# 東方現想華僑

烈火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

# 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方現想華僑

【Ｎコード】
Ｎ４７１１Ｓ

【作者名】
烈火

【あらすじ】
小さなときに交わした約束を胸に少年は、外の常識が一切通用しない世界で生きていく。
残酷で、それゆえに美しいこの場所で。
何を見つけ、何を感じ、どんな答えを導きだすのか？
前を見据えて、少年は歩いていく

この物語は東方Ｐｒｏｊｅｃｔの二次創作です。原作と設定が異なったり、キャラが原作と少し違うことがあります。

# 01．幻想入り（前書き）

――あの日、俺の常識は砕け散った

# 01．幻想入り

空には黒画用紙にきらきら光る砂を散りばめたように所狭しと星空が広がっていて、その中央には青い月が我が物顔で空にかかっていた。

地面はねずみ色で、大きな岩や小さな岩が無造作に置かれていたかと思うと、そこより少しばかり左に進むと大きなビルや住宅が建ち並んでいたりする。　なんともごちゃごちゃで、散らかっている子供部屋のような印象を受ける。　もしくは、幻想と現実が互いの場所に干渉しあっているようにも取れるかもしれない。

そんな場所の中央、具体的にいうならビルと岩の境目で二人の少年がいた。　より正確にいうならば、一人の少年のほうが血を流しながら地に伏しており、体全体にも及ぶ傷を負っていた。　そしてもう一人の少年、黒髪に赤い髪がところどころ混じっている少年……いや、青年は無傷の状態で地に伏している少年に冷たい視線を向ける。

「『もう終わりか？』」

青年が少年に声をかける。　その声はどこかつまらなそうな印象を受ける。

そう言われた少年は必死に顔を上げようとするが、その頑張りも虚しく顔はまったく上がらずにやがて力が尽きたように、また地面と濃厚なキスを交わす。

ああ……、この人には敵わなかったなぁ。

少年はそんなことを考えた。　いま目の前にいる存在は、自分よりも断然弱かった。　力もスピードも体力も反射神経さえも、全てにおいて自分がうわまっていた。

なのに、勝てない

かすり傷一つ負わすことができないでいた

ああ……、情けないなぁ。

人間まで捨てたというのに、なんて無様な姿を晒しているんだ。

ああ……、情けないなぁ。

こんなことなら告白しておけばよかった。

自分の頭の中で、ぐるぐると今までに出会った者たちの顔が消えては浮かび、浮かんでは消えていく。

結局、自分がしたことといえば自己満足をして、自分で狂って、悲劇の主人公を気取っていただけなんだよな……。

いったい、俺は何処から間違ったんだろうか？

俺があそこに行き着いたこと自体が間違っていたのか？

……なんて、いまさら考えても遅いか。

視界が霞み、音が聞こえなくなってきた。

どうやら俺の死も近いらしい。

どうせ、死ぬのならばいままでの人生を振りかってみるのもいいかもしれない。

どうか此処にいる皆さん、少しだけ見てくれないか？

妄想と現実の区別もつかない、そんな男の物語をさ――――

▽　　▽　　▽　　▽

「確かに、夜に森に入っちゃいけないという約束を破った俺も悪かったけど……。これはないんじゃない？」

俺の目の前に佇むのはアニメや漫画などでしかお目にかかれないような異形の存在

そんな常識外れの存在が、いま目の前に佇んでおり俺という食糧を

見つめている

いまにも崩れ落ちそうになる俺にできることといえば、足に力を入れ膝から落ちないようにすることと、できるだけ気楽な声を上げることくらいだった。

「§×〒〇！！」

しかし、あちら側からしたらそんなことは関係ないらしく理解不能な咆哮を上げた後、口を開き俺という食糧を捕食しようとする。

そんな光景をどこか他人事に見つめながら、俺は諦めて目を閉じた。

「……あれ？」

目を閉じて数分、いつまでたっても来ない痛みにいぶかしみ恐る恐る目を開けた。

「あんた大丈夫？」

そこに広がった光景を、俺は生涯忘れることはないだろう。

異形の存在すらも後ろを振り返ることなく逃げるように去っていく光景を

鮮血のような紅と真っ白なキャンパスとかわらないほどの白で形成されている巫女服の少女の姿を

▽　▽　▽　▽

人里からの依頼で妖怪退治を任された私は、今日一日その対応に追われていた。

別に相手が強かった訳ではないけど、ただひたすら逃げ回る相手というのもめんどくさいものだ。

なんとか見つけて退治して気がつけばこの時間。

慧音への報告は明日にして早々に家である博麗神社へと帰ることにした。

その時だ。声が聞こえてきたのは。

声は丁度真下から聞こえてきて、下を向けば少年が一人妖怪にいまにも食べられる寸前だった。

この時間にうろついていて、人里では見かけない衣服。

間違いなく外の人間だ。外の人間が幻想入りしてくる大半の理由は妖怪の食糧とするためである。そして今、外の人間が食べられようとしている。

別におかしいことじゃないし、むしろ幻想郷では当たり前のことなのだけれども、なんとなく、本当になんとなく、あの少年を助けてみようと思った。

ただの気まぐれか、それとも巫女のカンか。それは私にも分からなかった。

助けると決めた私は、いまにも頭を食いちぎらんとする妖怪の後ろ

に回り込み札に霊力を注ぎ、妖怪の背中に当てるとゆっくりと告げた。

「その自慢の牙を折られたくなかったら、このままここから消えてもらおうかしら」

口を大きく開けていた妖怪は、言葉は理解できなくとも札に注ぎこまれた霊力はわかったのだろう。　思わず天狗と間違うほどのスピードでこの場を後にした。

☆

「ちょっと、せっかく助けてあげたのにだんまりはないんじゃない？」

「……え？あ、ああ……悪い」

あまりの光景に黙っていると少女が、少しキツイ口調でいってくる

先ほどの異形の存在がいまは豆粒ほどの大きさしか見えない。　しかしなんで俺は助かったんだろう？　もしやこの女の子が？

一体、この少女は何者なんだろう？それ以前にここはどこなんだろう？

先程までは死への恐怖、そして諦めしかなかったのに、今はそんな疑問がふつふつと沸いて来る。

「しっかりしてよね。これじゃぁ、助けた意味ないじゃない」

やれやれ、といった具合に頭を振る少女

そんな彼女に俺は素直に湧いてきた疑問をぶつけた

「なぁ、ここは一体どこなんだ？それに……それ、動物……じゃないよな？」

指を指すのは先程までこの空間の支配者だったもの。改めてみると、どう見ても動物には見えない。

「あぁ、あれ。そうね～……。まず、ここじゃなんだから私の家に来ない？早く帰りたいし……」

最後のほうは小声で聞きとることはできなかったが、取りあえず家に連れてってくれるらしい。

「えっと……それじゃ、お願いします」

「ん」

短く返事をした少女は、俺の後ろに回り込んだ。

「なにしてんだ？」

「なにって――」

飛ぶために決まってるでしょう？――

「……え？」

ふわりと地面に浮く身体

「はぁっ！？」

一瞬でパニックになる脳内

「暴れないでちょうだい。あんた結構重いんだから」

そこに届く少女の言葉

「あ、あぁ……」

自分と変わらないくらいの年の子が冷静なのに対して男の自分がパニックになったのが少し恥ずかしい。

それから、どのくらい経ったのだろうか？

「ほら、もうすぐ着くわよ」

少女の言葉で顔を上げる

自分の前方に映るは、周囲が森で囲まれひっそりと佇む神社

（神社って……やっぱりみんな違うんだな）

少女に降ろされて改めて神社を見る。そして自分が唯一知っている神社と取らし合わせてみる。

（あっちのほうが……凄いような気がする）

「いま失礼なこと考えなかった？」

「い、いえっ！？」

隣に移動していた少女が、ジト目でこっちを見てくる

「そう？なら、いいけど。取りあえず上がって」

そう言って玄関の戸を開ける少女

（女の子の家って……あの子以外でこれが初めてかも）

キョロキョロしながら家を見ている少年に少女は上半身だけだして

「ちょっと、お風呂入ってくるからここで待っててくれない？」

それだけ言うと、少女は衣服のことをぼやきながら風呂場があるであろう所に歩いて行った。

一人残された少年は

「そういえば……女の子の風呂って長いんだよな」

一人呟きながら、少女の帰りを待つことにしたのである

▽　▽　▽　▽

「お茶飲む？」

「頂きます」

少女がお茶を汲み、少年が礼を述べながら飲む

少しの間、室内には二つのお茶を飲む音だけが響いていた。

コト……。そう音を鳴らして湯呑を置いた少女は少年に話しかけた

「質問があるんでしょう？」

ピクリッ。少女の言葉に思わず少年の身体が動いた。

「え～と……単刀直入に言うけど、ここどこ？」

少年の質問に少女は答えず、湯呑を傾ける

少年はというと、別にそれを咎める訳でもなく黙って少女の答えを待った

一分か二分か。

もう一度、湯呑を置いた少女が静かに話しはじめた

「ここは幻想郷。妖怪と人間が入り混じった場所。妖怪の楽園であり、ここの多くが妖怪や妖精で人間なんてほんの一握りよ。そして、外の常識が一切通用しないところ」

少女は言い終えると、目線で確認してくる。

「なら……俺を襲ったのも妖怪……なのか？」

「えぇそうよ。貴方のように外から連れてこられる人達を、私達は外来人と呼んでいるわ。そして、その外来人の多くは妖怪の食糧となる。」

――食糧――

自分もこの少女が助けに来てくれなければ、今頃あの妖怪の胃袋の中。

そう思った瞬間、全身に寒気が走った

そんな少年の反応をみて少女は続けた

「ま、それが正しい反応よね。そういえば、あんた名前は？」

お茶を飲むことでなんとか落ち着いた少年は、まだ自分が名乗ってないことに気がついた。

「不知火彼方（しらぬいかなた）。えっと……」

「博麗霊夢（はくれいれいむ）よ」

「うん。よろしく霊夢。それで、一つ…いいか？」

彼方は握手をした手をそのまま霊夢の眼前に持っていき、1を作る

「ええどうぞ」

「それじゃぁ……ここの人って空を飛べるが普通なの？」

真剣な表情で聞く彼方。それはそうだろう。彼方の常識の中には生身で空を飛ぶというのは無いのだから。

「普通じゃないわよ。それが私の能力」

「能力……？」

思わず首を傾けてしまった彼方。

「そ、『空を飛ぶ程度の能力』」

能力。彼方はこの言葉に聞きおぼえがある。

たしか……自分の幼馴染で一番身近にいた――

「他に質問は？」

そこまで、考えた彼方の頭の中に霊夢の声が入ってくる

彼方は霊夢の言葉で、一旦考えることを後にする

「（といっても……他ねぇ……）」

顎に手を当てて考える彼方。霊夢はその間もおかわりしたお茶を一人味わっている

「（まぁ、だめでもともと。聞いてみるか）なぁ、俺にもその能力ってあるの？」

「さぁ？私には分からないわ。けど……能力を持っているなら自力

で見つけれるはずよ」

「持っていなかったら？」

「それまでってことね。」

その言葉を聞いてガックリと肩を落とす

自力で見つけるといわれても、どうすればいいのか分からないし。
それ以前にあるのかどうかすら不明である。

「……」

思わず黙る彼方

「まぁ、普通能力は持たないから気に病むことじゃないわよ。」

お盆を持った霊夢が去り際に肩を叩いて来る。多分台所に行ったのだろう。その証拠に奥から水の音がしてきた。

「はぁ……。まあ、しょうがないか」

少年は頭を掻きながら呟く

右も左も分からない場所で、こうして拾ってもらったことをありがたいと思うことにした。

こうして、少年の幻想郷での初めての夜は過ぎていくのであった。

## 01. 幻想入り（後書き）

お久しぶりな方も、はじめましてな方も、こんにちは烈火です。

頑張っていきたいと思います

## 02．お守り（前書き）

そういう意味じゃないから、勘違いしないでよね

## 02．お守り

チュンチュンチュンチュン、とスズメ達が声を出し、人里のほうでは朝の市が始まっているこの時間、一人影を落としている少年がいた。

少年の名前は不知火彼方。外から幻想郷に迷い込んできた少年だ。

「なぁ、霊夢」

彼方は縁側で座りながらなにか作業をしている霊夢に声をかける。

「ん～、なに？」

声をかけられた霊夢は彼方のほうを振り向こうともせず、返事だけ答える

「確かに……住まわせてもらう俺としては、雑用はなんでも引き受けようと思ったんだけどさ……。流石に、家のこと全部ってのはないんじゃないか・・？」

洗濯から始まり、室内の掃除そして庭の掃除

彼方が先程までやっていたものは室内の掃除で、いまは場所を変えて庭の掃除をするため竹箒を持っている

「全部ってことはないでしょ？食事は私が作ってるんだから」

しかし彼方のよわよわしい抗議は霊夢のこの言葉で、ばっさりと切

られた。

住まわせて貰っている上に食事まで作ってくれている霊夢に彼方が文句を言えるはずもなく、ただただ肩を落とすばかりである。

「はぁ……」

ため息を吐いたところで落ち葉がなくなるはずもないので、気持ちを入れ替えてさっさと終わらせることに専念しよう。

そう思った矢先、目の前の集めていた落ち葉が空中を舞った

「ふ～。霊夢―遊びに来たぞ～」

「あら、魔理沙」

金髪の髪に西洋の魔女を思わせる衣服。頭にはとんがり帽子で、右手には箒を抱えている。年の頃は霊夢と同年代くらいだろう。

魔理沙と呼ばれたその少女は、自分が箒で着地したさいに彼方が集めていた落ち葉を散らかしたことなど知らないかのようにそのまま霊夢の隣に座る。

「って、ちょっとまてよ！？」

勢いよく魔理沙に掴みかかりにくる彼方。

「お前どうしてくれんだよ！この落ち葉！せっかく集めてたのに！？」

きょとんとした顔で彼方を見る魔理沙。そんな魔理沙に一瞬、自分が悪いのかなと思った彼方だったがそんな訳がないと思いなおして魔理沙に詰め寄る

そんな彼方に魔理沙は、穢れを知らない少年のような純粋な笑みを浮かべて悪びれもせずに

「いや～、悪かった。わたしもよ、もう少し奥で着地する予定だったんだよ。ほんとだぜ？」

はっはっは、と笑う魔理沙に彼方はげんなりとして直感的に悟った。この子を相手に俺は役不足だ、と。

彼方が黙った隙を見て魔理沙は隣にいる霊夢に話しかける

「とこれで霊夢。こいつだれ？見かけない顔だけど」

「外からの人よ。昨日たまたま助けたの」

ジロジロと彼方をみる魔理沙。

そんな魔理沙の視線に思わず彼方は後ずさる。

頭のてっぺんから爪先まで視線を巡らせた魔理沙は、彼方の腰の付近を指さしながら尋ねた。

「なぁ、その腰のものはなんだ？」

「ん？あぁ、これか」

魔理沙が指をさしているものがなんなのか気付いた彼方は、そのブツを腰――正確にいえばホルスターの中に入れてあるハンドガンを取り出し魔理沙の手に置く

「これは？」

「外の世界の武器。まぁ、壊れて使い物にならないけど」

肩を竦めてみせる彼方になおも魔理沙は尋ねる

「ふ～ん。貰っていい？」

「却下」

魔理沙の言葉を即答で返す。第一、このハンドガンだけは何があっても譲るわけにはいかないのだ。

いまは亡き父の形見なのだから。

「へ～。でも……欲しいな」

魔理沙が呟くと同時に、魔理沙の後ろから霊夢の拳が降って来た。

「やめなさいって。まったく、ほら彼方」

ハンドガンを放り投げるように渡してくる霊夢に軽く礼を言って受け取る。

「それと……」

そう言って、自分のほうに近寄って来た霊夢はつま先立ちして彼方の首になにかをかけた

「なにこれ？」

彼方の首にかけられたのは紅白の色だけがついている神社によくあるお守りである

「見ての通り、お守りよ。低級妖怪ならこれで大丈夫だし、一発くらいだったら強力なスペルカードにも耐えられるはずよ」

そこまで言って霊夢は奥のほうに消えていく。大方、お茶の準備でもするつもりだろう

「なぁ、魔理沙。スペルカードって……なに？」

礼をいうタイミングを逃した俺は、霊夢の言葉に聞きなれない単語があったので魔理沙に質問することにした。

「あぁ、スペルカードっていうのは弾幕ごっこでの必殺技みたいなもんだよ」

「弾幕ごっこ？」

弾幕、そして必殺技という単語に心ひかれた俺は、終始魔理沙の説明に感嘆の声を上げながら聞いていた

▽　▽　▽　▽

「霊夢って凄いんだな」

それが俺の初めの感想だった。

妖怪と人間の関係を疑似的に保ち強弱さまざま者がしこりを残さず対等に戦える「スペルカードルール」という決闘ルールを制定するなんてすごいな

改めて霊夢の凄さを再確認する。本人は素知らぬ顔で茶を啜っているけど。

「しっかし……霊夢がこんな男に興味を持つなんてな」

からかい口調で魔理沙が霊夢に話す。俺としてはこんな男呼ばわりされたことが少しショックなのだけど……。

「別に。ただの気まぐれよ。丁度、雑用が欲しかったところだし」

そんな俺の胸の内など知りもしないで二人の女の子は会話に興じる

「ふ～ん。人間にも妖怪にもさほど興味なんか持っていないのに？」

「雑用が欲しかっただけって言ってるでしょ」

魔理沙の言葉に少しイラついた霊夢がキツイ口調で言ってくる

「はいはい。そういうことにしておいてやるよ」

霊夢の言葉に肩を竦めてみせる魔理沙。なんで、あいつはこんなにこの仕草が合うんだろう・・・。

「それじゃ、わたしは紅魔館に行ってくるぜ」

こうまかん？名前からして凄そうな所だな。

「また、盗みに行くつもりなの？」

「盗みとは人聞きが悪いぜ。わたしは借りてるだけだからな。死ぬまで」

それもう盗みだろ……。

俺がそう思った時には、魔理沙は既に箒に跨り空を飛んで行った。

俺がいつまでも魔理沙の姿を追っていたら後ろから霊夢が話しかけてきた。

「出て行きたければ、出て行っていいわよ。なんなら、人里まで送ってあげるわ」

縁側でお茶を片手に霊夢が俺に聞いて来る

「いや……もう少しだけお世話になるよ」

「そう」

それで話しは終了したとばかりに霊夢は、さっさと奥へと消えていった。

「さってと……俺も掃除の続きをするか」

立て懸けておいた箒を手に取り、魔理沙によって1からスタートすることになった庭掃除を再開する。

「彼方、お茶飲む？」

しばらくして、お茶を沸かしていたのであろう霊夢がお茶を誘ってきた。

「ん、ならいただくよ」

辺りを見回すと落ち葉は既にほとんどなくなっていた。

それに満足して俺は、霊夢の元まで足を進める。

その時、紅白のお守りが右に左に足に合わせて揺れる。

「少し、短かったかしら？」

「いや、こんなもんじゃないかな」

左右に揺れるお守りをみて、俺はもう少しだけここの雑用をしてみようかなと思った。

# ０３．紅魔館（前書き）

見た目で妖怪か人間なのかわからないわ

# 03. 紅魔館

夢を見た。

そこには、幼いころの俺と隣に彼女がいた。

俺は神社でうずくまり、その隣で彼女が心配そうな、それでいてどこか泣きそうな顔をしていた。

「ねぇ、どうして――ちゃんはそんな顔をしているの？」

あの頃の俺は、どうして彼女がそんな顔をしているのか分からずにそう聞いた覚えがある

「だって……かなたちゃんが泣かないから」

そう言った彼女は既に限界が来ていたらしくその瞳にはボロボロと涙が零れていた。

あの時の俺は本当に困惑していたと思う

あの日、親父が亡くなった日。

それを信じたくなくて、――ちゃんの神社に行った。

でも、それで何かが変わる訳でもなく何もかもが嫌になった時、――ちゃんがいつのまにか隣にいてくれていたんだ。

あの時、俺は何て言ったかな？酷いような暴言を吐いたかもしれな

い。

それでも、――ちゃんは怒ることもなく、ああして隣にずっといてくれた。ましてや、泣けない俺のために泣いてくれた。

あの時の俺達は大人からしたらどう見えていただろう？

女の子を泣かした男の子？

それとも、男の子に同情している女の子？

いや、そもそも大人なんていなかったかな？

あそこには俺と――ちゃんの二人だけだったような気がする。

数分か数十分か。

静寂の中で、先に俺が口を開いたんだ。

「――ちゃん。僕さ、お父さんみたいな正義のヒーローになりたかったんだ……」

いつも後ろから見ていた父の姿。

強くてたくましく、そしてそれ以上に優しかった父。

「ぐすっ……いまは……なりたくないの……？」

――は涙でぐしゃぐしゃになった顔を、もっとぐしゃぐしゃにさせて彼方に問い詰めた。

「どうだろう……。よくわからない」

あの時の俺は色んなことが起こりすぎて、自分でもよくわかっていなかった。

「……だったら、かなたちゃんの周りの人達だけでも笑顔に……ひっく、させてみたら……？」

それはなんとも安直で、実に子供らしい発想だった。

「え……？」

「だから……かなたちゃんの周りの人達だけでも笑顔に、してみようよ？」

「そんなこと……僕にできるかな……？」

「うん……！かなたちゃんなら大丈夫だよ。だから……約束」

そして根拠のない自信だった。

「うん。僕頑張ってみるよ」

交わした約束は口約束。

書類もなければ、縛りもない。

それでも……この約束だけは守ろうと思ったんだ。

▽　　▽　　▽　　▽

「懐かしい夢を見たもんだな……」

夢から覚めた俺は思わずそう呟いた。

自分が交わした、たった一つの約束

「なにが懐かしい夢よ、このねぼすけ！」

「げふっ！？」

声と同時に横から強烈なキックが脇腹に突き刺さる

思わずもんどり打つ俺に、蹴りを放った張本人の博麗霊夢がおたまを持って冷ややかに告げる。

「雑用係の癖に、掃除をさぼって寝てるとは……どういうことかしら？」

いまにも、キレそうな霊夢。というか半ギレである。

「あ～、え～っと……それは――」

「言い訳は聞きたくないわ」

彼方が何かを言いだそうとする前にピシャリと言い放つ霊夢

「（聞く意味ないじゃん……）」

「なにか？」

「いえっ！なんでもありません！」

あまりの恐ろしさに、声が裏返ってしまった。

そんな彼方の様子をみて霊夢は、はぁ、とため息をついて洗面台を指さした

「取りあえず、朝食出来ているから顔洗ってきなさい。あんた、酷い顔よ」

「酷いって……」

あんまりにも、あんまりな言い方に彼方はムッとしながらも洗面台に向かっていった。

しかし、鏡をみて納得である

「あぁ……確かにこりゃ酷いわ」

洗面台の鏡でみた俺の顔は、涙の痕がくっきりと残っていた。

▽　　▽　　▽　　▽

「それでさ～、霊夢」

「はいはい。その話しはさっき聞いたわよ」

後ろの二人の声をｂｇｍにしながら竹箒で落ち葉を集める。

今日も今日とて、平和な一日である。家主である霊夢は賽銭箱を確かめて落ち込んでいたが。

まぁ、それも毎日の日課だ。別段、気にすることではない。

そんな折、来客が霊夢の所に訪ねてきた。

青い生地を主体としたメイド服、頭に置かれたヘッドドレス、人形のような白い肌をした女の子だった。年は俺とそう変わらないはず。

「こんにちは。霊夢はいるかしら？」

「えっと、霊夢ならそこだけど」

親指で後ろを指さす。

「ありがとう。その竹箒似合うわよ」

にっこりとほほ笑みかけながら、俺の横を通り向ける女の子

「（竹箒が似合う男って……どうなのよ？）」

疑問を感じるところは、一応褒め言葉として受け止めておこう

「ふぅ……」

大体の落ち葉を集め終えたので、俺も霊夢のところに行くことにした。

「ちょうど、良かったわ。彼方、いまから出掛けるわよ」

「俺も？」

「そう。というか、あんたが主役みたいなもんよ」

俺が主役？なんだろう、結構楽しみだな。

▽　　▽　　▽　　▽

「なんであんたに合わせて歩かないといけないのよ」

「別に俺は一人でいい、って言ってるだろう」

森の中を四人仲良く歩く。

先頭を俺と霊夢。後方を魔理沙と女の子。

「まぁまぁ、たまにはこうやって歩くのもいいじゃないか。それに、歩きが嫌なら霊夢は飛んで行けばいいだろう？」

魔理沙の言葉に霊夢が反論する

「別に歩きが嫌なんて一言もいってないわよ」

その言葉に魔理沙は、へ～、だの、ほぉ～だの訳のわからない呟きを漏らす

「なんかすんません。俺が飛べないばっかりに、貴女にまで迷惑かけたみたいで……」

俺は後方で静かに歩いていたメイドに話しかける

「いえ。客人の意見を最大限に聞き、それに答えるのが私の勤めですから」

メイドさんは営業めいた笑みを浮かべて答えた。

なんというメイド魂。その姿に思わず感心してしまう。

「さぁ、ここを抜けるとすぐですよ」

その言葉で俺は前を向く

次第に日光の光が強くなり森を出る瞬間、思わず目をつぶってしまった

「うわぁ。……すげぇ……」

その姿はまさに圧巻だった。

外装を赤色で統一して、前には大きな門。これだけで、ここの主が幻想郷でどういう立ち位置かわかる。

「なにボケっとしてるのよ。さっさと行くわよ」

「え、あぁ悪い」

目を奪われていたのはどうやら俺だけのようで魔理沙と霊夢はそうでもないらしい。

門の前まで行くと長身の女の人が立ったいた。

「あ！咲夜さん。おかえりなさい。この方がそうですか？」

「えぇ。そうよ」

「こんにちは！わたし紅　美鈴っていいます！ここで門番をしています！」

長身の女性。紅　美鈴は彼方に向かって手を伸ばす

「ああ、俺は不知火彼方。よろしく」

彼方も名乗ってから握手する

「（なんかメイ……ドさんといい門番といい、ここって礼儀正しいな）」

どっかの誰か達とは大違いだ。そう心の中だけで呟いた。

すると、いつのまにか彼方の後ろに移動していた魔理沙が耳元で彼方に話しかける

「知ってるか？こうみえても妖怪なんだぜ？」

へ～、妖怪ねぇ～。

「はっ！？妖怪！？」

あまりの衝撃事実に思わず首が９０。曲がる

「まじだぜ。なっ？」

「はい。妖怪ですよ～」

信じられん……。人間とどう違うんだろう。

見た感じ、俺となんら変わらないけどな……

美鈴を見て、魔理沙をみる。

うん、かわらないな。

「……もういいかしら？」

「え？あぁ、すいません！」

声のしたほうを振り向くと、そこにはメイドさん、確か咲夜さんって言われてたよな。その隣には腕組して、早くしろ。と目で訴えている霊夢がいた。

「それじゃ、美鈴、また後で！」

「はい！」

美鈴に手を振った後、俺は咲夜さんが開けてくれた門をくぐった。

「（近くでみると、ますます凄いな……）」

首を回し館全体を見回す。

キイィという門特有の音と共に咲夜さんが門を閉める

「それでは……」

その瞬間、俺の視界から咲夜さんが姿を消した。

「……は？」

「こちらですよ、彼方さん」

バッ！

思わず声のした後方におもいっきり振り向いた。

「紅魔館へようこそ。不知火彼方様。わたくし、メイド長を務めております十六夜咲夜（いざよいさくや）と申します。以後、お見知りおきを」

そこには、スカートを小さくつまみ軽くお辞儀をしている咲夜さんがいた。

▽　　▽　　▽　　▽

「へ～、ならあれが咲夜さんの能力なのか」

咲夜さんを先頭に俺・霊夢・魔理沙の順で後をついていく道すがら、先程の瞬間移動について質問したらこの答えが返ってきた。

なんなの、この娘達。俺なんて能力はおろか料理すら作れないぞ。

「では、こちらになります」

咲夜が足を止めた場所はひと際大きな扉をした部屋。

どうやら目的の人物はここに居るようだ。

コンコン、と咲夜が控えめにノックする。

少しの間を持って返事が返ってきた。

「入れ」

その声はやけに幼かった。

「失礼します。お嬢様、目的の人物を連れてきました」

「うむ、ごくろう。そこの者も入ってくるがよい」

「失礼します」

室内に入った彼方の目に飛び込んできたのは幼い容姿で、しかしどこか足を組んだそのポーズが似合っている。そんな少女だった。

「……え？あ、すいません。部屋間違えたみたいです」

彼方は、その少女を一目みた瞬間にUターンして室内から出ようとする

ガシッ！

不意に掴まれる右肩。その手の方角をそ～っと見ると咲夜が笑顔を浮かべている。しかし、その目は笑っていなかった。

―逃がしません―

声こそ出していないものの、その口はハッキリとそう開いていた。

「部屋？部屋ならここであっているぞ」

首を傾げる少女に咲夜は笑顔で答える

「すいません、お嬢様。一瞬、錯乱したようですがもう大丈夫です」

「そうなのか。まぁ、それも仕方がない。なんせ、この私レミリア・スカーレットと同じ空間にいるのだからな」

少女ことレミリアは自分の言葉に自分で満足に頷いた後、彼方の後方で額に手を当てて自体を眺めていた霊夢に声をかけた。

「あら霊夢。貴女も来てたの？」

「まあね」

「ふ～ん」

あまり興味なさそうな言葉で返した割には、背中の大きな羽がピコピコと動いている

「取りあえず、そこに座りなさい。咲夜紅茶をお願い」

「かしこまりました。お嬢様」

礼をしてその場から消える咲夜

「ほら、いつまでも立っていないで私達も座るわよ」

「いや、それはそうだけど……。魔理沙は？」

辺りを見回すとさっきまで居た魔理沙が消えたいた。

「あぁ。大図書館のほうじゃないかしら」

図書館？おいおい、この館にはそんな凄いものまであるのかよ……。

改めて、この館に驚く彼方であった。

## 03．紅魔館（後書き）

サブタイトルはいつも5秒くらいしか考えてないので適当で申し訳ない

たまに小さい子って、自分たちでは考えられないような発想をしますよね。そして驚かせられることがあります

## 04. unknown（前書き）

壊れないように扱うね

## 04. unknown

「改めましてこちら、紅魔館の主レミリア・スカーレット様です」

咲夜さんの紹介に満足げに頷く主こと レミリア……ちゃん？

「あ、どうも。不知火彼方です」

対面に座る俺は軽くお辞儀をしながら挨拶する。

やはり、主との対談は緊張する

「そう固くならなくてよい」

そんな俺に足を組んだポーズを崩さないままレミリアちゃんは苦笑する。

苦笑するレミリアちゃんを見ながら、俺は隣で素知らぬ顔で座っている霊夢に小声で話しかける。

「なぁ……霊夢。あの子の後ろに生えてるものって、もしかして……」

「もしかしなくても、吸血鬼よ。自称だけど」

やっぱり……。そんな思いを持ってもう一度目を向ける

ピンクのフリルを纏い、頬づえをつき優雅に足を組んでいるその姿はまさにここの主といったところか。

「（でも……幼女だからな……）」

レミリアの外見は１０~１２歳くらいだ。それが関係しているのか、してないのか分からないが、どうしても女の子が背伸びをしている印象のほうが強かった。

「あ、あの～。なんで俺を呼んだか教えてくれますか？」

そうは言っても、ここはレミリアの館。客である彼方としては、外見が幼女だから……なんか微妙だな。なんてことは口が裂けても言えないわけで、結果としてそもそもの疑問である、何故自分が呼び出されたを聞くことにした。

「あら？要件は伝えてなかったの咲夜？」

「あの～、私も連れてこい。としか言われてないのですが……」

キョトンとした顔で咲夜さんのほうを見るレミリアちゃんに咲夜さんは困った顔で答える。連れてこい、と言われただけで連れてくる辺り、咲夜さんもある意味只者じゃない。

「まぁいいわ。彼方……といったかしら。貴方に会ってもらいたい子がいるのよ。そしてできれば友達になってほしいの」

「はぁ……」

俺に会ってもらいたい？誰だろう？それに、友達って……

俺の頭の中で様々な想像が膨らむ中、隣にいた霊夢がおもむろに声

を上げた

「ちょっとレミリア！あんたまさか……アイツを彼方に会わせるつもりなの！？」

いきなりの霊夢の声量に、思わず驚き霊夢の方をみる

「あの……霊夢？」

「あんたは黙っててて！」

霊夢はいつになく真剣な顔つきでレミリアを睨みつける

こんな霊夢を見るのは初めてだった。

「大丈夫よ、霊夢。“いま”はね」

対するレミリアは霊夢の声には動じず、それだけでなくどこか余裕たっぷりに霊夢を諭す

「ばかばかしい。帰るわよ、彼方」

「えっ！？おい、待てよ霊夢！」

彼方の抗議など耳に入らない霊夢は、そのまま扉を開けて部屋を出ようとする

「どきなさい」

「それはできない相談です」

いつの間にか移動していた咲夜が霊夢の行く手を阻む。

「相談？違うわよ、命令よ」

「私に命令できるのはお嬢様だけですので」

頑として譲らない咲夜。そんな咲夜に業を煮やしたのか霊夢は懐から一枚の札を取り出す

「お、おいおい、霊夢。別に会うだけだろ？それなら、危険なんてないじゃないか。レミリアちゃんも大丈夫って言ってるんだし！ね！レミリアちゃん？」

「えぇ」

あわや戦闘が始まるのかというところで、慌てて止めに入る彼方。そして、あんな状況だったのにもかかわらずニヤニヤとした笑みを見せるレミリア

「……」

「いてっ！？何すんだよ！？」

何が気に入らなかったのか、霊夢は俺の足を思いっきり蹴った後、先程まで座っていた椅子に腰かける

かくいう俺も霊夢に手を上げれるはずもなく、ぶつくさ言いながら椅子に座るのだが。

俺達二人が座ったのをみてレミリアちゃんが後方に控えている咲夜さんに小声で何か言っている。多分、会わせたい子を連れてくるのだろう。

「かしこまりました」

一礼し、消える咲夜さん。

「（え……？というかこの空気どうすんの！？）」

彼方は一人、不機嫌な霊夢と相変わらず笑みを崩さないレミリアを交互に見ながらこの場の空気をどうしようか悩んでいた

▽　　▽　　▽　　▽

コンコンっとノックする音が聞こえてくる

わたしはぬいぐるみで遊ぶのを止めて、音のしたほうを振り向きながら答えた

「だれ？」

「妹様、咲夜です」

咲夜？なんで咲夜がこんなところに？

そんな私の疑問を察したのか咲夜は投げかける前に私の質問に答えた

「会わせたい人物がいるそうです」

会わせたい人物？誰だろう？

「ねぇ、それって壊れやすい？」

「……はい」

そっか壊れやすいのか……。

「分かった、すぐ行くよ」

壊れやすいなら、丁寧に扱わないとね。

▽　　▽　　▽　　▽

「妹さんがいるんですか」

「えぇ、そうよ」

場所は変わって、先程まで微妙な空気を醸し出していた彼方達の室内

「（友達って……妹さんのことだったのか。もしかして、レミリアちゃんって妹想いのいいお姉さんなのかな？）」

あの空気に耐え切れなかった俺は自分から話しを切りだすことにした。

結果分かったことは、レミリアちゃんに妹がいることだけ。

ちらりと隣で座っている霊夢をみると、相変わらずな仏頂面で座っていた。

「あの～、霊夢さん？そんなに嫌なら帰っても大丈夫ですよ？ほら、お守りもあることだし……」

そう言って首からかけているお守りを見せる

「雑用係が逃げないか見張ってるのよ」

俺のほうを横目でみた霊夢はそう言い切ると黙って紅茶を飲み始めた

「（別に逃げようなんて思ってないっての……）」

霊夢の中の自分の評価はどうなっているのか。

そんなことを考えていると、コンコンっと室内をノックする音が聞こえてきた

「入っていいわよ」

「失礼します。お嬢様、妹様をお連れしました」

そう言った咲夜さんの後ろからレミリアちゃんより、2~3歳くらい年下の女の子が出てきた

薄い黄色の髪を片方だけ結び、赤と白の可愛らしい服。そしてなにより、背中に七色に光る珍しい形の翼を生やしていた。

▽　▽　▽　▽

「どうしたの？お姉さま。いきなり呼びつけて」

「ごめんなさいね、フラン。貴方に会わせたい人物がいてね。彼方、この子が私の妹でフランドール・スカーレットよ」

わたしはお姉さまの視線をたどる。

そこには、前自分を倒した巫女ともう一人知らない少年がいた。

その少年はわたしの視線に気づくと、笑顔で椅子から立ち上がりおもむろに私に手を差し出してきた

「お～、レミリアちゃんと似てるな。俺は不知火彼方、よろしくフランちゃん。」

笑顔で差し出される手。

しかし、その手をフランがとることはなかった

「ありゃ……」

困った顔をする彼方

しかしフランはそんな彼方など、どうでもいいかのようにさっさとレミリアの隣に座る

「ねぇ、お姉さま。あれはなに？」

「霊夢や魔理沙や咲夜と同じ、人間よ」

「ふ～ん……壊してもいい？」

私の問いかけにお姉さまは黙って首を横に振るだけにとどめた

「え～と……どうすればいいの？」

私達の会話においてけぼりを喰らっていたお兄さんが困った顔で話しかける

「ねぇ、フラン。彼、あなたの友達になりたいって言ってるのだけれども。貴女はどう？」

友達？

ばかばかしい。私にそんなものはいらない。

いるのは壊れないおもちゃだけ。

「べつに。……興味ない」

わたしの答えにお兄さんは

「でも、友達っていいものだよ？いざという時、助けになってくれるし」

そんなことをのたまった。

助けになる？

それなら私にとって友達とは必要ないものだ。

助けてもらうことなんて何一つないからだ。
それでも……退屈しのぎにはなるかもしれない。

「ねぇ、その友達って……わたしが遊ぼうって言えば、いつでも遊んでくれるの？」

「あぁ、もちろん！」

わたしの返答が嬉しかったのか、お兄さんは満面の笑みで答える

「ふ～ん……。いいよ。なら友達になってあげる」

そして暇なときに遊ぼう。お兄さんは人間だから、ゆっくり丁寧に扱いながら……ね。

▽　▽　▽　▽

「ふぅ……、風呂上がりの麦茶は上手いな～」

紅魔館で夕食を頂いた俺達はその足で神社へと帰ってきた。

夕食は人数が多かったので、わいわいと楽しいものだった。

魔理沙がレミリアちゃんの友達、パチュリーのおかずを取ったり霊夢が当たり前のように俺のおかずをとったり。ということはあったものの満足のいく夕食だった。

フランちゃんが夕食の席で一回も笑わなかったことが、心残りではあるが・・・・。

そう、あれから俺はフランちゃんの笑顔を一回も見れてないのだ。
霊夢が魔理沙がレミリアちゃんがパチュリーが咲夜さんが笑っているあの場でフランちゃん一人が、つまらなそうな顔をしていた。
その顔が……なんだか俺には寂しそうに見えてしょうがなかった。

「って、俺の気のせいだよな」

「何が気のせいなのよ？」

「うわっ！？」

いきなり背後から声をかけられ慌てて後ろを向く。

「なによその顔。失礼にもほどがあるわよ」

浴衣姿の霊夢が団扇で顔をあおっていた。

「いやい……きなりだったからビックリして」

「ふ～ん」

よっこいしょ、と俺の隣に座る霊夢。

お互い無言の時間が続く。そよ風が吹き、上に吊るしてある風鈴がチリンチリンと音を奏でる。

「気をつけなさい。あの子には」

前方を見据えたまま、霊夢が俺に話しかけてくる
霊夢は俺の返事を待つわけではなく、勝手に喋る
「あの子はね。『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』という能力を持っているの」
「それは凄い能力だな……。でも、それなら霊夢の能力だって常識外れで似たようなもんじゃないか」
フランちゃんの能力に思わず俺が声を出す。
しかし霊夢は俺の言葉に黙って首を振ってさらに続けた。
「私が能力だけで、あんたに注意するわけないじゃない。本当に危険なのはあの子自身なのよ。あの子はね、４９５年間も地下室に幽閉されていたの。情緒不安定でね。少し前に私と魔理沙が関わったことがあったわ。それからは少しづつ屋敷内を出歩くとは聞いていたけど……」
４９５年間もの幽閉。それが本当なら彼女はとんでもない時間を一人で過ごしていたことになるのではないか？
「それだけじゃないわ。長い間、幽閉されていたあの子は手加減というものを知らないの。能力も何も持ってない貴方なんか一瞬であの世逝きよ。あの子にとって、あなたは友達じゃないわ。ただのおもちゃ、退屈を紛らわすための道具でしかないわ。それでも――貴方は友達だと胸を張って言えることができる？」

霊夢のまっすぐな言葉に、俺は無言で答えることしかできなかった。

# 04. unknown（後書き）

あ～、フランちゃんとチェスしたい

# ０５．能力（前書き）

ここで行かなきゃ、俺が俺でなくなってしまう

# 05．能力

頭を冷やしてもう一度考えなさい。

霊夢はそう言い捨ててこの場を去っていった。

「おもちゃ……ねぇ」

おもちゃ

その言葉が妙にしっくりとくる。それは多分、当てはまっているからだろうか。

正直にいうと霊夢の言葉を聞いて少し怖くなった。

あの夜の恐怖が蘇ってくる

恐怖が全身を蝕んでいくあの感覚。あれをもう一度味わうことに……。

「はぁ……情けねえな」

友達と言っておきながら、その友達に恐怖している自分を見て自嘲気味に笑う

「このまま考えてもブルーになるだけだわ。今日は寝よう」

結局俺は問題を先送りにして就寝することにした。

▽　　▽　　▽　　▽

それから数日、博麗神社でいつも通りの生活を送っていた。

竹箒で庭をはわき、人里までお使いに行き、終わったら夕食の手伝い

あれから霊夢は何も言ってくることはなく、普段通りのだらけた霊夢に戻っていた。

ただ、俺の心には靄が残っていた。あれからフランちゃんはどうしているだろう？

そんな時だった。レミリアちゃんの使いで咲夜さんが来たのは……。

「まったく……何時だと思ってるわけ？あんたのご主人様は……」

俺の隣を歩く霊夢が目をこすりながら咲夜に不満をぶつける

「流石のわたしも予想外よ。こんな時間に二人を連れてこいなんて命令」

顔にこそ出してないが、その声には困惑の表情がうかがえる

「あんたもなんか言ったらどうなの！？」

霊夢は咲夜から彼方へと矛先を変えて隣を睨みつける

「ん？いや、別にそれはいいんだけど……。夜なのに妖怪が襲ってこないなと思ってさ」

辺りを見回しながら、不思議とでもいいたげな顔な彼方

その彼方に咲夜が答える

「それは、霊夢がいるからではないでしょうか？博麗の巫女の強さを幻想郷の妖怪は知っていますからね」

おもわず霊夢を見る彼方

対する霊夢はどうでもよさそうに前を歩く

いつもはだらしないけど、その強さは本物だと前に魔理沙に教えられたことを思いだす

「（普段の姿からは想像できないけどな～……）」

しかし魔理沙の言ってることは本当なのだろう。

彼方自身が一度だけ見ている。

大きな妖怪を一撃で仕留めた霊夢の姿を。

もしかした自分はとんでもない女の子に拾われたかも知れない。

そんなことを考えている間に目的地が見えてきた。

「あっ！彼方さん。こんばんは！」

「こんばんは美鈴」

夜でも変わらない笑顔で彼方と霊夢を出迎える門番こと美鈴

「ちょっと待っててくださいね！」

急いで門を開ける美鈴

それにお礼をしながら三人で入る

長い長い廊下を通り、この前来た部屋の前にたどり着く

「お嬢様、咲夜です。お二人をお連れしました」

コンコンと控えめにノックをした後、名乗る咲夜にレミリアは一言、入れと促した。

失礼します。と行儀よくお辞儀をして瞬きをした瞬間にはレミリアの後方に控えている咲夜

その後に入る二人だが、どうやら一人先客がいるみたいだった。

「よっ！お二人さん」

黒いとんがり帽子に愛用の箒を横に立て懸けている魔理沙。そしてその横にはパジャマを思わせる服を着ている女の子がいた。彼女はレミリアの友人でパチュリー・ノーレッジ紅魔館の大図書館に普段は居るらしい。ちなみに生まれながらにして魔法使いである。

「魔理沙も来てたのか。パチュリーもこんばんは」

「えぇ」

短い言葉で挨拶を交わすパチュリー。その視線の先には一冊の本があり、その本のページをひたすら捲る作業をしている。

「今度は、さん付けしなかったはね」

「えぇ、まぁ……」

会ったその時に、さん付けで呼びその呼び方止めてと返されれば自然と呼び捨てにもなるだろう。彼方としては、呼び捨てのほうが楽なので願ったり叶ったりだが。

「それで？こんな時間に集めてなんの用？つまらないことだったらただじゃおかないわよ」

彼方の隣に腰に降ろした霊夢が配られた紅茶を一口飲みレミリアに話しかける

霊夢の言葉を受けてレミリアが口を開きかけたその時――

ドゴンッ！！

下からの轟音と衝撃が皆を襲った。

「うわっ！？」

ふいの衝撃で椅子から飛ばされる彼方

クッションになるようなものは下になく、そのまま頭から落ちる

「大丈夫ですか？彼方様」

瞬間に後ろから咲夜に抱き抱えられていた。

「あ、ありがとうございます」

礼をいいながら立ちあがる彼方

一体何があったんだ……？そう思い、みなの待つテーブルへと足を向ける。するとそこには先程までは見当たらなかった水晶玉が置かれており、その水晶玉の向こうで自分の友達が高笑いしている姿が映し出されていた。

え……？

彼方は理解できなかった。そこに映っている少女の姿が。

理解したくなかった

口は三日月のように割れ、これ以上ないほど見開かれた眼をしている少女が

――フランドール・スカーレットということを

「咲夜！美鈴と共にフランのところにっ！」

「かしこまりました！お嬢様！」

レミリアの叫ぶような命令に咲夜も気合いを入れて答える

「まさか……夜の鬼ごっこをするはずが、こんなことになるなんてね」

親指の爪を噛みながら悔しそうに呻くレミリア

水晶玉には既に、咲夜と美鈴がフランと交戦している様子が映し出されていた。

空を舞い、鮮やかな弾幕が飛び交う

その様子はとても彼方のような無力が人間にはたどり着けない世界だった。

なのに、だというのに――彼方の足は自然に廊下へとつながる扉へと向いていた

「まちなさい」

＞ｉ２２３３８―２９９２＜

彼方の後ろで霊夢が声をかける

「どこに行くつもりなの？」

「フランちゃんのとこだよ」

彼方の顔は扉だけを見つめていて、霊夢からはうかがいしることはできない

「どうしてなのか、教えてくれるかしら？」

霊夢の問いに黙る彼方

そんな彼方にさらにレミリアが追い打ちをかける

「もしかして、咲夜達を助けに行こうとでも考えているのかしら？それなら、心配いらないわよ？この子達を誰だと思っているの？このレミリア・スカーレットの自慢の従者たちよ？」

先程までの焦りは微塵もなかった。それだけ、自分の従者を信用しているということだろう。

「それに……彼方が行っても、死ぬ以外の運命なんてないわよ」

言い換えるなら、行ったら死ぬということ。

「分かるでしょう？貴方がいってところで変わりはしないし、それどころか咲夜たちの邪魔にしかならないのよ？」

霊夢はなおも厳しい口調で話しかける

「……そんなことわかっているさ」

言われなくてもわかっている。

あの場に自分が行けば一分も生きることができないことを。

そんなこと、誰よりも自分が分かっている。

なのに、なんでこんな時に限って――――あの子との約束が頭の中を駆け巡るのだろう

『周りの人達だけでも、笑顔にしてみたら？』

後ろでは水晶玉からフランちゃんの声が聞こえてくる

俺がいつまでも動かないことに業を煮やしたのか霊夢が肩を掴んでくる

「その気持ちだけで十分よ。彼方。死にに行くようなことは止めてここで待っていましょ？」

先程のキツイ口調とは違い、優しい口調で俺を席まで誘導しようとする霊夢

あぁ……それもそうだな。大体、俺なんかが出しゃばることもほうがおかしかったんだ……。

自分にそう決断を下して足を動かす

『だから……約束だよ』

その一瞬、脳裏に彼女の顔がチラついた。

「ッ！？」

そして正面に映し出されているフランちゃんの顔

狂気に満ちたその顔が、彼方には一人ぼっちで泣いている少女に見えた。

その瞬間、彼方の心は決まった

「霊夢……。ごめん、俺、約束したんだ。あの子と……そしてフランちゃんと。ほら」

そう言って水晶玉を指さす彼方。

水晶玉の向こうでは、フランが咲夜と美鈴に向かって遊ぼうと喋りかけていた。

「あんた……！？」

それはあの時交わした会話。だが、彼方にはそれで十分だった。

「御呼ばれされちゃぁ、行かないわけにはいかないだろ？」

――カチリッ――

その時、なにかがはまったような音が彼方には確かに聞こえた

▽　▽　▽　▽

「はぁ……はぁ……」

長い長い廊下を抜け、少年は森を走る

普通ならとっくに足が疲れて走れないような距離を、少年はいまなお同じスピードで走り続けている。

結局、あの後魔理沙が霊夢を止めるような形で彼方はその隙に逃げ出すように部屋を出てきた

彼方は走っている最中に胸に手を当てる

それは例えるなら歯車で

先程まで、かみ合わなかった二つがようやく上手く噛みあい、回りはじめた。

その回転は、フランの笑顔が見たいそう想えば想うほど回転数が増していくような気がした。

いまなら、手に取るようにわかる。

これが――自分の能力なんだと。

もしかしたら能力は自分の目の前に既にあって、自分がただ怖くて手が出せなかっただけなのかもしれない。

そう思えるくらい、自分の身体に馴染むような気がした。

そう思っていると、次第に爆発音が近くなっていた。
腰につけていたホルスターから壊れたハンドガンを引き抜く。
「（親父……力、貸してくれるか？）」
彼方の願いを了承するかのように、ハンドガンは姿を変える。
銃身が下部分に縦方向に三角形状に大きく伸び、さながら装飾銃のようである。
前方を見ると、咲夜と美鈴、そしてフランの姿が目に入った。
ここからでは、上手く聞き取れないがフランが一方的にまくし立ててるようにも見える
手には燃え盛るような剣
顔には狂気
前までの彼方だったら、恐怖で足が竦んでいたかもしれない。
距離はついに声が聞き取れるところまで来ていた
「ねぇ？咲夜。お兄さんはどこ？」
フランは咲夜に彼方の居場所を尋ねた。
「さぁ？わたしには分かりません」

咲夜は肩を竦めてみせる。

あぁ、なんだ。フランちゃんも俺と遊びたかったんだな。

二人の会話を聞いてきた彼方は、思わず笑みが零れた。

そうだよな……。だって俺達、友達だもんな。

「こっちだよ、フランちゃん」

全員がこちらを驚くような顔でみる。

そして、次第にその顔は変化していく。

二人は何故？というふうに。

そしてもう一人は、やっと来た。というふうに。

「あはっ。遅いよ。お兄さん」

「いや～、ごめんごめん。トイレしてたんだよ」

軽い冗談をいいながら、その歩を進める彼方。

フランもその顔に狂気を張りつかせたまま、地面に降り立つ

「さて……それじゃ、遊ぼうか？」

笑う彼方に、嗤うフラン

生死をかけた夜の遊びがいまスタートした

## ０５．能力（後書き）

挿絵は友人が描いてくれました。友人すまんな。段取りを間違えてしまって。

ピクシブにも投稿するので、私のマイページみたいなところで名前を載せておきます。

## 06. 掴んだその手（前書き）

なんどでも握ってやるさ

## 06. 掴んだその手

わたしにとって世界とは脆いものだ。

この世界には力を加えれば破壊できる「目」というものが存在している

わたしの能力はその「目」を自分の手の中に移動して強く握ることで破壊するものだ。

どんな屈強な妖怪だろうと私にかかれば一瞬で終わる

その手を握ることで目の前のものが破壊される。

妖怪・人間・神様・世界

そこに例外は存在しない

握ることで砕かれる

それが当たり前で、かわることのない絶対的な事実

しかし……もし握っても壊すことのできないものがあるならば？

この頃、そんなことを考えることがある

そんなものありもしないのに……だ。

わたしに勝った白黒の魔法使いにだって、「目」はあった。

お姉さまにだって「目」はあった。

これが真実だ

いくら私が考えたところで答えなど、とうに出ている

わたしが握ることで壊れる

わたしのこの手は壊すために存在する

▽　　▽　　▽　　▽

「どうしたの、フランちゃん」

その声でわたしは目の前にお兄さんに目を向ける

このまえ会ったときとは違い、どこか自信に溢れたその目がわたしをまっすぐに射抜いている。手にはかわった形のものを持ちながら。

「ねぇ、その手に持っているものは何？」

わたしの問いかけているものが分かったのか、お兄さんは左手に持ったものを掲げて答えた

「これか？これは、装飾銃って言ってね、こうやって……相手に向かって撃つんだよ？」

お兄さんの言葉と共にわたしの頬の横をなにかが通り抜けた

「あれ……？この距離でも当たらない俺の腕って……」

お兄さんがぶつくさ言っているが、そんなことよりもわたしは、いまのお兄さんの行動で胸の内より広がってくる衝動をゆっくりと噛みしめていた

あぁ……壊したい……

わたしの胸の中でその衝動が激しくなっていく

頬に垂れる赤い雫を一舐したわたしは、手にもったレーヴァテインを大きく振りかぶりお兄さんに向かって突撃した。

「あんまり早く壊れないでね？お兄さん」

▽　▽　▽　▽

「え……？」

俺の気付いたときには、その剣は目の前まで迫っていた

地獄の炎を思わせるそれは、いきなりのことで一歩も動けずにいた俺の身体を喰らっていく

「まったく……何しにきたんですか、あなたは？」

「え……？」

ふいに後ろから放たれた言葉

死を覚悟して閉じていた目をそっと開けると

「登場するだけ、登場して死ぬなんて何しに来たか分からないわよ？」

メイド服が破けているものの、怪我はしていない咲夜さんが馬鹿を見るような目で見ていた

「あ、咲夜さん。というか、口調変わってません？」

「いまのあなたに敬語なんて馬鹿みたいじゃない」

「あ、そうですか……」

傍から見れば登場してそのまま死んでいくモブそのものだったしな・・・……

俺が咲夜さんの理由に納得していると、もう一人の人物がこちらに駆けよって来た

「彼方さんっ!?なんでこんな所に来たんですか!?屋敷でじっとしてくださいよっ！」

「いやいや、美鈴。そういう訳にいかないんだよ」

駆けよって来た門番こと美鈴に指を左右に揺らしながら答えた

「だって俺、フランちゃんと遊ぶ約束しちゃってるし」

美鈴は俺の言葉を聞いて訳が分からないという顔をしている

それはそうだろう。今の俺は自殺志願者といっても問題ないことをやろうとしているのだから。

立ち上がりながら装飾銃をしっかりと持つ

「さってと……やりますか」

「まちなさい」

歩く寸前、咲夜さんが後ろから声をかける

「なんですか？帰れって言われても帰りませんよ？こっちだって、霊夢を怒らせてまで来たんですか」

「帰れなんて言うわけないでしょ？ただ――」

「私達も、その遊ぶにかかわってくれませんか？」

咲夜さんの言葉に美鈴が続ける

「しょうがないな……。ほんとは俺とフランちゃんで、きゃっきゃうふふやる予定だったのに……」

「あなた一人では数分で死ぬのがおちよ。言っとくけど、あなたが一番弱いんだからね」

「まあまあ咲夜さん。そこは私達がフォローしましょうよ」

俺の隣に咲夜さんと美鈴が並ぶ

一方はナイフを構え、もう一方は拳を軽く握る

「というわけで……フランちゃん。やろうか？」

▽　　▽　　▽　　▽

風が四人の間を駆け抜ける

一人は歪んだ笑み

一人は自信の笑み

二人は真剣な顔で

「それじゃ……先手必勝でいくわよっ！」

咲夜がナイフを投げる

手から放たれたナイフは吸いつくようにフランの元へと

「あははっ……残念でしたっ！」

フランはその手に持っているレーヴァテインでナイフを焼き切る

「こっちですよ。妹様」

フランが振り切った瞬間、背後から美鈴が襲う

「おしいよ、美鈴」

しかしその拳は空を切るだけに終わり当たることはなかった

「今度はこっちから行くよっ！」

禁忌『クランベリートラップ』

紫と青の綺麗な弾幕が三人を襲う

「うわっ！？」

彼方はそれを頭を屈めて避け、そのままフランに突っ込む

「彼方さんっ！？」

隣で必死に避けていた美鈴が叫ぶ

その叫びを無視してフランに近づき、銃を構える

捕えた！！

そう思ったのもつかの間、フランは片手を彼方に向け弾幕を発射する

「どきなさいっ！！」

喰らう寸前、咲夜が彼方を突き飛ばす

「あ～あ……避けられちゃった……」

セリフこそ残念がっているもののフランの顔は楽しそうである

「まったく……何考えてるのあなた！！」

彼方が突き飛ばされた先に、時間を止めて先に到達していた咲夜が彼方の胸倉を掴んで叫ぶ

「いや～……だって、当たらないんだもん……」

バツが悪そうに頭を掻く彼方に、咲夜は握った拳を振り下ろすか本気で迷う

そんな咲夜の気持ちを知ってか知らずか、彼方は咲夜の手をどけながら話しかける

「しっかし……フランちゃん強いなぁ」

「もしかしたらお嬢様より、強いかもしれないわね」

「え〝っ！？マジで？」

紅魔館の主より強いかもしれないフラン

以前霊夢から聞いてはいたが、この戦いを通してその凄さを再確認する

「悪いことは言わないわ。もう引き返しなさい。後は私と美鈴でなんとかするから」

優しい口調で帰宅を促す咲夜

普通ならそれが正しいのだろう

「（でも……でも俺は）」

――――フランちゃんの笑顔を見ると決めたから

それこそが彼方がこの地獄を体現しているかのような場所を動かない理由

「咲夜さん。一度だけ……俺のわがままを聞いてくれませんか？」

そう咲夜に話しかける彼方の目は、何かを決心したような目をしていた。

▽　　▽　　▽　　▽

咲夜と彼方が話している一方、美鈴は一人でフランを受け持っていた

しかし力量の差は歴然

次第にボロボロになっていく美鈴と、先程とかわらない姿をしているフラン

どちらが有利かは明らかであった

「あははっ！美鈴も頑張るねっ！！」

嗤いながらもその攻撃の手を休まないフラン

「当たりまえ、ですよっ！！」

拳に気を込め、フランの攻撃をかろうじて弾く
しかし、いくら美鈴とて限界というものは訪れる
「はぁ……はぁ……」
額に伝う汗をぬぐう
「美鈴、よく頑張ったわね」
その瞬間、美鈴の後方から無数のナイフがフラン目がけて飛んでいく
「咲夜さんっ！！」
慌てて後ろを振り返る美鈴
「そろそろ終わりにするわよ……。この遊び」
両手に１０本のナイフを構える咲夜
「あれ……？もう終わりなの？」
咲夜のナイフを全て焼き尽くしたフランが問う
「えぇ、そうです妹様。もうこんな時間ですし、明日の仕込みもありますから、ねっ！！」
言い終えると同時にナイフを投げる咲夜

その咲夜のナイフと同時に美鈴が駆ける
対するフランも狂気を浮かべて突進する
先に手を出したのは美鈴だった
ナイフと合わせるように回転蹴りをお見舞いし、そのままもう片方
の足で顎を撃ち抜こうとする
それに臆することもなくフランは突貫し、その代償として片手を失う
あぁ、楽しい
その感情だけが身体を支配する
千切れ飛んだ腕など気にも留めずに、美鈴の腹に弾幕を叩き込み、
吹き飛ばし、後方に控えていた咲夜を襲う
「咲夜さんっ！？」
弾幕を受け地に倒れながら、咲夜の名前を叫ぶ美鈴
そんな美鈴を安心させるかのように片手を上げて、咲夜は呟いた
「頼んだわよ、彼方」
その瞬間、咲夜の立っていた場所に彼方が現わる。それと同時にレ
ーヴァテインに飲み込まれていく
炎に飲み込まれる身体

遠くのほうで美鈴が叫ぶ

「お兄さん……なにしにきたの？」

いきなりの彼方の行動にフランは思わず、目が点になって呟く

その時、炎の中から声が聞こえてきた

「それはね……。――君の手を掴みにきたんだよ」

その声と共に彼方の手はレーヴァテインを握っているフランの手を強引に掴んだ

「やっとできたぞ。あの時できなかった握手」

不敵に笑いながら不知火彼方はハッキリと聞こえる声でフランに告げた

▽　　▽　　▽　　▽

訳が分からなかった

ただの人間であるお兄さんがレーヴァテインを喰らって生きていることもそうだし、何より何故そこまでして握手をしようと思ったのかも分からなかった

わたしは思わずレーヴァテンを消してお兄さんに話しかける

「ねぇ……。どうして握手なんてしてるの？」

「どうしてって……ほら、まえは握手断られたからさ。今度こそはと思って」

笑みを浮かべるお兄さん。この人はいまの状況が分かっているのだろうか？

握手ということは、わたしと手を握っている状態。人間と妖怪は力からして違う。それは握力だって例外ではない。わたしが強く握ることで、お兄さんの手を砕くことができるのだ。

なのに――なのに、それができない自分がいる

その事実にわたしは驚いた

「お兄さん、その手を離してよ……」

「断る」

なんで？なんで、わたしはこの手を砕くことができないの？

「わたしの能力知ってる？『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』っていってね？この世界には力を加えれば破壊できる「目」が存在するんだよ。そしてわたしはその「目」を動かし強く握ることで破壊できるんだ」

そういいながら、わたしはお兄さんの「目」を手に移動させる

あとはこの手を強く握れば終了

「なぁ……それってどんなものでも壊すことができるんだよな？」

わたしが握る瞬間、お兄さんが話しかけてくる

「うん。それに例外はないよ」

あぁ……なんで動かないんだ

「だったらさ……」

――――俺とフランちゃんが友達だって事実も壊せるのか？

「え……？」

それはわたしにとって思いがけない言葉だった

「だからさ、あの時俺達は友達になっただろ？例え俺という存在をフランちゃんが壊そうがこの事実だけは壊せはしないだろ？」

なに馬鹿なことを言ってるんだろう？

わたしに友達なんていないのに、いらないのに

不愉快だ、はやく壊しちゃえ

そう思えば思うほど、わたしの手は動かなくなっていく

「霊夢から聞いたよ。フランちゃんの能力」

動いて――――動いてよ！！

何故だがわたしの目から涙が零れてきた

悔しいのだろうか？　それとも情けないのだろうか？

「確かにおっかない能力だよな」

「他人事みたいだね。お兄さんが握っているこの手だって、そのために存在している手なんだよ」

「そのためだけねぇ……。俺はそうは思わないけどな。――君のこの手は誰かとこうやって繋がるために存在している。俺はそう思っているよ」

「え……？」

わたしは思わず顔を上げる

涙で視界が霞むなか、お兄さんは優しそうな目でこっちを見ていた

「そう考えたほうが素敵だろ？」

見上げたお兄さんの顔はとても優しそうで、その笑みに釣られて思わずわたしも笑顔がもれた

「お兄さんって馬鹿だね」

「あぁ、大馬鹿ものだな」

なにがそんなに楽しいのか、わたしの皮肉にも笑って答えるお兄さん

「ねぇ……お兄さん。わたしが遊んでほしいって言ったらいつでも遊んでくれるんだよね……？」

「あぁ、一年経とうが十年経とうが、フランちゃんが俺との遊びを望む限り、俺はいつでも相手になるよ」

あぁ……ようやくお兄さんが壊せないわけがわかった。涙が零れてきた訳もわかった

「じゃぁ……今夜はわたしの負けでいいかな……」

「おっ！お兄さんに勝ちを譲ってくれるわけか」

「うん。今回だけだよ」

だって――友達を壊すことなんてできないから。そして、お兄さんの言葉が嬉しかったんだ

そう思った瞬間、わたしをお兄さんの砲撃が襲った

▽　▽　▽　▽

「あ～、身体が動かねえ。フランちゃんどいてくんない？」

「ダメだよ。お兄さん。友達のお願いなんだから」

夜の道を少年が女の子を頭に乗せて歩く

その足取りはどこか重そうだった

「ぜってー霊夢に怒られるよ。お守りも壊しちゃったし……」

理由は実に単純だ

「あぁ、紅魔館が見えてきた……」

紅魔館が見えると、少年の足はもっと重くなり、動きスピードも遅くなっていた

まったく……。フランはそう心の中で呟きながらも少年の動く足に合わせて揺れることを楽しんでいたりもした

「そういえば、フランちゃん」

「ん？な～に？」

あと数メートルのところで少年がフランに呼びかける

「俺、フランちゃんは一人だと思っていたけどさ……。実はそうじゃなかったんだね」

「どういうこと？」

？マークを浮かべるフランに少年は門を指さした

フランが指のほうを向くと

「「おかえり、フラン」」

「「「おかえりなさいませ、妹様」」」

『おかえりなさいませ、妹様』

そこにはレミリアをはじめ、パチュリーに小悪魔、咲夜に美鈴、そして妖精メイド達が笑顔でフランを出迎えていた

「よっ！彼方。生きててよかったな！」

「魔理沙、洒落にならないから」

「彼方。後で覚えておきなさい」

「霊夢さん。できればお手柔らかに……」

早々に絡まれる彼方

そんな彼方の頭から降りたフランは、皆の前で最高の笑顔でいった

「ただいま、みんな」

▽　　▽　　▽　　▽

わたしにとって世界とは脆いものだ。

この世界には力を加えれば破壊できる「目」というものが存在している

わたしの能力はその「目」を自分の手の中に移動して強く握ることで破壊するものだ。

どんな屈強な妖怪だろうと私にかかれば一瞬で終わる

その手を握ることで目の前のものが破壊される。

妖怪・人間・神様・世界

そこに例外は存在しない

握ることで砕かれる

それが当たり前で、かわることのない絶対的な事実

しかし……もし握っても壊すことのできないものがあるならば?

この頃、そんなことを考えることがある

そんなものありもしないのに……だ。

わたしに勝った白黒の魔法使いにだって、「目」はあった。

お姉さまにだって「目」はあった。

これが真実だ

いくら私が考えたところで答えなど、とうに出ている

わたしが握ることで壊れる
わたしのこの手は壊すために存在する

そう思っていた自分にさようなら。

そして――――

大切な友達と家族をみつけた新しい自分に――――こんにちは

## ０６．掴んだその手（後書き）

ここまでが導入部って感じですかね。次はリアルのほうで引っ越しがあるので４日くらい間を空けます

※感想の設定を変えました。ユーザーだけだったのを、誰でも書きこめるようにしております

## 07. 取材（前書き）

いや～、これはいいネタになりそうですよ

# 07. 取材

「なぁ、霊夢……」

「なに？いま忙しいんだけど」

「これ、なに？」

晴天の空の下、俺は霊夢にある物を手渡した

霊夢は受け取った物をみて、俺に憐れみの目を向けながら

「なにって……。これは新聞っていってね？―」

「ちげぇよ！？外の世界にも新聞はあるし、ここなんかよりもっと発達してるよ！」

俺のツッコミに霊夢は、なら何が問題なのよ？とでも言いたげに視線をやる

「ここだよ！ここ！」

人差し指である記事を指す

そこには、こう書いてあった

外来人！悪魔の妹を倒す！！

「出鱈目にもほどがあるだろ！？」

「あ～、これね。気にしなくてもいいんじゃない？この新聞の記者はいつも誇張して記事を書くから、どうせみんな信じてないわよ」

コロコロと可愛く笑いながら、新聞を左右に振り回す霊夢

そんな霊夢をみて、それならいいんだけど……。と思いながらも竹箒を手に取り掃除に戻ろうとする

「彼方、お茶いる？」

「掃除を終わらせてからにしとくよ」

霊夢の誘いを断り、いざ掃除を開始しようとした直後、上空から声が聞こえてきた

「あややややや。今回ばかりは私、誇張もなにもしてないですよ～」

黒い翼を軽く羽ばたかせながら、ゆっくりと降りてきた少女

頭には赤い帽子（？）を被り、下はプリーツスカート、上はシャツを纏っていた。

「あら、文。どうしたの？」

「こんにちは、霊夢さん。そして、はじめまして彼方さん。わたし射命丸（しゃめいまる）　文（あや）と申します」

そう言って手を差し出してきた彼女

「あ、どうも。不知火彼方です」

差し出された手を掴み握手をする

その瞬間、俺の身体をありえない感覚が支配した

なんだろう?この感覚。初めて会ったはずなのに……何故だか懐かしい感じがする

俺がこの不可解なことに疑問符を浮かべていると、文は少し困った顔で

「あの～、彼方さん?いつまで手を握ってるんですか?」

「うわぁっ!?すいません、ちょっと考えごとをしていまして!?」

「彼方、後で神社の裏に来て頂戴」

「え〝!?」

慌てて飛びずさりながら、謝る俺に後ろから霊夢の容赦のない一言が降り注ぐ

弁明をする俺と、聞く耳を持たない霊夢

そんな俺達を見て、文は手に持っていたカメラのシャッターを切る

「ちょっと!なに撮ってるのよ!?」

その文の行動に気付いた霊夢が慌ててカメラを奪おうと飛びかかる

文はというと、慣れた動作でヒラリとかわし、霊夢の手は空を掴むだけに留まった

「いや～、いい写真が撮れましたよ！これで、明日の記事は決定ですね！」

ほくほく顔で俺の目の前に降り立つ文。

俺としては誤解されるので止めてほしい。霊夢ならもっと素敵な男性が現われるだろうしな。

「ところで、さっきは何を考えていたんですか？」

いまだ、ほくほく顔の文が俺に極上の笑みで聞いてくる。俺からも何か引き出そうって魂胆なのか？

「ええと……たいしたことじゃないんだけどさ。……俺と文ってこれが初対面だよな……？」

俺の言葉に一瞬文の目が揺らぐ

しかしそう思ったのもつかの間、文は声を出して笑い始めた。

「あはははは。なんですか？彼方さん。それはナンパですか？」

俺の言葉がツボに入ったのか、なおも笑いながら俺の肩を叩いてくる

「ちっ、違うって！？ただ、そんな感じがするな～、って思っただ

けだよ。俺だっておかしい事を聞いたのは自覚してるよ！」

いまさらになって、恥ずかしくなり顔を赤くしながら文に言う

それが逆効果だったのか、文はより一層笑う

庭には盛大に笑う少女と、その横で恥ずかしさで顔を赤くした少年と、いまなお一人でぶつぶつと先程のことの釈明を考えている巫女だけがいた。

▽　▽　▽　▽

ひとしきり笑った文は、ふぅ……。と息を吐きだし彼方の方を向いた

彼方は先程のことをまだ引きずっているのか、しきりに「違うんだよ……。いや、ナンパとかしてないから」と虚空に向かって喋っていた

「お～い、彼方さ～ん。起きてくださ～い」

文は虚空に向かって喋っている彼方の首にチョップを軽く入れ、意識をこちらに向けた後

「先程のことですけど、わたしと彼方さんは初対面ですよ」

「ですよね～……」

当たり前に答えに苦笑いを浮かべる彼方

「そんなことより、文。あんた何しに来たの？要件はだいたい分か

るけど……」

「あやや～。わたしとしたことがすっかり要件を忘れていました。今回お邪魔したのはですね、彼方さんに取材をと思いまして」

彼方の横にいた霊夢の問いに、うっかりとした感じで答える文

「……え？俺？」

自分の顔を指さしながら首を傾げる彼方

いきなりの指名に思考が追いついてないようだ。

文はうんうん、といった感じに頷いて顔を近づけてきた。一気にまくし立てた

「博麗神社に居候している外来人！しかも男！噂になっていた紅魔館の主レミリア・スカーレットの妹を弾幕勝負で倒したとなっては、取材しないほうがおかしいですよ！！」

マシンガンのように喋る文

「ちょっ！ちょっと待ってくれ！？俺はフランちゃんを倒してなんかいないし、むしろ首の皮一枚で繋がってる状態だからね！というかあの時どこにいたんだよ！？」

自分の首を横にスライドさせて必死にアピールする彼方

あの時は半ばお情け状態で勝ちを貰っただけで、勝負をすれば一瞬で死ぬ自信がある

そして、そのお遊びは自分が死ぬまで続くのだ

「（本格的に鍛えないとヤバいよな～……）と、とにかく！俺は取材なんて受けないからな！」

そう言って席を後にしようと立ちあがる彼方

「お兄ちゃん……。取材受けないの？」

否、立ちあがる寸前に後の重みでそのまま前に倒れ込んだ

「勝手に人の家に上がり込まないでよ」

「あら、ちゃんと声をかけたわよ」

彼方の横で眉を潜ませながら後方にいるであろう、紅魔館のメイド長　十六夜咲夜に話しかける霊夢に、澄ました顔で答える咲夜

そんな二人を横目に彼方は上に乗っかってる友達に話しかけた

「いてて……。フランちゃん、重いからどいてくれないか？それとなんで昨日は、さん付けだったのにお兄ちゃんになってるの？」

「こっちのほうが、お兄さんは好きかなと思って。どう？どっちがいい？あと、わたしってそんなに重いかな？」

可愛らしい笑みを浮かべながらゆっくり足に力を加えていくフラン

「どっちでもギブギブっ！？重くないから、フランちゃんは綿のよ

うに軽いから！その足をどけてくれ！？フランちゃんの力でやられたら洒落になんないからっ！？」

タップを繰り返しながらもがく彼方に満足したのか、フランは足に力を込めるのを止めて彼方の上に正座をし先程の件を話し始めた

「お兄ちゃん、なんで取材受けないの？」

フランの問いに、チャンスとみたのか文も横からたたみかける

「そうですよ！なんで受けてくれないんですか！嘘は書きませんから！」

「う～ん……。フランちゃん的には受けたほうがいいの？」

「もちろん！だって面白そうじゃん！ねえねえ、天狗さん、フランも取材受けていい？」

「えぇ、もちろんですよ。わたしが聞きたいくらいですし」

文の言葉を聞いた瞬間、嬉しそうに羽をパタパタ揺らすフラン。顔も先程よりも笑顔で一段とまぶしい。

「あら、結局することになったの？あんたホントに押しに弱いわよね」

「そして変なとこで意地を張ったりするしね」

やれやれ、といった具合に顔を左右に振る二人

言われた彼方は全部当たっているので、反論することができずにバツが悪そうに頬を掻くのであった

不知火彼方、フランとの遊びを終えた二日後。人生初の取材にである

▽　　▽　　▽　　▽

「って……なんで二人ともいんの？」

彼方を挟みこむ形で座っている霊夢と咲夜に疑問を投げかける彼方

「いいじゃない。暇なんだし。それに忘れたの？あんたが無茶したせいでお守り壊したことを」

「そうでした。霊夢さんのお守りがないと、俺は今頃炭でしたね。あと、あの後に受けたビンタはとても痛かったです」

「私はお嬢様から、妹様の面倒を仰せつかったので離れるわけにはいかないわ。それに忘れたの？あなたの無茶のせいで私と美鈴だって大変だったんだから」

「そうでした。俺まったくバトルしてなかったですしね」

疑問を投げかけただけなのに、まさか心のダメージを負わされるとは思っていなかった彼方。思わず冷や汗が垂れてくる

「あやや～、そろそろいいですか？」

困り笑顔を浮かべながら進めようとする文

「あ、そうでした。どうぞどうぞ」

「ではでは。まずは貴方のお名前は？」

「不知火彼方です」

彼方の言葉に素早くペンと走らしていく文

「外の世界では何をしていて、家族とかはどうでしたか？……あ、これは言いたくないなら無理にとはいいませんよ？」

「別に大丈夫ですよ。まぁ……外では学生やってましたね。家族は親父が亡くなって母さんと二人で過ごしてます。あとは……家族みたいな幼馴染がいるくらいかな。友人も結構いたし……」

「「「家族みたいな幼馴染……？」」」

霊夢・文・フランの声がはもる

「あやや。これは少し聞いてみる必要がありますね」

「お兄ちゃん……」

「へー、幼馴染ねー。ふーん。ま、わたしはそんなのどうでもいいけどね。彼方がどうしても話したいって言うなら詳しく聞いてあげるわよ？」

文は、わくわくどきどきといった感じでペンを握りしめ

膝の上に乗っているフランは彼方の手をぎゅっと握りしめて、上目

づかいで彼方を見やり

霊夢はどうでもよさそうにしながらも、しきりに横目でこちらをチラチラと盗み見る

三者三様の行動で彼方をみやる三人

「え～……と。言葉の通りで小さい時からの付き合いで、いまの俺がいるのはあの子のおかげというか……」

「ほうほう！それでそれで！」

ずい！という音が似合うような迫力で一層彼方に近づく文

文のあまりの食い付きに彼方は後ずさりのしようと試みるが――

「あれ……？」

横から霊夢が、がっちりと腕をとっているのでその場から動くことができなかった

横からは霊夢の無言の圧力

膝からはフランがいまにも腕をへし折ろうとし

正面からは、期待の籠った目をされ

助けを求めようと咲夜を見やれば、笑顔で手を振られる始末

この場に自分の味方がいないことを悟った彼方は、何がいけなかったのか？と思いながらゆっくりと語りはじめた。いつも自分の傍にいてくれた彼女のことを。あの時自分の背を押してくれた彼女のことを

## 07. 取材（後書き）

なんか引っ越しで2週間くらいネットがつながらないみたいです。
なんで書きためておきますね。2週間もあれば、幽々子の異変までは終わると思いますので。

## 08. 取材？（前書き）

いま何してるのかな？

## 08. 取材？

霊夢・フラン・咲夜・文が見つめる中で彼方はゆっくりと喋り出した

「その子とは家が近かったってのもあるんだけどさ、きっかけは俺が迷子になってさ。その時に泣きながら石段を上がった先が彼女の家だったんだ」

「ほうほう……。石段、というと神社かなんかですかね？」

「そうそう、神社なんだ。ここよりは大きいかな」

ペンを走らせながら問う文に笑顔で答える彼方。その横で霊夢が持っていた湯呑を割る音が聞こえてくる。

「も、もちろん！博麗神社だって素敵な所だよ！」

「そう。別に私は気にしてないし。まぁ、あんたがそういうなら、ありがとうって言っとくわ」

澄ました顔で答える霊夢に、咲夜がクスクスと笑う

しかしそれも、霊夢の一睨みですぐに消えてしまった

「ほら、早く続きをお願いしますよ！」

「え、あぁ」

そんな二人を無視するように催促する文に返事をして、当時の事を

思い出しながら彼方は話した

▽　　▽　　▽　　▽

「ひっく……ひっく……」

石段で泣いている少年がいた。

一人ポツンと座っている少年に、一人の女の子が声をかける

「あの……どうしたの？なんで泣いているの？」

後ろから声をかけられた少年は、身体をびくつかせて女の子の方を振り向いた

その目は滝のように涙を流していた

女の子のほうを向いた少年は、小さな声で呟いた

「おとうさんと、ひっく……喧嘩した」

そう小さな声で呟く少年に少女は疑問を投げかけた

「なんで喧嘩しちゃったの？」

「だって……おとうさんが僕と遊ぶ約束を忘れてたから……」

今日はいつも忙しいおとうさんが、少年のために休暇をとった日であった。

一日大好きな父親と遊べる

その事実に少年は有頂天になり、なにをするかまで考えていたほどだった。

しかしその遊びは、実現することはなく少年の中だけの日程になりかわってしまった。

嬉しそうに外へと出かけようとする少年に父親は、申し訳なさそうに少年に告げた

――ごめんな、彼方。お父さん、急用が入ってしまったみたいなんだ

心の底から、申し訳なさそうにいう父親

なんで？今日はずっと遊んでくれるんはずでしょ？あのとき約束したじゃん

小さいときというのは、世界は自分の周りだけが全てで他のことなど知らないものである。

そんな子供が約束を違われたらどうなるであろうか？

――おとうさんの馬鹿！

少年はそう一言いって家を飛び出してきたのである

自分のことよりも、その急用とやらのほうが大切なんだと思いながら

「だから、お家を飛び出してきたの？」

話しを聞き終えた少女は少年に聞いた

その問いかけに少年は、小さく首を縦に振るだけにとどめた

少しの間、二人は喋ることを止めて静かに時の中に身を委ねる

依然として少年は目から涙を浮かべている。

その様子をみた少女は、何かを決心したかのように立ち上がると家のほうへ駆けて行った。

ポツンと一人残された少年。

広い神社で一人ぼっちという状況に、少年はどうしよもなく心細くなり出尽くしたと思っていた涙が、また零れそうになっていた

「ひっく……うぅ……ふぇ？」

泣きだす寸前、少年は頭を撫でられた感覚がして思わず顔を上げた

「……あれ？」

撫でられたと思って顔を上げてはみたもののそこには誰もいなかった。

気のせい？

そう思って辺りを見回す

下をみて、上をみて、左右をみて、後ろをみる

しかし、そこには誰の姿もみえず少年の頭には疑問が残るだけとなった。

「はぁ……はぁ……。おまたせ！」

背後で少女の声が聞こえ振り返ると、少女は肩で息をしながら両手に柔らかいボールを抱えてニッコリと微笑んだ。

「さ！一緒に遊ぼ！」

「……え？」

いきなりの展開についていけない少年をよそに、少女は手を掴むと少年を強引に引っ張って、そのまま少し離れてボールを投げた

投げたボールは、緩やかな軌道を描き少年の所に届くこともなく、その半分くらいの場所で静かに止まった

「あぅ……」

恥ずかしそうに下を向く少女。自分の握力の弱さを今頃になって思いだしたのだ。

そんな少女の様子をみて、少年は家を飛び出してから初めて声を出して笑った

「あはは。ちょっとここじゃ遠いよ。もう少し近寄ろうか」

「えへへ」

少年に釣られて少女も笑いながら、二人して近づく

「いくよ、えい！」

掛け声とともに、勢いよくボールを投げる

「わぷっ！？」

勢いよく投げられたボールは、地面と平行に進み彼女の元に到達した。

しかし彼女は、そのボールを捕ることができず顔で受け止めることとなった

「だ、大丈夫！？ごめんね」

慌ててかけよる少年

少女は額を押さえうずくまる

その姿におろおろすしながら、手を伸ばそうとして引っ込める動作を繰り返す

「な～んちゃって♪」

次の瞬間、少女はけろりとした顔で少年に笑みを向けた

その姿に安堵した少年は、次第に笑いがこみ上げてきた

「？なんで笑ってるの？」

「だ、だって……わぷっ、って」

少女の顔に赤みが指す、いまさらになって先程の可愛らしい悲鳴が恥ずかしくなってきたのだ

「も、もう！笑わないでよ！」

「ご、ごめんごめん。あっはっは」

ぽかぽかと少年の身体を叩く少女に笑いながら謝る少年

「でも……やっと笑ってくれたね」

＞ｉ２３０５８―２９９２＜

「え……？」

「ほら、涙。止まってるよ」

指差されたところに触れると確かに涙は止まっていた

「ほんとだ……」

つい数分前まであんなに泣いていた自分が嘘のようだった。

「泣いてる顔より、笑ってる顔のほうが人って素敵でしょ？笑顔はそれだけで人を幸せにする魔法だよ。だから……もっと笑顔でいようよ？」

そう笑った少女の顔は、少年にはまぶしすぎて思わず見惚れてしまった。

「うん……。そうだね。でも、もし泣きたくなったらどうすればいいの？」

「そのときは、わたしの胸を貸してあげる」

「泣きたくても泣けないときは？」

「代わりにわたしが泣いてあげる」

胸を張って答える彼女

そんな少女に少年は、笑みを浮かべて

「じゃぁ、君が泣いてるときは僕が胸を貸してあげるね」

少年の言葉に一瞬驚いた顔をしたが、少女ははにかみながら頷いた。

その後、少年と少女は疲れて寝てしまうまで一緒になって遊び尽くした

▽　▽　▽　▽

「んで、後から聞いた話によると親父と母さんが町内を必死になって探して俺を見つけたらしい。そのときは、俺も彼女も疲れ果てて縁側で二人仲良く寝てたらしいけど」

「なるほど～、家出から始まる出会いという訳ですね」

彼方の話を真剣に聞いていた文は、ものすごいスピードでメモを走らせながらしきりに頷いていた。

「なんとも微妙な出会いなんだけどな」

「それで、その子とはずっとお付き合いを？」

「うん、そうなるかな」

ほへ～、と感嘆の声を漏らす文

「ねぇ、他の質問はないの？」

いままで黙って聞いていた、フランが羽をせわしなく動かして文に聞く

「ありゃ？フランちゃんにはこの話は面白くなかったかな？」

あんなに聞きたそうにしていたのにな～、と思いながら膝に座らせているフランに聞くと

「ううん。とっても興味深かったし、面白かったよ。お兄ちゃんの小さい頃の話も聞けたし。でも、お兄ちゃん嬉しそうに話すんだもん」

ぷくー、と頬を膨らまして喋ったフランの主張は訳の分からないものであった。

「え゛？というか、そんなに嬉しそうにしてた？」

「えぇ。つい弾幕を打ち込みたくなるくらいね」

さらりと言われた霊夢の言葉は彼方を震え上がらせるには十分だった。

「そう？私は純粋に面白かったけどね」

フォローのようで、そうでない咲夜

「あややや！そうですね！それより少し時間も押してきてるので次の質問にいきましょうか！」

険悪ムードになりかけたその時、文が危険を察知したのか三人に苦笑いを浮かべる。

文の行動のおかげで、自分に弾幕を喰らうことがなくなり内心ほっとする彼方

「あややや。そうですね……では、彼方さんの能力でも聞きましょうか」

「あ！それフランも知りたい」

「確かに興味があるわね」

「たしかに」

四人の目が一斉に彼方のほうを向く

「え～と……そう見られるとなんか恥ずかしいんだけど……」

「なに訳の分からないこと言ってんのよ。早くいいなさいよ」

「いや、まあ……。うん。えーと、俺の能力は『想いを力に換える程度の能力』だよ」

「「「「想いを、力に？」」」」

四人は口を揃える

「うん。俺の想いによって力が変わるみたいなんだよね。想いが強いほど力は強くなるし、逆になんも想わなかったら、人里の人達にも負ける自信があるよ」

肩を竦めながら言い切る彼方にフランはニコニコしながら彼方の腕をとった

「なら、あの時のお兄ちゃんはフランのことをいっぱい想ってくれたんだね！」

「うん。そうなるかな」

彼方の言葉を聞くと、フランはより一層羽をパタパタと羽ばたかせて幸せそうに笑った

「なるほど～。想いによって変動する能力ですか。珍しいですね」

ジロジロと彼方をみやる文

「けど、それって一定の強さを確保できないってことでしょ？だったら、能力を身につける前とそう変わらないんじゃないかしら」

咲夜の指摘に、うっ、っとつまる彼方

そう、咲夜がいった通り能力を身につけたからといって彼方自身が強くなったかというとそうでもないのである。

確かに、能力で強くなっているときは妖怪にも対処できるだろうが、普段の場合であればただの凡人。必然的に幻想郷に初めて来たときのようなことになるだろう

「そこなんだよな～……。どっかにいい師匠がいないかな～」

「あら？私じゃ役不足ってこと？」

彼方が腕組みして唸ってると、霊夢が横から口を出してきた

「いや、そういう訳じゃないけど……って、教えてくれるつもりだったの？」

「いやっ！？別に、あんたなんか知り合いなんて居ないでしょうから仕方なく私が教えてあげようかな、と思っただけで！？」

ぶんぶんと両手を左右に広げて自分の言ったことを訂正しようとす

る霊夢

「はは。ありがとう。もちろん、俺も霊夢に頼もうとは思っていたけどさ、それ以外にも……こう格闘というか、身体能力を上げたいな、と思って」

彼方の言葉に霊夢は顔を赤くしながら、そ、そう。とだけ答える

「あら、それなら美鈴に習ったらどうかしら。あの子格闘ならかなり強いわよ」

霊夢の横で話しを聞いていた咲夜が、自分のとこのおさぼり門番のことを思い出しながら進言する

「え!?ほんとですか!?そういえば、フランちゃんとの遊びのときも格闘を使ってたような記憶が」

なんとかあやふやな記憶を呼び起こそうと必死に頑張る彼方

あのときは彼方もタイミングを計るのに必死で、見てるようで以外と全くみていなかったのである。

「あやや。そういえば、そうでしたね。弾幕はさほど強くありませんが格闘はかなりの腕前でしたよ」

うんうんと頷く文

「そっか……。なら、明日頼んでこようかな」

底抜けに明るい門番のことを頭に浮かべながら明日の予定を脳内で

組み立てる

「あややや。もうこんな時間でしたか。わたしはこのことを記事にしないといけないのでそろそろお暇しますね」

居間の時計をみた文が早口にまくし立てて慌てて飛んで行った

それを見送りながら彼方は横にいた霊夢に話しかける

「文って、せわしないんだな」

「そうね。それより夕飯は何がいい？」

「パスタで」

「却下」

じゃぁなんで聞いたんだよとは、怖くて言えない彼方であった

▽　　▽　　▽　　▽

風を切って少女は駆ける

その少女の顔は少し暗かった

「変わって……しまいましたね……」

意識したわけではないのに、その言葉は勝手に漏れていた

その言葉が誰に向けて放った言葉なのか。

少女は自嘲気味に笑うと、先程の話を記事に仕上げるためにより一層スピードを上げて家へと戻った

## 08. 取材？（後書き）

お久しぶりです。自分のところのパソコンがまだダメなので友人のパソコンでの投稿となります。

# ０９．氷精と大妖精（前書き）

今日からアタイの子分ねっ！

## 09．氷精と大妖精

博麗神社の鳥居の前で心配そうな顔をした少女と、明るい顔をした少年がいた。

「ねぇ、ホントに大丈夫なの？」

「大丈夫だってば。お前は俺の母さんか」

少女の心配に少年は呆れながら頭を掻く

「でも……」

「紅魔館までならわかるってば。咲夜さんに地図も描いて貰ったし」

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜から貰った地図をヒラヒラと見せながら少女こと博麗霊夢を安心させようとする少年

「ありがとな、霊夢。心配してくれて」

少年は、なんだか自分がこうやって心配されることが嬉しくなって

ついつい霊夢の頭を撫でた。

頭を撫でられた霊夢は、キョトンとした後慌てて少年、不知火彼方の手を振り払い

「別にっ！そんな心配なんてしてないしっ！？それよりちゃんと帰ってきなさいよ！あ、あんたはわたしと空を飛ぶ練習もするんだから！！」

早口でそうまくし立てると霊夢は、ふんっっとでも言いたげにそっぽを向く

そんな霊夢の姿に苦笑しながら、彼方は石段を下りていった

紅魔館の門番、紅　美鈴に格闘を教えてもらえるように頼みにいくのだ

▽　　▽　　▽　　▽

「さて……地図を貰ったから大丈夫と思っていたけど、見事に忘れていた」

――幻想郷って、森が沢山あるんだよな

辺り一面、森・森・森

どうしよう……

いっそのこと、いまから博麗神社に帰るか？

いや、それじゃあ男として情けない。というかそもそも神社への道のりが既にわからなくなっていた。

霊夢に大丈夫と言っておきながらこの体たらくである

「やべえよ、やべえよ……。この年になって迷子とか魔理沙あたりに笑われてしまうぞ」

頭の中で腹を抱えて笑っている魔理沙が浮かび上がる

「いかんっ！！このままじゃいかんぞ！どうにかして、人を探さないと！」

拳をぐっ、と握る彼方であるがここは幻想郷

妖怪達が我がもの顔で跋扈する場所である

昼間とはいえ、こんな森の中に人の姿などあるわけがない

「おーい、だれかー」

ついつい心細くなって小さな声で誰かを呼んでしまう

しかし結果なんか火を見るより明らかで、肩を落とした直後

「あっ！人間だ！」

彼方の真上から可愛らしい声が聞こえてきて

「くらえっ！アイシクルフォール！」

ものすごい勢いでなにかが頬をかすめていった

「……」

「あたいのアイシクルフォールを避けたっ！？」

いきなりの攻撃に呆然と立ち尽くす彼方と、自分の攻撃が避けられて慌てる女の子

おいおいおいおいっ！？いきなりなんなんだよ！？

俺がいつこの子に攻撃されるようなことしたんだよ！？

内心びくびくの彼方

「あー、えーと……とりあえず君降りてきてくれない？」

いつまでも上を向いてる体制が疲れたのか、彼方は手招きする

「しょうがないわね！いうことを聞いてあげるなんて、あたいって優しいわ！」

自分で自分の胸を張りながら彼方の目の前に降りてくる女の子

「あ、うん。ありがとうね。え～と……なんで俺はいきなり攻撃されたのかな？」

「う～ん……なんとなく？」

聞かれてもわかりません。むしろ、わかりたくありません

俺の目の前にいる女の子は数秒考えたあと、そんなことはどうでもいいや。というセリフを吐いて俺に問いかけてきた

「あんたはなにしてるの？」

「えっと……勇者の剣を探そうと思ったら盛大に罠に引っ掛かってしまって……」

いってることが全く持って意味不明である

自分が迷子になったことを悟られたくないあまり、口から幼稚園児でも騙されない嘘が飛び出してしまった。

しかしここにいる女の子、只者ではなかったのだ。

「ふ～ん。あんたも大変なのね！」

彼方の嘘をあっさりと信じたのだ

え　ぇ！？信じるの！？

自分の嘘を信じられたことに唖然とする

目の前の少女はというと、なにか満足したのかしきりに首を縦に振っていた

「え～と……君は何をしていたのかな？俺への攻撃は……えっと、なんとなくだったんでしょ？」

このままじゃらちがあかないと思った彼方は、女の子の目線の高さまで膝を曲げてできるだけ小さい子に接するような声で聞く

女の子は彼方の質問で、はっとした顔になり手をポンッと叩いて

「そうだった！こんなことしてる暇なんてなかったんだ！あんた暇

そうね！ちょっと手伝いなさいよ！」

「えっ！？ちょっとっ！？」

いきなり腕を掴まれたかと思うと、必死になって彼方をどこかに連れていこうとする女の子

いきなりの展開に追いつかない頭で、行き先だけは知っておこうと思い女の子に聞く

「ちょっとどこに行くんだよっ！？」

「あそこだよ！あそこだよ！」

だから、そのあそこを聞いてるんだよっ！！

そう叫びたかった彼方であったが、言おうとした矢先木にぶつかり、噴出した鼻血を止めるために叫ぶタイミングを逃してしまったのであった

▽　▽　▽　▽

「ここよ！！」

鼻血をなんとか止めて前を見る

そこはとても幻想的だった――――

さわさわと透き通った川の水が上流から下流へと流れ、透き通った水の中には小魚達が気持ちよさそうに泳いでいる

外の世界では滅多にお目にかかれない自然の光景だった

「すげぇ……」

無意識のうちに口から言葉が出た

「すげえよ、ここ！水は綺麗だし、魚はこんなに気持ちよさそうに泳いでいるし！木が覆いかぶさっているおかげで、直接光も当たらないし！」

俺は川の中に足を入れて、その水の冷たさに懐かしさを覚えながら女の子に早口で喋っていた

「へへんっ！こんなところ見つけるなんて、あたいってやっぱり天才ね！」

俺の言葉に気をよくしたのか、女の子は無い胸を張る。その声はどこか嬉しそうな気がした。

「ところで、ここに連れてきてなにすんの？えーと……」

そこまで言って名前を聞いてないことに気付いた

女の子もそのことに思い至ったのか、腰に手を当てて

「あたいはチルノ！サイキョーの妖精よ！」

えっへん、という形で答えた

「チルノちゃんか。俺は不知火彼方。よろしくな」

手を差し出すと、チルノちゃんは手を握って来た。俗に言う握手である。握ったチルノちゃんの手はひんやりとしていて、そこだけど

こか違う場所のように思えた。

「（いや……手だけじゃないな）」

改めてみると、チルノちゃんの周りだけ周囲とは違う温度をしていた。

「（こんなにちっちゃい身体なのに、凄いなぁ……）」

依然霊夢から聞いたことがある。

幻想郷には妖怪と人間、神様と妖精がいて、もっとも幻想郷で弱い存在が妖精だと聞いた。

だが……

「（明らかに俺より強そうなんですけど……）」

チルノちゃんをみるかぎりそうは思わない。もしかして、チルノちゃんが妖精の中で破格の強さなんだろうか？それとも単に俺が弱いだけなのかな？後者っぽい気がするけど・・・・・……

俺がそんなことを考えているのをよそに、チルノは川の中へざぶざぶと入っていってしまった

俺が口を出さずに見守る中、チルノちゃんは中央まで行くと水の中に向かって勢いよく手を突っ込んだ

ばしゃぁっ！と水しぶきが舞う

「え～と……チルノちゃん？ほんとに何してるの？」

いきなりの行動に訳がわからなかった俺は、いまだ突っ込んだまま動かないチルノちゃんに向けて疑問の声を上げた

「見て分からないの？石を探してるの」

「まぁ見て分からなかったから聞いたんだけどね。それにしても…石なんてそこらへんにあるじゃん。ほら、ここにもあるよ？」

すぐ下に手を入れ一つ石をつまみあげる

「ううん。それじゃダメなの。わたしが探してるのはハート型の石」

「ハート型の石？またなんでそんなものを？」

そもそもハート型の石なんてあんのかな？

そんな俺をよそに、チルノちゃんは俺の疑問に大きく頷いて答えた

「あるよ、絶対ある。一回だけここでみたもん」

「ここで？水の中で？」

「うん、そう」

だとしたら、その石はもうここにはないんじゃないかな？

そう答えようと口を開けたが、チルノちゃんの真剣な顔つきをみて開けた口を静かに閉ざした

「ねぇ、なんでそんなにハート型の石がいるのか教えてくれないか？」

俺の問いにチルノちゃんは、一拍置いて口を開いた

「大ちゃんにあげようと思ったの」

大ちゃん？あだ名かな？

「大ちゃんっていう子は、お友達かなにかかな？」

「うん。いまはあたいの一番のお友達だよ！」

チルノちゃんはそう力強く答えて、大ちゃんとの出会いを俺に話してくれた

▽　▽　▽　▽

あたいが大ちゃんと初めて会ったのは今日みたいに天気がいい日でね。

そのころのあたいは、悪戯ばっかりしてたんだ

その悪戯のおかげで他の妖精の皆からも腫れもの扱いされてたの。

妖精って基本的に弱いでしょ？けど、あたいは皆よりずっと強かったの。そんなあたいが悪戯なんかしたら、それも同じ妖精相手に……そんなことしたら避けられちゃうよね。

でも、そのときのあたいは気にしてなかった。

だってサイキョーだから。サイキョーのあたいには友達なんて必要ないんだ。そう思ってたの。昔、一人だけいた友達が消えてしまったことも少しだけ理由にあるけど。まぁ、それはいま関係ないから置いとくね？

それでね？いつもと変わらず辺りを飛んでたの。いわゆるテリトキーってやつよ。……え？テリトリー？大丈夫、似てるから問題ないわ。

それで、ふらふら飛んでたら目の前から声が聞こえてきたの。一つは女の子の声でなんか叫んでるような感じで、もうひとつは何人かが怒鳴ってる感じがしたわ。

その声が気になってあたいはそこに行ってみたの。どうせ暇だったし。

そしたらあたいと同じ妖精の子が男の大人達に詰め寄られてたの！
男達がすっごく近くで怒鳴っていたから、その女の子が怯えていたわ。

そしてその時にあたいが飛び出してあげたの。理由？う～ん……
…なんとなく、かな。

そしてあたいの登場で男達はあたいのほうに詰め寄ってきたんだけど、逆にあたいのアイシクルフォールで男達をやっつけちゃった。

男達は覚えてろ～、とか言ってたけど名前もわからないのにどうやって覚えとけばいいのよ。って気持ちだったかな。

それでね？男達も去ったからあたいもまたどっか行こうかな～と思って、そこを離れる瞬間にその子があたいの服の裾を掴んで「ありがとう」って言ったの。

そのときのあたいは、なんだかそれが照れくさくて、そそくさと奥に行ったわ。

そしてその日は、家に帰ってたの。

普通助けてもらって、お礼いったらそれで終わりになるでしょう？

けどね、そうならなかったの。

次の日、あたいが湖でどんないたずらをしようかな～、って考えていると後ろから声をかけてくる子がいたの。

うん、そう。それが大ちゃんだったの。あたいは大ちゃんに、何か用？って聞いたの。そしたら大ちゃんね？一人で暇してるなら、遊ぼう？って声をかけてくれたの。

おかしいでしょ？妖精の皆からも避けられているあたいに、遊ぼうなんて声をかけるなんて信じられないよ。……でも、ほんの少しだけ嬉しかった。

そして……同時に少し怖かったの。昔の友達みたいに突然消えるんじゃないかって……。

そう思ってあたいは大ちゃんに聞いたの。

「ねぇ……あんたはあたいの目の前から消えちゃわない……？」

そう聞いたあたいに大ちゃんは笑顔で

「うん！もちろん！」

あたいの手を握りしめながら答えたの。

それからあたいは大ちゃんといつでも一緒に遊ぶようになったの。

▽　　▽　　▽　　▽

「これがあたいと大ちゃんの出会いだよ」

そういったチルノちゃんは、まるで自分の宝物を自慢するように胸を張っていた。

俺が彼女と出会ったように、チルノちゃんにとって大ちゃんという子の出会いは生涯色あせることはないだろう。そうこの子の顔を見て確信した。

「大ちゃんって子もチルノちゃんに会えてよかったって思ってるかもね」

頭をわしゃわしゃと撫でながら言う

妖精というものは、基本的に死なない存在だと聞いた。

それは言い換えれば死ぬことができない存在だということ。

そんな長い時間の中で、いつも傍にいてくれる存在がいるのだとしたら。それはどんなに幸せなことであろうか？

「よしっ！なら、探そうか！大ちゃんにプレゼントするために！」

「うん！もし見つけたらあたいの子分にさせてあげるね！」

体温が維持するかぎり俺は、小さな妖精のために頑張ろう

▽　　▽　　▽　　▽

「チルノちゃーん！どこ行ったのー！？」

大声を出しながら友達の名を呼ぶ。わたしの友達はすぐ悪戯ばかりして、ことあるごとに巫女の人やら魔法使いの人たちにこてんぱんにやられて帰って来る。

ほんと、こっちが心配してるのをいいかげん理解してほしい……。

「なんて言っても、チルノちゃんだしな～。それがいいところでもあるんだけど……」

このまま飛び続けても、らちがあかないと思ったわたしは近くにあった湖で休むことにしました。

「そういえば……わたしが勇気をだして遊びに誘ったときもこんな感じだったような」

人里の男の人に妖精という理由だけで襲われて、逃げ出したかったけど怖くてどうしようもなかったときにチルノちゃんが颯爽と現われたんだっけ？

あのときのチルノちゃんの背中はいまでも頭の記憶に焼き付いている

そして男の人達をあっという間に倒したチルノちゃんは、わたしがお礼をいうとそそくさと奥に行ったんだっけ？

そのときに感じたんだよね。

それから翌日はチルノちゃんを一生懸命探したっけ？

もう一度会いたくて、会って話しがしたくって。

そしてわたしは一生懸命探したんだ。

そして見つけた氷の妖精の後ろ姿は、どうしてか……泣いているようにみえたんだ。

わたしは自然に声を出していた

チルノちゃんはわたしの姿を確認して、妖精の皆からも避けられているの自分になんで？って本当にわからなそうに聞いたんだよね。

だからわたしは言ったんだ。

――わたしが一緒にいたいから

理由はそれだけでよかった。その理由さえあれば、十分だった。

チルノちゃんはその答えを聞いて、何かを考えたあと

「ねぇ……あんたはあたいの目の前から消えちゃわない……？」

どこか悲しそうな、それでいてなにかにすがるような声で聞いた

わたしはそんなチルノちゃんを安心させるように力強く答えたんだよね。

少し恥ずかしかったけど……

それでも、あれはわたしの本心だったから。

これから先もずっと一緒にいようという誓いだったから。

「だというのに……とうのチルノちゃんがいないしな～……」

「ん？あたいならここにいるよ？」

「うわぁっ!?チルノちゃん!?」

お、驚いた～……。いきなり後ろから声をかけるんだもん。びっくりしちゃったよ。

「えへへ。驚いた?大ちゃん」

「驚いたなんてもんじゃないよ～。もう!それで、いままでどこ行ってたの?」

チルノちゃんは、えへへ……と、はにかみながら

「大ちゃん。ちょっと目をつぶって?」

「え……?こ、こう?」

力いっぱい目を閉じるわたし。

そのとき、なにかがわたしの首に掛かった感触がした

「目、あけていいよ?」

チルノちゃんの言葉を受けて、おそるおそる目を開ける

そこには――

「うわぁ……。かわいい……」

綺麗なハート型をした石がかけられていた。

「これどうしたの！？」

「へへん！子分と一緒に探したの！」

こ、子分……？またわたしの知らないところでなにかしたらしい。

まったく……。

「けど……なんでわたしに？」

そう聞くと、チルノちゃんは恥ずかしそうにはにかみながら

「あたいの大切な友達だからだよ」

そういってきた。

思わず胸の奥が熱くなるのが分かった。

目から汗も垂れてきた

そんなわたしの様子をみて、チルノちゃんが心配そうな顔で「大丈夫？」と聞いてくる

わたしはその問いに「大丈夫」とだけ答えた。

これ以上なにか言ってしまうと、本格的に涙を流してしまいそうだった。

わたしの様子を心配しながらも、チルノちゃんは手を差し出してきた。

その手をわたしもとる

――今日は歩いてかえろうか？

――うん。そうだね。

そんな会話をしながら、わたしたちはゆっくりと家路についた。

歩くたびに揺れるハート型の石がわたしたちのことを微笑ましい様子でみているように思えてしまった

▽　▽　▽　▽

「ねぇ……彼方？あんた一人で大丈夫とかいってたよね？」

「……はい」

「魔理沙に抱えて運んでもらうほどに稽古をつけてもらったのね？ガタガタと震えるオマケ付きで」

「……」

「おまけにお土産が石って……舐めてんの？」

「……ごめんなさい」

あの後、石を探すまで水の中にいた俺はみつけた頃には体温を奪われていて歯の根も合わないくらい寒さに震えていた。

あたりは夕暮れどき

もうすぐ妖怪の時間である

そこに俺みたいな人間がいたらどうなるか？答えは想像するに難くない

そんなときだった。上空から魔理沙の声が聞こえてきたのは。

手を振る俺に手を振り返す魔理沙

そしてそのまま去って行った

あんときはまじで泣きながら、魔理沙の名を叫んだね。

だって、ここで魔理沙を逃したら俺の人生終了してたし。

魔理沙に事情を説明して笑われながらも、博麗神社へと送ってもらった。

そして、鳥居の前で待っていた霊夢へと連れていかれていまにいたる

「咲夜のほうから電話があったのよ？『彼方様が来ていらっしゃらないけど、どうしたの？』って、こっちが聞きたいくらいだったわ」

なおもぶつぶつと霊夢の小言が雨のように降り注ぐ

かくいう俺は先程から寒くて寒くてしょうがない。少し頭もくらくらしてきた。

早く終わってくれ。そう思った俺の願いが通じたのか、霊夢は立ち上がり

「お風呂。沸いてるから入ってきなさい。風邪引かれちゃ困るし…。それと！明日は私も行ってあげるから、門番にちゃんと頼みな

さいよ！」

それだけ言って部屋に戻っていった。

何故霊夢が風呂なんて沸かしていたのか気になったが、ありがたいことなので入らせてもらうことにしよう。

凍える身体を抱きながら俺は風呂場へと急いで行った

▽　　▽　　▽　　▽

後日、紅白の巫女に腕をひかれ紅魔館の門番になにやら頼み込んでいたのを、湖から二人の中のよい妖精がみつめているのであった。

## ０９．氷精と大妖精（後書き）

チルノかわいいよね！

# １０．小さな芽（前書き）

頑張りなさい――

# 10．小さな芽

幻想郷に静かに佇む館、紅魔館。その色合いは赤で統一されており見る人によっては禍々しくかったり、逆に美しく見えたりするだろう。

そんな紅魔館の門の前に一人の少年と、長身の女性が組み手をやっていた。

「彼方さんっ！もっと腰を低くして、重心を傾けて！」

「ちょっと！？まってよ！？美鈴っ！？」

少年こと、彼方の顔を鋭く美鈴と呼ばれた女性の足が襲う

必死に仰け反りながらかわす彼方。と、思ったのもつかの間、逆側からもう一方の足が襲ってくる。

「ぼさっとしないでください！！」

彼方に檄を飛ばしながらも攻撃の手を全く緩めようとはしない。

右に左に。その長身から繰り出される足技は一種の芸のようでもある。

彼方はというと、その攻撃を必死に避けながら攻撃……とほんとうはいきたいところなのだが避けるのに必死で全く攻撃ができないでいた。

「くっそ！……さっきから避けるばっかりじゃないかよ！？」

思わず愚痴を零す彼方。しかし、これも避けることだけしかできずに反撃に転じることができない、自分のせいであるからより一層愚痴を零したくもなるものだ。

だが、美鈴はその隙を見逃すはずがなかった。

愚痴を零した瞬間――――

「口よりも手を動かしてくださーい！！」

美鈴の放った蹴りが見事彼方の顎を的確に撃ち抜き、彼方は目を回して後ろに倒れるのであった。

「か、彼方さーん!?だ、大丈夫ですか!?」

慌てて介抱に入る美鈴、そして介抱されている少年をため息まじりに見ていた少女がいた。

季節は秋がやがて終わり、冬を迎えようとしているころだった。

▽　　▽　　▽　　▽

「いまだに空も飛べず、かといって格闘が強くなったかというとそうでもなく……あんた、やる気あんの?」

紅魔館の一室にて、紅白の巫女服を身に纏った少女が、隣で項垂れてる彼方にキツイ言葉を投げかける

「俺だって一生懸命やってるさ……。でもな……大体普通の人間が空を飛ぼうだなんてことのほうがおかしいの!俺は外の世界では凡人で、身体能力が異常に高かったり、とんでも能力を持ってたりはしてなかったんだよ!」

ウガーとでも後ろに付きそうな勢いで吠える彼方。

あまりにも可哀想な彼方を見かねたのか、少女の横で一緒に見ていた紅魔館の主、レミリア・スカーレットが

「でも、初めに比べたらよくなったじゃない。美鈴の攻撃も三分くらいなら避けれるようになったんでしょ？すごい進歩じゃない」

初期の頃と比較して彼方を褒める。初めの頃は5秒に一回のペースで美鈴の攻撃を受けてダウンしていた頃に比べればすさまじい進歩である。

しかし――

「でも、それだって美鈴がかなり手加減してくれてるからでしょ？」

「う〝っ！？」

霊夢の言葉通り、美鈴が手加減している状態での三分である。

その事実に彼方は思わず、胸を押さえて机にへばりつく

そんな彼方の様子に、流石の霊夢も言い過ぎたと思ったのか

「で、でも！それでもすごいことよ！？紅魔館の門番の攻撃を少しの間避けれるなんて、そうそうできることじゃないわよ！？」

手をパタパタと左右に振って、なんとか彼方を勇気づけようとする。今頃になって自分が彼方の胸をどれだけ抉ったのかを理解したのだろう。

ガタッ！！

「キャッ！？」

おもむろに席を立った彼方に驚いてついつい後ろに下がってしまった霊夢

そんな霊夢など眼中にないのか、ふらふらとしたおぼつかない足取りで部屋を出ていく。

「……ちょっと、いまの彼方やばくない……？」

「目が虚ろでしたね～」

様子をみていたレミリアとその従者、十六夜咲夜が後ろでこそこそと話しているのを後ろに聞きながら、霊夢は少し言い過ぎた。なと反省するのであった。

▽　　▽　　▽　　▽

紅魔館を出た彼方は、その足で川に来ていた。

なし崩し的に子分にされた、あの川の場所である。

あれからチルノとは何度か会って遊んでいる。チルノの友達である大ちゃんとも一緒に遊んだものだ。

チルノ達との楽しい日々を思い出しながらも、口から出るのはため息ばかりである。

「うふふ。人間がこんな所にいると妖怪に食べられちゃうわよ?夜に活発的になるだけで、昼の間は襲わないってわけじゃないんだからね」

「うわあぁっ!?」

いきなり背後から聞こえてきた声にみっともなく声を上げる

慌てて振り向くと、そこには――――

「まったく……。こんな綺麗で可愛いお姉さんが話しかけてあげたのに、そんな悲鳴はないんじゃないかしら？」

なんともおぞましい目をした、すき間みたいな空間から顔だけ出している女性が彼方のほうを見やりながら頬を膨らませていた。

▽　　▽　　▽　　▽

「はじめまして、不知火彼方くん。私は八雲紫（やくもゆかり）。妖怪の賢者よ」

そういってすき間から這い出てきた女性は、手を差し伸べて握手を要求する

「あ、これはどうも。八雲さん」

「ゆ・か・りって呼んでくれてもいいのよ♪」

自分の豊満な胸を彼方のほうに押し当てながら、可愛く指を左右に揺らす妖怪の賢者こと、八雲紫

「いえっ!?その、呼び捨ては気が引けるので、さん付けで!?」

紫の胸の柔らかい感触をひそかに堪能いながら、流石に呼び捨てはまずいと思い、さん付けを提案する

どうやら紫もそれでいいらしく、意外とすんなり了承が貰えた。

「ところで……なんで紫さんが俺の名前を知ってるんですか?俺と紫さんは初対面のはずですよね?」

どくんっ――

初対面

ほんとうに?

俺はこの人を知ってるんじゃないか?

胸の奥に湧き上がる小さな疑問と、奇妙な感覚が彼方を襲う

「ええ。貴方と会うのはこれが初めてよ。でも、噂くらいは知ってるのよ。外来人で能力持ち。これは妖怪の長として確かめておこうかな～、と思って。って、ちゃんと聞いてるの？彼方くん」

「え……？あ、は、はい！もちろんですよ！」

下からのアングルで至近距離から見られたので、おもわず顔が赤くなり少しだけドキドキしてしまう。

そしてそれと同時に、先程までの奇妙な感覚は消えていた

一体なんだったのだろうか？

「ほんとかしら……？まぁ……それはいいとして、さっきため息なんか付いていたけど、何か悩み事かしら？」

「え……えぇ。その～……ちょっと……」

なんとも歯切れの悪い彼方の返答

「なにかしら？お姉さんに話してスッキリしてみない？」

そんな彼方をみて紫はそう提案する

「う～ん……。なら、ちょっと恥ずかしいんですけど、聞いてくれますか？」

▽　▽　▽　▽

「なるほどね～。才能のカケラもなくて、みんなが教えてくれてるのに期待に答えれなくて落ち込んでいると……。それは困ったわね～」

「……結構軽いですね」

彼方の悩みを聞き終えた紫は、彼方の横に座りながら軽い感じで感想をいう

「あ、ごめんなさいね？私ってそういう経験がないからわからないの」

てへっ♪っと舌を出しながら答える紫

「まぁ……そりゃそうでしょうね。紫さんは妖怪の賢者ですし。俺みたいに凡人じゃないし、綺麗だし、可愛いし……。それに比べたら俺なんて……」

そう言いながらもどんどん彼方は胡坐の体勢から体育座りになり頭を丸め、しくしくと泣きはじめた。

「俺なんて、霊夢に飛び方教わってるのにいまだに浮くことすらできないし、美鈴さんに至ってはいまだに避けるばっかりだし、攻撃の方法を教わってるのに……」

対人戦に置いては外の世界はもちろん、ここ幻想郷においても美鈴に勝てるものは少ないだろう。霊夢に至ってもそうだ。空の飛び方だけではない。弾幕だって霊夢に教えてもらっているのだ。スペルカードの作成にも係わってくれている。

そんな状況の中、いまいち成果の出ない自分に彼方は情けなくなってしまったのだ。

「能力にしたって一定の強さがあるわけではないし……俺なんかが幻想郷で過ごすこと自体がダメなんじゃないかな～ってこの頃思ってしまうんです。それに、怖いんです。こんなにしてくれているの

に肝心の俺がダメダメで……。いまは皆付き合ってくれているけど、いずれは飽きられてしまうんじゃないかって」

気がついた時には本音をぶちまけていた。

ついさっき会ったばかりの人に、自分の身近な人達にも話せなかった悩みをスラスラと話すことができていた。

「そもそも、俺は幻想郷に永住しようとは思ってないし。外の世界には母さんや学校の友人、それにあの子だって俺の帰りを待っていると思うんだ。だったら……このままいっそ、ここから消えてしまったほうがいいような気がしてきて……」

言葉を紡げば紡ぐほど、頬から何かが伝わり落ちていく。

喋れば喋るほど声が震えてくる。

嫌になる

何が？

いつまでたっても進歩しない自分自身が

悔しい

何が？

幻想郷から逃げようとしている自分に勝てないのが

ふわっ――――

「大丈夫よ。貴方はしっかり成長しているわ。ずっと見ていた私が保証してあげる」

後ろから優しく抱きしめ、泣いている小さな子供をあやすように頭を撫でる

「ゆ……か……り……さん？」

「大丈夫よ。あの子達はそんなことしないわ。あの子は……霊夢は絶対あなたを見捨てたりはしないわ。妖怪の――――いえ、幻想郷の管理者である八雲紫が断言してあげる」

気付いたら俺は大声で泣きながら紫さんに抱きついていた。

紫さんは俺が泣きやむまでずっと抱きしめて、手を握ってくれていた。

紫さんの胸に抱きついた時に思ったのは、何故かどこか懐かしいような感覚がしたことだった。

▽　　▽　　▽　　▽

「その……みっともない姿を見せて申し訳ないです」

いまさらになって恥ずかしくなってきた俺は、目の前にいる紫さんの顔を直視できないままで話しかける

「うふふ、いいのよ。泣きたくなったらお姉さんにいつでも抱きつきにきなさいね？」

それは勘弁願いたいです。

目の前で笑顔を浮かべている女性にそうはいえない彼方

しかし、本音をぶちまけたことにより胸の中にあったもやもやが少しだけ無くなった気がした。

時刻は既に夕方である

「それでは、俺は帰りますね。今日はありがとうございました」

もう一度頭を下げる

そんな俺に紫さんは顔を上げさせ

「ねぇ、彼方くん？彼方くんは同じ植物でも成長が早いのと、遅いのはどっちがいいと思う？」

いきなり変なことを聞いてきた

いや、紫さんのことだ。多分、何か意味があるんだろう……。

「え～と、それはやっぱり成長が早いほうがいいですね」

何事も早いことがいいに決まってる

そう答える俺に紫さんは一つ微笑んで

「なら、成長は早いけどひょろひょろ伸びた植物と、成長は遅いけど時間をかけて茎が太く育った植物ならどっちがいいかしら？」

「それは、茎が太いほうが――――」

あれ？

そこまで言って俺は紫さんのほうに顔を向ける

するとそこには、

「そういうことよ。それじゃ、頑張ってね？」

手を振りながらすき間に帰ろうとする紫さんがいた。

もちろん顔は笑顔だ

そして音もなく消えていく幻想郷の管理者

「かなわないな……」

思わず俺は笑顔で頬を掻いた

▽　　▽　　▽　　▽

「彼方!?どこ行ってたの!心配したのよ!?」

「ごめん霊夢」

博麗神社に帰った俺は、そこで鳥居の前で待っていた霊夢にお叱りを受けていた。

俺はかなりの幸せものなのだと思う

帰りが遅くなればこうやって霊夢が鳥居の前で待っていてくれて、あまつさえ俺を叱ってくれる。

霊夢のお叱りの最中にはどうやら俺を探していてくれたらしい魔理沙が笑って俺に拳骨をくれた。

紅魔館のみんなからも電話があった。

あぁ……。なんて俺は幸せものなんだろう。

「だいたいあんたは――」

「なぁ霊夢」

いまだに俺を説教している霊夢の意識を強引に俺に向ける

「なによ？まだ終わってないわよ」

怖い顔で睨んでくる霊夢。さっきまでの心配そうな顔とは大違いだ

「ありがとう」

「――へ？」

それだけ言って俺は席を立つ。

今日は泣きつかれたから早く眠りたいのだ

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ!?彼方!」

後ろで霊夢が何か騒いでいるけど無視して寝ちゃおう

今日はなんだか気持よく眠れそうな気がした

▽　　▽　　▽　　▽

薄暗い寝室に二人の女性がいた。

一方は寝間着姿で、もう一方は割烹着姿で

しかしその顔は二人とも真剣だった

「どうでしたか?紫様。あの方との接触は?」

尋ねられた八雲紫はため息で答える

「無理だったわ。でも、居ることがわかっただけでもよかったわ」

それに――

「彼方くんのほうも気にいっちゃった」

そういって眠る紫に従者は頭を抱えるのであった。

本来ならば冬眠にはいっているこの妖怪がただ一人の人間のためだけに起きていた。

それが何を意味するのかは、まだ誰にも分からない

# 11．冬妖怪の恋愛指南（前書き）

彼方が悪いんです

# 11．冬妖怪の恋愛指南

しんしんと雪が降り積もるこの日

俺と霊夢は人里へ買い物に来ていた

「冬だというのに、人里の人達は元気だな～」

厚着をしているものの、行き交う人々の顔は笑顔で溢れていて、なんだか見てるこっちまで楽しくなってくる。

「確かにここと、そっちじゃ違うのかもしれないわね。外の世界はどうだったの？」

「う～ん……。なんというか、こんなに笑顔じゃなかったかな。確かに笑顔の人もいたけどそれは作り物だったり、とか結構あるし」

外の世界は、色々なことがあり過ぎて、みんな笑顔というものを忘れている人が多いような気がする。

その点……幻想郷の人達の笑顔は見ていて気持ちがいい

「ところで霊夢。みるからに高そうなものを買っているけど、大丈夫なのか……？生活結構厳しいんじゃなかったっけ？」

手に持っている食材の中身をみやる。幻想郷内では滅多に食べることができない海の幸や、高そうな肉が入っている。

帳簿をみながらため息をついている霊夢の姿を知っているこちらとしては、こんなり無理して大丈夫なのかと心配になってくる

「大丈夫よ。いざとなったら紅魔館にたかりに行くし」

ごめん、咲夜さん。俺に霊夢は止められない。

「でも……なんでいきなり？」

そう聞く俺に霊夢は、八百屋に鎮座してある野菜をみながら

「べつに……いきなりじゃないわよ。その……あんたが浮くことができるようになったから、その……記念にと思って……」

小さな声で、ぼそぼそと喋る霊夢。その顔は熟れたリンゴのように

赤かった。

彼方が初めて浮くことに成功したその日は、まるで自分のことのように喜び、できの悪い弟がテストで１００点をとってきたことを自慢するかのように周りの人にみせびかしたもんだ。

その時の彼方はあまりの恥ずかしさのあまり、途中で逃げ出したのだが。

「き、記念といっても、あれよ？べつに普段よりちょっとだけ豪華にするだけだし、そもそもやっと浮くことができるようになったのか……。ってくらいだし！少し才能がある人なら、もうとっくに空を飛んでいることだしね！」

わたしは自分でも自覚できるほどの早口で捲し立てる

彼方が紅魔館から飛び出したあの日

なんども探しに行こうか迷った。だけで、その度に魔理沙に止められた。

『あいつはこれくらいじゃ、諦めないぜ』

そして魔理沙のいうとおりだった

夕方近くになって帰って来た彼方の目は、フランとの夜に視たあの目をしていた。

それから彼方は寝る間も惜しんで練習をしていた。

それをわたしが発見できたのも全くの偶然だった

まぁ……発見できた理由は、あれよ、あれ。その……人間にとっては欠かせない行動というか……。えぇいっ！そんなのはどうでもいいの！

えっと……そうそう、彼方はわたしが眠りについたころに一人、庭で空を飛ぶ練習をしていた。

空を飛ぶといったって、初めは空に浮くことから始めてるのだけど……、まぁとにかく彼方は一人で練習していたわ。それが終わると弾幕の練習を、そして美鈴に習っている格闘を。

格闘といっても、本格的な格闘を学んでいる、ということではないみたい。美鈴いわく『彼方さんは格闘よりも、まずは身体能力を上

げましょう！』ということで身体能力の向上を最優先でやられてるみたいね。もちろん、たまに格闘も教えるみたいだけど。

弾幕に至っては、思わず顔を覆いたくなるほどね。いまだに弾幕で出せる量なんて指で足りる程度だし、質に至っても同じく。まぁ、彼方の場合は能力が能力だけに、もっとすごい弾幕もできるかもしれないけど……それは希望的観測に過ぎないから考えるのは止めましょう。

確かに才能なんて欠片もないけど、それでも彼方は諦めようとはせず、寝る間も惜しんで練習してきた。

だから、今回彼方が浮くことに成功したのが嬉しかった。舞い上がりすぎて思わず周りに自慢してしまうくらい。

まだまだ浮くことができただけで、これからやっと空を飛ぶ練習だけど……まずは浮くことができたのを祝ってあげないと！

そう思い、わたしは後ろにいるであろう彼方に声をかけた

「ね、ねぇ彼方？あなた確か人参を甘く煮詰めたものが好きだったわよね？」

彼方のことだ。あの笑顔で元気よく肯定するでしょう。

そう思いながら後ろを振り返ったわたしの目に飛び込んできたのは

――――――

「すいません、怪我はないですか？」

「えぇ。大丈夫です」

兎の耳を生やした女の子を抱きかかえるようにして声をかけている彼方だった。

女の子のほうは彼方の問いに完結に答えると、そそくさと去って行った

「いや～、驚いたな～。こんなところでブレザーを見ることになるなんて。久しぶりだったからついついそのまま見ちゃってさ～、そのままあの子とぶつかってしまったよ。アハハ」

彼方はわたしをほうをみながら、楽しそうに喋る。

ブチィッ！！

その顔をみた瞬間、わたしの中の何かが切れた

「そういや、なにか言ってたけど……って、霊夢さん？どうしたの？」

「どうしたの？ですってぇぇ～……！！よくもまぁ、その口からそんな言葉を吐けるわねぇ～……」

ゆらり　ゆらり

身体を左右に揺らしながらゆっくりゆっくり彼方の至近距離まで詰めていく

「わたしがあんたの頑張りを称して祝ってあげようかな～、と思って少しだけ無理をして買ってるのに。あんたの好物を思い出しながら買い物をしてるのに、当人のあんたは楽しそうに女の子をナンパですか。そうですか……」

『逃げろ』というサインが彼方の身体の中を駆け廻る

しかし彼方の身体は一向に動かなかった。否、動けなかったのだ。

幻想郷に初めてきた時に味わった恐怖の感覚が蘇って来る

ゆらり　ゆらり

彼方の至近距離のところに到達した霊夢

「……た……か……」

小声で何かを呟いている

「え？」

その言葉を聞こうと彼方が霊夢の口まで耳を持っていった瞬間――

「彼方の馬鹿ぁぁぁぁあああぁぁ！！」

爆音と呼んでも差し支えないほどの声で霊夢が彼方に叫ぶ

彼方はというと、あまりの大きさに思わず尻もちをついてしまった。

キッ！

彼方のほうをみた霊夢の目には少しばかり涙が溜まっていたのだが、本人は耳が痛すぎてそれどころではない。

「彼方のことなんか知らない！この馬鹿！あんたなんかさっきの子とよろしくやってたら！！」

そう吐いて、霊夢はさっさと飛んで博麗神社まで帰って行った。

残されたのは、いきなりのことで戸惑っている彼方と、霊夢が叩きつけた食材だけだった。

▽　　▽　　▽　　▽

「う～ん……流石に女の子と買い物に出かけてるのに、他の女の子と喋るのはまずかったかな～。それに、さっきの俺は傍からみたらただのナンパ野郎だったしな～……」

あの後、騒ぎを聞きつけ駆けつけた人里の守護者の人に事情を説明し、俺はいま歩いて博麗神社に帰っている最中だ。

人里の守護者の人からは拳骨をもらってしまった

いま思えば当然であるが。

「まずったなー……。外の世界で学習したつもりだったんだけどな〜……」

『もう！彼方ちゃんは、わたしだけをみてればいいの！』

そう言ってプリプリと怒る彼女のことを思い出す

外の世界ではよくあの子と買い物に行っていた。そのたびに俺はあの子にそう言われていた。

あの子いわく、女の子は自分と一緒にいる男の子が違う女の子と仲良くしていたらダメらしい。

これもあの子が腰に手をあてて、まるで物分かりが悪い子供に先生が優しく教えるように延々と話された覚えがある。

「それに……この食材をみるかぎり今日は豪華な料理を作る予定だったんだろうな～……」

霊夢によって一部が食べれなくなった食材を目の高さまで持っていき、その食材の凄さにため息が出る

海が存在しない幻想郷で海の食材を手に入れること自体が至難の業だ。

そしてそれが人里に流れてくる、ということはほとんどない。

だというのに――

「鯛が二匹……」

元来、鯛とはめでたい時に振る舞われた食材である。

どのような手段を講じてこの鯛を調達してきたのか分からないが、霊夢がどれだけ俺のことを祝おうと思ったのかはこれをみれば明らかだ。

「そういえば、あの時は俺よりはしゃいでたよな～」

『やったわね！彼方！』

『みてみて魔理沙！ついに浮くことができるようになったわよ！』

『まぁ、わたしの指導がよかったからだけどね』

はしゃぐだけはしゃいで、その後我にかえったのか急にそっけなくなった少女を思いだして、ついつい笑みが零れる

「っと、少し寒くなってきたな……」

博麗神社までもう少しあるというのに、だんだんと寒さが厳しくなってきた

「おいおい、勘弁してくれよ……。ただでさえ寒いの苦手なのに……」

ついついそんな愚痴を零してしまう。まぁ、誰もみてないしいいだろう。

「あら、この寒さがいいんじゃないの？」

前言撤回。後ろに誰かいました

「もしかして、あなたも冬が嫌いなのかしら？」

「いや、嫌いではないんですけど……。寒さがすこし苦手で……」

冬にしかできないことだって沢山あるし、そういうのが楽しめるので冬は好きだ

「ふ～ん……寒さは苦手なのに冬は好きと……。おかしな人ね」

俺の答えを聞いて背後でくすくすと笑い声がもれる

その声が気になり俺はそ～っと後ろを振り返る

そこには、雪女らしき人が口に手を当てて笑っていた

「くすくす……、ごめんなさいね？あまりにも可笑しかったから。私の名前はレティ・ホワイトロックよ。よろしくね」

そういって差し出された手を握り返して、こちらも名乗る

「不知火彼方です。えっと……レティさんは、その……妖怪です、よね？」

「ええそうよ。冬の妖怪よ」

冬の妖怪？

なんか限定的な言い方をする人だな。それに――握っているはずの手がとても冷たい人だ。

いや、冬の妖怪なんだから当たり前かもしれないけど……

「ところで、あなたは一体こんなところで何をしているのかしら？」

首を傾げながらそう聞くレティさん

「え～っと……」

先程のことを言っていいのか迷う。というか言いたくない。

第一なんて言えばいいんだよ!?

えーと、えーと!?……そうだ!

「家に帰る途中です」

目まぐるしく回る頭の中で出た答えはなんとも簡潔的だった。

実際博麗神社に帰ってる途中だし、嘘をついてる訳ではないし大丈夫だろ!

「ふ〜ん……家に帰る途中ねぇ。家に帰る前に女心というものを学んでみたらどうかしら?」

……へ?

いきなりの発言に思わず目が点になる

なにを言ってるんだこの人……？

俺の視線に気づいたのか、レティさんは、ふふんとでも言いたげな顔で

「ずっと後ろから聞いていたのよ。色男さん？」

可愛くウインクを送って来た

▽　　▽　　▽　　▽

雪が降りたる道で、一人の妖怪と一人の人間が何かを話していた。

男が一方的に喋り、女は男の話を聞いているだけである。

やがて男は話し終えたのか、その口を閉じる。

男の名前は不知火彼方。外の世界から幻想郷に来た絵に描いたような凡人である。

そして女の名はレティ・ホワイトロック。冬の妖怪である。

何故共通点なぞ存在しない二人が一緒にいるかというと――――

「それはあなたが全面的に悪いわね」

――レティによる恋愛指南を彼方が受けているからである

「うっ……！やっぱり……」

「当たり前よ。むしろ死ななかったことに感謝するのね。私なら氷漬けにしてたわ」

氷漬け……！？

驚く俺にレティさんは、当然よ、とう顔をしたまま眼前にピッと人差し指を持っていき

「それくらいの罪だと思いなさい」

やれやれと困った風に頭を振りながらそういった

「でも……もしそうならこれからどうすればいいんでしょか？」

あの子の時は、一緒に寝るとかで許してくれたけど……霊夢にそんな提案しても……

『霊夢、今日は一緒に寝ようか？』

『夢想封印！！』

ダメだ！！消されるビジョンしか思い浮かばない！？

いや……よく考えてみると、そもそもこの年になって一緒に寝るように強要してきたあの子がおかしいんじゃないか……？

外の世界でのあの子の行動に、う～ん、う～んと考えている彼方にレティは蹴りを一発ぶち込んで

「いまは目の前のことに集中しなさいっ！！」

「は、はい！！」

それから、レティによる恋愛指南は一時間にもわたった

▽　　▽　　▽　　▽

博麗神社の石段を一人の少年がゆっくりと登る

「あ～、疲れたぁ～……。こんな寒い中一時間も恋愛指南はキツイってば」

ぶつぶつと言いながらも少年の中には、冬の妖怪に対する負の感情は全くといっていいほどなかった。

それはたぶん、あの冬の妖怪が自分のことで親身になっているのがわかっているからであろう。

確かに、寒くはあったがそれに見合うだけの何かを得られた……と思いたい

「それより……レティさんが最後にいったあの一言が気になるな～……」

恋愛指南が終わって帰る間際にレティさんは確かに呟いた

『忘れ去られる、ということは生きていく中で一番怖いものなのよ』

あの時のレティさんは、とても妖怪だとは思わなかった。まるで――

――――

「なにボ～っとしてんのよ？そっから先は石段はないわよ？」

「へ……？って、うわっ！？」

隣から声が聞こえてきたと思った瞬間、石段を登るために高く上げていた足は石段がないことにより、スカり勢い余って転んでしまった。

その様子を隣で、冷たい目でみている少女

その少女に彼方は、きわめて明るい声を意識して話しかけた

「や、やぁ！霊夢！ただいま！」

「おかえり。ずいぶん遅かったじゃない？もしかして……ほんとにあの女の子とよろしくやってたのかしら……？」

優しい声色で、可愛らしい笑顔で彼方の首を掴みあげる、博麗神社の巫女、博麗霊夢

その頬は少しひくついており、後ろには気のせいだとは思うが、鬼がみえる

「お、おちつけ！？違うってば！？」

彼方は霊夢の手をどけようとするが、あまりの力にどけることを諦めて霊夢に説明をしようとする

『いい？下手に説明なんかするより、女の子は抱きしめられたほうがいいのよ？』

「っ！」

ガバッ！

「えっと……ただいま？霊夢さん」

思わずレティの言い付けを思い出し抱きついてはみたものの、何を言えばいいのか分からなかった彼方は先程の言葉を繰り返した

「へっ！？な、なによ！いきなりっ！？」

いきなりの行動に手をパタパタさせて驚く霊夢のことなど気にせず、なおも抱きしめる

「ただいま、霊夢」

「も、もうっ！……おかえり、バ彼方」

顔を上げた霊夢は、嬉しそうに少年の帰りを喜ぶのであった

▽　▽　▽　▽

かちゃかちゃと食器を洗う音が響く

「霊夢～、タオルとってー」

「もう、自分で取りなさいよ」

そう言いながらも霊夢は、彼方のほうにタオルを投げて寄こす

夕食が終わり、いまは食器を片づけている最中だ。

元々、これは居候の彼方の仕事なのだが、少し前くらいからたまに霊夢の手伝うようになってきた。

ザブザブと溜めた水で、皿を洗いながら霊夢は隣でタオルで皿を拭いている彼方に

「ね、ねぇ？彼方？さっきのあれは……その……どういう意味かしら？」

もじもじとしながら聞いていた

さっきのとは、彼方が霊夢を抱きしめたことだろう

問われた彼方は、皿を拭きながら実にあっけらかんと答えた

「あ～、あれ?実はレティさんの受け売りでさ～。いやー、流石レティさんだ!一発で霊夢の機嫌が直ったね!」

「……え?」

「あ、レティさんっていうのはさ――――」

隣でそのレティという女のことを楽しそうに話す彼方

霊夢の中で、静まり返っていた怒りが再度わき起こる

ふ～ん……。やっぱり、誰かの入れ知恵だったのね?

べ、べつに彼方にあんなことされて嬉しかったわけじゃないし、どうでもいいんだけどさ

彼方のほうをみやる霊夢

そこには、いまだその女のことを楽しそうに喋っている居候の姿がある

だけど……なんでここで他の女の名前なんか出して、ましてや楽しそうに喋っちゃって……

プルプルと霊夢の拳が震えてくる

「――――それでさ～、って霊夢さん？どうしたんですか……？」

彼方なんて……彼方なんて……

「あ……れ……？霊夢さん……？」

「もう知らない！！馬鹿ぁ！！」

その夜、博麗神社の周辺では、泣きながら誰かに謝る声が聞こえたとさ

## 11．冬妖怪の恋愛指南（後書き）

ポルタの遺産を追って、カプリ島に先行上陸したミスタとジョルノ！トラックに乗り込んだ敵スタンドを追った、ミスタだが、物体を自由に固定できるスタンド『クラフト・ワーク』を前に苦戦を強いられる・・・！！

# 12. 人形使いの宝物（前書き）

シャンハーイ！

## 12．人形使いの宝物

人里のある所で沢山の子供たちの声が聞こえてくる

その声はどれもこれも楽しそうで、聞いているこっちが楽しくなってくるほどだ。

場所は寺子屋。そこで今日は、月に一回の割合で行われる人形劇があっていた。

「すげぇー！すげぇー！霊夢、見てみろよ！これ全部、あの子が一人で操ってるんだってよ！」

そんな子供たちに紛れて一人はしゃぐ少年がいた

年の頃は１６くらいであろう。その少年は膝に、シャンデリアをおもわせるような羽をもった可愛らしい女の子を抱えて、隣にいる紅白の巫女服をきた少女に話しかけていた。

「わかってるから。聞いてるから。お願いだから彼方、静かにみて頂戴。恥ずかしい……」

霊夢と呼ばれた少女は、隣の少年、もとい彼方のはしゃぎようにみてるこっちが恥ずかしくなって、顔を赤く縮こまりながら答える

「ねぇねぇ、お兄ちゃん。ここではいつもこんなことをしてるの？」

「う～んと……。普段は慧音さんがここで、この子達に読み書きそろばんなんかを教えているんだよ。今日は月に一回行われる人形劇なんだって。フランちゃんは人形好き？」

「うん！大好き！」

袖をくいくいと引いて彼方に疑問を投げかけたフランと呼ばれた女の子は、首を大きく縦に振って元気よく答えた。

そんなフランの頭を彼方は優しく撫でる。すると、その手に甘えるようにフランは可愛らしい声を出す。一見すると、仲の良い兄妹みたいである。その横で、若干一名、握り拳を作っているが……。

はてさて……

何故、この三人がこんな所で人形劇を見ているのか？

それは、昨日の夜にさかのぼる――――

▽　　▽　　▽　　▽

夕食を終えた俺と霊夢は、居間でゆっくりとした時間を過ごしていた。

この時間は俺も霊夢も居間で、寝転がったり、本を読んだりと穏やかな時間が流れる。別に居間に二人揃っている必要はないのだが、なんともなしに二人ともここにいることが多い。

俺がスペルカードでも、考えるかな～って感じで席を立ったその時に電話のベルが鳴った。

「彼方、電話」

「……なんてタイミングなんだ」

スナイパーにもほどがある……。

そんなことを考えている間にも、電話のベルが鳴り止むことはなく、俺はしぶしぶと受話器を取った

「はい、もしもし。不知火……じゃなくて、博麗です」

いかん。ついつい自分の名字を名乗ってしまう……。いまの俺は居候で雑用係。博麗神社に居候中は、プライベートの時以外は博麗と名乗る習慣をつけないと……

「ん？彼方か？ちょうどいい。お前に用があったんだ」

受話器から聞こえてくる声には聞き覚えがあった。

何度か博麗神社の生活が危ない、とは言わないまでも結構厳しくなった時に俺を臨時のアルバイトとして雇ってくれた人里の守護者こと上白沢慧音さんだ。

「こんばんは、慧音さん。こんな時間にどうしたんですか？」

「こんばんは、彼方。実はな？前に話したと思うけど、月に一回行われる人形劇のことなんだけど……」

「あぁ、寺子屋の子供たちがいっつも楽しそうに話していましたね」

たしか亮や、佳奈が嬉しそうに話していたな。俺は毎回見れてないけど。え？何故かって？うちの家主がそういう時にかぎって紅魔館に行ったり、魔理沙の家に行ったりするんだもん。俺を連れて

「そうそう、子供達の楽しみの一つだよ。それでだ、今回は彼方も来ないか？もちろん、霊夢も連れて」

「それはそれは嬉しいお誘いですね。……っていきなり過ぎやしませんか……？」

いや、俺もめちゃくちゃ見たかったんだけどね？

俺の言葉に受話器越しに慧音さんの乾いた笑いが聞こえてきた

「ははは……。実はな？寺子屋の子供たちにどうしてもと頼まれてな……。全く、そのせいで今日は授業にならなかったよ……」

受話器越しでも、慧音さんが手を額に持っていき、やれやれ……としてる光景が鮮明に浮かんでくる

なるほどな。子供達たっての頼みなら慧音さんも断れないしな。

俺が一人納得していると、慧音さんは、それに……と前置きをした後

「私も楽しそうに人形劇を聞いてくるお前にみせてやりたいと思っていたんだ。いつも、どんぴしゃで居ないからな」

そう言って苦笑した

かくして俺は霊夢に頼んで、人形劇を見に行くことになった。初めは、すんごいジト目で見られていたが、急になにかを思い付いたのか、霊夢はえらく優しい笑顔になって了承してくれた。

そして俺は人形劇を見に行くことになった。

いまから楽しみだ。だって、一人で沢山の人形を操り、噂によると半自立人形もいるみたいだしな

▽　　▽　　▽

うんうん、と昨夜の回想を終わらせる

そういえば、フランちゃんは今日遊びに来たから連れてきたんだよな。俺と霊夢が二人で見てることを条件に。

そこは人里の守護者、人里に害が及びそうなものは野放しにはしない。

まぁ、あの顔をみるかぎりこの条件は人里の人達を安心させるための条件だろう。

慧音さん自身はとても歓迎していた。優しい方だ。

ワァー！！

ふと、子供達の歓声がひと際大きくなった

んっ？って何事かと思い前を見ると――――

「これでおしまいよ。長々とありがとうね」

そう言って子供達に頭を下げている女の子がいた。

金髪に赤いヘアバンド、そして隣に人形をずらりと並べていた

この女の子こそが先程から、子供達に人形劇をみせていたアリス・マーガトロイド。子供たちからはアリスって呼ばれてるらしい。

アリスは子供達に手を軽く振った後、さっさと部屋を出て行ってしまった。

……しまった!?後半まったく聞いてなかった!?

あまりのことにショックで手を畳について打ちひしがれていると

「ちょっと、彼方。これからどうするの?」

横から霊夢がつんつんと指でつつきながら今後の予定を聞いて来る

「ちょうど、お腹もすいてきたことだし……その……ご飯なんてどうかしら?」

もじもじとし、周りの子供たちに視線を移しながら霊夢は彼方にそう提案する

「ねぇ、フランちゃん。あの子の肩に乗っていた人形が半自立人形

かな?ちょっと触ってみたいんだけど……」

しかし当人はアリスの肩に乗っていた半自立人形に夢中で霊夢の言葉が耳には入ってくることはなかった

「……」

スクッっと席を立つ霊夢

「ん?どうした、霊夢。トイレ?」

「ちょっと、用事を思い出したから帰るわね」

陽気な声で霊夢に聞く彼方とは対照的な声音で霊夢は出入り口に向かって歩く

その途中、子供達が霊夢の顔をみて怯える

霊夢の後ろ姿しか見えない彼方からは想像できないかもしれないが、この時の霊夢は鬼をも射殺すほどだった。

「ふ～ん、そっか。霊夢も一緒に来るかと思ったのに、残念だな。んじゃ、俺達はちょっと話してくるから、気をつけてな？」

彼方の言葉に腕を軽く振って寺子屋を出て行く霊夢

「はぁ……。この、朴念仁……！」

霊夢の言葉は、子供達の声にかき消されていった

▽　▽　▽　▽

霊夢と別れた俺はフランちゃんを連れて、アリスさんを探していた。

すると前方

笑顔を浮かべている慧音さんと、ふぅ……って感じで一息ついてるアリスさんを見つけた

慧音さんも俺に気付いたのか、手を振ってくる

「よく来てくれたな、彼方。人形劇はどうだった？」

「いや～凄かったですね。外の世界にも人形劇はありますけど、あんなに沢山の人形を一人で操り、なおかつ自分も劇に加わるなんてのは、初めてみましたよ」

俺の言葉に慧音さんは、満足そうに頷いて、隣にいたアリスに話しかける

「そういえば、紹介がまだだったな。こちらは、不知火彼方。外の世界から来たもので現在は博麗神社でお世話になっている。ここの寺子屋にも何度かアルバイトしに来てもらっているよ、子供達の人気ものだ」

慧音さんがアリスさんのほうを見ながら喋る。

そんなに俺って子供達に人気だったっけ?結構俺が遊ばれているような気がしてるんだけど・・・・・・

「えっと、はじめましてアリスさん。不知火彼方です。きょうの人形劇とっても凄かったです」

そういって手を差し出す

アリスさんはその手をとって

「はじめまして、さん付けは慣れないから、アリスでいいわよ。私も彼方って呼ぶことにするから。あなたの噂は魔理沙から聞いているわ。面白い能力を持った、面白い人間だ、ってね」

「ははは……」

乾いた笑いが口から無意識に出てくる

さては魔理沙の奴、俺の失敗談を延々と語りやがったな……！

「ところで、さっきから気になっていたんだけど……その子って吸血鬼よね？」

アリスがフランちゃんの方を指さしながら聞いて来る。

「えぇ、そうですよ。紅魔館の主、レミリア・スカーレットの妹のフランドール・スカーレットですよ。俺の友達なんです」

とうのフランちゃんは、人形となんか話しているけど……

名前でも名乗っているんだろうか？フランちゃんは胸に手を置いてなにか言っている

対する人形のほうは、シャンハーイ！シャンハーイ！って言ってるけど……名前かなにかなのかな……？

「魔理沙の言うとおりね……」

「え？」

俺がフランちゃんと上海のやり取りに気を取られている隙に、アリスが何か言ったので、つい聞きなおしてしまった

「いや、なんでもないわ」

頬笑むだけで教えてはくれないんだね……

「ところでこの人形だけど、これが噂の半自立人形？」

「そうよ。名前は上海。そしてこっちが蓬莱。私の宝物よ」

アリスの肩に乗っている黒い人形がホウラーイ！っと可愛らしい声を上げて挨拶？をする

「こんちには、蓬莱ちゃん。なるほど。フランちゃんと遊んでいるほうが上海ちゃんか。って……あれ？」

先程まで聞こえていたフランちゃんの声が止んでいた。というか、二人の姿が消えていた

「……さっきまで、いたよね？」

俺は先程までいた場所を指さしてアリスに同意を求める

「いたわね。まったく……悪いけど彼方、探すの手伝ってもらえる？」

「オッケー」

というか、上海ちゃんと一緒にフランちゃんも消えてしまったわけだし。

このままフランちゃんをはぐれました。なんてことになったら慧音さんの立場と、俺が物理的に危ない。

かくして、俺とアリスは人里のどこかにいるであろう、フランちゃんと上海ちゃんを探すことになった

▽　　▽　　▽　　▽

人里の大通りに俺と蓬莱を肩に乗せたアリスが歩く

「それにしても……どこにいったんだよ。フランちゃん。あんなに俺か霊夢に離れないって約束したのに」

さては忘れているな。レミリアちゃんの妹だからな。ありうる。レミリアちゃんもよく約束を忘れるし……。いや、あの子の場合はわざとっぽいけど……

「大方、人里なんて行く機会ないから珍しくって色々と見て回っているんじゃないの？吸血鬼が人里に行くなんて聞いたことないし。上海は……なんとなくついて行ったのかもね」

ということは……フランちゃんの横で上海ちゃんがついて回っていると。それはそれで和むな。

「まぁ……それでも人里の人達に、何かあったら危ないし。さっさと見つけるほうがいいわね。じゃないと、霊夢が動くわよ」

それはヤバい

でも、焦ってたって見つかるわけじゃないしなぁ……

「え～と、なんか話しながら見つけない？例えば……アリスと上海・蓬莱ちゃんの話とか」

俺の言葉に一瞬アリスは立ち止まったが、すぐに歩き始めてポツポツと話し始めた

金髪の少女と、半自立人形の優しい物語を――

▽　▽　▽　▽

元々人間だった私は、魔法の修行を積んで魔法使いというものになった。

身体は食事を取らなくてもよい身体になった。それでも私は食事・睡眠どちらとも取っているが。理由は人間だった頃の習慣が抜けきってない。のと、睡眠を取ったほうが集中力が上がるからである。

魔法と言っても、それぞれに属性というものがある。魔法使いにも色々とあり、何が得意で何が不得意なのか、それぞれ違うものだ。魔法使いとしての私は苦手な魔法も得意な魔法もなく、いわゆる万能型だった。

そんな私が一番、心惹かれた魔法が人形を自在に操る魔法だった。

自分の手や足の延長のように人形を操ることができたら、どんなにいいだろうか。

その頃から私は人形作りに没頭した。人間の頃から手先が器用だった私には、人形作りはそんなに難しいことではなかった

来る日も来る日も人形作りに精を出していた私は、やがて二つの人形を作りだした。

名前は上海と蓬莱。自分の持ちうる知識をフルに使って作りだした最高傑作だった。

「こんにちは。上海、蓬莱。……わかるかしら？」

名前を呼び掛けたはいいけど、本当にこれで成功したのか不安でついつい付け足してしまう。

そんな私をみてまるで、大丈夫と言っているように人形達は動きだした

「シャンハーイ！」

「ホウラーイ！」

そう言って可愛い声を上げた上海と蓬莱は私に抱きつく

「キャッ！……もう、全く……」

人形でありながら、人形じゃない。そんな二人に私は口でこそ怒っているようにしながらも本当はとっても嬉しかった。なんだか新しい家族ができたような気がするから。

「よろしくね？二人とも」

▽　　▽　　▽　　▽

「それからは、どこに行くにしても上海と蓬莱と一緒よ」

「へ～。んじゃ、一番の友達なんだな」

「友達というより、宝物ね」

アリスは俺の隣を歩きながら、どこか誇らしげにしている。蓬莱も、首を縦に振って肯定の意を示している

宝物で一番の友達か……。それってまるで――

「まるで、可哀想な人だな。とか思ってるんじゃないの？」

「うぇ！？」

いつの間にかこちらを向いていたアリスが俺のほうにそう質問してくる

「いやいや!?誰もそんなこと思ってないよ!?」

「本当かしら?魔理沙が勝手に本を持ちだして、そのことが私にバレた時と同じ顔になってるわよ」

それは一体どんな顔だよ

アリスは何を勘違いしているのか、俺がアリスを可哀想認定していると思い込んでいるらしい。

なんとか誤解を解かないとな……

▽　　▽　　▽　　▽

彼方とアリスが探している中、フランと上海もまた二人を探していた

「う～ん……お兄ちゃんが迷子になっちゃったね」

あっちをきょろきょろ　こっちをきょろきょろ

フランは人里の店の中を覗きながら肩に乗せている上海に彼方が迷

子になった旨を伝える

「シャンハーイ！」

「え？アリスがいるから大丈夫？う～ん……でもお兄ちゃんだしな～。何かしているかもしれないよ？」

「シャンハーイ……」

「あぁ！ごめんごめん！そんなに落ち込まないで！大丈夫！お兄ちゃんにアリスをどうこうなんて勇気ないと思うから」

「シャンハーイ！」

フランの言葉を聞いて、元気な声を上げる半自立人形こと上海。先程から落ち込んだり、喜んだりと忙しい人形である。

「ねぇ上海？上海はアリスと一緒にいれて嬉しい？」

「シャンハーイ！」

フランの問いに元気いっぱいで答える

その様子をみてフランは微笑む

「おや？そこにいるのは、アリスちゃんの人形じゃないのかい？」

後ろから聞こえてきた声に二人は振り向く。そこには、少し太り気味で優しい雰囲気をした女性が立っていた

「やっぱり人形さんじゃないか。こんなところにいたのかい。アリスちゃんが探していたよ？」

女性はそのまま目線を合わせるためにしゃがみこんで

「お譲ちゃんがフランちゃんかい？お連れさんが探していたよ？」

「あッ！それお兄ちゃんだ！ねぇおばさん、どこ行ったか知ってる？」

おばさんと言われた女性は怒ることもなく、フランに先程までアリスと彼方がいた場所を教える。

「ありがとう！おばさん！」

フランはというと女性にお礼を言ってから上海と一緒に彼方達がいるであろう場所まで一目散に駆けて行った。その後ろを上海がひょこひょことついて行く。その様子に人里の男達はかなりときめいたという

▽　▽　▽　▽

先程から俺は必至に誤解だということをアリスに説明している。

説明すること数十分。アリスは分かってくれたのか、俺の顔の前に手を出してきた

「ストップ。もう、十分わかったわよ。それに魔理沙の話を聞いているかぎり、あんたがそんなこと思うような人間じゃないのは分かってるわよ。なんたって、吸血鬼の妹のために命張るくらいだものね」

くすくすと笑いながらアリスは俺の鼻を、ちょんと押す。

ははーん。……ハメられたわけか

それでもアリスが笑っているんだから、それでいいや

そう思ってしまう自分は随分と甘いのかもしれない

「おにいちゃーん！」

前方からの聞きなれた声に思わず前をみる

そこには上海を肩に乗せて走りながら大きく手を振っているフランちゃんがいた

「フランちゃん！どこいってたんだよ。心配したんだぞ？」

「えへへ。ごめんなさい、お兄ちゃん。人里ってあんまり行かないからついつい色々見て回りたくって」

笑顔全開で答えるフランちゃんに俺は、怒る気力がなくなってしまう

「上海もよ。勝手に居なくなったりして、心配したのよ？」

「シャンハーイ……」

アリスが幼い子供をしかるように人差し指を上海の前で立て、めっ、っと怒る。アリスに怒られた上海は、声も幾分か小さく、しゅんとして答える

そんな上海を見かねたのか、フランちゃんが一歩前に踏み出して何か言おうとするが、その前に俺が口を優しく押さえる。

「全く、いつもいつも勝手にどっか行って……心配するこっちの身にもなりなさいよね」

アリスはそう言って上海の頭を優しく撫でる

「シャンハーイ！」

たまらずアリスに抱きついて、胸の中に顔をうずめてすりすりする上海。そこに蓬莱も加わり、アリスの周りだけ別空間に発展する。

「こ、こら！？やめないさい！？まったく……彼方も悪かったわね。上海探すの手伝ってもらって」

「いや、こっちとしても結果的にはフランちゃんを見つけることができたんだし。お互い様だよ」

頭を下げるアリスに俺も下げる。あんまりこんなことをしていると、人里の人からおかしな目で見られてしまうので、二人して止める

「ほら、二人とも帰るわよ」

アリスが上海と蓬莱の手を引いて去って行こうとする

「それじゃあね、彼方。また今度でも外の世界の話でもしてくれないかしら？」

その途中、アリスは俺のほうを向きそう話してきた。

「俺でよかったらよろこんで。人形大好きで乙女チックなアリスさん」

アリスは俺の言葉に驚いた顔をするが、すぐに俺の顔をみてにやりと笑い

「さようなら、幻想郷一のお馬鹿さん」

今度は振り返ることなく、歩いて行った。

小さな友達で、なによりも大きい宝物と一緒に――――

▽　　▽　　▽　　▽

彼方達が去った後、一人の少女と一人の女性がそこに立っていた。

「まったく……ちゃんと見張ってなきゃダメでしょうに。なにしてんのよ、あの馬鹿」

「まぁまぁ、吸血鬼の妹ちゃんのほうも大人しく人里の見ていただけだったし、被害もなにもないんだからいいじゃないの」

少女が額に手を置いてため息をつく横で、女性のほうはニコニコとした笑みでフォローする

「それにしても、あなたも一緒に探せばよかったじゃないのかい？こんな面倒なことしなくても……」

女性によるもっともらしい問いかけに、少女は身体をもじもじさせて

「だって……いまさら出て行くのもカッコ悪いし……。それになんだかストーカーみたいじゃない」

身体をもじもじとさせてそう言う少女に女性は、やれやれといった様子で答える

「元にストーカーじゃないの。後ろをこそこそとつけ回ったりして」

「ち、違うわよ!?これはフランが何か起こさないように監視を――」

「アリスちゃんとあの少年が楽しそうにお喋りしている時の貴女の顔、ものすごく怖かったわよ?」

「う゛!?」

痛いところを突かれた少女はそれきり黙ってしまった。

そんな少女を面白そうに、くすくすと女性は笑う

笑われた少女は、頬を膨らませて反論しようとするが、女性の顔をみて無駄だと悟りそのまま口をつぐんだ。

「それにしても……彼、面白い子ね。色々と」

「あげないわよ。絶対に」

女性の指す彼が何者なのかすぐに分かって少女は、先程とは打って変わった表情で女性にキツク言い含める

その様子をみた女性は、やれやれ……といったぐらいに肩を竦ませ

「まったく……。彼、後ろから刺されなきゃいいけどね」

女性の言葉は、何か考えごとをしている少女の耳に届くことはなく、晴天の空に溶けて消えていった

## 12．人形使いの宝物（後書き）

期間があいてしまった。　そして春雪異変がまだ書き上がっていないことにびっくり

# 13．春の雪（前書き）

訪れた春は、寒かった

## 13．春の雪

ある所に一人の少女がいた。少女の家柄は伝統があり、少女自体も生粋のお嬢様であった。おしとやかで清楚な少女は周りからみてもとても可愛らしかった。

しかし、少女の周りにはいつも死体だけが転がっていた。自分を好いていた男も、自分が大好きだった家族も少女には触れることができなかった。

少女は自由に死に誘うことができたのだ。しかしその力を少女は自分の力で操ることができなかった。触れる者、近づく者を例外なく死に誘ってしまったのである。

少女は自分を呪い、力を呪った。

そんな時だった。自分と同じように未知な力を用い、自分自身を妖怪だと名乗る女の子に出会ったのは。

少女は喜んだ。やっと自分の傍に居てくれる者が現われたことを。

少女は喜んだ。やっと自分を怖がることなく接してくれる存在を見つけたことを。

女の子は紫と名乗り、毎日毎日遊びに来てくれた。

少女にとって紫と話している時間がなによりの楽しみだった。

その時だけは自分が女の子なんだと自覚することができたのだから。

紫が何か言うたびに少女が笑い、少女が何か言うたびに紫が笑う

それは幸せの時間だった。

しかし時間とは、かくも無常に過ぎていくものである。

それは二人の少女にとっても例外でなく、幸せの時間は唐突に終わりを告げた。

紫が泣き崩れる傍らで少女は安らかに死んでいた。

その顔は、ようやく苦しみから解放させたかのような顔をしていた。

少女の死の理由は明らかであった。

自分の能力が原因だった。少女には自分の能力で人が死ぬことに耐えれなかったのだ。

その日は庭の桜が満開で綺麗に咲き誇っていた。

少女の口が小さく動く

その声は誰が聞くこともなく、ただただ桜の木だけが少女の死に様を黙っているみているだけであった――

▽　　▽　　▽　　▽

春

それは新緑が芽吹き、長い冬眠から目覚め、人々が新しいことに向かって一歩を歩きだす季節

「だというのに……いまだに冬なんですけど。暦的にはもう春だよな？」

外の世界ではとっくに春を迎えている頃だというのに、幻想郷ではいまだに雪が降り積もり、寒い日々が続いていた。

初めに内は、少し冬が長いんだろうな。と思っていたがここまでくると疑問を持たないほうがおかしいくらいだ。

「そうね。これは流石におかしいわね……」

彼方の対面に座りお茶を飲んでいた霊夢も、いつにもまして真剣な表情をしている。

「ここまでくると『異変』じゃないのか霊夢」

霊夢の隣では遊びに来ていた魔理沙が顎に指をおいて霊夢に問いかける

『異変』

彼方はそのフレーズを何度か聞いたことがある。

異変とは外でいうところの事件みたいなものである。　しかし、そ

の事件の規模が違うのである。幻想郷を国で例えるとするならば、その国を揺るがすほどの大事件、それを『異変』と幻想郷の人達はいう。　そしてその異変を解決するのが、博麗霊夢と霧雨魔理沙というわけだ。

「確かに、これは異変と呼んでもよさそうね」

霊夢は飲んでいたお茶を静かに置き、立ち上がる。

それに続き魔理沙も立ち上がった。

「え？　二人とも何しにいくんだ？　というか、どこ行くんだ？」

二人が立ちあがったことに疑問を覚えた彼方は、二人を交互に見やりながら問いかける

「なにって……ちょっと、異変の元凶の所に」

彼方の問いかけに、しれっと答える魔理沙

そんな魔理沙を霊夢は無言で背中を押して、外に追い出した。

二人が行くなら俺も行くよ

そう言おうとした彼方に先手を打って霊夢が背を向けたまま、彼方に告げる

「あんたは絶対、来ないこと。じっとして家で待ってなさい。いまのあんたが来ても足手まといにしかならないわ」

▽　　▽　　▽　　▽

「『足手まといにしかならないわ』だってよ。いくら、いまだに俺がろくに飛べないで、弾幕も通常時では少量しか撃てないからといって、あんまりじゃないかな。こう……もう少し言い方とかもあると思うんだけどさ。　それに、行く寸前で来た咲夜さんはｏｋだったんだぜ？　どう思う？アーちゃん」

「まずはその呼び方をどうにかしてくれないかしら？寒気を通り越して、嘔吐してしまいそうよ」

人里の少し洒落た喫茶店の店内にて、彼方は先程あったことをアリスに話していた。

「だいたいなんで私があんたの愚痴を聞かないといけないわけ？」

彼方の対面に座るアリスは上海と蓬莱を隣に座らせたまま、自分は頼んでいた紅茶を一口啜りながら彼方に問いかける

「え？だって友達だろ？　それに、たまたま人里に行ったらアリスがいたから、つい」

「つい、で人を呼びつけるな！大通りであんなに大声出して……呼ばれるほうの身にもなりなさいよ！？」

「え……？あれが普通じゃないのか？　外の世界ではいっつも、幼馴染とはこんな感じだったんだけど……」

「私なら恥ずかしすぎて悶死できるわ」

やれやれ……といった具合に頭を振ったアリスは

「だいたい……なんであんたは人里にいるのよ？霊夢に家でじっとしてるように警告されたんでしょ？」

そもそもの原因である、何故ここにいるのかを問いただした

「いや、俺もそうしようとしたんだけどさ。家に塩が無かったら急遽買いに来たんだよ。ほら、霊夢達ってどうせ腹空かせて帰って来るだろうから、おにぎりでも作ろうと思ってさ」

「ふ～ん……。案外いいとこあるじゃない」

彼方の言葉にアリスは一つ頷いて、店内に掛けてある壁時計をちらりと見て立ち上がる

「まぁ、確かに異変解決した後なら、お腹も空いているかもしれないしね。　それじゃ、私はもう行くから」

「おろ？　そういえばアリスは何しに人里に来ていたの？」

「いまさらそれ聞くの？　はぁ……人形作りの材料を買いに来ただけよ。もう少し回ってみようと思うけどね。　あ、会計が私がしておいてあげるわ。今月厳しいんでしょ？」

「はは……。サンキュ」

俺が苦笑いで手を振ると、アリスを軽く手を振って本当にそのまま

会計を済ませて店を後にした。

「さて……これからどうしようかな。　せっかく来たんだし、このまま帰るってのもなんかな～」

肘をついて外の様子を見ながら、これから何をしようかぼんやりと考える

「あややや。こんな所に珍しい人がいますね～」

「ん？　あぁ、文じゃないか。文こそこんな場所に来るんだな」

後ろから放たれた声に、聞き覚えがあり振り返ると、そこには幻想郷のブン屋こと射命丸文がピースサインをしながらカメラを構えていた

「店内では撮影禁止だぞ」

「大丈夫ですよ。それくらい分かっていますから。　ちぇっ、あなたのいまの姿を写真に撮ればそこそこいい値がついたのに……」

本当に残念そうにカメラをしまう文

「撮る気満々じゃないか。そして俺の写真なんか誰が買うんだよ」

俺が肩を竦めながら言うと、文は何故か可哀想な者をみる目で肩を優しく叩いてきた

「……なに、その手は、目は」

「いえいえ、何も」

ふと気付くと先程から文が立っていたままなのを思い出して、席に座るように促した。ここに来たということは、店の商品を食べに来たってことでいいんだよな？

文は、それじゃ失礼しますね。と言って先程までアリスが座っていた椅子に座り、注文を取りに来た店員に紅茶とケーキを注文した後、改めてこちらに向き直った。

「して……今日は彼方さん一人ですか？　あの霊夢さんが一緒にいないなんて何かあったんですか？」

野次馬根性丸出しで聞いて来る文

「別に俺と霊夢はセットじゃないんだし、なんなんだよ。お前のその反応は。　霊夢は異変を解決しに行ったよ。魔理沙と咲夜さんと一緒に」

「あぁ、やっと行ったんですか」

俺の言葉に文は納得したように首を縦に振って

「それで彼方さんは行かないんですか？」

痛いところを突いてきた

「う　ぐ！？」

「あやや！その反応！何か言われましたね！」

ずいっ！と身を乗り出して彼方に問い詰めようとする文。

「べ、別になんでもないよ！？　そ、そうだ！文こそ行かなくていいのか！？新聞に載せたら誰もが目を引くようなネタがあるかもし

れないぞ！」

彼方に言われた文は、乗り出していた身を一旦引いて椅子に座り直すと

「う～ん……行ってもいいんですけど……ブン屋の勘がこれからもっと面白そうなことが起こると告げているんですよね」

顎に手を当てて可愛らしく首を動かしながら、彼方にいう

「えー。これ以上ブン屋が喜びそうなことはないと思うんだけどな……。そもそも文の勘なんて当たんのかよ？」

「むっ！失礼ですね。ちゃんと当たりますよ」

文は注文していた紅茶が来たので、それを一口口に含み自信満々に

「いいですか？　明日の新聞は絶対彼方さんが驚くような記事を書きますからね！」

「まぁ期待しないで待っとくよ」

そう言って席を立って、文に手を振りながら店を後にした

▽　　▽　　▽　　▽

雪が積もっている道を彼方は一人で歩く。その手には人里で買ってきた塩を持っている。

外の世界で好きだった音楽を口ずさみながら歩いていると、前方から見知った妖怪が歩いてきた。

「あら、彼方じゃない。こんな所で一人でいると危ないわよ？」

「こんにちは、レティさん。大丈夫ですよ。低級妖怪程度ならなんとかなるレベルになってきましたから」

もちろん逃げるレベルであるが。

俺がそう言うと、レティさんはくすくすと笑う

そういえば……レティさんは何してるんだ？　このまま真っ直ぐいけば、人里の行くけど何か用事でもあるんだろうか……？

「レティさんはこれから何するんですか？」

俺がそう聞くとレティさんは、穏やかな笑みを浮かべて言った

「人里の人達にちょっと用事があってね」

なんだ～。レティさんも人里に用事があるのか～。　どんな用事なんだろうかな。

それを聞こうとした所でレティさんはそのまま、それじゃと言って歩き出した。

ほんとに何しに行くんだろ？

▽　　▽　　▽　　▽

博麗神社へと帰った俺は、炬燵の中に足を突っ込んでさっき会ったレティさんのことを考える

レティさんは人里に用があると言っていた。

用事って一体なんなんだろうか？

文みたいに店で何かを食べる？　いまいちピンとこない

アリスみたいに何かを探している？　それも微妙

なら、なんなんだろうか？　それも、こんな異変の時に……

「ん……？異変？」

そういえば……依然霊夢が言っていた。幻想郷の妖怪は基本的に自分勝手でわがままばかりだと。　なのでたまに人里を襲うこともある。と……。　基本的に人里は慧音さんが守っているし、人里の人達を襲う妖怪は霊夢が退治する。

だがいまは異変の真っ最中

霊夢は異変解決に乗り出している。慧音さんはどうかわからないが、人里全体のことまでは分からないかもしれない。　もしかしたら、能力でなんとかなるのかも知れないが……俺は慧音さんの能力を知らないのだ。

そんな状態でもし、妖怪が襲撃してきたら……？

「まさか……レティさんにかぎって、そんなことは……ね？」

口ではそう言ったものの、嫌な想像だけが膨らんでいく。

自分が寺子屋で勉強を教えた生徒達

生活が苦しいのを知ってて、皆には内緒でまけてくれた八百屋

外来人にも係わらず、みんな俺に親切にしてくれた。

気付いたときには足が勝手に動いていた

玄関で靴を履き、石段を三段飛ばしで降りる

別にレティさんを疑うわけではない。……これは、確認なんだ。

そう自分に言い聞かせて、俺は先程まで歩いて帰って来た道を、今

度は走って戻って行った

▽　　▽　　▽　　▽

真っ白くて美しい雪の道をレティ・ホワイトロックは歩く。

「もうすぐ人里。ふふ……。異変の最中で助かったわ。いくら冬だからといって、あの博麗の巫女とやり合うのは避けたいものね」

幻想郷の妖怪にとって、人里の人達というのはある意味大切な存在である。

だから妖怪の賢者こと、八雲紫がわざわざ外から人間を連れてくるのだ

別に人里の人達を皆殺しにするのではない。　ほんの少し脅かす程度だ。冬が終われば ほとんど外に出ることはない私にすれば、そうしないと人々の記憶に残らないのだ。

妖怪にとって「忘れ去られる」ということがどれほど辛いことか。

私の背後で雪を踏む音が聞こえてくる。それと同時に、ここまで全

速力で来たのだろうか、荒い息を吐いて、私の名を呼ぶ少年がいた。

ねぇ？あなたは私のことをずっと覚えていてくれるのかしら？　それとも、春が来たらすぐに忘れてしまうのかしら？

「あら、彼方。先程ぶりね」

あの寒い冬の中、嫌な顔一つせずに私の話を聞いてくれた少年、不知火彼方くん？

## 13．春の雪（後書き）

この回から春雪異変に入ります。

個人的には冬のレティさんはかなり強いと思う。

## １４．白玉楼での大決戦！！

時は少し前に遡る

彼方を博麗神社に置いて、異変の元凶を解決しに来た霊夢・魔理沙・咲夜はそのまま真っ直ぐ、元凶であろう場所に向かっていた

「なぁ霊夢。ほんとにあいつ置いてきてよかったのか？」

自分の少し前を駆ける霊夢に声をかける魔理沙。

「よかったもなにも、今の彼方の実力じゃ妖精を倒すのが精々じゃない。　そんな状態で連れて行ったりしたら、そっちのほうが危ないに決まってるじゃない」

「なるほどなるほど……ようは彼方を連れていくと心配でうまく行動できないと……」

「ち、違うわよ！　だ、誰があんな奴なんか……！？」

「そういえば、人里の娘から熱烈なアタックを受けてたな、あいつ」

「……へぇ」

二人の会話を横で聞きながら咲夜は、はぁ……、とため息をついた

先程言ったことは全部魔理沙の出鱈目だろう。元に魔理沙の顔は、霊夢を弄れて嬉しい。といった風な顔をしている。

まぁ……もしいまのが本当ならば紅魔館からも彼方にキツイ何かがありそうではあるが。

それにしても……あの彼方のことだ。どうも大人しく私達の帰りを待っているとは思わない。　彼の性格からして、またなにかに巻き込まれてるような気がしてならない……。　まぁ、彼のことだからまたどうにかするでしょう。

「それよりも、早くこの異変を解決しちゃいましょう。お嬢様が花見をしたくてうずうずしているのよ」

春の季節が近づくにつれて段々と花見の話題が増えていた紅魔館。

やはり桜の下で飲む酒は普段とは少し違うのだろう。

「ん？そういえば、霊夢のところにも酒好きでお祭り好きの鬼がいたよな？」

「えぇ。彼方が居ないときに私の傍に来て、いつもぼやいていたわよ。花見はまだなのか。とね」

やれやれと言ったように話す霊夢

「けど、いまから解決しても花見ができる期間は短いだろうな」

雪が降っているから誤解しがちだが、いまの暦は5月なのである。
この異変を解決したとしても、できる回数といえば指の数で足りる回数である。

それでも十分だろうと感じる者もいるかもしれないが、霊夢や魔理沙からしてみたら異常に少ない回数である。　もっとも、宴会のたびに毎回準備する霊夢からしてみたら少し喜ばしいことであるが。

「そうね。まったく……異変を解決してもなにか一波乱ありそうな予感がするわ」

小さな身体で、いつも酒を入った瓢箪を持っている二本角の鬼を頭

に思い浮かべながら小さくため息を吐いた

▽　　▽　　▽　　▽

「もうすぐね……」

綺麗な桃色の髪を一度かきあげて一人呟く女性がいた。　その女性の周りには2・3体の亡霊がフヨフヨと浮いていた。亡霊はその女性の周りをくるくると動きまわる。

そんな亡霊に軽く笑いながら、女性は後ろをゆっくりと振り返る

「それで、何しに来たのかしら?紫」

振り向いた女性の目の前。　そこには妖怪の賢者こと、八雲紫が立っていた。

「随分と大がかりなことをやっているようね、幽々子。幻想郷中の春度を集めるなんて」

「ふふ。ビックリした?」

「当たり前よ。おかげで寝過ごしちゃったじゃない。まったく……。どうりでいつになっても春が来ないはずだわ」

腰に手を当てて怒っている紫に、幽々子と呼ばれた女性は上品に口に手を添えて笑った。

「まったく。こんなことして一体何をしようとしてるわけ？」

「この桜の木の下に眠っている人を起こしたいのよ」

辺り一面桜が咲き誇っている中に一つだけ咲きかけの桜の木を指さしながら幽々子は言った

「幽々子……」

「『富士見の娘、西行妖満開の時、幽明境を分かつ。その魂、白玉桜中で安らむ様、西行妖の花を封印してこれを結界とする。　願うなら、二度と苦しみを味わうことの無い様、永久に転生することを忘れ……。』ねぇ紫。不思議だと思わない？　ここは冥界であり、そのほとんどが霊体。　そんな中で何故この桜の下にいる人物は亡骸であり続けるのか？私は疑問であると同時に興味でもあるの。そしてその答えは、これを満開にすることができれば解決するの」

「……」

紫はその語る幽々子の顔をみることができなかった。

その昔、紫には女の子で人間の友達がいた。その子はとても特別で人間が手にするには大きすぎる力を持っていた。そしてその能力ゆえか、その子の周りには誰もいなかった……。

そんな時だった。紫が女の子に声をかけたのは。女の子は、はじめは紫の存在に驚きはしたもののすぐに心を開いた。

とても楽しい毎日だった。紫が話すとその子は笑い、その子の笑顔を見るたびに紫も笑った。

だが、その子と仲良くなることで、その子が抱えているものがどれだけ重いものなのかということを紫は知ってしまった。

「どうしたの？紫。　顔色が悪いわよ？」

幽々子の声で紫は無意識に下げていた顔を上げる

そこには心配そうな顔で首を傾けた友達がいた。

「大丈夫なんでもないわ。それよりも、もうすぐ来るわよ？幻想郷の異変解決人たちが」

幽々子に笑顔で心配ないことを告げて、もうじき来るであろう異変解決人のことについて触れる

「あなたの庭師が弱いとはいわないけど、それでも一人は此処に来ると思うわよ」

「丁度いいじゃない。その子からも春度を取っちゃえば、この桜も満開になると思うし」

「そう……。だったら私は何も言わないわ」

すき間を作り、その中に入る。幽々子の決意が変わらない以上、これから先は自分は傍観者として見守ることにしたのだ。

「紫」

すき間を閉じる瞬間、後ろから幽々子の声が聞こえてきた

「どうしたの？」

「ありがとう」

後ろから放たれた言葉に、紫は手を軽く上げてこんどこそすき間を閉じた

▽　　▽　　▽　　▽

異変の影響で好戦的になっている妖精達を叩きのめしながら進んできた霊夢達は一つの門の前で立ち止まった。

「まさか冥界まで来ることになるなんてな～」

辺りを見回しながら魔理沙が呟く。　その周りには霊体がふよふよと浮いていた

「まったく……。こんな所にまで来させるなんて、ただじゃおかないわよ」

博麗神社から霊夢達のスピードで結構な時間をかけてここまで来た

のだ。

「そんなこと言ってないで、さっさと行きましょう。お嬢様と紅魔館が心配だわ」

咲夜は自分が居ない紅魔館が今頃どうなっているのか少し心配だった。　そして自分の主人であるレミリア・スカーレットが心配でたまらなかった。

それもそうね。そう言って門を潜ろうとした瞬間

「お待ちください」

腰に二本の刀を差した白髪の少女が霊夢達と門の先を結ぶように出てきた

「ここから先は一方通行です。申し訳ありませんが、来た道を戻ってください」

腰に差した二本の刀の一つを手に取り、霊夢達の方に向けながら喋る

「そうしたいのは山々なんだけどね……。こっちも、「はいそうで

すか」って言って帰るわけにもいかないのよね。」

やれやれ……と首を横に振りながら決して戻ろうとはしない霊夢をみて

「そうですか……。ならば――」

キンッ――!!

「ならばその首貰います、ってことかしら?」

腰に差していたもう一つの刀を引き抜き、霊夢の首を一閃しようとした少女の目の前に咲夜が躍り出り、ナイフで刀を受けていた。

「ここは私に任せて貰えるかしら?霊夢」

「あら、いいの?」

「えぇ。そのかわりさっさと倒してきてちょうだい」

言われた霊夢は、少女の横をそのまま通って、屋敷の中へ入って行く

「あ！待ってください！」

「貴女はここで私と遊んでもらうわよ」

すぐさま霊夢を追いかけようとした少女であったが、その足目がけて咲夜がナイフを投げてきたので、それを回避すべく横に避ける

「しょうがないですね……。貴女をさっさと倒してすぐにあの巫女を追うことにしましょう」

既に見えなくなって霊夢の追跡を諦めて、目の前にいる咲夜を倒すことに専念した少女は一度刀を納めて、居合いの格好をとる

「その心配は無用だから大丈夫よ。」

対する咲夜も自分の周囲にナイフを散らばらせて、迎撃の態勢をとる

「魔理沙。手は出さないでね」

「分かってるって」

咲夜から手出し無用と言われた魔理沙は、離れた所で二人の勝負を見守ることにした。　本当は自分も勝負したいのだけども、させてもらえなそうだし、なによりそんなことしたら、後で咲夜になにされるか分からない・・・・。いや、それもそれでありだけども。

「（はぁ～……仕方がない。後で彼方と弾幕勝負でもするか）」

そう心に決め、二人の勝負を見守る魔理沙であった

▽　　▽　　▽　　▽

少女を咲夜に任せた霊夢は一人で長い階段を飛び続け奥へと進んでいた。

「こんにちは。随分と遅かったわね」

長い階段がもう少しで終わる、といったところでいきなり空間からすき間が出てきて、そこから声が聞こえてきた。　そしてその中からスルリと金髪の女性が出てきた。

「あなたは覚えているかしら?私の顔を」

「えぇ。覚えているわ。私が先代巫女から受け継いだ時にいたわよね」

霊夢が昔先代の巫女から博麗の巫女を受け継いだ時に傍にいた人物だった。先代からは妖怪の賢者である、と教えられた。

「それで一体なんのようなの？邪魔するのであれば、ここであんたから倒すけど……」

懐から一枚のお札を取り出す霊夢に紫は、手を上に上げて

「私は別にあなたと勝負をするために来たんじゃないわ。むしろ、彼女を止めてほしいのよ」

「止める……？もしかしてあんたこの先の人物と関係があるの？」

そう聞く霊夢に静かに首を縦に振った紫

「今のあの子には私が大きく関わっているからね……」

そういった紫の顔はどこか寂しそうだった。

「ねぇ霊夢。あなたは……大切な人が自分よりも先に死んだらどうする？」

「それは……仕方がないんじゃないのかしら。生きているかぎり、『死』というものには逃れられないだろうし」

「確かにそうね。なら、その子がずっと生きている間苦しんで苦しんで、あげくの果てに自害したのならどうする？」

「それは……」

「私はもう一度あの子に転生して同じ苦しみを味わってほしくなかったの。だからあの子の骸を西行妖の下に封印した」

いつものように訪れた場所には、自分にいつも笑いかけてくれていた友達が満開の桜の元で息を引き取っていた。

自分はあの子を救えなかったのだ。　自分が願ってもいない能力で人生を翻弄された少女。人間ではじめて友達になった少女。そんなあの子を私は救えなかったのだ。

「このままいけば、あの子は西行妖の封印を解くでしょう。もしも西行妖の封印が解けたならば、止まっていた時間が全て動き出すでしょう」

そうしたならば、止まっていた時間は全て止め処なく流れあの子の死に繋がるだろう。

「私じゃあの子を止めることはできない。……だから霊夢。お願い、あの子を止めて」

そう言って頭を下げようとした紫の額に霊夢は手を差し出し止める

「悪いけど、あんたとこの先にいる人物の関係なんて知らないし、興味もないわ。それにそういうのは私じゃなくて、もっと相応しい奴がいるからそいつにでも相談しなさい。その馬鹿なら私の神社でいつも庭掃除してるから」

そう言って紫の横を通り過ぎていく

「私は私の目的でこの異変を解決しに行くわ。こう寒いと炬燵代だって洒落にならないし、なによりあの馬鹿に幻想郷の桜を見せたいしね」

▽　　▽　　▽　　▽

はらりはらりと桜が舞う

「いい光景じゃない。流石は幻想郷中の春度を集めただけあるわね」

その桜をみながら、博麗霊夢は中央に佇む女性に声をかけた

「ふふ。綺麗でしょ？あなたもここで花見なんてどうかしら？」

女性は霊夢のほうにゆっくりと振り返りながらそう声をかける

「悪いわね。あいにく花見は誰と、どこでするか決めてるのよね。だから――――」

さっさと返して頂戴――――？

ふいに放たれた霊夢のお札を幽々子は全て防ぐ

「あら～、ひどいじゃない。不意打ちなんて」

「手が勝手に滑っただけよ」

「手が滑ったのならしょうがないわね」

幽々子が言葉を発した瞬間、霊夢に大量の弾幕が襲いかかる

「ごめんなさいね？手が勝手に滑っちゃって」

「手が滑ったのならしょうがないわ」

うふふ……。と二人して笑う。

「私は博麗霊夢。あなたを今回の異変の犯人として少しばかり痛い目にあってもらうわ」

「ちょうど春度が足りなかったとこなのよね。あなたが来てくれてよかったわ」

霊夢は自分の周りに針とお札を展開し、幽々子は黒い蝶を周囲にばらまく

「「さぁ、はじめましょう？」」

その瞬間、春を取り戻すための弾幕勝負が始まった

## １４．白玉楼での大決戦！！（後書き）

オリ主の活躍だけみて誰が嬉しいもんか！！

というわけで、こっちはこっちで戦います。これから三つの戦いを一つ一つスポットを当てていきますが、時間軸はどれも同じとおもってください。

## 15．雪を溶かすは光の波動

私の目の前には一人の少年が立っている。その少年は荒い息を整えてから私に話しを切りだした。

「えっと……もしかしてレティさんも人里に用があるんですか？……その塩を買いに来たとか……」

苦笑いを浮かべながら私に問う少年に、私は満面の笑みで返した

「いいえ、違うわ。ちょっと人里でひと暴れしようと思ってるの」

私の答えに少年の苦笑いが消える。

「……そんなことしたら霊夢が黙っていませんよ？」

「あいにく博麗の巫女は異変を解決にいってるでしょう。私の目からみてもこの季節外れの雪は異変にうつるもの」

私の切り返しに少年は押し黙る

「話しはそれで終わりかしら？それなら私は用事があるから行かせてもらうわね？」

私は呼びとめられて止めていた足を再び動かす。

さぁ、どうやって脅かしてやろうか？　そんなことを考えながら歩いていると、頬に何かが通り抜ける。　そしてその数秒後に頬を伝わる赤い雫。

「ふふ……。酷いことするわね。レディの顔に傷をつけるなんて……」

私はもう一度、ゆっくりと振り返る

「……すいません、レティさん。流石の俺もいまのあなたを黙って見送るわけにはいきそうにないですわ」

先程までとは打って変わった表情で私を射抜くその姿。　これぞ、まさしく私が望んだものだった。

▽　▽　▽　▽

俺は銃を構えたままレティさんをまっすぐに見つめる。

レティさんはあくまで軽く笑うだけだ。

しかしそれはそうだろう。カッコつけたはいいものの俺とレティさんの間にある力量差は歴然である。まったく……呆れるな、俺自身に。これじゃ、勝負なんかにはなりそうもないよ。

「あら……？来ないのかしら？私を止めるんでしょ？」

「そうですね。んじゃ……いかせてもらいますよ！」

変化させた装飾銃で弾幕を撃ちだす。弾幕は一直線にレティの方へと向かい

「なんとも弱弱しい弾幕ね」

レティに届くことなく、レティの目の前で消えていった。いや、レティの目の前に出来た雪の壁に当たった。といったほうが正しいだろうか。

「くそッ……！」

雪の壁をみて彼方はレティの正面から横へと移動しようとしたが

「無駄よ」

「――!?」

移動しようと足を踏み出した瞬間、彼方が置いた足がまるで底なし沼にはまったかのようにズプズプと入り込み、その場で身動きがとれなくなってしまった。

足をひっこ抜こうと動かすも、動かせば動かすたびに下へ下へと吸い込まれていくような感覚に陥る。

「ふふふ。そういえば、あなたは私の能力を知らなかったかしら?」

先程から一歩も動いていない場所でレティは彼方に話しかける。

「というか、レティさん。能力持ちだったんですね……」

いまだに抜けない足を抜こうともがきながら、なんとか返事を返す。

「あら、それも知らなかったの？」

「聞いてませんでしたし」

彼方の答えを聞くとレティは、くすくすと笑ってゆっくりと彼方の方へ歩き出した。

「私の能力は『寒気を操る程度の能力』よ。あなたにも分かるように言ってあげるとするならば……雪や冬を自在に操れる、とでも言い換えればいいかしらね？」

彼方の元まで来たレティは、動くこともできずにいる彼方の顔に手を添え

「これがどういうことか、分かるわよね？　いまの貴方は私に捕えられた憐れな人間なのよ」

顔がもう少しで触れ合う。という距離まで接近して官能的な声で彼方に甘く囁く

「はは……。レティさんみたいな人と一緒にいれるのならそれもい

いかもしれませんね」

ただ……、と彼方は小さく呟き

「俺じゃ貴女みたいな素敵な女性とは釣り合いませんよ」

もっていた装飾銃を片手で回し、逆手に持ちかえてレティの無防備な腹へと弾幕を浴びせる

油断していたところでの弾幕攻撃に思わず後ずさる。　しかし、弾幕を喰らったのにもかかわらず、レティは痛がる素振りなど微塵もみせなかった。

「おいおい……。流石にへこみますよ。あんなに特訓してんのにレティさんピンピンしてるじゃないか……」

会心の一撃をおみまいできたと思っていただけに、彼方はレティの様子をみてがっくりとうなだれた。

「ふふふ・・・・……。いえ、あなたの一撃は結構良かったわよ。すくなくとも私が冬以外に喰らっていたら、いまの一撃で流れが変わったかもしれないわね。」

そう、彼方の攻撃は確実にヒットしていたし至近距離からの現段階で撃てる弾幕量の全てを撃ち、かつ力をかなり注いだ彼方の弾幕はそれなりの攻撃力になっていた。

ただ時期が悪かっただけなのだ。レティ・ホワイトロックという妖怪は春・夏・秋では妖精のチルノにも負けるほどの弱さであるが、冬であるならばその力は絶大なものへと変貌を遂げる

「そろそろ私からも仕掛けてみようかしら……」

レティが呟いた瞬間に、拳ほどの大きさの雪の塊が彼方に襲いかかる。

「がッ！？」

想像を絶するような痛みに彼方は思わず声になっていない声を上げる。　しかしレティはそんなこと気にする様子もなく彼方に雪の塊をぶつけ続ける

そこには一切の妥協などなかった。

「ほらどうしたの？このままなら、あなたは死んでしまうし、この

ままいけば人里の人達だってただでは済まないと思うわよ？」

レティは攻撃の手を休めない。　やがて、耐えきれなくなったのか彼方は足が抜けたかと思うと、後ろへと思いっきり吹っ飛んだ。

「げはッ！？……はぁ……はぁ……」

口内に溜まっていた血を吐きだして、ふらふらの状態でなんとか立ち上がった彼方へとレティは追い打ちをかける。

「ほら……みて。雪があればこんなことも出来るのよ？」

「おいおい……。いくらなんでもこれはねえってば……」

彼方の周りには、雪で作られた人間の武器がいくつも矛を向けていた。

「あ～……だめだ。」

周りをぐるりと見渡して自分がどうあっても避けるのは無理と分かったのか、彼方は頭を掻きながら困ったように笑う

そんな彼方をみて、レティは問いかけた

「あなた……本当にそれでいいの？」

「え？何がですか？」

レティの問いかけに、彼方は首を曲げて問いかけの意図が分からないと答える

「これを喰らったらただでは済まないわよ？怖くないの？」

「俺が怖がってないようにみえますか？見てくださいよ、この手」

彼方は装飾銃を持っていない手をレティに見せる。その手は小刻みに震えていた。寒さから来るものもあるだろうが、いまのこの状況からくる恐怖からの震えであることは彼方の言葉から分かった。

では何故、彼はそんな顔が出来るのか？

普通、恐怖に支配されたものというのは顔が変わるものだ。例え、屈強な男であろうとも無様にその顔は恐怖で支配され、命乞いをす

るものだ。

しかし彼方には当てはまっていなかった。

いままさに無数の雪の武器によってその身を貫かれんとする男の顔は自信に充ち溢れていた。

不思議な少年だ。

レティはそう思った。

会った時から感じていたことだった。　そもそも妖怪である自分と普通に話しをする時点でそうとう不思議ではあるが。

だが、所詮は人間。　私が人里を襲うと言ったときに見せた彼の表情。そして先程の彼の狙撃。それだけで、彼は人里を選んだのだと分かる。

といっても当たり前の結果ではあるが。人間である彼は結構な頻度で人里に世話になっているとも聞いた。良くしてもらった所が妖怪によって滅ぼされるかもしれないんだ。彼の性格からしてみれば放ってはおけないだろう。まったく……人間とは理解しがたい生き物だ。

まぁ、なにはともあれ彼は私ではなく人里で選んだ。その結果だけで十分だった。あぁ……私は何をしているんだろう？彼を貫いたところで何が変わるわけでもないのに……。まったく……自分から期待したくせに自分で失望するなんてほんと可笑しな話よね。もうとっとと終わらせよう。元から人里を襲う気など皆無だし、直にこの長い冬も終わるだろうし。さっさと次の冬に備えるための準備をしないといけないし。

そう考えて私は手を振った。すると彼方の周りにあった武器が一斉に彼方へと襲いかかっていった。さようなら、彼方

▽　　▽　　▽　　▽

彼方とレティの戦いを上空から見守る一人の少女がいた。

漆黒の翼を生やした鴉天狗の射命丸文である。

「ほんと……似ても似つきませんね」

文はなんともなしに呟く。

ブン屋である自分の勘を頼りに外に出てみれば、冬の妖怪が人里へと向かっているところだった。そしてそこに彼方が登場してきて勝負勃発。はじめはウキウキ気分でみていたのだが、流石に一方的なレティによる攻撃で興が覚めたのか、いまはカメラを手に取ることなく戦況を見守っていた。

「というか……あれが本当に悪魔の妹である、フランさんを倒した彼方さんなんですか？弱すぎます」

ハッキリ言って文は少し彼方に失望していた。そもそも彼方がレティに喰らっていた技だって空さえ飛ぶことができていれば楽にかわすことができるのに。

「何故彼方さんは弾幕を撃たないのかしら？いくら彼方さんが弱いからってけん制に弾幕を飛ばすことは可能なのに……あッ！」

そこでやっと文は気付いた。彼方の先になにがあるのかを。

そして気づいてから笑いがこみ上げてきた。

まったく……。彼はどこまで人がいいのか。だが、これで彼が弾幕を放たない理由がわかった。

まったく――――弾幕を撃ったら人里に当たってしまうなんて普通は考えるか？自分が下手すれば殺されるかもしれないって時に。

本当に彼は面白い。彼といると新聞のネタに困ることなんて無くなるだろう。そんな気さえしてくる程だ。

だから――――だから明日の新聞の一面を面白くするためにほんの少しだけ力を貸すことにしよう。

私は翼を思いっきり動かし下へと降りて行く。

▽　　▽　　▽　　▽

「信じられないわ……。あれを喰らって生きているなんて……」

レティが見た光景はなんとも信じがたいものだった

「へへ……。あいにく、こちとら毎日美鈴による特訓をしているもんでね……。覚悟さえ決めてれば、一回くらいは耐えられるものだよ……。」

肩や足を貫かれながらも決して崩れはしない彼方がそこにいた。

「といっても……正直限界が近づいてるんだけどね」

たはは……。と力なく笑う彼方の横に一陣の風が吹き抜けた。そして耳に聞こえてくる見知った者の声

「ほんと呆れますね……。あなた程度じゃ、倒せないと分かっているのに」

「……文？」

彼方の隣へと降り立った文は彼方の姿をみてため息をつき、そして同時に驚いた

銃を持っていない手はだらりと下がり血がぽたぽたと垂れ、足はがくがくと震え、先程から荒い息を吐き出している。　これではいつ死んでもおかしくない状態だ。

「はぁ……はぁ……。なんで……文がこんな所にいるんだ？」

「強いて言うな……ブン屋の勘ですかね」

「……あっそ。けど、ここに文がいることは好都合だよ。ちょっと手伝ってくれ……」

「勝負に参加しろ。なんてことだったらお断りですよ。あくまで私はブン屋としてここに来たんですからね。私が参加したら新聞を書くときに主観的になってしまいますもん」

「それなら大丈夫さ」

ちょいちょいと文を手招きして近づけ、その耳にそっと何かを話す彼方。

文は彼方の提案を聞くと、満面の笑みで親指を向けた

「奇遇ですね！私もそう考えていて、するつもりだったんですよ」

その言葉を聞いた彼方は、にやりと笑って

「んじゃ、よろしく」

「ええ、わかりました」

文は自分が持っていた団扇で彼方をひと仰ぎする。すると彼方の周りに風が集まってきて彼方をふわりと持ちあげる。ゆっくりと持ちあげられた彼方はそのまま先程とは反対方向へと降り立った。

降り立った場所は、後ろにはすぐ人里がある場所だ。　先程まで彼方が立っていた位置というのは、前には丁度人里あり弾幕を撃ちだすのには少し躊躇する場所であった。

「あら……？こんなときでも人里のことを心配していたの？本当に馬鹿な子ね」

「はは。馬鹿で結構ですよ」

これで心おきなく攻撃ができる……ということはなかった。既に彼方の身体はボロボロであった。

手は片方は完璧に使い物にならなくなり、足はいまにも崩れ落ちそうで、先程喰らった攻撃で全身の至る所から痛みがあり、挙句の果てにはこの環境で意識が朦朧とさえしてきた。

どんなに取り繕っても隠せない状態だ。というか隠す気力も沸いて

こない。

そしてそんな彼方をレティは冷ややかな目で見ていた

「ほんと……考えられないわ。他人のために命を張ろうとするなんて」

我が強い妖怪には分からない心理だった。

「まぁ……別に私はわかろうなんて思わないからいいけどね。そんなことより、なにか遺言はあるかしら？」

「遺言……ねぇ。そうだな……別に遺言ってほどじゃないけど。もう少し貴女と話したかったかな」

「――――！？」

ぼろぼろの身体でそう言う彼方にレティは驚いた。

「……あら？どうしてここで私の名前が出てくるのかしら？ご機嫌とりのつもり？」

「別に……そういう意図があるわけじゃないですよ。ただ……もしここで貴女を行かせてしまったら、貴女は人里を襲ってしまう。そうしたら霊夢は人里を襲った貴女を退治することになるでしょう」

いくらレティが強いといってもそれは冬に限った話である。冬以外の季節ならばレティは自分自身で弱いと言っていた。そんな時に霊夢と対峙したらどうなるかくらい彼方でもわかる。

「俺はもっと貴女と話しをしたい。あなたが知ってる冬のことについても知りたいし、冬の幻想郷を二人で回ってもみたい。だからこんなくだらないことで貴女を失いたくなんかない。だから俺は行かせない。例えこの身が朽ちようと絶対に貴女を人里へと行かせない。だから、ここから先は一方通行だ！」

喋るたびに辛くなる。息を吸い込むたびに苦しくなる。しかしこの言葉を言わずにはいられなかった。

「あなたは……人里を守りに来たんじゃなかったの……？」

「守る？何言ってるんですか？俺はレティさんを止めにきただけですよ？」

勘違いしていたのは私のほうだったのだろうか？

私はずっとこの少年が人里を襲いに来た私を倒すためにやってきたと思っていたのに、実際はそんなことをしたら私がどうなるのかを危惧して止めに来ただけだというのか？

なら――なら彼は最初から私のことを考えて行動してくれていたのか？

「ふふ……。そんな綺麗事で誤魔化そうたってそうはいかないわよ」

そんなことあるわけない。

「綺麗事なんかじゃないさ。俺はレティさんに来年も会いたいもん。こんな寒い中でさ、二人でかまくらなんか作ったりして、博麗神社に皆で集まって雪合戦なんかしたりして……そうやって遊びたい」

そんなの嘘だ。どうせ口からのでまかせだ。

「だからレティさん。来年の冬も俺に会ってくれますか？」

彼の言葉が優しく胸の中に入ってくる。こんな高度な嘘を彼がつけ

ないことくらい分かっている。けど、信じられなかった。いや、怖かったのだ。

だから私は自分も気づかない内におそるおそる彼に聞いていた

「ほんとうに……私のことを覚えていてくれるの？」

「当たり前じゃないですか。俺に女心を教えてくれた人を忘れるなんてこと、できるわけないじゃないですか」

最高の笑顔で私に答える彼。

あぁ……まったく、呆れるのは彼じゃなくて私自身ね。

自分はすぐに忘れてしまう存在だと決めつけて、それが嫌で一芝居うって、彼を呼び出して……。そんなことしなくても、彼は私のことを覚えていてくれたのに。まったく呆れるわ。怖くて彼に素直に聞けなかった私自身に。

「そう……。でも、そんなぼろぼろで私に傷一つ、つけられない情けない男に私は会いたくないわね」

自分の考えとは反対の言葉が口から洩れる

「それはお厳しい。けど……情けないかどうかは俺の最高の一撃を見てから決めてくださいよ」

そう言って彼は一枚のスペルカードをとりだした

▽　　▽　　▽　　▽

スペルカード

それは弾幕勝負において必殺技といっても過言ではない。

基本的にスペルカードは技名を決めていないと発動することはなく宝の持ち腐れとなる。

かくいう俺も霊夢や皆の指導によって作ったはいいものの技名がどうもピンとするものが浮かばず、いままで使ったことは一度もなかった

「最初に使うときが、こんなときになるなんてな……」

やれやれと思ったが、レティさんに認めてもらうにはこれしかなさそうだし……。

「ふふ……。スペルカードなんて持っていたのね。なら、私もスペルカードを出そうかしら」

レティさんが袖から一枚のカードを取り出す。

「はは……。お互い全力でいきますか……！」

もう会話なんていらなかった。

レティさんはスペルカードを宣言し、弾幕なんてものとは比べ物にならないほどの密度の巨大な雪の塊が俺に襲いかかる

そんな光景を目にしながら俺は目を閉じた

思い返すは霊夢や魔理沙の言葉

『あんたの場合は想いで力が変わるんだから、スペルカードといっても普通の弾幕と変わらなくなる時もあるんだからね？』

分かってるさ、霊夢。　いまの俺の想いは最高潮にまで達しているよ

『いいか彼方?弾幕はパワーだ!スペルカードだってパワーで押すんだよ!』

ああ、そうだな。魔理沙。　押して押して押しまくるんだよな

俺は一回大きく息を吸い込んで吐き出す。

自分の中にある歯車の回転を上げていくように。

俺の想いがレティさんに届くように。

さぁ、声を高らかに宣言しよう

この白銀の世界を溶かすスペルカードを

レティさんの心の中にふいている吹雪を取り払うために

俺は声を大にして叫ぼう

「――光想――光波動（こうはどう）！！」

目の前に広がっていた巨大な雪の塊が吹き飛ぶ

想いをのせた光の波動は真っ直ぐにレティを飲みこんでいく

「はぁ……はぁ……。参ったな。やったはいいけど、もう動けそうもないや……」

世界がぐるぐると回っている

ここで俺が倒れたらダメだということは分かっているが、どうやら俺の身体は休息を必要としているらしく意識が段々と遠ざかっていく。そして俺は崩れ落ちた。

▽　　▽　　▽　　▽

「まったく……。いまが冬で本当に良かったわ。でないと、今頃私は消えていたでしょうね」

ところどころ衣服が破けているレティは目の前で倒れている少年に向かって言葉を発した

「残念ながら彼方さんは意識がない状態ですよ?そんなこと言っても彼に届くことはありません」

「あら、あんな熱烈なプロポーズをしておきながらその返事を聞かないで眠るなんて、中々女心が分かってきたじゃない」

「それ……わかってるのかしら?」

文の疑問にレティは、ふふ……。と笑うだけで答えを返さず、そのまま後ろを振り向いた。

「あれ?人里のほうはもういいんですか?」

「ええ。元々人里を襲おうとも思ってなかったしね」

さくりさくりと雪の感触を楽しみながら歩き去るレティを黙って見送る文

レティはふと立ち止まり、文のほうに向きなおして

「そうだ。彼に伝言をお願いするわ。『次の冬は氷漬けにしてでも連れ帰るからもっと鍛えて頂戴ね。そして、かまくらの件楽しみにしてるわよ』って」

「あややや。彼方さんも大変ですね。分かりました必ず伝えておきますね」

「ええ、よろしく。では、また次の冬にお会いしましょう」

そういって今度こそレティは歩き去っていった

「とりあえず……これ以上彼はここに置いておくと本格的に大変なことになりそうなので、人里のほうに運びますか……」

彼方を肩に担いだ文は人里へと入る。

そこでぼろぼろの状態で担がれてきた彼方をみたアリスと人里の守護者である慧音が慌てふためいて人里がちょっとしたパニックになってしまったが、それは完璧な余談であろう。

## １５．雪を溶かすは光の波動（後書き）

長すぎワロタ

おかしい。ほんとうは４０００文字くらいで終わるはずだったのにね。

そしてまた結構空いてしまいましたね。申し訳ありませぬ

次回は吾木香に挿絵を頼んでいるんで、金曜くらいになります。

この頃、アニメを見ようと思わなくなってきた自分が怖い。シュタゲとあの花と銀魂はみよう。うん。

Ｃｈａｏｓ；Ｈｅａｄのドラマ ＣＤ買ったらサイフの中身が空になった。オワタ

## 16．従者として

白玉楼の門の前、いままさに二人の少女が弾幕勝負を開始しようとしている。

一人は周囲にナイフを展開し、もう一方は二振りの刀で身構える

無言の対峙が続く中、先手を切ったのは紅魔館のメイド長、十六夜咲夜だった

周囲に展開していたナイフの一部を投げた瞬間に時を止め、即座に後ろに回り込み後方からも同じように投げる。

仕留めた――

そう思い時を戻す。次に見る光景は、相手の胸と背中にナイフが突き刺す光景であったが――

「やはり……一筋縄ではいきそうにないわね」

咲夜がみた光景は、二本の刀を器用に使い前方後方のナイフを全て弾き切った、白玉楼の庭師、魂魄妖夢の姿であった。

「こちらもいきなりのことで驚きました……。中々面白い能力を持っているみたいですね……」

妖夢は二本の刀のうち短刀をしまい、両の手で長刀を強く握りしめる

「この刀は『楼観剣』幽霊十匹分にも相当する殺傷能力があります。……下手に当たると怪我では済みませんよ？」

楼観剣を目の位置にまで水平に持っていくと、最後忠告をするように咲夜に聞いて来る妖夢。　咲夜はそんな妖夢をみやりながら、やれやれ……とでも言いたげに頭を振り、言い放った。

「だったら、当たらなければいい話じゃない」

それが合図となったのだろうか、二人とも足に力を入れ前へと走り出す。

半人半妖である妖夢に対して、咲夜は人間。いくら弾幕勝負が人間と妖怪の公平さを出すためといっても元からあった性能が上がるわけではないので、どうしてもこういう時にその差が出てしまう。

ナイフを散りばめながら、進む咲夜に妖夢は最小限の動きだけで自分に当たりそうなものだけを避ける

六道剣『一念無量劫』（いちねんむりょうごう）

斜めに切ったかと思った瞬間には、下から上に掬い上げるように切られるその様は剣で六芒星を描いているようであった。

目の前に詰め寄ってでのスペルカード。いかに咲夜が普通の人間よりも凄かろうがこれは対処できないだろう……。

「あっけない終わりでしたね……。」

そう言って刀を腰に納めようとした時だった。

「いきなりのスペルカードなんて困るわね。あぁもう。端っこが切れてるじゃない！」

「――――！？」

背後からの声に驚き振り返ると、メイド服の端っこだけが切れた状態の咲夜が指でくるくるとナイフを回しながらこちらをみていた。

「私の能力を完全に把握できていなかったのだが、惜しかったわね。さて――――」

――今度は私のナイフで舞ってもらおうかしら？

「なッ！？」

ここで妖夢はようやく気付いた。自分の周りに仕掛けられていた沢山のナイフに。

メイド秘技『殺人ドール』

咲夜が手を下に下ろした瞬間、ナイフはそれぞれが意思を持っているかのように妖夢に襲いかかる。

上に下に左に右に、ときには斜めからも容赦ない攻撃が襲ってくる。

その光景は人形を持った赤ちゃんが振りまわしているようであった

やがてナイフの奔流は徐々に収まり

「驚いたわ……。まさか、まだ立っているなんてね……」

そこには二振りの刀を手にした妖夢が立っていた。

肩には弾き残したのか、ナイフが一本刺さっている。

「私は幽々子様のためにも負けられないのです……！」

肩に刺さっていたナイフを強引に抜き取ると、妖夢は楼観剣を腰の位置に止めそのまま腰を少しばかり落とす。さながら居合いのような格好をとる

その様子をみた咲夜は警戒して、自分の周りにナイフを展開する。

「あなたはとても強い方です。けど、そろそろ時間が迫ってきているので幽々子様のほうに加勢に行かなければなりません」

そう言った妖夢の声は心なしか震えていた。

「あら？いまから私が倒されるみたいな言い方ね。少しだけむかつ

くわよ？」

咲夜は妖夢の震えた声を聞かなかったことにして、まるでもうすぐ自分が倒れることを予想している妖夢にいった。

そんな咲夜の言葉に妖夢は頷きで肯定の意を示す。

「いくらあなたが凄かろうと……この技は見えません」

妖夢は一度深呼吸と同時に瞼を閉じ……

「いきますッ！！」

獄界剣『二百由旬の一閃』（にひゃくゆじゅんのいっせん）

＞ｉ２４９９４―２９９２＜

居合い一閃

一瞬、時が止まり辺りは静寂に包まれた。

そんな中、妖夢は刀を鞘に戻す。チンッ！と刀を戻したのが合図だったかのように、風が吹き荒れその風の余波は遠くにいた魔理沙の帽子をも飛ばすほどであった。

妖夢は歩きだす。幽々子と霊夢が戦っているであろう場所を目指して。すでに勝敗をついたのだから……。

「主の敵の末路を確認もせずに行くなんて……同じ従者として考えられないわ」

故に信じられなかった。その声が聞こえることが。

「確かに……いい一撃だったわよ？　あなたの心に迷いさえ無ければ……の話だけどね」

故に信じられなかった。その存在が無傷でいることが。

「確かに……私は外へと吹き飛ばしたはずなのに……！？」

故に信じられなかった。その存在が自分の目の前に立っていることが。

「紅魔館のメイド長を舐めてもらっては困るわよ？」

妖夢の目の前には、腕組みした咲夜が立っていた

▽　　▽　　▽　　▽

「（勢いで言ったみたものの……正直しんどいわね……）」

咲夜は能力こそ、『時間を操る程度の能力』という強大な能力を持っているが、それ以外は普通の人間と変わらない。故に長期戦となると自らが苦しくなってくるのだ。

そしてもう一つ気がかりだったのが、先程の妖夢の攻撃

刀を振り切る瞬間、妖夢は少しだけスピードを減速させたのだ。それが咲夜が無傷でこの場に立っている理由である。

「（まぁ、あれこれ考えるよりも聞いたほうが早いわね）貴女……何をそんなに迷っているのかしら？」

「ま、迷ってなどいません！私は確かに、あの一撃で――」

「嘘よ。私に攻撃を放つ瞬間、少しだけ減速したわよ」

咲夜の言葉に「うッ」と小さな声を出す

「それに……先程から妙に攻撃が軽いわ。貴女……本気で私を倒す気があるのかしら？」

「あ、当たり前です！私はあなたを倒そうと――」

「それも嘘ね」

「ど、どうしてそんなことが分かるんですか！？確証なんか――」

「あなたの顔を見れば分かるわ。それに……いまの貴女は何かを恐れているわ」

咲夜の言葉に先程まで荒げていた妖夢の声がピタリと止まった

「……あなたに……何が分かるんですか……？」

妖夢の刀を握り締めていた手が徐々に開かれる

「知ってますか……？このまま春度を集めて、あの西行妖が満開になってしまったら幽々子様は消えてしまうんですよ……」

震える妖夢から聞こえてきた話は、咲夜にとっても予想外なことだった。

▽　　▽　　▽　　▽

私の祖父がここを離れる前に忠告したことがある

『決して西行妖を満開にさせるでないぞ』

そう言った時の祖父の顔はいまでも覚えている。　とても厳しい顔つきだった。

『なんでですか？』

私は祖父の言葉の意味が分からずにそう聞き返した

そんな私に祖父は、『いづれわかる』そう言い残して、この白玉楼を去って行った。

最初は少しだけ気にしていたが、それも時が過ぎていくにつれて段々と気にならなくなってきた。

幽々子様との毎日が楽しすぎたのだ。　確かに大食いの幽々子様の食事の用意とかは大変ではあるが、それも大変なだけであって苦通だと思ったことなど一度もなかった。

いつも明るく、笑顔の絶えない。悩みとは無縁の幽々子様だからだろうか。私は変な確信を持ってしまったのである。『幽々子様なら、わざわざ西行妖を満開になんかしないだろう』と。

元に一度それとなく聞いたときには、『う～ん……。別に咲かせようとは思わないわ～。　それより、お団子食べたいわ～』と言っていた。

だからこそ、だからこそあの時の幽々子様の言葉は信じられなかった。

はじめは冗談だと思っていた。幽々子様は、私に対してよく冗談を言うほうだから今回もそうだろうと思った。

しかし幽々子様の目が物語っていた。冗談でもなんでもないと。

それから私の春度を集める作業が始まった。

そもそも何故祖父はあんな忠告をしたんだろうか？

そう思った私は、幽々子様が出かけている間に幽々子様のお部屋にお邪魔しました。

そして……そこで見た書物は私にとっても思いがけないものでした。

▽　▽　▽　▽

「幽々子様は気付いていないのだと思います……。あの書物に書かれていた存在が自分自身なんだと……」

実際初めの頃は私も気づかなかった。

私が気付くことができたのも本当に偶然。　祖父から小さい時に聞いた話しを思い出せたのが行幸だった。

「それで……？貴女は止めなかったのかしら？」

妖夢の頭に冷たい声がかかる

「止めれるわけ……ないじゃないですか……。あの人の笑顔を見たら……止めれるわけないじゃないですか……。　私は従者なんですよ？」

ポタリポタリと雫が落ちる。

妖夢だって分かっている。自分がやっていることがどれだけ愚かなことなのかということを。　このままいけば、引き返すことができないところまでいくことぐらい容易に想像がついてしまう。　しかし、それでも妖夢は後一歩が踏み出せないでいた。

「主が消えると分かっていながら、止めない貴女を私は従者だなんて認めないわよ」

そんな妖夢に咲夜は冷たい言葉を放った。

「おいおい！咲夜！それはいくらなんでも言い過ぎじゃないか？」

弾幕勝負が止んだのを見計らって二人の傍に来ていた魔理沙があまりの咲夜の言い方についつい口を出してしまう。

「べつに言い過ぎでもなんでもないわよ。だったら、魔理沙は霊夢自身が何かをすることで、霊夢の存在が消えようとした時に何もしないで指をくわえて見ているつもりかしら？」

「え？いや、そう言われたら……あたしも止めると思うけどよ……。だって、こいつは従者なんだぜ？友達と主従が少し違うものがあるんじゃないのか？」

魔理沙がいうように、友達と主従では少し違ってくるかもしれない。
だがそれは、表面上だけのものであって、中身までもが変わるわけではない。

「一緒よ。主従がある分、私達のほうが主には消えてほしくないと思うはず。　もしも……もしもお嬢様が今回のようなことをされて、それによってお嬢様の存在が消えてしまうのだとしたら、私は殴ってでもお嬢様を止めるわ。」

それが十六夜咲夜の誓い。

この身、この心を主に捧げたその時から全ては主のもの。

だからこそ、一緒にいたい。

だからこそ、そんな馬鹿げた理由で消えてほしくない。

「従者とは時に主を全てのことから護る盾となり、主を止める縄となる。例えそれが、嫌われることに繋がるとしてもね」

そこまで言って、咲夜は座り込む。　そろそろ体力の限界が近づいてきたようだ。

「やっぱり私は……未熟者なんですね」

ずるずると座り込みながら妖夢は一人呟く

結局、主を止めることもできないまま、浮ついた心で侵入者達を迎え撃つことになり、そのうちの一人には素通りされて、挙句の果てにはこうやって怒られて……誰が悪いという訳ではない。ただ単に自分自身が未熟だったのだ。　このメイドのような心を持っていた

のならばもしかしたら……

「私はそうは思わないわよ」

思考の渦に飲まれようとした瞬間に咲夜の声が耳に入った。

「こんなにも主のことを想い、いまだって主のために泣いている従者のどこが未熟者だっていうの。あなたの主を想う気持ちは一人前よ」

そう言って咲夜は妖夢を優しく抱きしめる。

「頑張ったわね、お疲れ様」

母親が子供をあやすように抱きしめられた妖夢は、小さな声で咲夜に囁く

その言葉を聞いて咲夜は、自信に満ちた笑みで

「ええ。まだ間に合うわよ。いってらっしゃい」

そういって、ゆっくりと背中を押した

妖夢はそれに後押しされたのか、勝負にみせた以上の速さで霊夢と幽々子が戦っているであろう所まで駆けて行った。

「あ～あ。結局のところ勝負はどうなったんだよ」

二人の勝負を遠くから見守っていた魔理沙だけがぶつぶつと文句を言う

そんな魔理沙に咲夜は、まぁまぁと落ち着かせた後

「文句を言わないの。　べつにいいじゃない。勝負がつこうがつかまいが。私としては、さっさとこの冬が終わってくれたらそれでＯＫよ。」

そうすれば紅魔館に帰ったときにお嬢様が最高の笑顔で迎えてくれるから。

「それに……もうすぐ決着つくでしょう。霊夢も今回の異変は本気みたいだしね」

「あ～……そういえば炬燵代のことで機嫌が悪かったよな。そのせいで彼方の弾幕訓練が凄まじいことになったしな」

魔理沙はしみじみとあの時の光景を蘇らせる

霊夢の大量の弾幕を必死に逃げ回る彼方。

しかし数秒とたたずに被弾して、そのたびにブッ飛ばされる。　流石にあの時だけは、可哀想になって参加するのを止めたんだっけ……。

「まぁもう一つ理由があるみたいだけどね。　そんなことよりも魔理沙はこの後どうするのかしら？」

「もちろん霊夢の所にいくぜ！」

ズビシッと親指をサムズアップして咲夜に答える魔理沙

「そう。それじゃ行きましょうか。いまから歩いていったら丁度終わりのときに着くんじゃないかしら」

「あ～……それよりも咲夜？」

てくてくと歩きだす咲夜に魔理沙は先程から気になっていたことを聞いてみた

「そのメイド服、新品同然みたいなんだけど、いつ着替えたんだ？」

魔理沙の指さしたメイド服はたったいまおろしたてたような感じだった。　いや実際のところいま、おろしたのかもしれない。　それを可能とする能力を彼女は持っているのだから。

指摘を受けた咲夜はというと、一瞬キョトンとした顔になったが、軽く笑って口元に人差し指を持っていくと

「紅魔館のメイド長たる者、この程度のことができなくてどうするの？」

それだけいって門をくぐった。

そんな咲夜をみながら、魔理沙はやれやれと首を振るのであった。

## 16．従者として（後書き）

更新は金曜とかいってたな。あれは嘘だ。

セバスチャンかっこよすぎ

女装シエルかわいすぎ

以下、挿絵担当の吾木香よりコメント

この作品の挿絵を描かせていただいております変態です。いつもこんな鉛筆オンリー絵を見ていただきありがとうございます（二回しかないけど）。これからも頑張って描いてこうと思うので応援よろしくお願いします。

ということです。

まぁ、こちらこそいつもありがとな。

# 17．蝶の辿った軌跡

わたしが目を開けた先には二人の人物がいた。　一人は長い刀を持った初老の男で、もう一人は綺麗な金髪の女性でその手にはお洒落な感じの日傘を持っていた。

『こんにちは。待っていたわよ』

金髪の女性が私に向かって頬笑みかけてくる。

『あら？ほんと～？ごめんね、待たせちゃって』

わたしが謝ると女性はいつの間にか持っていた扇で口元を隠す。

多分、笑っているのだろう。扇で口元を隠したのは、その笑いを見させないためだと思う。

そう勝手に私は判断した。

『ねえ、そういえば貴女のお名前はなんていうのかしら？』

私の問いかけに女性は口元を隠していた扇を、パチンッと閉じて私に告げた。

『八雲紫よ。よろしくね』

思えばあれが私と紫との初めての出会いだった。

――本当に？

「弾幕勝負の最中、考えごとなんて随分と余裕じゃない」

「――――ッ！！」

前方から聞こえてきた声で私は初めて目の前で起こっていたことに気がついた。

迫りくる霊気の籠った札の弾幕

それをすんでの所で私は回避した。

「あら、もしかして私が声をかけなければ今の当たってたかしら？」

およそ巫女服とは思えないような巫女服を着た少女、博麗霊夢はいま放った弾幕をみて一人呟く。

「大丈夫よ。貴女の弾幕程度なら私は落とせないわよ」

「言うじゃない。面白いわね」

目の前の少女が懐から一枚の札を取り出す

夢符『封魔陣』

その瞬間、私をとり囲むように大きな陣が形成される

大した力だわ……。その年齢でそんな強力な力を持つなんて……。
流石は紫が一目置いてる存在ね。

幽々子が思っている間にもその陣はゆっくりと狭まっていき……

少女が手を前にかざし、握った瞬間に一気に縮小される

それをみた霊夢はふぅ……と口から漏らしパタパタと身体を手で仰ぐ

「あ～疲れた。さてと……咲夜のほうも……。ん?」

門の前で戦っているであろう咲夜も、既に終わっているであろう。
と読んでいる霊夢の前に一匹の蝶が漂ってきた。否、一匹だけではない。

「なっ……！？」

霊夢の周りを漂う蝶は数えることができる範囲で５０匹はいたのだ。

その蝶は見る者を魅了するような美しい羽を揺らしながら霊夢の周りをまわる

「あらあら、紫に聞いていた通り、博麗の巫女ってのは随分な怠慢なのね。あれくらいで私が落ちるとでも？」

「普通はあれを喰らったら落ちるんだけどね……。あんたは普通じゃないみたいね……」

「あら～？私は普通よ」

「あんたみたいな普通がいてたまるもんですか」

軽口をたたく霊夢であったが、ほんとうに予想外なことだった。

スペルカードにはありったけな力を込めたはずだ。そこらへんの妖怪はもちろん、先程あった従者でもかなりの痛手を負うはずなんだが……目の前で優雅な仕草で笑っているこの亡霊はみた感じ、こた

えている様子はない。

そしておまけに自分の周囲に展開される蝶。　四方八方を塞がれており、ここから抜け出すのは至難の業だ。

「それじゃあ……こんどはこっちの攻撃も受けて貰おうかしら」

幽々子の言葉に応えるように後ろに大きな扇が姿を現す。

「さぁ……蝶のように舞いなさい」

華霊『ゴーストバタフライ』

霊夢の周りにいた蝶が一斉にその羽で霊夢を襲う。　いや、霊夢の周囲にいた蝶だけではない。幽々子の後ろに展開された巨大な扇からも蝶がその羽を揺らし、霊夢へと襲いかかって来る。

一撃一撃は霊夢のそれよりは軽いが、いかんせん数が多すぎる。最初のほうは防ぐことができていた霊夢も次第と押されていき、ついには無防備な状態でスペルカードを受けることになってしまった。

「ふん……。あんたのスペルカードも大したことないわね」

幽々子のスペルカードを全て受け切った霊夢は、なんとも平気な顔で幽々子に告げる。

「丁度いいわ……。この頃、彼方の訓練に付き合ってレベルを落としていたのよね……」

弾幕勝負において右に出る者はいないとさえ言われる博麗霊夢。

その霊夢に弾幕の訓練を受けている彼方なのだが、二人の力量差は文字通り天と地ほどの差がある。　いくら妖怪と人間の公平をきすために弾幕を使うようになったからといっても、弾幕だって打ち所が悪かったりすると人間の場合は死ぬ恐れもあるのだ。

人間で弾幕を撃てる者など幻想郷では数えるほどしかいない。そして、その全員が規格外の能力を持ち、弾幕勝負もそれなりに強い。ゆえに弾幕勝負で死ぬようなことなどなかった。　しかし、霊夢から訓練を受けている少年、不知火彼方は違っていた。

凡人を絵に描いたような少年は、霊夢による弾幕訓練で結構なとこまでイったりする時がある。　もちろん訓練なのだから、少しぐらいは無茶をしないといけないのだろうが……それでも毎回毎回こうなら少年の身が持たないと思った霊夢はあえて自分のレベルを落とすというやり方で訓練をしていた。

そんな訓練を毎日毎日していたためか。自分でも知らず知らずの内に幽々子との弾幕勝負の時でも自分のレベルを押さえて戦っていたのだ。

「あら？悔しかったの？私を落としたと勘違いして、逆に私のスペルカードを真っ向から受けて悔しかったの？」

「う、うるさいわね！　いまからあんたの扇子へし折ってやるから覚悟してなさい」

幽々子の挑発的な言葉に霊夢は、指をビシッと突き付ける

「ふふ……。それは面白い――――！？」

面白いわね。と続けようとした幽々子の顔を何かが掠める

「ふふ……」

「次は扇子よ」

霊夢が放った弾幕が幽々子の頬をかすめる。

「悪いわね。こっからは本気で行かせてもらうわ」

霊夢が左手を勢いよく薙ぐ

ヒュンヒュンヒュンッ

するとそこに現われる針針針

「串刺しにならないように気をつけてね？」

針を幽々子へと向かわせる霊夢。針が幽々子へと向かっている間に自分は一旦下へと直下していく。

「弾幕を針に換えたくらいで……私が倒せるとでも？」

幽々子は慌てることなくその針をギリギリのところでかわす。

「ええ、思うわよ」

声が聞こえてくるのは幽々子の下

先程、直下していた霊夢が勢いそのままに幽々子と肉薄する。

「喰らってみなさい。流石に痛いわよ」

霊符『夢想封印　集』

霊夢の莫大な霊気によって作られたスペルカードが幽々子を襲う

五つ六つからなる陰陽玉が一つの大きな塊となって幽々子の腹で爆ぜる

「くっ！？」

流石の幽々子も至近距離からのこの攻撃は逸らすこともできずに、なすすべもなく受ける。

そこに飛び込んでくるのは霊夢の針。

15本にもおよぶ針がそのまま幽々子の腹に突き刺さる。

「これで!!終了――――!?」

最後の一発を撃とうとしたところで霊夢が何かに気付いたのか、勢いよくその場を離れる

その直後に無数の蝶が霊夢のいた場所へと群がる

「残念……。もう少しだったのに……」

幽々子は童女のように顔をぷくりと膨らませて霊夢を睨みつける

「それはお互い様でしょ。あと少しであんたを落とせたっていうのに」

霊夢は少しイラついているのか、舌打ちをしながら幽々子に答える。

「というか……なんであんたはそこまでして、その桜の下をみようと思っているわけ?」

ふいに霊夢が幽々子に訪ねる。

「そうねぇ……。興味と疑問ってとこね」

幽々子の答えに霊夢は、「ふ～ん」となんだか間の抜けた声を上げる

「……あなたが聞いたんじゃないのかしら？」

霊夢のあまりにもな返事に幽々子は弾幕勝負の真っ最中だということを忘れて困った笑顔を向ける

「いや、別に私はいいんだけどさ。そんな簡単な理由だとはね。……もしかしたら、あんたがその桜を咲かせることで悲しむ人がいるかもしれないわよ」

――――もう……疲れちゃった

霊夢の言葉とともに突然脳裏に浮かびあがる映像

――――この世界で生きるのは私には難しかったみたい・……

綺麗な桜の木の下で少女が手に持っていた何かを自らの身体にあてがいながら寂しそうに笑う光景

――――……私が死んだら、あの子は泣いてくれるのかな？

刹那に飛び散る赤い花

その花は綺麗な桜に飛び散り、桜を艶やかな姿へと変貌させた。

そしてその光景を幽々子はいつの間にか、離れた所で見ている自分に気がついた

「……え？」

自分でもどこから出てきた声なのか分からない声に困惑しながらも、何かに動かされるように一歩ずつゆっくりと近づいていく。

一歩、二歩、三歩

その少女に近づく幽々子の鼓動は、歩を進めるために早くなっていく

あともう少し、もう少しでこの少女の顔を視認することができる

幽々子は足を前へと大きくだ――――

「幽々子様ダメです！！」

――――すことはできなかった。

「よ、妖夢……？それに……ここは」

後ろから強い衝撃を受けて振り返ると、そこには自分の身体に力いっぱい抱きついている自分の従者がいた。　そしてそれと同時に、先程まで視ていた不思議な光景も消えていた。

「幽々子様ダメです！！これ以上行ったらダメです！！」

イヤイヤと小さな子供が駄々をこねるように幽々子を引きとめる妖夢

「こ、こら！？妖夢恥ずかしいから止めなさい。それに行くってどこに――――」

幽々子が振り向いた先には

「――――西行妖……」

まるでここまで幽々子を誘っていたかのように静かに静かに佇んでいた。

もしかして……先程の光景はこの桜が私に視せてくれたものなのか？

この桜はあの映像を通して私に何かを伝えようとしていたのかな？

なんてね。そんなことあるはずもないのに。まったく……自分で考えておいてなんて都合のいい妄想なんだこと……

「幽々子様ぁ……」

私は私を決して離すまいと力を込めて裾を握っている自分の従者をみる

いつもいつも自分のわがままを聞いてくれた子。

私のために一生懸命頑張ってくれた子。

「ねぇ妖夢。もし……、もし私が消えちゃったら、貴女は私のために泣いてくれるかしら？」

妖夢の顔が上がり、私を見つめる

その目に涙をいっぱいに溜めながら。

「そんな……こと……、言わないでくださいよ……」

「ああ！？ごめんごめん！？別にそういう意味じゃないからね！？」

ほんの一瞬だけ、妖夢の顔が誰かと被った

だが、それは一瞬すぎて私には誰かわからない

「あなたも……そう想ってくれてるのかしらね？」

幽々子が問うた視線の先の者はついぞ答えを言うことはなかったが、

幽々子はそんな答えに満足して、霊夢へと向き直った

「博麗の巫女さん。この勝負、私の負けでいいわ」

そういって幽々子は腕を虚空へと振るった。

「これで貴女のいう異変というのも解決よ」

「そう。それじゃ私は失礼するわ。あとは二人……いや、三人でね」

軽く手を振りながら来た道を戻っていく霊夢

そんな霊夢を笑いながら見送った幽々子は、いまだに自分の裾を抱きしめている妖夢へと顔を向ける

「ねぇ、妖夢。これからも私と一緒に居てくれるかしら？」

「そんなの当たり前じゃないですか！！」

絶対に離すもんかと幽々子へと全身タックルを決める妖夢

「私は幸せ者ね。――――そうは思わない？紫」

何もない空間へと喋りかける幽々子。　するとそこに空間の割れ目が出てきて、一人の女性が出てきた。

「ふふ……。羨ましいわ、幽々子」

金髪の女性、八雲紫は二人の姿をみて嬉しそうに目を細める

「ねぇ、紫」

そんな紫に幽々子は一拍置いて

「いつまでもお友達でいてくれるかしら？」

そう問う

問われた紫は、開いていた扇子を閉じ少女のような笑みを浮かべてこう答えた

「ええ、もちろん」

▽　　▽　　▽　　▽

桜の花が舞っている

空一面に舞った花弁は鮮やかなピンク色の空間を作る

そんな空間で、二人の少女が笑いながら談笑をしていた。

ここからでは遠くて内容までは聞こえないが、とても楽しい内容なのだろう。

沢山談笑して、話し疲れたのだろうか、二人の声が唐突に止んだ。

すると、片方の少女が真剣な面持ちで何かを話し始める

もう片方の少女は、その話しに口を挟むことなく静かに黙って聞いていた。

やがて少女の話が終わったのだろう。辺りは静寂が支配する。

少しの静寂の後、話しを聞いていた少女のほうがおもむろに何かを離しはじめた。

その声はやはりここからでは遠く、その内容までは分からずにいた。

だがそんな中、一つだけ分かった言葉があった。

聞こえたわけではない

だが、こう言ったという確信はあった。

『ずっとお友達でいようね』

少女がそう言ったであろう瞬間、もう一人の少女が抱きつく。

それから二人は照れたようにはにかむ

そんな二人の少女の見ながら、庭で一番の桜の木はただただ綺麗な花を咲かせるだけであった。

## 17．蝶の辿った軌跡（後書き）

更新が遅くなりがちだね。これも天則をまたやりはじめたからだね。

この頃、私は歯科検診で虫歯があるといわれたので歯医者さんに行ったのですよ。そこで「もう少しで神経取るとこだったよ、危なかったね～」とか言われて治療を受けたんですが・・・・・・・ドリルが怖いこと怖いこと。

あのウィ～ン！！って感じで迫りくるドリル。何歳になっても苦手です。

ドリルって因果律とか運命とか穴とか明日へと続く道を掘るって、大グレン団のあのお方が言っていたのに・・・・・・

俺の心をへし折りに来たでやんす。

## 18．冬から春へ

「ねぇ……まだおにいちゃんは寝てるの？」

「そうですね……。もう少しで起きると処置してくれた方が言ってましたけど……」

夢か現かあやふやな中に聞きなれた人たちの声が聞こえてくる。

「う～ん……軽く叩いてみたら起きるかな？」

「そうですね。そろそろこの寝顔を見るのも飽きてきましたし、起こしましょうか。おーい、朝ですよ～。起きてくださーい」

ぺしぺしと軽く頭をはたかれる。

なんだか……懐かしいな……

幻想郷に来る前は、あの子がこうやって毎日毎日、起こしに来てくれたんだよな。……いまでも霊夢に叩き起こされることが多いけど……。

「ダメだよー。おにいちゃんは美鈴に鍛えてもらってるんだから、もう少し強くしないとダメだよ」

この声は……フランちゃんかな？

はは、まったくフランちゃんたら、俺は頭は鍛えてないんだから「みててね？おにいちゃん、朝だよ～」

「そんなことしたら、頭が潰れちゃうよおおおおおおおお！？」

頭を一気に覚醒させて横に転がりながらなんとか回避する。……あの……陥没してるように見えるのは気のせいだよね？

「あっ！おにいちゃん、おはよう！」

「うん、フランちゃんおはよう。それに文もおはよう」

「おはよう、彼方さん。ついでにいうと朝でもないですけどね」

抱きつくフランちゃんを膝に乗せながら、フランちゃんと一緒にいた文に話しかける

「というか……夜？だよね。それに俺はレティさんを止めた後ぶっ倒れて……」

「そのまま放置してもよかったんですが、後が怖そうだったので人里に運んで、医者……まがいのことをしてる人に来てもらいました」

「医者まがい？俺改造とかされてないよね？大丈夫だよね？」

「その心配はないと思いますよ。傍には心配性な人達がついていましたし、腕はたしかですよ」

文は誇張はするが嘘はつかない。その文がこう言ってるんだから大丈夫なんだろう。……というか、お礼を言いに行かなきゃだめだよな。

「なぁ文。その俺を治療してくれた人っていまどこにいるのか分かる？」

「ええ、あっちでお酒を飲んでますよ」

お酒？

俺が疑問符を浮かべていると、膝で寝ころんで遊んでいたフランちゃんが俺の顔を強引に向けさせて

「あのね！あのね！きょうは宴会をやってるんだ！フランは楽しくなかったから、おにいちゃんをみてたの！文はなんとなく来たみたい」

「宴会ねぇ……」

「どうします行ってみますか？あなたを心配してる人も結構いますし」

う～ん……。まだ身体は少し痛いけど、動く分には問題ないし、その宴会も少し気になるし、俺を治療してくれた方がそこにいるなら行かないわけにはいかないよな。それに皆心配してくれてるらしいし

「うん、そうだな。ちょっと俺も宴会にお邪魔させてもらおうかな。フランちゃんもそれでいいかな？」

「うん！！」

さて……幻想郷の宴会というものを見てみますかね

▽　　▽　　▽　　▽

「あれ？あんたまだ生きてたんだ。へー」

「ねえ文。これで心配？それともこれが幻想郷流の心配？それなら外来人の俺には少しキツイんだけど」

「まあまあ。こうは言ってますが、人里に運んだときに酷く心配してましてね。『ちゃんと治るんでしょうね！？』とか大声で叫んでたんですよ？」

「アリス……」

「ちょっと！？そんな出鱈目言わないでよ！！あんたも涙目でにじり寄って来ないでよ気持ち悪い！！」

少しウルっときてアリスに近寄って行ったら、思いっきり拒否されました。

というかなんでアリスがいるんだ？

俺がそう思っていると、俺の思考を読んだのか

「幻想郷では外の世界の常識は通用しないのよ」

と分かりやすい答えを返してくれました。そうなんだよな……。ここは俺がいた所と違って何もかもが違うんだよな。

「ところであんた、怪我のほうはもういいの？」

「う～ん。まだ身体のあちこちが痛いけど、動く分には問題ないかな」

「そう。それなら大丈夫ね」

大丈夫？　こういう時って良かったねとかじゃないのか？

「あっちのほうに貴女に会いたい人が待ってるわよ」

俺に会いたい人？　誰だろう？

「えーと……とりあえず行ってみるよ。アリスも心配してくれてありがとうな」

「うるさい！？さっさと行きなさいよ！！」

お礼をいうとアリスが持っていたお箸を投げてきたので、フランちゃんを抱いたまま文と全力で逃げました。

▽　　▽　　▽　　▽

アリスの元から逃げること数分。前方に見知った顔を発見した。

「ねぇ魔理沙。私も彼方の所に行ったほうがいいと思うの」

「おいおい。もう同じことを三時間も前から言ってるぜ、霊夢。フランと文があそこにはいるだろ。起きたら文が連れてくれるから大丈夫だって」

『でもでも……フランはいまだに力加減とか知らないし、もしかしたら、起こそうとしてつい頭をザクロのように潰したりとか……』

『……だ、大丈夫だって』

「すごいですね霊夢さん。フランさんのことをよく分かってますよ」

「俺は今頃になって寒気がしてきたんだけど……」

横にいる文が感嘆の声を漏らすよこで密かに自分の身体を抱きしめる俺。

話の中に出てきたフランちゃんはというと、何を勘違いしてるのか少し照れくさそうに頬を染めて、「えへへ……」と俺の服を掴んでくる。　フランちゃん、別に霊夢は褒めてる訳じゃないからね？

「霊夢さん達も心配してますし早いとこ顔を出しにいきましょうか」

「うん、そうだな」

文と一緒に霊夢達の元まで歩く。　すると、霊夢達のほうからこんな会話が聞こえてきた。

『文から聞いたけど、外出したあげくに冬の妖怪と戦ったらしいし……おまけにあちこちボロボロの状態で永琳―えいりん―が居なかったら今頃死んだかもしれないのよね……。』

ああ……そういえば外出禁止令っぽいのが出てたような……。

『それもこれも、あいつが私の言うことを聞かないから……』

あれ・……？なんとなく雲行きが怪しくなってきたぞ？

「ん？どうしたんですか、彼方さん」

「いや……大丈夫気のせいだよな」

ほら、結果的に俺は生きているし。塩だって買ってきたし。あの優しい？霊夢さんが怒るなんて……

『やっぱ一度、調教……とまではいかないけど、そういったことをしないといけないわね』

『へー。面白そうじゃん。私にもさせてくれよ』

「あっ！？彼方さん！？」

「すまん文！！俺はあそこでまだ寝とくことにする！！」

霊夢の言葉を聞いて、脱兎のごとく逃げ出す俺。

いまなら外の世界での世界新も夢じゃないかもしれない

「きゃっ！？」

「うわっ！？す、すいません！」

前を見ないで走っていたせいか、目の前に人がいることも気がつかず、思いっきり衝突してしまった。

「あの、怪我はありませんか！？」

「ええ、大丈夫ですよ。私も余所見をしていたのでお互い様になっちゃいますね」

俺とぶつかった女の子はふんわりと微笑んだ。

白髪のおかっぱに、なんとなく俺と同じ苦労人の臭いがする。女の子の隣では丸くてもふもふしたものがふよふよと浮いている。幻想郷にアクセサリーか何かだろうか？

そして腰……というか背中には二本の刀が……刀？

「あっ！もしかしてあなたが咲夜さん達が言っていた彼方さんですか？　はじめまして。私、白玉楼の主、西行寺幽々子様の元で庭師と剣の指南役をしております、魂魄妖夢と申します」

白髪の少女、魂魄さんが綺麗なお辞儀で挨拶をしてくる。

そのお辞儀をみて俺も慌てて立ち上がり

「博麗神社で雑用をしています、不知火彼方です。へー、ここは白玉楼っていうんですね。桜が綺麗ないい所ですね」

「その桜で少しアクシデントが起きたんですけどね……」

一気にトーンダウンする魂魄さん

「え、えっとすみません魂魄さん」

「なーんてね。気にしてませんよ。それに、彼方さんもその話し方キツイんじゃないですか？咲夜さんから聞いたのとちょっと違いますし。　あと、妖夢でいいですよ？」

いや、だってこんなに丁寧な人にいきなりため口は失礼っぽいし。
まぁ……妖夢がそういうならいつも通りでいいかな。

「えっと、それじゃ妖夢。　さっきから気になっていたんだけど、そのふよふよしたのは一体なに？」

妖夢の横に浮いているものに指をさす。妖夢はその指を差されたものを一回にみて、合点がいったのか満面の笑みで

「私です！」

と俺を困惑の谷間に落としてきた。

「……え？もう一回お願いできるかな？」

「だから私なんですよ」

「えっと……」

どう反応してあげればいいんだろう？　『面白い冗談ですね』とかを期待してるのかな？

「あ、すいません！？私……人間と幽霊のハーフなんですよ」

俺の困惑顔をみてとったのか、妖夢が慌てて言葉を継ぎ足した。

「あ、なるほど。ハーフなんだ。それじゃあ、それも幽霊なんだね」

「はい！そうなりますね」

なんともなしに見ていると、幽霊が俺の周りをくるくると回りはじめる

なんか犬みたいで少し可愛いかも……

「彼方さんはどうしてここに？咲夜さん達はあっちで宴会を楽しんでますよ？」

「えっと……ちょっと行きたくない理由がありまして……」

「？何を言ってるんですか。みなさん貴方のことを心配していたんですから顔を見せないとダメですよ」

心配したあげくの到着点が調教ってどうなんだろう？

行きたくない俺の腕をとって強引に霊夢達がいる場所に向かう妖夢

なんとか話題を出して、妖夢の気を逸らさないと……

「そ、そういえば妖夢。咲夜から話を聞いたって言ってたけど咲夜は俺の事を何て言ってたの？」

俺の問いかけに妖夢は足を止め、少し唸ったあと

「えっと……『不屈の馬鹿』って言ってたかな？」

笑顔で俺に言ってきました。

「ねぇ幻想郷の人達は外来人をいじめないと気が済まないの？それとも咲夜は俺に恨みでもあるの？」

「ま、まぁ……咲夜さんなりに褒めてるんだと思いますよ？」

そう思うなら俺の方を向きながら話してくれよ。

とにもかくにも妖夢の気を逸らすことに失敗した俺は、あえなく霊夢達の所に連れていかれました。

▽　▽　▽　▽

「えっと……久しぶりだね。霊夢」

「……」ジー

「そ、そういえば塩が家に無かったよ？ダメじゃないか備蓄しておかないと……」

「……」ジー

「あの……」

「言うことは？」

「え？」

「私に言うことは？」

霊夢達の所に無理やり連れていかれてから、すぐさま魔理沙に捕まり、霊夢の正面に座らされた俺。　なんとか霊夢と会話を試みたが……霊夢に言うことってなんだろう？

周りを見れば、咲夜と妖夢が作ったらしい色とりどりの料理。　そして俺は飲めないけど鼻にツンッっとくるようなお酒。

……もしかして

「ごめん。タッパーは持って来てないんだ」

なにしろ気絶して起きたらここに居たんだから。

たしかに家計的に危ない俺達としては、こういった時にタッパーを持って来ておかずを詰めたりすることも重要だよな。行儀悪いけど。

俺が一人で得心が言ったように、うんうんと首を縦に振っていると周りの皆が手を額に当て、『はぁ～』とため息をついていた。

みんなどうしたんだろう？

てか咲夜に至っては、なんか軽蔑に似た眼差しなんですけど……。それとフランちゃん。君は此方側だよね？絶対みんながため息ついた理由分かってないでしょ？それと文はなんでカメラを構えているの？

「……さいわ？」

「え……？」

みんなに集中していたからか、隣で小さく呟いた霊夢の声を聞き逃してしまった。

「あ、ごめん霊夢。いまいち聞こえなかったからもう一度言ってもらえるかな？」

顔の前で両手を合わせて霊夢に謝る。

「だから……『ごめんなさい』はって聞いてるでしょう！？」

言葉とともに勢いよく立ちあがった霊夢は俺の頬を思いっきりはたく

「いたぁッ！？なに、なに、霊夢さん！？俺がなんか――――」

「したにきまってるでしょ！！」

大声で叫ぶ霊夢に、空気が止まる。

その霊夢の顔には冷たい雫が垂れていた

「いつもいつも突っ走るだけ突っ走って、自分の身体も省みないで、ほんとこっちとしては迷惑なのよ！！もう彼方なんて嫌い！あっち行って！！」

「れ、霊夢……？」

「あっち行ってってば！！」

「まぁまぁ、彼方。ここは私に任せてお前は他所に行ってきな。霊夢は私がなんとかするからさ」

霊夢に向けた手を宙に漂わせていたら、ぽんと肩を叩かれる。そこには魔理沙が親指をサムズアップしていた。

確かに……いまの俺がなにを言っても逆効果だよな……。

「その……ごめんな魔理沙。嫌な役を押し付けちゃって……」

「気にすんなって。後で色々と貰うからさ」

さあ行った行った。といわんばかりに俺の背を押す魔理沙に従って俺はその場を後にした。あと、霊夢の写真を撮っていた文のカメラもついでに壊しといた。

▽　▽　▽　▽

霊夢に叩かれ、怒られたあげく強制退場を喰らった俺は一人とぼとぼと歩いていた。

「はぁ～……。霊夢のアレ痛かったな～……」

口から出るのはため息と先程受けた霊夢のビンタの感想。本当は霊夢のビンタとかそんなのはどうでもいいことなんだ。いや、アレは痛かったからどうでもよくはないんだけど……。

『いつもいつも突っ走るだけ突っ走って、自分の身体も省みないで、ほんとこっちとしては迷惑なのよ！！』

俺としてはこちらのほうがきつかった。

自分自身、そんなこと考えたこともなかったが……

「はぁ～……。俺って本当にダメダメだな……」

「くすくす……。若いっていいわね」

「お師匠さま……。自分の年齢がばれちゃいますよ？」

「なにか言ったかしら、鈴仙？」

「いえッ！？なにも！！」

「へ？」

下を向きながら歩いていた顔を上げると、そこには俺に向かって手を振っている女性がいた。そして隣には人里で何度か見かけたことがある女の娘もいる。

「こんばんは、彼方くん。私は八意　永琳よ。その様子によると怪我の具合はいいみたいね。鈴仙、軽く触診で診てもらえる？」

「はい、お師匠さま。それじゃあ失礼しますね」

言うやいなや俺の身体の隅々を触りまくる鈴仙と呼ばれた女の娘。

「ちょッ！？やめ、くすぐった！？」

脇や、へんな所を触られるたびに笑い声が出そうになるのを必死で

堪える。

すると、鈴仙と呼ばれた女の娘は満足したのか、俺を触るのを止めて永琳さんの元へと戻っていった。

「もうほとんど治ってますよ。お師匠さまが治療をしたとはいえ……凄い回復力ですね」

「ふふ……。当然よ。ねぇ彼方くん？」

「は、はい？」

突然話しを振られて、おもわず変な声を出してしまう。

「聞いた話によると、彼方くんは気を扱う妖怪の元で訓練をしてるみたいね。それの影響によるものだと思うけど、あなたも知らず知らずの内に気によって自分自身の身体の内側を強化しているのよ。あなたを指導してくれた妖怪に感謝することね。そうじゃなかったら、今頃あなたはまだ生死をさ迷っていたわよ。」

ってことは、俺は美鈴から色々教わっていなければ……今頃はまだ生死の境をさ迷っていたとか、なんてことにもなるのかな？……後で美鈴にお礼言っておこう。

それとは別に気になったんだけど……もしかして

「貴女が俺を治療してくれた方ですか？」

「ええ、そうよ」

「えっと、ありがとうございました」

ぺこりと頭を下げる。

「べつにいいわよ。治療代も今回はいいわ。私としてもあなたみたいな若い男の子の身体を色々調べることができたことだし。能力持ちの外来人なんて、中々治療する機会がないのよね。……それに、あなたは面白い身体をしていたし」

一瞬だけ永琳さんの目が鷹のように鋭くなったのは気のせいだと思いたい。

「ねぇ鈴仙。あっちにあるおつまみを取ってきてくれるかしら？」

「はい。お師匠さま」

鈴仙と呼ばれた女の娘が、とことこと霊夢達の所まで走る。

人里でみかけた時から思っていたんだけど……

「ふふ。彼方くんの思っている通り、あの娘は妖怪よ。兎のね。」

「うえ〝っ!?……なんで俺の考えていたことが分かったんですか……?」

「ふふふ。な・い・しょ。ところで私も彼方くんに聞きたいことがあったんだけどね」

「?なんですか?」

「あの娘、鈴仙は人里ではどうしているかしら?ちゃんと人里の人達とよくやっているかしら?」

えっと……俺が知っているかぎりではあの娘が人里の人と楽しそうにしてるところは見たことはないし……そもそもあの娘が避けてるっぽいかな。

「え～と……その……」

「ふふ。いいわよ、その反応で十分よ。はぁ……まぁしょうがないと言えばしょうがないんだけどね」

「えっと……なにかあったんですか？」

俺は少し不躾な質問かも知れないと思いながらも聞かづにはいられなかった。

「あの娘はね、兎なの。臆病者で人の目ばかり気にして、そのくせ振り向かれたら怖くて逃げだしてしまう、そんな兎なのよ。だからね、見逃してしまうのよ。誰かの優しさや、温もりを。人里の人達は気のいい人達ばかりみたいだから、薬を売るという名目で鈴仙に人里に行かせているんだけど……やっぱり難しいみたいね」

頬に手を当て、はぁ……とため息をついた。

永琳さんのその顔は本当に困った顔を浮かばさせていた。まるで、幼稚園に娘を行かせたはいいものの、その娘が幼稚園に馴染めずに一人で遊んでいることについてどうしようか困っているみたいだった。

「永琳さんはあの娘のことを大切に思っているんですね。」

つい口から出た俺の言葉に永琳さんはきょとんとした顔をしてその後、口元に手を当ててくすくすと笑い始めた。

「そうね……。そうじゃなきゃ、『鈴仙』なんて変えないだろうし、『優曇華院』なんてつけないでしょうね」

ああ……。この人にとってあの娘は家族にも等しいのかもしれないな。

すると、そこに丁度鈴仙が皿に盛った大量の料理を手にして帰って来た。

頃合いかな。

「それじゃ、俺はそろそろ行きますね。ほんとうに永琳さん、それに鈴仙、治療ありがとうございました」

早くこの場を去らなければ

「あら、もう少しお話していってもいいのよ？」

そうじゃないと

「いえいえ、俺がいても邪魔になりそうですしね。失礼しますよ」

家族に会いたくなってしまう――――

▽　　▽　　▽　　▽

「ほんとあの子には困ったものね」

夜桜を眺めながら、八雲紫は傍らで一緒に酒を飲んでいる幽々子に話しかける

「あの子って……紫がよく話しに出している子？名前は彼方くんだったかしら？」

幽々子はこの白玉楼から動くことなど滅多にない。だからなのか、幻想郷のことはブン屋による誇張新聞か、友人である紫による話しくらいしか情報を得ることができないのだ。

「そうよ。あの子は自分から死にに行く自殺志願者みたいな行動を平気でするから、見てるこっちも困るのよね」

今回のことだってそうだ。

「ふふ……。けど、その子だって立派な男なんでしょ？小さな子供じゃないんだし、博麗の巫女がいるんだし大丈夫でしょ」

「何言ってるの。彼は子供どころか赤ちゃんよ。幻想郷という世界に放り込まれて、右も左も分からずに、霊夢という少女に拾われた、赤ちゃん。そして幻想郷はそんな赤ちゃんが耐えられるほど生易しい所じゃないわ。いまは優しい面ばかり見せているかもしれない幻想郷がいつその牙を彼方に突き立てるか。」

幽々子は紫の話を一笑することができなかった。

紫の話を聞くかぎり、その少年は優しすぎる。　そして、その優しさが幻想郷では命取りになることがあることも幽々子は知っている。

「知ってるでしょう？霊夢は先代の巫女が亡くなってから、ずっと一人だった。いつもどこかつまらなそうに日々を送っていた霊夢が彼方と出会ったその日から笑顔を見せるようになって。……少し最

近はいき過ぎな感じはするけど。それでも毎日楽しそうにしてる」

紫は手に持っていた杯を、ぐっっと握りしめる

「幽々子、私達は知ってるでしょ？大切な人を失う悲しみを。」

「紫……」

『お～、ここら辺の桜はものすごく綺麗だな～。おっ！あっちの方も行ってみよう』

ふいに聞こえてきた、なんともこの空気をぶち壊すほどに気の抜けた声

そして近づいて来る足音

「紫。そういったことは本人に言ってみれば――って紫？どこ行ったの！？」

「あれ？先客がいたんだ」

いきなり消えた友を探して辺りを見回していた幽々子の元に、ひょこりと顔をみせた彼方。

「えっと……すいません」

「ふふ。いいのよ。お隣どうぞ」

バツが悪そうな顔をして謝る彼方に幽々子はなんとか大人の笑みを浮かべて、彼方が座れるように、隣を手で軽く叩く。

「それじゃ、失礼して。それにしても、ここの桜は綺麗ですね。外の世界にもこんなに綺麗な桜みたことないや」

「そお？彼方くんが気にいってくれてよかったわ」

「えっ？なんで俺の名前を？」

「それは秘密」

彼方の口元に自分の指をあてがい、ふんわりとした笑みを浮かべる幽々子に彼方は何も言えなくなる。

「えっと……もしかして、貴女が西行寺幽々子さんですか？妖夢が言っていたここの主の」

「ええ、そうよ。よろしくね、彼方くん」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願いします」

差し出された手を思わず握りしめる彼方。

「ところで、彼方くんはここにきてどのくらい経つのかしら？」

「えっと……もうすぐで一年ですかね」

思えばこんなに経ってしまったのかと彼方は思う。

はじめは好奇心に負け、少しの間だけ滞在する予定だったのにもかかわらず、もうすぐで一年が経とうとしている。

思い出すのは、自分を此処まで育ててくれた母親の顔。　学校で出来た友達。　お世話になった人々。　そして自分の帰りを待っているであろうあの子。

「帰りたいと思ってる？」

「あっ……」

何故だかその問いに答えを口に出して答えることができなかった。

永琳との遭遇で、自分は帰りたいと思っているはずなのに、どうしても口に出して言うことができなかった。

「自分でも……わからないです。あっちには大切なものが沢山あります。……けど、こっちでも大切なものが沢山出来てしまいました」

ほんと、俺って優柔不断ですね。自嘲気味に笑う彼方。

「力のない俺がここにいても……そう思うときだってあります。元々、ここは俺のような奴がいるような場所じゃない。それは分かっているんですか、どうしても動けずにいるんですよ。まったく……蝶のように脆弱な存在だというのにもかかわらず」

「そんなことないわよ」

彼方の言葉を遮る形で幽々子は喋る

「たしかに今の貴方は蝶の羽ばたき程度の力しかないかもしれない。けど、それはいつか大きな嵐へと姿を変える」

幽々子が彼方をみる目は真剣そのものだった。決して冷やかしに言ったものではない。

「だといいわね」

最後に下を可愛く出して、彼方をこけさせたが。

「ははっ……。まぁ、そうですね。そう考えたほうが気持ちがいいかもしれませんね」

「でしょ？」

彼方と幽々子、二人でくすくす笑う。

ふとそんな二人の間に、微かな話声が聞こえてきた

『ねぇ、魔理沙。彼方怒ってるかしら？』

『大丈夫だってば。ほら、早くしないとレミリア辺りが彼方を紅魔館に誘うかもしれないぜ？いまのあいつは傷心してるからな。コロッと落ちるかも』

『そ、それはダメよ！？早くいかないと！』

その言葉を最後にドタドタと此方側に足音が近づいて来る

「ふふ……。貴方も大変ね？」

俺の顔をみて笑う幽々子さんに苦笑をしながらも、俺は思う。

もう少し、もう少しだけここにいてみようと。

## 18．冬から春へ（後書き）

これにて妖妖夢編終了でございます。

それと、鈴仙といいますか、永遠亭の設定を少し変えております。
ご了承ください。　原作では、永遠亭メンバーは外との接触を避けていますが、この作品では鈴仙は普通に人里に薬を売っているということで

## 19．小鬼／郷愁

深夜の博麗神社に何かが入り込む。

その者は、酔っ払いのようにふらりふらりと揺れ、何を思ったのか、とある一室へと入って行った。

そこには布団が一つ、そしてその中に眠る齢17になる少年が寝息を立てて気持ちよさそうに寝ている。

「うぁ～……。寝むいよぉ～……」

その者は目をくしくしとこすると、目の前にある布団の中へともぞもぞと入っていった。

「う～ん、きもちい～……。なんか懐かしい～……」

何を思ったのか、少年の寝間着を掴んで自分のほうに引き寄せ、力いっぱい抱きつく。

ボキバギメキ

丁度少年に抱きついた辺りから、骨が折れたような音が聞こえてきた。

「ぎゃあああぁあああああ!!??」

それと同時に深夜に響く少年の絶叫

そしてその絶叫を聞きつけたのか、奥からドタドタと慌ててこちらに向かっている足音が聞こえてくる。

「ちょっとまって!?めっちゃ痛いんですけど!?なにっ!?俺がなにしたの!?」

いきなりの激痛に、夢から覚めた少年は困惑しながら叫ぶ

そこに飛び込む少年以外の声

「う~ん……ちょっとうるさいよ~……。せっかくいまから寝るんだからぁ~」

「えっ!?誰!?なに!?君どこから来たの!?もしかして霊夢の

隠し子！？」

「う～ん、うるさいってば～……」

声を大にして喋る少年にその者は口元を強引に閉じらせる

そしてその直後、閉じていた襖が勢いよく開けられ、驚きと怒りが半々の霊夢が顔を出した。

「ちょっと彼方！？いま何時だと思ってるの！！」

「お～、霊夢だ～。やっと異変を解決したんだね～」

「え？萃香、どうしたのこんな所で？」

おっす、というように片手を上げて自分に手を振る知人に、霊夢は先程まであった怒りと驚きに満ちた表情は消える。かわりにどうしてこんな所にいるのかという疑問が口から出た。

問われた萃香は、手に持っていた瓢箪を一口煽り、喋る

「いや～、霊夢の所に行こうと思ったらさ～……。ほら、霊夢と同棲している男が気になって、こう……ふらふら～……。ってとね」

「ど、どどどどどど同棲じゃないわよっ！？た、ただの居候よ！」

いきなりの萃香の発言に霊夢は顔を赤くさせ、左右に視線を振る。

すると、萃香の手から開放させられ、いまだ激痛に苦悶の表情を浮かべている彼方と目が合う。

「あっ……」

普段は別に見ていても何も感じないのだが、先程の萃香の言葉で変に意識している自分がいた。

か、彼方とは……ど、同棲じゃなくて・……い、居候と家主の関係よ……！それ以上でもそれ以下でもないわ！

そう自分に言い聞かせて、彼方を見る

ドキドキドキ……

……やっぱダメ！！

何故か分からないけど、彼方を上手くみることができず自分から目をそらす霊夢。

「ほほう……」

そんな霊夢の行動をニヤニヤしながら見ている萃香。

「いつつ……。もしかしてまた骨が折れたんじゃないか……？　なんかそんな痛みがあるんですけど……」

そしてそんな霊夢に気付かず、一人愚痴る少年が一人。

そんな少年は襖に立っていた霊夢を見つけ、少し頬を膨らませて怒る

「おい、霊夢！ちゃんと見張ってないとダメだろ！？」

「うっ……。ごめん」

彼方に怒られ、しゅんとした様子で謝る霊夢。

ふらふらと状態で立った彼方は、いつもの仕返しとばかりに少し霊夢に余分に怒り、つかの間の自分の優位さに喜んでいた。

――――が、それもそこまでだった。

少年はやれやれといった風に、首を左右に振り

「まったく……。ところで、この子はなに？霊夢の隠し子か何か？」

少しばかり怒りすぎたかなと思った彼方は、彼なりの冗談でこの場を和ませようと思ったのだが……

「イマ……ナンテイッタ……？」

その発言が先程まで、子犬のような顔で怒られていた霊夢の顔に暗い影を落とす。

「あれ……？霊夢さ～ん……？」

ゆらりゆらりと亡者のような足取りで彼方へと近づく霊夢

「ちょっと……霊夢？じょ、冗談だって冗談！……いや、ホントに冗談だから！？ちょっとまって！？俺の腕はそっちには曲がらないいいいいいい！！？？」

霊夢の鬼をも逃げ出す形相を見ながら、少年の意識はブラックアウトした。

▽　▽　▽　▽

「あの……霊夢さん。おかわりを……」

「自分でやれば？」

「……はい」

彼方は霊夢のほうに差しだした茶碗を自分のほうに戻し、霊夢の横に置いてある炊飯器の前まで移動してよそよそと白米を盛る。しかし、彼方の見ている方向は決して炊飯器ではなく霊夢だった。

そしてそんな様子を萃香はニヤニヤと笑みを浮かべながらみていた。

「おい、萃香っていったよな？　どうにかしてくれよ、さっきから霊夢の発するオーラみたいなので胃がきりきりすんだよ……」

ご飯をよそい自分の席まで戻った彼方は隣で酒を煽っている萃香に小声で話しかける。

「え～……。だって、あたしは関係ないし～。ひっくっ。これは霊夢とあんたの問題でしょ～。　ほんと、人間ってのは面倒だよねぇ～。あいつが人間に拘る理由がわからないよ」

持っていた瓢箪をテーブルに置いて、そのまま彼方の膝にごろんと座る。

「いや、寝っ転がるんじゃなくてさ。どうにかしてほしいんだって……。てか、酒臭……。どんだけ飲めばそんなになるんだよ」

「いや～、そんなに褒められても困るな～」

褒めてねえよ。そう内心思いながらも彼方は口を挟むことなく、も

くもくと箸を動かした。

「あ、そうだ。霊夢。俺、食べ終わったら永琳さんの所に行ってくるよ。傷の具合の確認と、萃香に締め付けられたところがズキズキと痛むんでさ。だから、今日の弾幕訓練は少し遅れるけどいい……？」

ふと思い出して箸を止め、対面に座り、相変わらず一人もくもくと食べている霊夢に話しかける

「そう……勝手にしたら。……折れてればいいのにね……」

ボソッと呟く霊夢の言葉にほんの少しだけ背筋を寒くした彼方であったが、それをなんとか切干大根と一緒に飲みこんだ。

▽　▽　▽　▽

「え～っと……ここら辺で待っているように言われてたんだけど……」

博麗神社を出て、人里近くの竹林の前まで足を運ぶ。そこで彼方はとある人物を待っていた。

「それにしても……萃香って何しに来たんだろうな」

人の身体を痛めつけたあげくに、俺の朝ご飯を横からちょくちょく取っていた小さな鬼を頭に浮かべる。

鬼

外の世界では、漫画やゲーム、伝承にまでなっている存在

その力は他の妖怪より圧倒的に優れており、嘘を嫌い、人間の恐怖を体現したような存在

この幻想郷に居ることになるならば、いつの日かその存在とも相まみえると思っていただけに、先程の萃香の様子を見ているとなんだか拍子抜けしてくる。

しかしそうは言っても鬼は鬼。その圧倒的な存在感は彼方をビビらせるには十分だった。

萃香が彼方の膝に乗ったとき、一瞬だけ、ほんの一瞬だけであるが彼方の身体は、ほんの少し動いた。　身体が勝手に反応したのだ。

鬼という圧倒的な存在の前に。

「まぁ……俺がどうこうしたって敵わない相手なんだけどな。圧倒的強者と戦うなんて、普通ありえないしなぁ～」

自分自身で納得のいく答えが出たのか、一人うんうんと首を縦に振っていた彼方の後ろから呆れに似た声色が届いてきた

「『圧倒的強者と戦うなんて、普通ありえないしなぁ～』って……あんた既にそのありえないことをやってのけてるわよ……」

「あっ！鈴仙。もう薬売りは終わったのか？」

「ええ、たったいまね。……ほんと、なんでお師匠さまは私にこんなことさせるのかしら……」

後ろから聞こえてきた声に振り向けば、外の世界でお馴染みのブレザーを見に付け、背中に薬箱を背負っている鈴仙が立っていた。

彼方に治療を施してくれた永琳の住んでいる永遠亭という建物は、少し厄介な場所に建ってある。　もともと、身を隠すためにそんな厄介な場所に建てたとは聞いているが、理由までは教えてくれなかったし、彼方もそこまで聞こうとは思わなかった。

永遠亭の建っている場所というのは、普通の人間ならば一度そこに入ってしまうと、戻ることは不可能とまで噂されている、迷いの竹林という場所だ。切っても切っても、決してその成長を止めようとしない竹林は、人の方向感覚を狂わせ、その精神をも狂わせるとさえ言われている。　もし、その場所から出ることができるとするならば、迷いの竹林の案内人役である、幸運の兎に見つけてもらうより他はないらしい。

しかしそれは普通の人間ならばの話である。

空を飛べる者は、空から永遠亭に行くことができるし――――

「鈴仙のように波長で、帰ることもできるのか……」

前を歩く鈴仙を見失わないように注意しながら彼方は一人呟いた。

なんでも鈴仙の能力は、『狂気を操る程度の能力』らしい。　何度か、永琳に傷を見せに行くときに暇潰しに……と話されたけど、自分にはよく分からなかった。

「もう少しだから」

「ん。あいよ」

それから数分、鈴仙の言葉通りに永遠亭にはすぐ着いた。

鈴仙は彼方を永琳の元へ案内したあと、用事があるといって自分の部屋へと消えて行った。

その間、彼方はもちろん、永遠亭の誰とも目を合わせることはなかった

▽　　▽　　▽　　▽

「う～ん……傷の具合はいいみたいだけど……。そっちの骨は折れてるわね」

「……え？ほんとですか？」

「ええ」

永琳さんにレティさんとの弾幕勝負の傷の具合を確認してもらった後、先程萃香に喰らったところの骨をみせたところ、見事に折れて

ることが判明。流石は鬼。あれくらいで普通に人間の骨を折るとは……いや、俺が脆いのかもしれないけど。

「やったほうも結構力を入れたみたいね。貴方じゃなきゃ、大変なことになってたわよ」

くすくすと笑う永琳さん。　永琳さんは俺のことを頑丈みたいにいうけど、当の本人としてはなかなかどうして……そうは思えないのだが。

「あの……永琳さんが思っているほど、俺は頑丈じゃないんですけど……」

過大評価をされては困ると思った俺は、永琳さんに思いきって言ったのだが、俺の言葉を聞いた永琳さんは、鳩が豆鉄砲を食らったみたいな顔をしていた。　そしておもむろに額に手を当て

「ふぅ……。知らぬは本人のみ。ってことかしら。……けど、彼方くんは結構な鈍さだし、頭もそこまでよさそうじゃないし……」

ため息とともに、可哀想な目でみられた。

「あの……永琳さん？」

「あら、なにかしら？」

恐る恐る問いかけた俺に、笑みを向ける永琳さん。

「えっと……なんでもないです」

その笑みに負けて何も言い返せなくなる俺。なんとも情けないこと極まりない

はぁ……と小さくため息を漏らす俺の下で、もぞもぞと何かが動く感触を覚え下を見ると、白くてふわふわしてるうさぎが俺の脛をかじっていた。　その様子になんだか懐かしさを覚え、ついついうさぎをかかげ膝の上にまで持っていく。　するとうさぎは膝の上が気持ちいいのか、次第にうとうととしてきて、ついには俺の膝の上で夢の世界へと旅をはじめた。俺はそんな兎の頭をゆっくりと撫でながら、外の世界のことを考える。

外の世界では、動物園というものはあって、そこには小動物とふれあえるコーナーが用意されていた。あの子はそういう小さいものが大好きで、よく動物園に行ったときは小動物ふれあいコーナーを動こうとはしなかった記憶がある。　兎やハムスターを抱きながら俺に近寄ってきて、隣に座る。そして俺に抱えている動物を差し出して、それに俺がびっくりしてその様子をあの子が楽しんで……。

不思議なものだ。男の俺は正義のヒーローやロボットというものが好きで、彼女は小さいものが好きだったのに、よくずっと一緒にいたものだな。　まぁ……付き合う内に、お互いロボットや正義のヒーロー、小さいものが好きになっていたけど。　ここに来てもうすぐ一年になる。学校のことも心配だし、残してきた母さんのことも心配だ。今頃、母さんはどうしているんだろう？早いうちに親父を失い、一人息子まで行方不明になってしまって……泣いているんじゃないだろうか？母さんにはずっと笑顔でいてほしい。外の世界の友達にだって会いたいし、彼女とも会いたい。

「はい。これを使いなさい」

考えごとをしている俺の目の前に、永琳さんがハンカチを差し出してきた。　その行動に訳が分からなくて戸惑っていた俺だったが、永琳さんが自分の頬に手を宛がう動作をし、そのまま立ち去る。そんな永琳さんにつられて俺も自分の頬に手を当てることでようやく気付いた。

――――自分の頬から涙が流れていることに

考えごとえおしていたせいか、はたまた違う理由なのかは知らないが、俺は涙を流していたらしい。みると、俺の膝の上で寝ていたうさぎも俺を心配しているのか、俺を見上げていた。　そんなうさぎに俺は、「大丈夫だよ」と一声かけて永琳さんから貰ったハンカチで涙をふいた。

## １９．小鬼／郷愁（後書き）

おっと、彼方はロリコンじゃないですたい。作者は分からないけど。いや、どうなんだろ・・・・。確かに幼女はいいけど、それが対象に入るかといわれると、Ｎｏだからセーフなのかな？

ちょいと、シリアス気味だけど次の話でぶち壊れるしいいよね。個人的にシリアス大好きだし。鬱は場合によるけど。

それと更新をもう少し早くしたいね

# 20．類は友を呼ぶ

「さて……そろそろ行くか」

永琳さんに貰ったハンカチを手に持ち、膝の上にいたうさぎを下に下ろし、部屋を出る。あんまり長居するのもなんだし、既に涙も止まっている。

「それじゃな、うさぎさん」

目線を下げると、いまだに俺のことをみているうさぎがいたので、頭を一撫でして部屋を出る。それにしても、紫さんに続き永琳さんにまで涙を見られるとは……なんか恥ずかしい。

俺は診察部屋を出て、玄関の所まで歩いていく。その間、誰とも合わなかったが……いや、因幡達に会ったか。

「おにいさん、もう帰るのかい？」

「ん？ああ、てゐか。う～ん、そろそろ帰らないと霊夢に怒られるからな～……」

「あいかわらず尻に敷かれてるね～」

兎の耳を生やし、人参のブレスレットをかけている女の子が彼方に話しかける。その手には大きなスコップを持っているみたいだ。

「てゐだって、毎日毎日、鈴仙にちょっかいかけて飽きないな」

「それが私の毎日の楽しみだからね」

この因幡てゐという少女。なんと永琳達がここに住む前からここにいた者で、ここら一体の兎のリーダーだという。　なんでもあの永琳を相手に、迷いの竹林の主であることを主張し、取引を持ちかけるほどの精神の強さを持っている。

「おにいさんはここから一人で帰るのかい？もしそうなら、鈴仙を呼んでこようか？」

「いいよ、方向さえ教えてくれれば。第一、一番最初に此処に来た時、てゐに頼んだら、上半身がはだけてる状態の鈴仙が出てきて、色々と大変なことになったじゃないか」

はじめて、てゐに会ったときに『帰るから鈴仙はどこか教えてくれ

ないかな？』と彼方が聞いたらてゐは嬉しそうに、着替え中の鈴仙を連れだした。そのおかげで、彼方は鈴仙からビンタを喰らい、霊夢からは無言で顔面を殴られ、咲夜からは冷たい視線を浴びせられ、フランは何を勘違いしたのか、脱ぎだし、それを聞きつけた文が号外と称して幻想郷中にばらまいた過去があるのだ。

「あれー？そうだっけー？てゐ忘れちゃったなー」

てゐは持ち前の、なんでもうやむやにしてしまう笑顔をみせる。その様子に彼方は、はぁ……とため息をつく。

「それで、方向を教えてくれる？」

「ん。あっち。」

彼方はてゐの指差した方向に向かって、歩きだそうとした瞬間に足を止めて、てゐに先程のハンカチを渡す。

「それ永琳さんに返しといてくれる？」

「いいけど……彼方って中々守備範囲広いんだね。どう？お師匠さまの臭いはちゃんと感じたかい？」

「小さい女の子がそんなこと言うもんじゃないよ」

ニヤニヤした笑みを浮かべて、彼方をみるてゐに軽く拳を落とした彼方は、そう言い残してゐが指示した方向に歩いて行った。

「あんたより、果てしないほどの時間を生きてるんだけど……」

「ふふ、いまだに外の世界の常識のほうが勝っているってことじゃないかしら」

誰ともなく呟いたてゐの言葉に、返事を返す者がいた。

「あ、お師匠さま。これ、彼方が返してくれって」

永琳の姿をみて、今しがた彼方から受け取ったハンカチを永琳に返す。

永琳は、ありがとう。と言って受け取る。

「それにしても・・・・・……彼方って此処に来てもうすぐ一年になるんでしょ?普通それぐらいになると、幻想郷のほうに馴染むと

思うんだけど……」

「それほど、彼にとって外の世界に大切なものがあるってことじゃないかしら？」

「ふ～ん。彼方も大変なんだな～」

永琳の言葉を聞いて、腕を後ろに組んで彼方が歩き去った方向を見つめる

「ところでてゐ。あなたが差示した方向は人里とは逆方向だけど……」

「いや～、『あっち。は逆方向だから、こっちだよ』って言おうとしたら彼方が話しを最後まで聞かずに行くからさ。てゐは悪くないよ」

口では困った困ったと言いながら、とても楽しそうにしているてゐに永琳はため息をついた

▽　▽　▽　▽

てゐが指示した方向を歩くこと一時間

「どこだよ……」

彼方は迷子になっていた。

「あれー？てゐはこっちって言ってたのに……。まさか、てゐに騙されたかな？」

頭を掻きながらてゐの笑顔を思い出す。うん。確かに何かを企んでいた笑顔だったような気がする

「まぁ……そんなことより、いまはこの竹林を抜け出すことからはじめないと」

「ん？そこにいるのは……彼方じゃないか？どうしたんだ？」

俺が頑張って竹林を出ようと決意したその時、後ろから聞いたことのある声が聞こえてきた。

「あれ？妹紅さんじゃないですか？」

振り向いた先には、俺が何度かお世話になった人が立っていた。

彼女は藤原妹紅さん。人里の守護者である慧音さんの友人だ。　はじめて会ったのは、俺が人里で臨時の教師をしたとき。　慧音さんとの打ち合わせのさいに、声をかけてきてくれたのだ。最初はぶっきら棒な人なのかなと思っていたけど、意外と優しい人で寺子屋の子供たちがよく話しをしてくれる。中には『もこたん』なんて呼ぶ子もいる。俺も一度だけ呼んだことあるけどブッ飛ばされてからは、妹紅さんと呼んでいる。

「こんな所で何をしているんだ？」

「えっと……てゐに人里までの道を聞いてその通りに来たんですけど……なんか迷子になってしまって……」

力なく笑う彼方に妹紅は呆れ１００％の声を上げる

「はぁ……。因幡の兎の言うことを信じるなんて、やはり彼方はアレだな。」

「アレってなんですか。アレって」

「とにかく、ここに居てはいずれ餓死してしまうぞ。私が人里まで連れていってやるからついてこい」

▽　　▽　　▽　　▽

「傷はもういいのか？」

「ええ、おかげさまでレティさんとの傷は完治しました」

まぁ、また新たに負傷したわけですけど

「なるほどね。冬の妖怪との傷“は”完治したわけだ。それで？また何か起こして負傷したんだろ？先程から、そこの部分を押さえながら歩いているが」

妹紅さんに指摘されて、自分を見ていると本当に右手でそこを押さえていた。

「いや……霊夢の所に小鬼が来まして、それもかなりの酒飲みの。んで、酔っ払って俺に抱きついてきて、骨が折れました」

「抱きつかれて骨が折れるなんて流石彼方だな。全く、羨ましくは

ないけど」

いや、俺も別に骨を折られてまで抱きつかれても……

「いやまぁ、萃香だって悪気があったわけじゃないですし、これでも美鈴に鍛えてもらってるし……。まぁ、萃香の抱きつきを受けたのが俺でよかったかな。他の人達なら大変なことになってたらしいですし。」

へらへらと笑う彼方に、意外にも妹紅は冷めた目を向ける

「お前みたいな奴から死んでいくのが此処、幻想郷だよ。正直言って、慧音も私もあんたがいつ死ぬのか心配だよ」

妹紅は振り向き、彼方を正面から見つめる

「人ってのは脆い生き物なんだよ。それこそ、少し強い妖怪が腕を軽く振っただけで肉は抉れ、骨は砕かれる。確かに彼方の周りには、博麗の巫女や紅魔館のメイド長、普通の魔法使いといった面々がいる。けどね、それはあいつ等が、“こちら側”だからなんだよ。」

そこで一度、妹紅は口を閉じ、彼方の様子を伺うが、彼方は黙って妹紅の話の続きを待っていた。その様子をみて、妹紅は再度口を開

ける

「その“こちら側”に彼方は入らない。分かっているだろう？何故、弾幕勝負にもかかわらず自分がこんなに負傷するのか。確かに、他の奴らからしてみたらお遊びかもしれない。けど、彼方からしてみたら、毎回毎回が命がけじゃないのか？いつ何時死ぬかもわからない状態だ。普通の者なら耐えることができないだろう」

なら、何故この者はいまだ耐えることができているのか？

「いまはまだお前の中にある『信念』が支えてくれているのかもしれない。……だけどな、幻想郷はお前が思っているほど甘くない。いまからでも間に合う、私はお前が外の世界に帰ることを推奨するよ。」

妹紅は言いたいことを言い終えたのか、彼方に背を向け、先程と同じように歩きだした。

その背中を彼方は、ボーっとみることしかできなかった

▽　▽　▽　▽

「それじゃ、私はここで失礼するよ」

人里の入口で彼方に別れを告げる妹紅。なんでも、古い友人を殺しにいくらしい。

「あ……はい。ありがとうございました」

妹紅に礼を言って、頭を下げる彼方。

そんな彼方の様子を一度みてから、妹紅は何かを言いかけたが微妙に開けた口を閉じて、足早に歩き去った。

「はぁ……」

妹紅の姿が見えなくなったところで、知らず知らずの内にため息が漏れてくる

本当に……一度帰ったほうがいいのではないか？

そういう疑問が頭の中をぐるぐると駆けまわる

そんな時だった。

一瞬にして自分の全身に鳥肌を駆け廻らせることになったのは。

「あらぁ～。こんな所でかなたんを見つけるなんてぇ～。わたしってばついてるわ」

「ふむ……。しかし、いつも一緒にいる巫女さんがいないぞ。それに、吸血鬼のお譲さんも」

「げっ……。安城さんに、橘さん……。」

「いやんっ。橘なんてよしてよ。クリスって呼んでいいのよ～」

そう言いながら、近寄ってくる橘、別名クリスに彼方は容赦なく肘を入れる

「いいかげん、橘さんが作る変な店に俺を入れようとするの止めてくれませんか？」

彼方にしては、珍しくうっとうしそうな目で話しかける。

この橘という男、彼方と同じ外の世界からの外来人でここに来る前は、オカマクラブを経営していたということもあってか、彼方が人里に来るたびに勧誘を行い、霊夢やフラン、時には彼方本人によって迎撃されるのだが……不死身なのか翌日にはケロッとした顔をしている。なんとも不思議な男である。ちなみに、源氏名がクリスだったのか、人里でもクリスの愛称で呼ばせてるようだ。

「安城さんからも言ってくださいよ」

クリスの隣に居たもう一人の男、安城と呼ばれた男は

「ふむ……。小さい子女の子からのお願いなら、聞いたのだが。相手が彼方くんならな……」

ものすごく嫌そうな顔をしていた。

シルクハットに黒いステッキ。そしてこちらが、見てて熱くなりそうな黒のコートを纏っている安城という男。クリスと関わっているだけあって、こちらもかなりなアレである。　具体的にいうなら、小さい女の子が大好きなのだ。ただし、性的欲求は無いらしいので、人里の子供達も安心して近づき、便利屋さんとして使われている。ちなみにこちらも外来人。

そんな人里でもかなりの変わり者の男達と、なんでいままで彼方は

付き合っているのかというと、遠慮をしなくていいからである。

確かに霊夢やフランなんかといるのも楽しいが、そこは異性が絡んできてどうしても遠慮をしてしまいがちになる。その点から言うと、この二人はそんなこと気にすることなく接することができる、クラスメートみたいなものなのだ。

「ほんと……安城さんは相変わらずですね。フランちゃんにぼこぼこにされたのに、ピンピンしてますし……」

フランと彼方が人里で買い物をした時、丁度通りかかった安城とばったり会った彼方は、フランを紹介したのだが、安城のあまりに醸し出すオーラが気持ち悪かったのか、フランは安城を人里でボコボコにした過去があるのだが……

「ああ、あの子か。気持ちよかったと伝えておいてくれないか」

当の本人は、とても気持ち良かったらしい

「嫌ですよ。俺を見る皆の目がますます変わるじゃないですか」

「大丈夫よ。オカマになればそんなこと関係なくなるわ」

「あんたは黙ってろ」

ことあるごとにしなだれかかってくる橘の顔を、右手で自分から離す彼方

「うふふ。やっとかなたんらしくなったじゃない？」

「え……？」

先程までの声とは少し違うトーンで話す橘に、彼方は一瞬訳がわからず唖然とする

「顔よ、顔。さっきまでのあなた、いまにも押しつぶされて動けなくなりそう。って感じだったわよ？」

「うむ。君はいつでも明るくいかないとな。そうしないと、人里の皆も心配してしまうだろう。もちろん、私達もね」

橘の言葉に同意を示すように、安城が彼方の肩を叩く。

「二人とも……。ただの変人じゃなかったんだな」

「失礼しちゃうわね、まったく」

「まったくだ。それに私は変人ではないというのに」

いや、二人とも十分変人だよ。そう口が裂けてもいえない彼方だった。

「けど、ありがとう二人とも。ほんの少しだけ楽になったよ」

彼方がそう笑うと、二人は優しい笑みを浮かべて彼方の頭を撫でる。

「君は一人でなんでも解決しようとするからな。　君の周りには、君より長い年月を生きている者が沢山いるだろう。一度、そう言った人たちに相談でもしてみたらどうかね？」

そう安城に言われて、彼方の頭には一人の人物がすぐに浮かび上がった。

たしかに……あの人なら今のこの状況を打開する何かを考えてくれるかもしれないな。

「うん。そうしてみるよ。ありがとうございます、安城さん」

そうだ。あの人なら……多分、この幻想郷でもかなりの年長者のあの人なら、何か道が見えてくるかもしれない

そう思った彼方は、その人物と初めて会った場所まで走って行った

# ２０．類は友を呼ぶ（後書き）

さて、風神録をやってこよう

## 21. 汝、想ひ　此のぶみ送る

「もう一度、言ってくれるかしら?」

「えっと……紫さん。怒ってます?」

石の上に正座をさせられながら俺は、恐る恐る口に出す。

紫さんは何を拗ねているのかよくわからないけど、またしても俺は地雷を踏んだらしい。

はてさて……どこで俺は地雷を踏んだんだろうか?

▽　▽　▽　▽

人里を出て、俺はまっすぐこの場所。紫さんと初めて会い、チルノの子分?友達?になったあの川である。

確証があるわけではなかった。ただ、紫さんならあの場所で俺の来ることを予知しているかのように待っていると思ったのだ。

結果だけを述べてしまえば確かに紫さんはいた。

俺が汗を掻きながら目的の場所にまで行くと、紫さんは日傘を差して川に足をつけながら、まるで俺が来ることを分かっていたかのように、「ようやく来たわね。待ってたわよ」その言葉を口にした。
あいかわらず恐ろしい人である。

「なんで俺が此処に来るって分かったんですか……？」

そう口にする俺に紫さんはこちらを向いた後、笑いかけながらいった

「さぁ？なんでだと思う？」

俺を試すかのように、くすくすと笑う紫さんに俺は何も言えなくなる。　答えなんて全て、紫さんだから。で片が済みそうだし。

「残念ながら、俺には分かりません。それより、相談があるんです」

「それは私に相談しなければならないことなのかしら？霊夢や紅魔館のメイド長じゃなくて」

「はい。紫さんに相談したいことなんです」

俺がそう言うと、紫さんは少し嬉しそうに、まるで幼い弟に頼りにされた姉が嬉しくてつい顔がニヤけてしまうような顔をした。

「そう。私に相談したいことなのね。そうなの」

「はい。長生きをしている紫さんにしかできない相談なんです」

「彼方。そこに正座しなさい」

……え？

▽　　▽　　▽　　▽

思い出した。どこが悪かったのかはわからないけど思い出した。

「あの……どこがダメだったんでしょうか？」

「はぁ……」

紫さんはため息をつくだけで、答えてはくれないらしい。　いや、自分で考えろってことなのかな？

俺が脳の中をフル回転させて答えを導きだそうとしていると、紫さんが唐突に話しかけてきた。

「もういいわ。あなた相手にこんなことしてたら、日が暮れちゃうし。　それで？何か相談したいことがあったんでしょう？」

「あ、はい。あの……紫さんは幻想郷の管理者なんですよね？」

「ええ、そうよ」

「だったら……幻想郷の管理者に対して聞きたいことがあります」

居住まいを正し、紫の目を正面から見る彼方。そんな彼方を見て紫も居住まいを正す

大きく口を開け、質問を言おうと声を出そうとしたところで、自分の口から音が出ていないことに気がついた。

自分では質問したはずだったのに、その質問は音に変換されることなく紫の耳には届かなかった。

あれ……？　おかしいな……？

少しおどけたつもりが、またしても言葉は声にはならず口だけが動いた

声が出ずに焦る彼方。

そんな彼方に紫は自分の両手で彼方の両手を包み込むようにして持ち、安心させるように言った

「大丈夫よ。私は逃げないから。ゆっくり、落ち着いて」

語りかけるように喋る紫に、彼方は素直に頷いた。

「お水でも飲んで喉を潤しましょう。ここまで休憩なしで走って来てるんですから喉だって乾いてると思うわよ」

そしていつの間にか紫の手には、どこから取り出したのであろうコップが一つ。中には水が入っている。

彼方は紫が差し出してきたコップを会釈だけして貰い、ゆっくりと喉全体に染み込ませるように飲んだ。

「どう？少しはマシになったかしら？」

「……はい。大丈夫です」

彼方の声が戻ったのをみて、紫は良かったと嬉しそうに笑った。

「すいません、紫さん。いつも迷惑かけてしまって……」

肩を落とし、しょんぼりする彼方に紫は言った

「いいのよ、彼方。迷惑をかけて、かけられて。それが人間なんだから」

「なんか、紫さんが言うと成程って思ってしまいますね」

「ふふふ。当たり前じゃない。私は幻想郷ができる前からこの世に存在しているのよ。それに、ありとあらゆる人間だって見てきたの。

そんじゃそこらの人間なんかじゃ、比べ物にならないほどの人生の先輩よ」

その麗しい外見のせいで忘れてしまいがちになるが、紫は妖怪なのである。

そして今の話を信じるとするならば、幻想郷が出来た頃がいまより１０００年くらい前だと霊夢に教えて貰った。そしてその昔から存在している。

「そうでしたね。ついつい忘れてしまいますが、紫さんって妖怪でしたものね」

「ええ、そうよ」

「それでは……その人生の先輩であり、幻想郷の管理者に問います」

私は――――此処に残ってもいいんでしょうか？

「とある人に言われました。幻想郷は俺みたいな甘い奴が居る所ではない。って。ましてや、俺は弾幕勝負だってするし……」

段々と言葉が弱くなり、ぼそぼそと喋る彼方。

自分だって、何も好きで毎回怪我をしているわけではない。霊夢や咲夜みたいにほとんど無傷で終わりたい。　だけでも、自分の強さではそれをすることができない。　それに自分には残してきた家族だってある。永琳達と絡むようになってから、家族に対する想いというものが段々と強くなってきてる自分を客観的にも感じ取れる。

会いたい

母に会いたい。　友に会いたい。　そして――彼女に会いたい

そう思ってしまったが最後、その想いは日に日に強くなっていった。

けど、目を覚まして霊夢がいて、フランちゃんが遊びに来て、人里に行けば皆がいて。

好奇心で此処に滞在したはずが、いつの間にか長年そこにいたかのような感じに思えて来てしまった。

だからこそ動けないでいた。

紫はそんな彼方を一瞥して、口を開いた。

「幻想郷の管理者、八雲　紫として不知火彼方の問いに答えましょう。――――現段階でいえば、あなたは此処に残ってもよろしい。」

その言葉に彼方は、ほっと胸をなでおろす。よかった。自分はまだ此処にいてもいいんだ。

そう思う反面、そうなってくると自分はいつ家に帰ることができるんだろう?と疑問が沸いてくる

「あの……紫さん。もし、もしですよ?俺が外の世界に帰りたいって言ったときは、俺は帰ってもいいんですよね?」

「ええ。そうよ。ただ、此処での出来事を全て記憶から消すことになるだろうけどね」

「……え?」

何を言っているのか分からなかった。　紫さんの言葉に唖然とする俺を差し置いて、紫さんは続ける

「あなたが此処で出会った人物、行った場所、見た風景、出来事、能力、その全てを消して私が責任を持って貴方を外の世界に送るわ。どうせ、貴方が帰るなんて言い出したら、最低でも二人ほどは貴方を監禁してでも引き止めようとする人物がいると思うしね。」

ちょっと待ってくれよ……

「そうじゃなくても、貴方はお人好しな部分があるから、帰るときになったら、誰かの泣き顔をみて決心が鈍ったりするかもしれないし」

俺のことを無視して話しを進める紫さんに、俺はたまらず声を上げる

「ちょっとまってくださいッ！？なんで……！なんで記憶を消したりなんか……！？」

思わず立ち上がる俺に、紫さんは管理者の顔として俺に告げた。

「なんで……？　はぁ……。彼方はまだ分かっていないみたいね。此処は幻想郷。外の世界で生きられない者たちが住みつく場所。此処と外の世界は繋がっていないようで、繋がっているの。ゆえに外の世界の者に知られる訳にはいかないのよ。」

その言葉に俺は次の言葉を放つことができなかった。

確かに言われてみればそうだ。

此処は外の世界に存在が知られる訳にはいかない場所なんだった。

もし、俺が外の世界に帰ってきて、うっかり口を滑らしてしまえば大変なことになる。９９％の人が信じなくても、そこに１％でも信じてしまう人が出てくると、そう遠くない未来に幻想郷という世界そのものが消えてしまうかもしれない。

「結局……変わらないか……」

いや、俺が此処にいてもいい。ということが分かっただけでも大きな進歩なのかもしれないな。そういう意味では紫さんに感謝しないと

「そうねぇ……。別に手紙くらいなら私がスキマで送ってあげないこともないわよ？」

俺の落胆をみて、可哀想になったのかは分からないが紫さんがそう提案してくる

「えッ！ほんとですか！！」

思わず紫さんの肩を抱いて、揺すぶる

がくがくと前後に揺られ、流石に苦しくなったのか紫さんは手で俺の手を掴み、優しくどける

「え、ええ……。ただし条件があるわ。貴方が本当に手紙を出したい人にしか書かないこと。外の世界の常識の範囲内で書くこと。私達妖怪について触れないこと。そしてその手紙は貴方からの一方通行で済ますこと。　わかったかしら？」

「はい！！わかりました！！」

そうだ！手紙という方法があったんだ。　帰るか、残るか。という選択にばかり気を取られてこんな簡単な選択すらも見逃していたなんて……

「それじゃ、紫さん！！書いたら持ってきますので！！」

そうと決まれば早く博麗神社に戻って手紙を書かないと！！

俺は紫さんに会いに行くときよりも早いスピードで博麗神社までの道のりを急いだ。

▽　　▽　　▽　　▽

彼方が去っていった後、紫の後ろに空間ができそこから九本の尾を生やしている女性が出てきた

「いいんですか？紫様。あんなことしてしまって。そんなことしたら多方面からバッシングが来ますよ？」

「あら、それはそれで面白そうじゃない。私の目の前に連れてきて、私の目を見ながら言ってもらおうかしらね」

紫は扇子で口元を隠しながら、心配する女性に面白そうに口を歪めながらいった。

「はぁ……。困ったものですね」

「ん？なにが？」

「紫様の行動にですよ。あんなことして、知りませんよ？彼が外の世界にもっと恋しくなっても」

紫のスキマを借りてから、先程の出来事を余すことなく見ていた女性は彼方が走り去ったほうを見ながらいった

「これでいいのよ。じゃないと彼方、そう遠くない未来に大変なことになりそうですもの」

「まぁ……それは確かにそうですけど」

「それに、彼方の正体が分からない内にどうこう決めるのもね」

紫の言葉に女性は、主の方を振り向くも、その顔は日傘を盾にしてあり伺うことはできなかった。そんな様子をみて女性はため息をつく。この人はいつもそうだ。本当に決めないといけないことは自分一人で何でも片づけようとする癖がある。

「それにしても……彼の正体ですか。それは人間や妖怪と言った種族的なことではなく？」

「違うわ。もっと別なものよ。……まぁ、いずれ分かるわよ。それまで彼方に関しては様子を見てることしかできないわ」

「それで……、もし都合が悪いものだった場合はどうするんで

すか……？」

女性の言葉に、紫は答えずに黙る。

質問をした女性も、何も言わずにただただ返答がくることをまつ。

一分だろうか、二分だろうか？

やがて紫の口が動いた

「そんなの決まっているじゃない――――」

▽　　▽　　▽　　▽

もうスピードで戻って来た俺は、玄関で脱いだ靴も揃えずに急いで自分に割り当てられた部屋に行く

「あっ！こら、彼方！！練習サボってどこで遊んでいたの！！」

「悪い霊夢！！説教は後で聞く！！」

途中、傍から見ても怒っていることが分かる霊夢に会ったが、その横をすり抜けて部屋に入る。後ろで霊夢が何か罵声を浴びせている気がするが気にしない。　そんなことより、いまは大事なことがあるからだ。

「たしか、ここに書きものと、紙が……。っと、あった。」

引き出しを片っぱしから調べて、依然に慧音先生から頂いた紙と、書きものを見つける

「よ～し！書くぞ！」

えっと……俺が本当に送りたい相手だったな。

まずは母さんだろうな。こんな俺でも息子なんだし、心配してくれないとそれはそれで少しへこむ。

それと、彼女。　なんだかんだ言って、此処に来てからというもの、ふとした瞬間に彼女の笑顔が、声が、脳内で再生される。

正直な話。此処にきてから彼女のことを想わなかった日はないと思う

優しい彼女のことだ。俺のことを心配して捜索願いとか出してるかもしれない。　彼女には俺が無事なことを伝えないと。

そう心に決め、いざ俺が筆を握り、書こうとした瞬間に

「なにをしてるんだい？」

「うわぁッ！？」

目の前にいきなり萃香が現われた。いきなりの登場に思わず仰け反る俺

「なんだ、萃香か。驚かすなよ」

「いや～、ごめんごめん。なんか面白そうなことしてるのかと思ってさ。　それで、何をしてるんだい？」

何故かそのまま俺の膝に座りながら尋ねてくる萃香に俺は簡単に説明をする。

「なるほど。まぁ、どっちつかずの彼方には妥当な選択だろうね」

「まぁね。俺がもう少しカッコ良く、どっちかを選ぶことができたらいいんだけどね。萃香も書いてみる？文あたりに届けて貰えばいいし」

「う～ん。まぁ、暇つぶしにはなるかも」

そう答えを聞いてから、俺は萃香の分の紙と筆を渡す。紙と筆を受け取った萃香はそのまま自分の身体をスライドして俺の横に腰を落とした。

「ん？なにかい。私に見られたら、まずい内容の話でも書くのかい？」

「いや……。そうじゃないけどさ。」

なんというか……。フランちゃんもそうだけど、ちっちゃい子って膝とか、年上の人の隣とか好きだよな。　あ……、年齢的にいったら俺のほうが年下か。

まぁ……萃香が満足してるならそれでいいや。　さっさと、俺の自分のことに集中しないと……。

えっと……彼女には此処についてからの経緯とかを説明しないとね

……

母さんには……あの言葉にしようかな。

そうして俺は、途中で飽きた萃香によって遊びに誘われたり、遊びにきたフランちゃんに遊びにさそわれたり、俺をカエルと戦わせようと連れ出しに来たチルノに誘われたりと、安城さんが見たら、ステッキで叩かれそうな感じのあれをしながらも、なんとか徹夜をして書いて、朝一番に紫さんに会いに行き、手紙を渡した。

手紙に込めた俺の想いが届くといいな

▽　　▽　　▽　　▽

「あら？これはなんでしょうか？」

私が学校から帰ってきたら、私の机の上に見慣れない紙が一枚置いてありました。

「諏訪子様の悪戯かしら？神奈子様はこんなことしないし……」

まぁ、なにはともあれ、読んでみないとわかりません。私はその場に鞄を置いて、紙を持ち、差出人の名前をみます。

――不知火彼方より

「……え？……嘘」

そこに書いてあった名前は、いま私が一番会いたい人の名前でした。
私の忠告を無視して山へと入り、その翌日には行方不明になり、いまだその姿を現すことがなかった、私の大切な人の名前でした。

「お、おちつくみょよ。私。そんなことで風祝が務まりますか」

既に噛んでる気がしないではないが、そんなこと気にしてなんかいられない。

だって、手紙を送って来るってことは、よっぽど危険な状態になっていたり、助けを求めてたりすることが多いって、昨日のテレビでも言ってたし。

私は急いで文面に目を通す。

――早苗ちゃんへ

『元気ですか？　私はいま、腋をだした巫女の元で居候として住まわせてもらっています。』

これは確かに彼方ちゃんの頭が危険な状態になっている……。

腋を出した巫女なんて、そうそう居るはずもないのに……。

続けて、文面を読む

『多分、心配していると思うので、これまでのことを軽く説明します。俺が早苗ちゃんや、母さんの忠告を無視して出て行った夜、色々ありまして、巫女の元へ居候することになりました。』

なに一つ説明になっていないことについて説明を求めたい

『それから、色々ありまして、小さい金髪の妹のような友達もできましたし、小さい子の子分兼、友達にもなりました』

小さい子に馬鹿にされてるようにしか見えないんだけど……

『それと、学校のような場所で教師まがいなこともやっています。それに、人形職人とも友達になりました。そして新聞屋とも仲良くなりました』

ふふ……。あの彼方ちゃんが教師なんてできるのかしら？　けど、人形職人ってのは羨ましいかも。彼方ちゃんには、長い年月をかけて私の趣味をマスターさせたし。

『まぁ、微妙に命を狙われたりしますが、どうにかなると思います』

……え？

『まぁ、色々と不思議な体験をしている真っ最中ですが、必ず早苗ちゃんの元に戻ってきます。だから、もし戻ってきたときはノートなんかをみせてくれると嬉しいです。　それと、それまで母さんをよろしくお願いします　――――不知火彼方より』

「ふう……。ほとんど、意味がわからなかったけど、大丈夫のようで安心したかも」

最後まで読み終えた私は、紙を折り、机の引き出しの中にいれる

巫女や妹のくだりなんかが、気になったけど、それは後で問い正せばいいことだしね。

隣の部屋から、私を呼ぶ少し幼い声が聞こえてくる。それに続いて大人びた女性の声も。

まったく……。諏訪子様も神奈子様も彼方ちゃんがいなくなってからというもの、私を寂しくしないためにあんなに振る舞ったりして……。

「はいはい、いま行きますよー！」

早く帰ってきてね？彼方ちゃん。　あんまり遅いと、迎えに行っちゃうぞ？

……おばさまのほうにもこの手紙、届いているのかな？

▽　▽　▽　▽

「まったく……彼方くんったら。お母さんに勝手に行方不明になんかなっちゃって」

部屋で一人、女性が一枚の紙をもって愚痴る

その外見の若さは、下手したら２０代でも通ってしまうかもしれないほどだ。

「ねぇ、パパ。ほんと、彼方くんってば、ダメダメなんだよ?」

女性は正座のまま、一人の男性が写っている仏壇にまで移動して持っていた紙をみせた

「今頃になって、出かける挨拶なんてするんだもん。わたしの教育が甘かったかな～?」

女性がみせたその紙には、早苗のときとは違い、短くこう書いてあった

『いってきます』

## 21．　汝、想ひ　此のぶみ送る（後書き）

ふぅ・・・。やっと早苗が出せたお。でも、本格的な参戦は風からだお

今回のタイトルは辞書引きながらしますた。

現代語で、『君、想い　この手紙を送る』ということです。

間違ってるよ～。てのがあったら言ってくださいノシ

## 22．暗がり少女とチルノファミリー

一難去ってまた一難とはよくいったもので、自分がまだ幻想郷に残ることを決めた俺にショットガンのような早さで新たな悩みの種が浮上してきた。

「ほらほら、彼方。このお酒なんかおいしいわよ？」

「この“鳥殺し”とか結構キツイんですけどね？飲むと一気にハマってしまうんですよ。ささ、彼方さんも一杯いかがですか？」

「これね、咲夜が作ったワインなの！もちろん、おにいちゃん飲んでくれるよね？」

「……べつに私が注いだお酒を飲んでなんて頼まないけど。……あんたが飲みたいっていうんならしょうがないけど、飲ませてあげるわ」

ニコニコ顔で俺の手になみなみ注がれたお酒のコップを乗せようとする紫さんに、“鳥殺し”なるものをビンごと近づける文。紅魔館のメイド長、十六夜咲夜が能力で一瞬にして作りだしたワインを誇らしそうに掲げ、元気いっぱいの笑顔で俺の膝に乗って来るフランちゃん。そして、そっぽを向きつつもコップだけは俺のほうに向け

ている家主の博麗霊夢。

「えっと～……」

場所は博麗神社。いまは宴会の真っ最中だ。俺が来てからは、霊夢の遠慮していたようだが、冬の異変を解決したときに俺も宴会に強制的に参加させられたので、なし崩し的にそのまま宴会なんかを頻繁にするようになった、が

「ぶっちゃけ、ありえない」

何がありえないかというと、いま目の前に展開されているお酒の展示会もそうだが、宴会の頻度である。具体的にいうと、3日に1回の割合で開かれるのだ。そしてそのたびに俺が幻想郷で会った人達が一同にかいして、雑談なり弾幕ごっこなりをしている。どこかの上流貴族達でもあるまいし、この人達は飽きないのだろうか？　俺はもうかなりうんざりしているんだが……。

「まったく……。こんなに一辺にやられても彼方が困るでしょうに。ほら、貴方達はそこらで勝手に飲んでおきなさい。　はい、彼方。これ外の世界の飲み物よ」

そういって俺に酎ハイを渡してくる紫さん。ほんと、スキマって便利だよな。お金を払ってるかはわからないけど。

「あやや。でも彼方さんも一緒に飲むなら私みたいな子がいいですよね。賢者と飲んでも、プレッシャーでお酒もおいしくなくなりますし。ほら、酔った勢いで短いスカートの中身が見えてしまうかもしれませんよ？」

明らかに紫さんを挑発しながら、俺に“鳥殺し”を注いだコップを持たせようとする文。確かに文のスカートって短いし、空も飛ぶのに気にならないのかな？

「いや、別に紫さんと飲むのは構わないし、プレッシャーよりむしろ少し安心しないでもないんだけどさ。それと、文も女の子なんだからもう少し、気をつけたほうが」

あんまり派手に動くとスカートの中が見えちゃうし……。

「ダメー！！おにいちゃんとはフランが飲むの！ね？おにいちゃん？」

尻尾をぱたぱた、羽をぱたぱたさせて、フランちゃん用の少し小さいコップに注いだワインを差し出してくるフランちゃん。この頃は紅魔館にある図書館が気に入っているらしく、よく本を持って来ては俺に読ませる。早苗ちゃんへの手紙にも書いたけど、本当に年の離れた妹ができたみたいな感覚だ。

「う、う゛うんッ！！彼方、私の横で飲みなさい。家主の命令よ」

少しドスの利いた声で俺を手招きする霊夢。こちらは、この頃機嫌があまりよろしくない。多分、俺という人数が増えてから食費なり生活費がかかるようになってストレスが溜まってるのかな？だとしたら、臨時講師のバイトを増やさないといけないかも。

「あら、命令なんて博麗の巫女ともあろう人が横暴ね。そんなことしてると、彼方嫌になって私の所に逃げちゃうわよ？」

「お黙り年増。あんただってもう年なんだから、いい加減宴会に出るの止めたらどうなの？おばあちゃんにはキツイでしょう」

ビキビキ……

二人の額から血管がいまにも飛び出そうなほど浮かびあがっている。

「あやや。これは大変なことになりましたよ、彼方さん。あ、これどうぞ」

「あ、ありがとう。……といっても、俺があの場に飛び出していっ

ても無駄死にするだけじゃないかな」

いつのまにか俺の横に座っていた文から差し出された液体を飲んだ俺は、目の前に広がっている光景をみながらそう答えた。

「いや……別に俺じゃなくても大丈夫なんだよな。誰か止めてくれる人を……」

そう思い辺りを見渡す

アリス……『自分で撒いた種でしょ。なんとかしなさいよ』

そんなぁ……

魔理沙……『面白そうだ。ちょっと私も混ぜてもらおうかな』

これはダメだ。被害が広がるだけのような気がする

慧音さん……『ちょっと人里に戻ってくる。まぁ、頑張ってくれ』

えッ！？ちょっと慧音さん！冗談ですよね！？え、ほんとに帰っちゃうの！？おーい！？

くそ！！頼みの綱の慧音さんが居なくなった……！

だが慌てることはない。宴会に集まっている人はみんな知り合いなんだ。きっと助けてくれるはず……！！

まずは鈴仙……！

『……』

ガン無視っぽいけど気にしない！！

永琳さん……『治療ならやってあげるわよ？』

つぎい！！

レミリアちゃん……『ワインもいいけど、レモンティーが飲みたくなってきたわ』

つぎぃ！！

咲夜……『チッ』

まさかの舌打ちッ！？

目は口ほどにものをいうというが、これは燦々たる結果である。というか、俺の交友関係とはなんだったのかと疑問が出てきた。

「あやや。どうしたんですか？彼方さん。顔が少し青いですが……」

流石に俺の顔が青くなってきたのを心配したのか、文が俺の顔を覗き込む。

ここには永琳さんがいる。負傷してもあの人なら治してくれるだろう。しかし、しかしだ。流石に死んだ人を生き返らすことはできないだろう。

その考えた俺は一つの結論を導き出した。

「よし、撤退だ」

「えッ!?ちょっと彼方さん!?」

言うが早いが俺はそう口にした瞬間、トップスピードで博麗神社を後にした。後ろで文が何か言っていたが気にしない。

そしてこれは逃げたんじゃない。

戦略的撤退なんだ。

▽　　▽　　▽　　▽

「ふう。なんとか撤退に成功したな。さて……博麗神社には帰れないから……。人里にでも遊びに行くかな」

博麗神社では今頃、霊夢と紫さんが弾幕ごっこに興じているのだろう。俺なんかじゃ入り込む隙がないほどの濃厚な弾幕ごっこを。ほんとうは俺も見て勉強しないといけないのだけど……あの場所にあのままいたら俺は死んでたような気がするし。

ここから人里までは歩いて３０分ほどだ。ゆっくりのんびり歩いていこう。

そう思って歩を進めようとした途端に、自分の服の裾を誰かが握っている感触がしたので、ゆっくりと目を下に落とした。

「ねぇねぇ。あなたは食べていい人間？」

そこには金髪姿で頭に赤いリボンをつけている、可愛らしい女の子がなんとも哲学的な質問をしてきました。

「え～と……できれば食べないでくれるかな？」

食べるの意味がよく分からないが、こんなちっちゃい子が言うんだ。性的に食べるほうじゃないだろう。　それにしても、この子は面白い冗談を言うな

「えー、でもあなた外来人でしょ？外来人は食べてもいいって言われてるよ？　それにお腹も空いたし……」

「君、もしかして妖怪？あ～、確かに人里の人を食べると霊夢や慧音さんが黙っていないものね」

妖怪にとって人間というのは切っても切れない存在だからね。

……って、ちょっと待てよ？

この子が妖怪？　まぁ、驚きはしない。この子と同じくらいの風貌のフランちゃんも吸血鬼なんだから。ただ……

「うん。でもよかった。外来人が通りかかって。いただきま～す」

この子が本気で俺を食べにきてるのはかなりまずいことだ。

「ちょ、ちょっとストップ！？」

口を大きく開けて、俺の腕に噛みつこうとする女の子を制止する。

そのまま噛みつこうとした女の子は、俺の突然の大声に「ひゃぁ！？」と可愛らしい声を上げた

「なに～……。ルーミアお腹空いてるのに～……」

「ここはお互い自己紹介を――はやいよッ！？俺が聞くまで待っててよ！？」

「あう……ごめんなさい……」

シュンとした様子で謝るルーミアちゃん。心なしか目元に涙が溜まっているようにも見えなくない。　いかんいかん。こんなちっちゃな女の子を泣かしたとあっては、俺の幻想郷での地位が大変なことになる。いまでも一部では自殺志願者や、不屈の馬鹿といったまったくもって俺には当てはまらないような変な二つ名もあるほどだし。

「いや!?ご、ごめんね!?おにいちゃんも少し動揺してるんだ。ほら、怒ってないから!全く持って怒ってないから!?」

「……ほんと？」

「うん!!ほんとにほんとだよ!!」

そう言いながら、ルーミアの頭を撫でる彼方。彼方の手が頭に乗せられた瞬間、ルーミアはびくッっと肩を震わせたけど、一瞬にしてその表情は笑顔に変わっていった

「えへへ。おにいさんの手ってなんか優しい感じがするね」

「そ、そうかな……。う～ん、自分ではそうは思わないけどな」

「優しいよ。だって心がぽかぽかするもん。　えへへ。それじゃ、いただきま～す」

「まって、おかしい。いま時空が歪んだ。明らかに歪んだ」

いまだに食べることを諦めていないルーミアに俺は、昨日人里で買って来ていたべっこう飴をポケットから取り出して渡す

「お腹が空いてるんなら飴なんていかがかな？　空腹がまぎれるよ。それからでもいいんじゃないかな？俺を食べるのは」

ポケットより差し出した飴に興味心身なルーミアちゃん。　それも当たり前だろうか。妖怪が人里に来るなんて基本的に襲うという認識なのだから。そう考えるとフランちゃんって凄い子な気がしてきた。　まぁ、何が言いたいかというと、ルーミアちゃんのような妖怪には珍しいから

「わはー。もらっていいの！？」

「もちろん」

このように食いついてきてくれるというわけだ。

「どう？おいしい？ルーミアちゃん」

「うん！！」

さて……この間にどうやって彼女から逃げるかを考えよう。　俺だってもう17歳になるんだし、女の子一人、軽くまいてやるさ

▽　　▽　　▽　　▽

「それでそれで！？おにいさんは勝てたの！？」

「う～ん……。勝った、というか勝たせてもらった感じかな。俺はそのまま気絶したから実質的には俺の負けだけどね」

なんで俺は腰を落ち着けて、ルーミアちゃんにレティさんとの弾幕勝負の話をしているんだろうか……？　おかしい。本当なら今頃、颯爽とルーミアちゃんをまいて安城さんや橘さんと騒いでいるのに……。

「おにいさんのお話は面白いね！」

「ほんと？それは良かったよ。それじゃ、おにいさんはそろそろ行くね」

ルーミアちゃんの頭を一撫でして、手を振りながらその場を去ろうとする

「あ、まっておにいさん！」

去る俺を止めるように、俺に抱きつくルーミアちゃん

「大丈夫だよ、ルーミアちゃん。幻想郷にいるかぎり――――」

「まだおにいさんを食べてないよ？」

俺の毎日はデッド・オア・アライブになりそうだ

「え、え～と……まだ諦めてなかったの？」

そう聞く俺に、こくんと頷くルーミアちゃん。やばい、どうしよう……？

このままでは食べられてしまう。そう焦っている俺の耳に、遠くから声が聞こえてきた

「しらぬーい！おーい！」

みるとそこにはチルノが羽をパタパタさせて俺に手を振りながらこっちに向かってきた。その横には大ちゃんも一緒だ。

「おお！チルノちゃんじゃないか！どうしたのこんな所で？」

俺の目の前にまでやってきたチルノちゃんは俺の質問に、えっへんとでも言いたげに胸を張り

「子分が襲われそうになっていたからね！サイキョーであり、親分のアタイが助けにきてあげたのよ！」

「違うよチルノちゃん。『博麗神社で宴会をやってるから』って言って来たけど道に迷って泣き出しそうな時に彼方さんを見つけて、チルノちゃんが飛び出してきたんだよ」

「ち、違うもん！！アタイ泣いたりしないもん！！不知火も笑うな

！アタイは親分なんだぞ！」

さっきまでの態度は一変して、大ちゃんの口を押さえようとしながらも俺を叩くという動きを見せるチルノちゃん

このままではまずいと思ったのか、チルノちゃんはおもむろに俺の横にいたルーミアちゃんに視線をうつした

「そんなことより！不知火、この子は誰よ！！」

「あぅ……」

大きな声を上げながら指を差したチルノ。そのチルノの大声でルーミアは肩を震わせ、彼方の服を先程よりも強く握る

「おいおい、親分。ルーミアちゃんが怖がっているじゃないか」

「そうだよチルノちゃん。もう少し優しく接してあげないと。ごめんね？ルーミアちゃん。私は大妖精の大ちゃんって言うの。よろしくね？」

「うん……。わたしルーミア」

大ちゃんはチルノを軽く叱った後に、彼方の後ろに隠れるようにしているルーミアの所まで降りてきて、自分の名前を言った後に手を差し出す。そんな大ちゃんをみてルーミアもその手を握った。

「う～！！アタイだけ仲間はずれにするの禁止―！！」

そんな二人の様子が気に食わなかったのか、チルノは強引に二人の間へと入りその勢いのままルーミアに手を出した

「アタイはチルノ。サイキョーの妖精よ！！ルーミアは不知火子分なんでしょ？だからアタイのことは親分って呼ぶようにっ！！」

「いやいや、まったくもって違うからね？チルノちゃん。ルーミアは俺の子分じゃないし……」

「親分？」

「ルーミアちゃんもチルノちゃんの言うことなんて聞かなくても大丈夫だからさ……」

まずい。サイキョーにアレなチルノちゃんはルーミアちゃんのこと

を完全に俺の子分だと誤解している。ルーミアちゃんもルーミアちゃんでそのことについて何も疑問を抱かないし……というか、子分とか親分といったものが分からない可能性もあるのか。

「そう！不知火はアタイの子分！だから不知火の子分はアタイの子分と同じよ！わかったわね、ルーミア！」

「う～ん。よくわからない」

それはそうだろうな。俺も分からないんだから。

「あの～、彼方さん？」

「ん？どうしたの、大ちゃん」

チルノちゃんとルーミアちゃんの噛み合ってるようで噛み合ってない会話をなんともなしに聞いていたら、横から大ちゃんが申し訳なさそうな顔をして話しかけてきた

「すいません。チルノちゃんが迷惑かけちゃって。多分、チルノちゃん嬉しくて少しはしゃいじゃってるんだと思います」

「はしゃぐ……？」

俺にはいつものチルノちゃんにしか見えないんだけど……

「はい、とってもはしゃいでますよ。こうみえて、チルノちゃんって結構寂しがりで、彼方さんが遊びに来てくれないときなんて、その日一日、なんだか暗い感じで終わってしまうんですよ」

あのチルノが？いっつも俺に無邪気な笑顔を提供してくれるあのチルノが？

「妖精には、“死”というものが存在しません。まぁ、それに似たようなものはありますが、ゲームでいうリセットみたいなものなんですよ。それに妖精って弱いじゃないですか、だからチルノちゃんってどうしても少し肩肘を張っちゃうんですよね。けど……彼方さんと出会ってからのチルノちゃんは、少し変わりました。なんていうか・・・・・……“家族”を得た感じで」

家族……か。　確かに妖精にとっちゃ家族なんて無縁な代物であり、手に入れることが難しいものなのかもしれないな。　そんな家族に俺が組み込まれるなんて……嬉しいかぎりだ。

「そうだな……。けど、どっちかというと、“家族”よりは“ファミリー”のほうがしっくりくる感じがするな。チルノ団ファミリー

みたいなさ」

「あは。それはいいですね。隊長がチルノちゃんで彼方さんが切り込みで、ルーミアちゃんがマスコットですか？」

「そして、大ちゃんが救護係ってか？」

俺は大ちゃんと顔を見合わせて笑った。なるほど、こんな関係も悪くないな

▽　▽　▽　▽

「あー！もう！らちがあかないわ！こうなったらアタイが親分だってことをその身をもって分からせてあげるんだから！」

親分と子分の違いがわからず、かつどうして自分がチルノの子分になるのかがいまいちわからないルーミアに痺れを切らしたチルノはそう叫び、ルーミアの手を強引に握った

「不知火！いまから探険よ！新しい子分にアタイが親分だってことを分からせてあげるんだから！」

そう息まくチルノだったが、彼方は

「すまん親分。いまから人里に行かなきゃならないんで俺はパスで」

手をブンブンと横に振って、あっさり親分の誘いを断った

「なにいってるのよ!?親分の命令は絶対なの!不知火はアタイと一緒に遊ぶの!」

「こらこら、ダメだよ。チルノちゃん。彼方さんも忙しいんだから、わがまま言ったらダメだよ」

「う～～!!」

優しく諭す大ちゃんであったが、チルノはそんなことには気にせず、涙目で彼方のほうを見上げる

これに困ったのは彼方だ。人里に用事があるなんて言ったが、そんなのは真っ赤な嘘である。

「（けど……俺が行ってもな～）」

小さい女の子が三人いる中で男が一人。それも17歳だ。　なんとなくここは女の子三人でのほうが道中も盛り上がりそうな気がする

「（まぁ……そんなわけで）三人ともけがをしないで、なかよくな～」

「あ、こら不知火！！」

チルノが後ろで何か言っていたが気にせず逃げた。

俺ってなんか逃げてばっかりだな……

▽　　▽　　▽　　▽

三人と別れた俺は、無事に人里へと到着し、いまは一軒の店の前で店主と相談をしていた

「そこをなんとかしてくださいよ、旦那～」

「う～ん……。彼方くんにそこまで言われるとこちらも下げるわけ

にはいかないなー」

「お！マジですか！？流石旦那、話しが分かりますね！」

俺がいまいる場所は飴だけを営んでいる飴屋だ。ここの店主は数年前に外から幻想郷に迷いこんだらしく、外の世界は飴を作っていたということもあってか、飴屋を開き、いまでは子供はもちろん、大人にも大人気の飴屋である。

「しかしこれを全部旦那が一人で作ってるんですから、凄いですよね」

所狭しと並べられてある飴、飴、飴

「此処の人達は、飴に必要な材料なんかを惜しげもなくくれるからね。こちらとしても、その期待に答えようとしたらこんなになってしまったんだよ」

苦笑する旦那。　そこに子供達が近寄って来る

「おじちゃーん！あめくださーい」

「あいよ、どれがいいんだい？」

その子を皮きりに後から後から子供達がやってくる。　というか、寺子屋の生徒たちじゃないか

「あ！彼方だ！」

「よう、みんな元気そうだな」

俺に気付いて近寄って来た一人の生徒の頭を撫でる。うんうん、やっぱ子供ってのはこれくらい元気があったほうがいいよな

「あ、ほんとだー」

「彼方が一人で来てるー」

「もしかしてフられたのかな～？」

「だとしたらどうするんだろう？ヒモのくせに」

「全員集合」

ヒモじゃねえよ。ちゃんと寺子屋で働いてるよ。というか、お前たちの先生だろうが。あと、フられたも何もそもそも彼女すらいないよ、悲しくなってくるけどさ

とりあえず、生徒を一列に並ばせ一人ずつデコピンでもしようかなと思った所で、後ろから声がかかった

「宴会から無事に逃げだせたのかと思ったら、こんな所でなにをやっているんだお前は……」

少し呆れまじりの声に振り向くと、そこには教科書を抱えた慧音さんが立っていた

「あ、慧音さん。もしかして明日の仕込みかなんかですか？」

「まぁ、そういうところだ」

それで宴会を抜け出したのか。てっきり俺は慧音さんにまで嫌われてるのかと思っていたよ。　しかし流石慧音さんだ。ちゃんと明日の準備をするなんて偉いな。俺の授業は、教科書一回読んで大体の内容を掴んで終わりだからな。　まぁ……それ以上時間をかけると乱入者が来るってのもあるけど。　ほら……夜は吸血鬼にとって出

歩くには最適だろ？

「それより、此処に来るまでの間に妖怪に襲われたりはしなかったか？」

妖怪ねぇ……。ルーミアちゃんにはぶっちゃけ襲われたのか襲われてないのか、微妙な感じだったから……

「いえ、襲われていませんけど」

何も間違っちゃいない答えだな。

俺の言葉を聞くと、慧音さんは胸を撫で下ろしような感じで安堵のため息をついた

「そうか、それはよかった」

「あの……どうしたんですか？」

怪訝に思い、俺が質問すると

「いやなに、最近此処に来た妖怪が、無闇やたらに暴れまわっていると聞いてな。、まぁ、たいがいの外からきた奴は暴れてそのまま此処にいる連中たちの強さをみて大人しくなるか、誰かの琴線に触れて倒されるか、霊夢に退治されるかなんだよ。　近々、私のほうから霊夢に依頼を頼もうと思っているんだけどね。　そうだ、彼方からも霊夢に言っといてくれないか？」

そういえば、前に紫さんが外の世界にも妖怪は少なからず存在しているとは話していたな

「ええ、わかりました。霊夢に伝えておきますね。霊夢ならちゃちゃっと退治すると思いますし」

「ああ、よろしく頼むな。此処に来たての妖怪は自分より弱い存在。つまり人間や妖精といった者達を狙うことが多いからな。人里の守護者としては放っておけないのだよ」

……え？

いま……なんて？

「あの……いまの話はほんですか？」

「ん、あぁ。とくに妖精なんて狙われやすいかもしれんな。ごく稀に幻想郷でも指折りの実力者達に喧嘩を吹っ掛ける者もいるが、例外なく倒される、もしくは殺されるよ。まぁ、ほんとうに極稀にだけどな。って彼方、どうしたんだ？」

慧音さんが親切に何かを説明してくれていたが、俺の頭の中はあることで埋め尽くされていた。

『妖精とかは狙われやすいな』

「ッ！チルノ達が危ない！！」

急いで人里の出口まで駆けだす俺。

こういうときの俺の勘はよく当たるんだよな……！

▽　▽　▽　▽

「ここはアタイがなんとかするから、ルーミアと大ちゃんは逃げて」

そういうチルノは姿はところどころに裂傷ができており、肩で息をするほどだった

「だ、ダメだよ!?チルノちゃん!私も残るよ!!」

「こないで大ちゃん!!……親分の命令よ」

いまにも前に出そうになった大ちゃんをチルノはその一言で止める

「おいおい……。お前らは全員俺の獲物なんだから逃げたところで変わらないさ」

チルノの目の前にたっていて、大きな蜥蜴の妖怪がチルノたちをみて嘲笑う

「ふん……!あんたこそ大丈夫なのかしら。サイキョーの妖精であるアタイに喧嘩を売ったこと後悔させてあげるんだから……!」

大口を叩いてみたものの、いまのチルノは負傷しており、相手は蜥蜴の妖怪である。傍からみても勝てる可能性は皆無である。

「早く逃げて!二人とも!」

しかしチルノは逃げない。何故なら自分は親分だから。子分を見捨てて逃げることなんてできるはずがない

「親分が子分を守るんだったら……子分だって親分を守るよ」

チルノの傍にゆっくりと誰かが歩み寄ってくる。

「……ルーミア？」

「よくわからないけど。ルーミアきょうは楽しかったよ。おにいさんを食べれなかったのは少し残念だけど、チルノと大ちゃんはルーミアの知らない所に連れていったりしてくれて、とっても楽しかった。だからルーミア、もっとチルノ達と遊びたい」

彼方がいなくなってから、三人は色々な場所を巡った。紅魔館という場所の門番ともお話をしたし、三人で大きな蛙に勝負を挑みにもいった

過ごした時間は短いけれでも、それでも三人は互いのことを友達だと思えるほどまでにはなっていた。

そんなときだ。この蜥蜴の妖怪に襲われたのは。

チルノは二人をかばい、負傷して氷を思うように撃てなくなり、ルーミアはなんとか反撃をしようとするが、結果は残念な結果に終わり、大妖精にいたっては攻撃の手段をもっていない。

必然的に彼女らに残っている選択肢といえば、逃げるか、喰われるかのどちらかだ。

それも逃げるにしても全員が逃げ切れるかというと、その答えはＮｏである。

誰かが囮になり、他の二人を逃がすという方法でしか、この蜥蜴の妖怪からは逃げられないのである。

「はぁ……。もういいか？こっちとしてはさっさと殺したいんだよ……」

彼女達の姿に、蜥蜴の妖怪はうんざりとした目をし、その大きな口を開け、チルノを飲み込もうとする。

もうダメだ――――

そう思いチルノが目を瞑ろうした瞬間、その者は勢いよく茂みから

姿を現し、蜥蜴の口に向けて何かを引いた

「俺のファミリーに、その薄汚ねえ牙を向けてんじゃねえよ」

▽　▽　▽　▽

必死になって三人を探し当てたときには、丁度チルノが蜥蜴の妖怪に喰われる一歩手前の状態だった。　その光景をみた瞬間に俺は、自分でも驚くくらいの速さでその場につき、大口を開けていた蜥蜴に装飾銃の弾丸という名の弾幕をぶち込んでやった

「な……なんなんだよ……お前！？」

「あ゛？チルノ団ファミリーの１の子分、不知火彼方だよ、バカヤロー」

いまだ動けないでいる蜥蜴にそう吐いて、俺は後ろにいるであろう三人の方を向く

「ごめんな、三人とも。俺が着いていたら、こんな怖い思いしなくてもよかったのに……。俺のせいで……」

後悔の念が心を絞める

あの時、変な考えなんてなくして自分も着いていったのならば、チルノも怪我をすることもなかったんだろう。

「ごめんな……本当にごめんな」

そう謝る俺に、チルノは顔を真っ赤にして言った

「こら不知火！！いまからアタイが本気を出すとこだったのに！なんてことしてくれたのよ！」

「……へ？」

「なに言ってるのチルノ。チルノ泣きそうだったじゃん」

「ち、違うわよ!?サイキョーのアタイが泣くなんてありえないわ！」

「けどほら、チルノちゃん。涙が」

俺を無視して騒ぐ三人。

あれ……？結構、本気で心を痛めたんだけど……

「彼方さん。助けてくれてありがとうございました」

チルノちゃんとルーミアちゃんの二人の口論のようで口論になっていない口論を横眼に大ちゃんが話しかけてきた。

「いや……助けるもなにも、元々は俺のせいだし……」

そういう俺に大ちゃんは首を振った

「そんことないですよ。この幻想郷で、私達妖精の身を心配してそんなに汗だくになりながら、助けにきてくれる人なんてそういるもんじゃありません。というか、他にいませんよ」

――だから、私達を助けてくれてありがとうございます。

そう頭を下げる大ちゃんをみて、俺の中の何かが溶けていった

「当たり前だろ？ファミリーは助け合っていかないとな？」

そういう俺に大ちゃんは、調子がいいですね？っと言った後、くすくすと笑った。

▽　　▽　　▽　　▽

「まてよ……！」

チルノの傷を確認して、きょうは博麗神社に泊まろうということになった俺達。いざ、帰ろうという時になった途端、先程まで何も喋らなかった蜥蜴がいきなり話しかけてきた

「俺がたかが人間に負けるわけないだろ……？少し待ってろよ、いますぐ起き上がってその頭、喰い散らしてやるからさ……！！」

そう言いながら起き上ろうとする蜥蜴。

そんな蜥蜴を冷ややかに彼方は見つめていた

――――妖怪ってこんな奴ばっかなのか？

いや、そうじゃない。　現に俺は知っているだろう。

――――人間は妖怪にとっては食糧でしかない？

いや、そうじゃない。　そんなわけない。　だって、俺は沢山の妖怪と友達になることができたんだ。

――――でもさ……チルノやルーミアや大ちゃんを泣かせたコイツは殺してもいいんじゃない？

ああ……それは……そうかもしれないな

「だったら、その人間に殺されるお前は、なんなんだろうな？」

口を三日月のごとく割らした彼方は、ゆっくりと銃口を蜥蜴の額につける

チルノ達はというと、先程とはうってかわった彼方の様子に驚くことしかできず、口を開くことができなかった

このままでは自分が死ぬ

蜥蜴はそれを肌で感じたのか、顔が少し青ざめ始めた

そんな様子をみた彼方はますます表情を歪ませ、その銃口を――――

「ダメよ、彼方。　私のお酒を飲まないで宴会から抜け出すのは」

突然出てきたスキマによって飲みこまれていった。

「あ……れ……？俺は一体……」

「少し疲れが出たのでしょうね。なんせ、その子達を探すために森を駆けずり回ったのですから」

いきなり出てきた紫によって、先程の表情が消えた彼方に、紫はそう説明した。

「ほら、ここは私にまかせて。幻想郷の管理者のほうがこの場は適任でしょうし。その子達も今日は疲れてると思うわよ」

紫が示したほうには、チルノ達が彼方を心配そうにみていた。

そんな三人に彼方は、大丈夫。と答え紫が開いてくれたスキマを通り抜けた。

その後を、三人も追っていく

やがてスキマは四人を飲み込むと、その口を閉じるように消えていった。

「藍、その子には身の程を教えといてあげないさい。　同じ妖怪のよしみとしてね。」

「わかりました」

かくして蜥蜴妖怪の末路は決まった。

☆

生かさず殺さずで蜥蜴妖怪に幻想郷での生活の仕方を教えた藍は、先ほどの彼方の行動、そして言動に疑問をかんじ紫に問いかけようとする

「紫様……。あの……」

「さ、帰るわよ。まだ宴会は終わっていないんだから、飲み直さないと」

しかしながら紫は藍が質問をしようとしたタイミングで、自分も切り出し藍が続いて喋る言葉など聞かずにそうそうにスキマを開いて、その場を後にした。

「負の想い……か。」

そう一言だけつぶやきながら。

## 22．暗がり少女とチルノファミリー（後書き）

おかしい・・・・・

後半になるとシリアスや鬱が増えるからせめて前半はほんわかした話にしたいのに・・・・・

## 23．パチュリー先生と秘密の特訓

「むりいいいいいいいいい！！？　死ぬ死ぬ！！」

「こら彼方！？逃げてるばかりじゃ勝てるものも勝てないわよ！！」

「そうはいっても……！？　隙がないんだもん！！」

今日も今日とて博麗神社に、悲惨な青年の声が響く

「彼方さん！一つの弾幕をみるのではなくて常に全体を見るように意識してください！！」

遠くから紅魔館の門番、紅美鈴が彼方に大きな声でアドバイスを出すものの……

「うおおおおお！？やばいってやばいって！？」

彼方はそれどころではなく、弾幕の特訓の先生である霊夢の弾幕から全速力で逃げていた

彼方が能力を覚えてから毎日行われている弾幕の特訓と、身体能力の向上。この頃は、弾幕の特訓も次の段階へと移ったわけだが……

……

「いやあああああああああああああ!!?」

彼方は見ての通り逃げ回るばかりである

「ねぇ、おねえちゃん」

「なにかしら、フラン?」

そんな彼方の奇行を神社の縁側でお茶を啜りながらみている者が三人

紅魔館の主こと、レミリア・スカーレット

彼方の友達であると同時にレミリアの実の妹である、フランドール・スカーレット

紅魔館のメイド長であり、最近はフランの世話も主から任されている、十六夜咲夜である

「フランもおにいちゃんと遊びたいよお……」

弾幕の特訓中は、霊夢が直々にフランに彼方に近寄るなと言ってあるのだ。

あまりにもストレートな物言いに、精神年齢が外見通りのフランは目に涙をためたが、その後の彼方の『終わった後なら時間がある時は必ず遊ぶから』との言葉に喜んであっさりとｏｋを出したのだが……そこはやはりというか、子供心が働くのであろう。

「ダメよ。彼方と約束したでしょ？終わるまで待ちなさい」

そんなフランをレミリアは自分がした約束を思い出させる形でわからせる。

「それにしても……最初の頃と比べて中々になってきたんじゃないかしら？」

隣で待機している従者に目を向けながらそう口にするレミリア。従者である咲夜はレミリアが何が言いたいのかを心得ているように口を開いた

「そうですね、最初に比べれば身体能力は普通の妖怪であるならば、十分に逃げれるほどかと。弾幕勝負であるならば普通の妖怪程度なら倒せるかと思います」

咲夜の報告を聞き、レミリアは一つ頷く

「能力を使用した場合だと？」

「それはわかりません。まぁ……冬の妖怪が認める程度にはあるのではないでしょうか？」

「それもそうね。彼方は能力の関係上一定の強さを得られない。まぁ……それは裏を返せば強さに上限がないというある意味凄い能力だけど……」

『うぎゃあああああ！！？』

「あの様子じゃ無理そうね」

レミリアが見る先には、たったいま霊夢の弾幕をその身に浴びて、地に倒れている彼方がいた。

▽　　▽　　▽　　▽

「精が出るわね、彼方」

「あ、レミリアちゃん」

今日の弾幕特訓を終えて、タオルを取りに縁側に行くと俺の様子をずっとみていたレミリアちゃんが声をかけてきた

「どう？少しは強くなったかしら？」

「う～ん……まぁ、最初に比べると少しは強くなったと思うよ」

俺の言葉を聞いてレミリアちゃんは、俺の身体をしげしげと見る

「ふむ……」

レミリアちゃんは何も言わずにただただ俺の身体を見るだけ。隣に居る咲夜の顔もだんだんと険しくなってくる

「あの～……レミリアちゃん？」

いくらなんでもあまりこの状態を続けておくと、隣にいる咲夜や後ろで見ている霊夢からなにか飛んできそうなので、たまらず声を出す

「まぁ……大丈夫でしょ」

レミリアちゃんは自分でなにか納得したのか、居間のほうへと足を向けた

「あ、まって！レミリアちゃん！」

そんなレミリアちゃんを俺は呼びとめる

レミリアちゃんは俺の呼びかけに、進めていた足を止め、こちらを振り向く

「どうしたのかしら？」

首をかしげるレミリアちゃんに俺はずっと気になっていたことを質問した

「俺は……人間だよな？　妖怪のレミリアちゃんからの意見が欲しい」

昨日の一件で、俺の心の中に芽生えたものを消すかのように

「ええ。あなたは人間よ」

レミリアちゃんは、俺にそう一言だけ告げると霊夢に宴会が始まるまで寝るといって、客間のほうへと足を向け直して進んでいった

「なにかあったの、彼方？」

気が着くと、霊夢が俺の傍まで寄ってきて心配そうに俺の様子をうかがっている。

「ん。なんでもないよ。　そんなことより霊夢」

俺は、そんな心配そうな霊夢の表情を変えたくて話題をふる。結構こちらも前から気にはなっていたことだ。

「霊夢って弾幕特訓のときはあまり高い位置に飛ばないよね？　もしかして俺に合わせてくれてるの？」

いまだに空を自由に翔ることができない俺。　ほんとうになんでだろうか？一回、霊夢とそのことについて話し合ったこともあったけど、フランちゃんが乱入してきたから、結局のところ分からずじまいに終わってしまったんだよな……。今度、紫さんにでも聞いてみようかな。あの人なら答えが分かっているかもしれないし。そうじゃなくてもヒントくらいはみつかりそうだし。

「……」

俺が紫さんにいつ会うかなどの計画を立てて、霊夢からの反応がないことに気付き、霊夢のほうをみると……

「れ、……霊夢？」

霊夢は何故か顔を真っ赤にしていた

「……が……えるから……」

「へ？　ごめん、声が小さくて聞き取れない」

予想外に小さい霊夢の声に俺は疑問に思いながらも、耳を近づける

「～～～！　パンツが見えるから飛ばないの！！」

「うわぁ！？」

大きく息を吸い込んだ霊夢は、近づけてきた彼方の耳目がけて思いっきり声を出した。そのいきなりの大声に驚く彼方。

「え！？え！？」

自分の予想とは違った答えにうろたえる彼方

そんな彼方に霊夢は顔を真っ赤になりながら答える

「高く飛んだら彼方にパンツがみえちゃうじゃない！だから、飛ばないようにしてたのに……」

「いや、だって霊夢は前にドロワーズって言ってたじゃん！？　そういうのはあまり得意じゃないって……」

「な、なによ！私がパンツ履いてたらダメだっていうの！？」

ぐいッ！っと彼方の肩を自分の方に引き寄せて霊夢は喋る

「それとも……彼方はそういうの……嫌い？」

「う〝ッ！？」

先程の火山が噴火したような勢いはどこにいったのやら。いきなり上目づかいでみつめる霊夢に彼方は息を飲んでしまった

「いや……別に、嫌いじゃないけど……」

「じゃぁ……好き？」

首をかしげながら、ぱっちりと彼方のほうをみる霊夢

いつもがツンケンしているだけに、慣れない霊夢をみて彼方の心臓は少し早鐘を打つ

「いや……まぁ……それは嬉しいけど……」

「けど……？」

今度は霊夢が彼方の口に顔を近づける。その差はわずか５ｃｍ

彼方の心臓は、先程よりも早く、その音が霊夢にばれないか心配なくらいだ。

「ねぇ……彼方？お願い……聞かせて？」

「いや……あの……その……」

思考回路がヒートして何を考えているのか自分でもわからなくなる。

「えっと――――」

彼方が口を開いた瞬間

「おにいちゃん、パンツみたいの？」

フランが彼方の袖を握りながらそう聞いてきた

「へ？」

彼方が振り向くと、フランが自分のスカートをたくし上げている最中だった

「だったらフランのパンツみせてあげるね？」

いきなりのこと＋霊夢でショート寸前の彼方にはフランの奇行を止める時間はなく、精神年齢が外見同様のフランはなんの躊躇いもなくその鉄壁のスカートをみずから上げ――――

「いけません、妹様。この下劣でロリコンで女たらしで自殺志願者もどきの上に妹様が膝に乗っかるたびにその顔を至高の笑みで満たし、あわよくば妹様をその毒牙にかけようとし、その上人間、妖怪、妖精と様々な種族の者達を自分の手籠しようとしている巫女萌え男なんかに、妹様のその崇高でお美しい下着をみせるなんて、紅魔館のメイド長であり、お嬢様から妹様のお世話を頼まれております、十六夜咲夜が許しませんよ」

――――ようとしたところで、時間を止めて傍にきていた咲夜に止められた。

「えー。ダメなの？」

「ダメです。このロリコンだけではなく人里の者でも同じです。もし妹様の下着をみたものがいるのであれば、ナイフの餌食になりますので」

人差し指を立ててフランに優しく語る咲夜。内容はかなり恐ろしいものであるが。

フランは咲夜の言葉に、本当に分かったのかと思うような声で、ハーイと手を上げた

咲夜はそんなフランをみてため息を一つ

「あの……咲夜さん……？　もしかして、俺のこと嫌い？」

そんな咲夜の後ろから彼方が声をかける

「べつに。第三者からみて、貴方のことを正確に分析した結果だけど……なにか問題でも？」

「ありまくりだよッ！？」

叫ぶ彼方に、咲夜は本当に不思議そうに首をかしげた

「第一俺はロリコンじゃないし、女たらしじゃないし、フランちゃんをそんな目でていないよ！！」

「自殺志願者と巫女萌えは否定しないのね？」

「……まあ、傍からみたら自殺志願者だろうし……。けど、巫女萌えは違う。たまたま幼馴染が巫女のようなことをしているから――――」

「気がつくと、巫女萌えになっていたと」

「だから違うってばッ！！」

力いっぱい叫ぶその彼方の姿が咲夜には図星にみえた

「ふ～ん……。まぁ私は貴方が巫女萌えでもメイド萌えでもなんでもいいんだけどね。　私はそろそろ宴会の準備をしに行くわ。

霊夢一人じゃ大変そうだし」

霊夢。その言葉で自分の傍に先程までいたはずの人物がいつの間にか消えていたことに気がついた

咲夜の言葉を信じるなら宴会の準備にいったのであろうが……先程の霊夢はどうしたんだろう？　その……少しだけ可愛く思えてしまった。　いや、霊夢は十分可愛いのだが、そういう外見の可愛さじゃなくて内面の可愛さというか……自分でも言ってるこがよくわからないけど。

「それなら俺も宴会の準備を手伝うよ」

辺りを見回すと、美鈴もフランちゃんも姿がない。多分、霊夢の手伝いにいったんだろう。

「それには及ばないわ」

「どうして？」

「今日でこの宴会も最後だと思うし。あなたもうすうすは気付いてるんじゃないの？この宴会に」

3日おきくらいに行われる宴会、この頃は毎日あるようにもなってきた。

はじめのほうは、この宴会が行われる異常な頻度も幻想郷的には普通なものなのかと思っていたが、どうやらそうではないらしい

「まぁ……確かにこの頻度は異常だと思うけど。それがなんで手伝わなくていいことになるんだ？」

宴会の準備といっても、かなりの数が集まるのだ。それを準備するのは大変である。霊夢だって人数は欲しいはずだ

咲夜は彼方に告げる

「いまの貴方じゃ無理ってこと。　紅魔館にパチュリー様がいるはずだから、今日はそこで一日、ゆっくりしときなさい。帰るころには全て終わってるから。　お嬢様もこのことは知っているみたいだし」

「なんか納得がいかないんだけど……」

渋る彼方の頬になにかが通り抜ける

「返事は？」

「いってきます」

別に宴会が嫌いというわけではないが、未成年の俺には少しキツイものがあるのは事実だし……なにより紅魔館の図書館にも興味があったので、よしとしよう。

そう思った俺は、汗をふき服を着替えて博麗神社を後にした

▽　▽　▽　▽

「こうしてお話しするのは初めてですよね？わたくし紅魔館の地下にある、あの図書館で司書をしています小悪魔です。ちなみにパチュリー様の使い魔です。」

「ご丁寧にどうもありがとうございます。博麗神社の雑用係の不知火彼方です」

咲夜に言われて紅魔館を訪れると、門の前に悪魔です。と主張しているかのような女性がいたので話しかけたところ、なんでもパチュ

リーの使い魔らしく、わざわざ俺を図書館から迎えにきたらしい。

「ここが図書館になります。どうぞ」

紅魔館を地下を歩くこと数分、大きな扉を前に小悪魔は手を前に出し、俺を誘っている。

俺はその誘いにのり扉を開ける

「うわぁ……！」

本・本・本・本・本・本・本・本・本・本

そこには辺り一面に本棚が置いてあり、その本棚自体も自分の身長の数倍の大きさがあった。そんな中を妖精メイド達が、えっちらおっちら本を運んでいる

「ふふ……。驚きました？」

隣が隣で微笑んでいるがいまの彼方にはそんな小悪魔の言葉すら耳には入ってこなかった

「すげえ……。外の世界でもこんな図書館、数えるほどしかないぞ……」

自分が予想していたものよりも遥かに巨大で、ざっとみただけでその種類の豊富さがうかがえる

まるで夢の国にでも来たかのような様子に満足する小悪魔。するとそこに一人の女の子が奥から出てきた

「あ、パチュリー」

彼方に名前を呼ばれたパチュリーは、彼方のほうを一目みて

「騒がないこと」

それだけいって、また奥へと引っ込んでいった

「なんというか……。口数が少ないね」

最初に会ったときも、あんな感じで必要最低限の言葉しか話さなかった気がする

「パチュリー様はいま外の世界の本にはまっているらしく、徹夜で解読を試みていますからね。普段はもう少しだけ口数も多いんですよ？」

困った顔を浮かべて喋る小悪魔

「へー。外の世界の本か～。やっぱパチュリーってそういうの気になるんだな。」

「ええ。本を読むのが大好きですから。けど……あまり根を詰め過ぎても……。はぁ……どっかに外の世界に詳しい人がいてくれたら」

ため息をついて、軽く頭をふる小悪魔。やはり使い魔としては主の体調が心配なのだろう。

「あの……俺外の世界から来たんですけど……」

そんな小悪魔をみて彼方は恐る恐る手を上げた

「……」

目をぱちくりさせて彼方をみる小悪魔

そんな小悪魔に苦笑で返す彼方

そしてその二人の前を疑問を頭に浮かべて通る妖精メイド

なんとも微妙な空気だけが辺りを支配した

▽　　▽　　▽　　▽

「無理に決まってるじゃない。」

「ですがパチュリー様。彼方さんは外の世界の人ですし……」

「まったく……。こういうのは外の世界の人間に任せとくもんだぜ？　それで、パチュリーは何を必死になっているんだ？」

小悪魔とパチュリーと話している横から俺がパチュリーの手に持っていた本を奪い取る

「……『相性がわかる占い』ねぇ。こんなものまで入って来たのか？」

「あ！ちょっと返しなさいよ！」

本を取られたパチュリーが俺の手めがけてジャンプしようとするが、普段から動くこともないパチュリーが俺から奪えるわけもなく、その場でジャンプして着地しただけに終わった

「パチュリーってこういうの信じるタイプなの？そもそも」

俺の問いにパチュリーは、まさか……。という顔をして

「まぁ、信じる信じないといえば信じないわね。ただ、魔法を扱うのもとしてはこの本は興味があるわ。たったこれだけの行動・言動・持ち物だけで他人の好意、そして関係性がわかるんだもの。　彼方、これが外の世界の魔法かしら？」

かなり真剣な表情で俺に話すパチュリー

「いや……。魔法……とは少し違うし。それにその本に書いてあることが必ずしも当たるというわけではないから……。パチ

ュリーが求めているような成果はないと思うよ？」

外の世界の女子高生や、恋に生きる人達は信じてそうだけど……。いがいに男の人達は信じてないんじゃないかな？　あぁ……早苗ちゃんは信じてたかな？『この世には恋愛成就の神様がいるんです！』って豪語していたくらいだし。早苗ちゃんの家系からすると、そういった考えになるのは当たり前だけど

「そ……そんな……！？　騙したわね！？」

「え　ぇ！？それ俺が作ったものじゃないんだけど！？」

ショックを受けたかと思うと、いきなり俺の襟首をつかんで前後に動かすパチュリー

「だ、ダメですよ！？パチュリー様！彼方さんは真実を言ったまでだけですし！」

そんなパチュリーをあわあわと止める小悪魔

小悪魔に止められて、肩で息をしながらもやっと自分の持ち前の冷静を取り戻せたのか、ふぅ……。と息を吐いて座る

「……まぁ、真実を教えてもらったことだし。そのことについては礼をいうわ」

それだけいって、パチュリーは俺が元から存在しなかったかのように自分の周りに積まれている本を手に取り読み始めた。そんなパチュリーの後ろで小悪魔が困った顔をしながら、頭を下げている。
これがパチュリーの“素”なのだから気にするこはないのに。

「んじゃ、俺も勝手にさせてもらうよ。　あ、パチュリー？魔法に関する本は読んでもいいのかな？」

「奥にある本じゃなければいいわよ。　奥の本は開いただけで貴方なら発狂するだろうし」

「……うん。絶対いかないよ」

この年で人生をおりたくないし

▽　　▽　　▽　　▽

「う～ん……。反射、反射っと……」

パチュリーから自由にしてもいいという許可も貰ってから一時間。
俺はある魔法を探していた

「ないな～……。パチュリーに聞いたほうがいいかな？」

「どうかなさったんですか？」

困りに困り、最終的にはパチュリーに聞くという結論に達したところで奥から出てきた小悪魔に話しかけられた。しかも隣には次の本を取りにきたのであろう、パチュリーも一緒だ。

「あ、小悪魔。それにパチュリーも丁度いいところに来た。ちょっと相談したいことが――――」

「いやよ」

「はやいよッ！？なんで幻想郷の人ってこうも早いの！？」

「まあまあ……パチュリー様も話しくらいは聞いてあげても……」

小悪魔、可愛い顔して結構言うね。胸にくるよ、いまの言葉

小悪魔の言葉を聞いたパチュリーは、いかにも嫌そうな顔をするが、しょうがない……。といった様子で持っていた椅子に座った。……もしかして椅子を持ち歩いているのか？

「えっとさ……弾幕勝負についてなんだけど……。俺ってまだ弱いから成功法の弾幕じゃ皆に勝てないじゃん？」

「ええ、そうね。これからも勝てないと思うけど」

「……それで新しいスペルカードを作ろうと思ってるんだけど……。そのスペルカードに反射をつけたいな……。っと思って」

「……反射？」

俺の言葉にパチュリーが怪訝そうな顔をする

「うん。ほら、光の屈折みたいな感じで、弾幕も反射できないかな……と」

「弾幕を……？あなたが相手の弾幕をってこと？」

「いや、自分の弾幕をだよ」

例えば、俺が弾幕を撃ったとしよう。俺の弾幕は一直線に飛んでいくタイプで、ほんとうに弾丸のようなものだ。　けど、俺の弾幕は高確率で避けられるだろう。　そこで、この反射を利用する。イメージとしては弾幕の道に鏡を置く感じだ。そうすると、弾幕は直線上に進むのではなく、また違った軌跡を描くと思う。そうやって相手を翻弄、あるいは攻撃して、弱ったところに光波動を撃ち込む。

「って、ことなんだけど……」

椅子に座って俺の考えを黙って聞いていたパチュリーが口を開く

「ふ～ん……。なかなか面白い発想ではあるけど。それだけではスペルカードにする意味がないわ。　そうね……。そのあなたがいう鏡を相手の周囲全体に展開させて、そこに貴方が弾幕を撃つ。もちろん、全体に展開させるわけだから弾幕はその中を不規則に動きまわり、やがて避けられなくなった相手はその弾幕を喰らう。これくらいじゃないとスペルカードにする意味がないわ」

ペラペラと喋るパチュリー。成程、これくらいじゃないとスペルカードにする意味はないのか……。

「もちろん、これには貴方がその鏡を動かすというのが絶対条件よ？　そうしないと不規則な動きはできないし、いくら周囲に展開するといっても通り抜ける場所はいくらでもあるわけだから」

俺の方にピン！と伸ばした人差し指を向けるパチュリー。　それにしてもパチュリーって親切だな。俺が考えたものに対して、こんなにも考えてくれるなんて……

「それにその鏡も魔法ではなく、あなたの弾幕と同様な力で作らないと意味ないわ。下手に魔法で代用なんてことは絶対にダメ。わかった？」

「お、おう……。ありがとうパチュリー」

「あっ！……まぁ、これは礼よ、礼」

やっと自分が熱くなっていたことに気付いたのだろう。バツが悪そうな顔で俺のことを睨みつけると、そそくさとその場を去ってしまった

「えっと……。なんか悪いことしたかな？」

「ふふ。いえいえ、パチュリー様も楽しそうでしたし、よかったと思いますよ？」

去った場所を見ながら隣にいる小悪魔に話しかけると、小悪魔はくすくすと笑うばかりであった

▽　▽　▽　▽

パチュリーの言葉を思い出し、紅魔館の庭を借りて練習すること一時間。どうも上手くいかない。　もともと、自分で言ってて悲しいが、才能がないというか凡人の俺には結構難しいみたいだ。

「どうもうまくいかないな……」

そろそろ休憩しよう、と思いはじめたとき後ろから声がかけられた

「一つの鏡に力を注ぎ過ぎよ。もっと、全体に満遍なく……。そうね、薄い生地を伸ばす感覚でやったほうがいいわ。それと、弾幕と同じ力なんだからもう少し抑えても十分に維持できるはずよ」

「あ、パチュリー」

みると、パラソルの下で小悪魔に用意させたのであろう紅茶を飲みながら、パチュリーが本に目線を向けたまま俺に指示をしてきた。

「……なんでパチュリーが？」

あの図書館からずっと出ないものだと思っていたんだけど。それと小悪魔も

「……あなたの練習の音で静かに本が読めないのよ。だからさっさとあなたに習得させれば落ち着いて本が読めるでしょ？」

はいはい、すいませんね。音がうるさくて

「って、あれ？音なんてしてたかな？鏡を作成させて弾幕を撃つことしかしてないんだけど……・・・」

「ほら、さっさと続きをしなさい。みてあげるから」

「あ、うん……」

なんだか少し釈然としない感じだけど、パチュリーがいると心強いのは確かだし、ここは素直にパチュリーにいうことを聞いておこう

そうして俺はパチュリー指導の元、宴会からレミリアちゃん達が帰ってくるまで練習を続けたのであった

▽　　▽　　▽　　▽

「それで？明日は何時くらいに練習にくるのかしら？」

「え　ぇ？」

何故か迎えにきていた霊夢と一緒に博麗神社に帰ろうとしたとき、今日一日付き合ってくれたパチュリーにお礼を言ったら、そんな言葉が返ってきた

「『え　ぇ？』じゃないでしょ。明日はいつ練習にくるのか聞いてるのよ。あなた一人で練習なんてできるわけないでしょ？　それともなに？自分一人でできると過信しているのかしら？」

いや、流石にそうは思っていないけど……。迷惑にならないのか？

「それであなたの生きる確率が上がるならね。あなたが死んだらフ

ランなんて幻想郷を破壊しちゃうかもしれないし」

ああ、なるほど。そういうことね。パチュリーって身内には優しいんだな。それとフランちゃんが紅魔館で大切にされてるようで安心したよ。

「それじゃ……来るときは電話いれるってことでいいかな？」

時間指定なんてしても、この頃は襲撃する子が多くて邪魔されそうだし

「ええ、わかったわ。それじゃ、帰ったら今日のことをちゃんと復習しとくように」

パチュリーはそれだけ言って、小悪魔を引き連れてさっさと屋敷に入っていった。その途中小悪魔が会釈してきたので、こちらも会釈する

「さて、またせたな。霊夢」

「べつに待ってないわよ」

……なんだか少し棘があるのは気のせいですか？

「そ、そうだ。フランちゃんに一声かけてから帰ろうと思うんだけど」

今日、遊んでないし。

「妹様なら、『おにいちゃんがフランを置いてけぼりにした。もうしらない！フランもおにいちゃんを置いてけぼりにする！　あのロリコン野郎で巫女萌え、メイド萌え野郎！』とか言って部屋に帰ったわよ」

「咲夜……何時の間に？あと、最後のほうは捏造だろ。フランちゃんにまでそんなこと言われたら、ショックすぎて違う意味で発狂するよ」

霊夢に聞いたはずなのに、時間を止めてきたのであろう咲夜が答えた

「いまの貴方は紅魔館のお客様だもの。メイド長としてお客様を見送るのは当然の義務よ」

そういって咲夜はお辞儀をした。

そんな咲夜を見るのが少し恥ずかしかったので、俺は霊夢の手を掴んで博麗神社まで帰ることにした。

▽　▽　▽　▽

その頃のフランちゃん――――

「明日、おにいちゃんに会いに行ったら、自分からは話しかけないこと。いいクマちゃん」

自分の部屋でお気に入りのぬいぐるみ相手に誓いをたてていた

「う～！でもでもおにいちゃんが話しかけてこなかったらどうしよう？　そんなの嫌だよぉ・・・・」

ぬいぐるみを顔に押し付けてパタパタと足をさせるフラン。その表情はありえもしない想像をして少し涙目になっていた

「……やっぱ話しかけちゃおう……」

そして、寂しくて、自分が立てた誓いを数分で破壊したフランであ

った

## 23．パチュリー先生と秘密の特訓（後書き）

フランちゃんに壁に手をつけさせ（紳士的に）

少しお尻を突き出させ（紳士的に）

パンツを膝より少し上まで下ろさせる（紳士的に）

あとはわかるな？

（＊゜□゜）／　このときに注意しなきゃいけないこと

1．恥ずかしがり屋のフランちゃんが照れて頭を小突いちゃうかもしれないぞ☆　その時は、潔く生を諦めよう。たぶん、頭がザクロのようにはじけ飛ぶし。　大丈夫、えいきっきの説教が受けられるんだ！それはそれでいいじゃないか

2．メイド長や主がくるかもしれない。そのときも諦めよう。主のほうは口のスキル次第では姉妹でいけるかもしれないが、メイド長の場合は諦めよう。　どうせ蜂の巣になるんだ、パンツをみるくらいの気持ちで突っ込むのもあり。

3．嫉妬に狂った作者が追っかけてきます。その時は、オススメの同人誌を教えればホクホク顔で帰って行くよ

以上のことをふまえた上で、トライしてください

## ２４．化け猫と猫神様

なし崩し的にパチュリーが先生に加わったところで、美鈴と霊夢の特訓が楽になるはずもなく、むしろ霊夢は俺を親の敵のようにいじめ抜き、結構キツイなスケジュールに俺は身体的にまいっていた

「そうだ……。人里へ行こう」

誰もいない自分の部屋で呟いた俺は、息抜きに人里へと足を運んだ

▽　　▽　　▽　　▽

霊夢に人里へ行くことを告げると、なんか疑いをかけられた目で見られたけど、なんとかそれに耐えて人里へと来た。それにしてもあの目はなんだったんだろう？　まるで浮気を疑っている妻みたいな反応だったけど……。

「あややや、そこにいるのは彼方さんじゃないですか」

「お、文じゃん。なにしてるの？」

「取材ですよ、取材」

大通りを歩いていると後ろから声をかけられたので、振り返ると文が手を振っていた。それに軽く振り返して近寄ってみると、どうやら取材をしにきたらしい。　誰だろう?慧音さんかな?　それとも慧音さんから話しをきいただけの人物だけど、阿求さんって人かな?幻想郷の歴史書を編纂していると聞いたけど……いまだに挨拶に伺うことが出来てないんだよな……。近々時間を作って挨拶に伺うことにしよう。

「それで?その取材人物って俺が知っている人?」

「ええ、もちろん」

俺の問いに文は満点スマイルを浮かべ

「クリスという人物に取材を試みようと思いまして」

とんでもない人物に取材を試みようとしていた。

「文、止めたほうがいい。クリスさんは色々な意味でやばい」

とくに服装が。そしてオーラが。

幻想郷の重鎮達とは違う意味で寒気を覚えてしまう

「あやや……。そんなに危険な人物なんでしょうか？」

「うん。危険のベクトルは違うけど……」

文は顎に手を当てて考えこんでしまった

「まぁ……なんとかなるでしょう。彼方さんを差し出せば……」

どうやら俺の耳は壊れたらしい。文の口からとんでもない言葉が聞こえてきたんだからそうに決まっている

「文。今度おごるからクリスさんは止めとこうぜ」

クリスさんは源氏名みたいなもので、本当は橘さんなんだけど……それを言ったら俺が橘さんに怒られそう。それを理由にオカマバーの従業員なんかにさせられたら、俺は外の世界に帰る勢いで霊夢に頼みごとをするだろう。

「えー……ヒモの彼方さんに奢られても……なんか私が無理やり奢らしたみたいになりそうですし。どうせかけそばとか辺りでしょうし……」

「ヒモじゃないって言ってるだろっ！？」

なんども寺子屋で会ったじゃん。それとも文は子供達に混じって俺が慧音さんの授業を受けているとでも思っているのか

「あはははは。冗談ですよ。三割くらい」

リアルな数字ですね。まだ一割とかのほうが笑えてくる

「それにしても、彼方さんはなにをしているんですか？」

「ん？　あぁ、なんというか……息抜き？」

いきなりの話題転換に一瞬頭がついていけなくなった俺は、質問をしてきた人に対して質問で返すというなんとも訳のわからない回答をした。

だが、息抜きであることには変わりないよな。決して訓練がきつす

ぎて逃げ出そうなんてこと微塵も思ってないし。

俺の言葉に文は、一つ頷いて納得した顔で俺に言った

「霊夢さん達の訓練が嫌で逃げてきたんですね」

「逃げたんじゃない。戦略的撤退だ。　いや、それも違うな。ただの息抜きだよ。　第一、訓練が嫌であろうとなかろうと俺が霊夢や美鈴、それにパチュリーになにかを言える訳がないだろ。　皆、俺のために自分の時間を割いてまで訓練に付き合ってくれてるんだから」

「でも、彼方さんは元にこうやって逃げてますよね？」

首を傾げる文に、俺はなんて言えばわからなかった

確かにどんな言葉をこの口が吐こうが俺が逃げている……息抜きをしている事実は変わらないわけで……でもいまから帰ったところで、霊夢から白けた目で見られるのは必須でし。それどころか、訓練が強化されたりしたら……

「骨が砕かれ……手足は千切れ飛び……」

「彼方さんっ!?　どうしたんですかっ!?　なにをどう想像したらそんな答えにいきつくんですかっ!?」

顔が青ざめているであろう彼方の肩を揺さぶりながら、必死に正気に戻させる文。

そのかいあってか、なんとか彼方は正気へと戻った

「あ、そういえば彼方さん。少し聞きたいことがあるんですけど――」

なんとか正気に戻り、深呼吸をしている彼方に別の話題を持ちかけた文であったが

「こんな所に猫とは珍しいな。うりゃうりゃ」

彼方は文の反対方向を向いて、自分の足元にいるなにかと遊んでいた

「……」

「いたっ!?　文さん扇でビンタは止めてください!?　ちょっとな

んなのっ！？」

「べつに……。なんとなくです。　それはともかく、その足元で戯れているのは猫さんですか？」

彼方の足元を、覗きこむような形でみた文は、真っ白な毛並みの猫が彼方の足……というより、ズボンにしがみついているのをみながら彼方に話しかける

「だね。猫なんて幻想郷で見たことなかったらいないのかと思ったよ」

「あれ？そうでしたっけ？」

疑問符を傾げる文に

「ほら……俺、普通の人とは周りにいる連中が違うじゃん……？」

彼方は少しだけ、どんよりとしながら答えた

毎日毎日、訓練訓練訓練。それに永琳の診察にフランとの遊びやチルノとの遊び

普通の外来人であるならば、まずこうは日常を送ってないだろう。

だからといって、この日常が嫌というわけではない。

むしろ、毎日毎日が楽しくて仕方がないのかもしれない。

普通ではないから、霊夢と出会い、普通でないからフランやチルノと友達になれたのだから。

普通の人間である、自分が。

「と、そんなことは置いといて……この子、迷子かな？」

「う～ん……。見た所、そのようですけど……。多分、“猫”ですから、あの子と関係があるのかと……」

「あの子？」

「ええ、簡単に言ってしまうと――――」

『にゃーにゃー』

「ん？魚が食べたいのか？」

「……」

「痛い痛いっ！！？？　文さん、俺の腕はそっちには曲がらないです！！」

自分の話を無視されたのが嫌だったのか、はたまた彼方程度に無視されたのが嫌だったのか……文は無表情で彼方の腕を人体が曲がることがない方向に力いっぱいに曲げていた。

そんな二人を微笑ましそうに見守る人里の人達

「みなさ～んっ！？　そんな目でみてないで助けてくださいよ！？」

人里の人達に向かって手を伸ばす彼方であったが……

『にゃー』

その手は人里の人達に届くことはなく、かわりに真っ白な毛並みの猫が彼方の手に自分の手をのせたのであった。

▽　　▽　　▽　　▽

「まったく……よくまあお金もないのに、魚を買おうと思いましたね」

「川魚なら……そんなに高くないと思ったんだ……」

先程文によって、ありえない方向に曲げられそうになった骨は無事にことなきを終えたわけだが……。　猫に魚を買おうと思ったところ、自分の手持ちでは圧倒的に足りなく、近くでそれを黙って見ていた文に代わりに支払ってもらう形になったのだ。

『にゃー？』

「うんうん。いいんだよ君は。それよりおいしいかい？」

『にゃー』

彼方の落ち込んだ声に反応した猫は、彼方を気遣うように彼方のほうを心配そうに向いたが、そんな猫を彼方はしゃがみこみ頭を一撫でして問いかける。

その問いに対して、猫は目をつぶって嬉しそうにすることで答えた

「それにしても……この猫さんは私達をどこに連れて行きたいんでしょうか？」

いま文達がいる場所は先程の人里を出て山の中である。

「ここは妖怪の山に属する所なんですが……」

「あ～……もしかして文の立場が悪くなったりする？」

鴉天狗である射命丸文は妖怪の山に住んでいる。そして妖怪の山は天狗達によって支配されているのだ。

天狗達を言葉であらわすなら、“会社”という言葉がしっくりくるかもしれない

外の世界の人間社会を小さく纏めたもの。

「べつに悪くなったらなったでいいですよ。　身内を持ち上げるだけの、新聞というにはあまりにもお粗末なものを作り、誰もそのことについて一切の不満を持っていないんですから」

下の者は上の者には逆らえず、下の者は上の者に気にいられるような記事を書く

「あんなの新聞なんて言い切れませんよ。　あぁ、話題が逸れてしまいましたね。　ですから、何を言いたいかというと、彼方さんは気にしなくていい。ということですよ」

俺の肩を軽く叩いて

その文の表情は少しばかり寂しそうで

「さ、行きましょうか？　猫さんも早く行きたがってますよ？」

先を歩こうとした文の手を無意識に掴んでしまった

「？？？どうしたんですか。彼方さん」

「あ、……その……なんでもない」

何かを言わなくちゃいけないはずなのに

俺は何も言えなかった

いや――――言ったらいけないと思った

何故そう思ったのかはわからない

けど……霊夢の言葉を借りるなら“カン”というものだろう

「お～い！いきますよ～！」

いつの間にか、自分より遥か前方へと進んでいた文に追いつくために俺は小走りでその場を後にした

『やれやれ、呆れたな……。　まるで、学級限定の新聞だ。いや、只の点数稼ぎか』

▽　　▽　　▽　　▽

先程の場所から歩くこと１０分。なにやら大きな家が見えてきた

「やはり……私の考えは正しかったですか」

隣で得心がいったというように頷く文

「？どういうこと――――」

その言葉の真意を確かめようと文に話しを振ろうとした瞬間、家の

玄関が開き何者かが駆けてきた

「やっと見つけました！もう、どこ行ってたの！？」

身長はフランより少し高いか同じくらいで、猫耳と二又の尻尾を生やした女の子が、俺の足元の猫に向かってなにやら怒っていた

『にゃー』

「へっ？この人達にお魚さんを貰ったの？　ちゃんとお礼いった？」

『にゃーにゃー』

俺からしてみればこの女の子が一方的に会話をしているようにみえるんだけど……一人と一匹の間ではちゃんと会話が成立しているらしい。

というか……この子誰だ？

白猫との話がついたのだろう。女の子はこちらのほうを向く

「えっと……この子がお世話になりました。私、橙一ちぇん一っていいます」

一度頭を下げてから、橙は笑顔で彼方に自己紹介をした

「お礼の言葉がいえるなんて橙ちゃんは偉いね。　こんにちは、俺は不知火彼方。博麗神社って分かるかな？　その神社でいまは居候として厄介になってるんだ」

膝を折り、橙と同じ目線の高さにしてから、できるだけ優しい声を意識して橙に自己紹介する彼方

「雑用係とは言わないんですね」

「そこ、うるさい」

隣でボソリと呟く文の言葉にツッコミをいれて橙に話しかける

「橙ちゃんはここに一人で住んでいるのかい？」

「はい！一人ですよ！　あ、でも藍しゃまが毎日来てくれるのでほとんど二人……かな？」

ん？藍しゃま……？

その単語には身に覚えがあった

自分の良き相談相手である、八雲紫の式である

「ねぇ、橙ちゃん。その藍しゃまって――――」

誰なんだい？

そう聞こうとした所で先程の玄関から新しい声が聞こえた

「こらー、橙。　外に行くときはちゃんと後片付けしないとダメじゃないか――――」

普段みたことがないほどのデレデレ顔で、橙ちゃんを怒りながらこちらに来る八雲藍がいた。

「……」

「……お久しぶりです、藍さん」

こちらに気付いた藍が固まるなか、どうにかそれだけを言うことができた彼方

その横では文が必要以上にカメラのシャッターを切り

「あれ？藍しゃまー、どうしたんですかー？」

訳が分からないといった様子で彼方と藍を交互にみやる橙がいた

▽　　▽　　▽　　▽

「あれからかわりはないんだな」

「ええ、毎日普通に生きています」

藍さんの以外な一面をみてしまった後、俺は家の一室にて藍さんと話していた

この話しに文も参加したかったみたいであったが、橙ちゃんの遊び相手をするなら取材を一度だけ受けるという藍さんの取引に、首を高速で縦に動かし隣の部屋で嬉々として遊び相手になっている。

あのときの文の顔ときたら……

「ふむ、それは結構だ。君は明らかに“こちら側”ではないからな。博麗神社で庭でも掃除しているのがお似合いだよ」

咲夜にも言われたけど……もしかしたら俺の天職は庭掃除なのか？
だとしたら少しだけ泣けてくる

「あの……藍さんに聞きたいことがあるんですけど……」

「ん？なんだ？私にわかる範囲なら何でも答えてやるぞ」

その言葉を聞いて俺は自分の胸を少しだけ抑えながら

「俺はあの時――――どんな顔をしていましたか？」

あの時――――はじめてルーミアに会い

――――ルーミア達の怯えた姿をみて

――――あの妖怪の傲慢な姿をみて、自分の中の何かが一瞬だけ壊れた

あの時、紫さんが止めに来てくれなかったら……俺はなんの躊躇いもなくあの妖怪を殺していたのだろう。　なんとなく、自分の中に変な確信めいたものがある

藍さんは黙って俺は見つめている。その瞳は何かを躊躇っているようにもみえた

「そうだな……。とても人間らしい顔をしていたよ」

「……は？」

思いもしなかった答えに俺の思考は一瞬ついていけなくなった

「彼方。君は太陰対極図というものを知っているかい？」

「太陰対極図……ですか？」

それなら外の世界で、バッチとしてみたことがある

「簡単にいうと、世界のすべての物は陰と陽の二つで成り立っているという考え方に基づいたものだ。　陽とは、光・ポジティブなどといったプラスのもので使われてることがおおい。　逆に陰とは、悪・ネガティブといったマイナス方面で使われることが多い」

「でも、俺の記憶が正しければ……白いところにも黒い点があったような気がするんですけど……」

律義に手を上げながら疑問をぶつける彼方

「うむ、よく気がついたな。いま彼方が言った通りだ。　白いところにも黒い点があるな。これは、善の中にも悪はあり、悪の中にも善はある。という考え方だ。　完全な善などなく、完全な悪などない。全てが混じり合って存在している。そういう意味だ」

完全な善はなく、完全な悪もない

ということは――――あのときのアレが俺の中の悪なのか？

黙っている俺が気になったのだろう。

「そうきにするな、彼方。私の知人曰く、『完全な悪や善なんて、それこそ化物に等しいな』ということだからな。　それに、だからといって不知火彼方という存在が変わるわけでもないだろ？」

「そう……ですね。確かにそう通りですね」

ありがとうございました。　と頭を下げる俺に藍さんは、きにするなと声を出す。そしておもむろに俺の後ろのほうへと声を張り上げた

「さぁ、私達の話は終わったぞ。　こそこそしてないで出てきたらどうだ、橙。誰も怒っていないから」

藍さんが声を上げた数秒後襖から橙が、みつかちゃった……というように気まずそうに顔を出す。そしてその後ろから文も。

「？どうしたの、二人とも」

「いや～……橙のほうが彼方さんに言いたいことがあるとかで……。一応、私は止めたんですけど」

頭を掻きながら困った顔を浮かべる文。そしてその話しの中心人物である橙は、とことこと彼方の前まできてガバッと勢いよく頭を下げた

「お願いです、猫神様！橙に力を貸してくださいっ！」

誰ですかソイツ。存じ上げません

「いや、あの、……え？」

訳が分からなり、周りをみると文は、あちゃ～とした顔で顔を覆い、藍さんは口を開けていた

「だって！橙が使役できなかった白猫さんをいとも簡単に使役しましたし……！　猫神様に間違いありません！」

「間違えです」

橙の力説に間髪いれずに否定の言葉で返す彼方

「ふぇ……」

「彼方、ちょっと話しがある」

「え〝っ!?」

自分の考えが否定され涙目になった橙。そんな橙をみて藍は彼方の首根っこを掴み奥の部屋へと怯える彼方を引きずって行った

後に残ったのはいまなお涙目の橙と、困った顔を浮かべている文だけ

「え～っと……彼方さんは正義のヒーローですから、正体がバレるのが嫌だっただけなんだと思いますよ?」

いたたまれない気持ちになって、ついつい橙に話しかける文

「うぅ……。ほんとう?」

「ええ、本当ですよ」

文の言葉を聞いて、先程の涙顔はどこへ消えて行ったのか。橙は嬉しそうに自分の部屋へと帰って行った。

「はぁ……ブン屋としては嘘を吐くのは嫌なんですが……しょうがないですね」

奥から聞こえてくる彼方の叫び声をＢＧＭになんとか自分で納得した文であった

## ２４．化け猫と猫神様（後書き）

ないと思いますが、誤解すると悪いんで言っときますね。
彼方＝猫神ではありませんので。

というか猫神ってなんだろう。　ケットシーとかかな

ちょいと更新遅れてすまんこ。

多分、すぐに次は上げれると思うんで

あ～、霊夢にジト目で色々されてーわ。
文字に起こしたらＢＡＮされそうだからできないけど。

## 25．かぐや姫

春が終わりを迎え、地獄のような夏が顔を出す

此処、幻想郷でもそれはかわらず日に日に暑くなり、そろそろ外の世界での文明利器であるクーラーが欲しくなってくる時期である。しかし悲しいかな、幻想郷は俺のいた所とは文明の発達速度が遅く（というか、意図的に止めていて）クーラーというものが全くといっていいほど見当たらない。当たり前というか、なんというか、紅魔館には普通にあったのだが。そこは年中貧乏である博麗神社。参拝客もこないことからわかるように、此処にはクーラーなんて贅沢な物を購入する金なんてどこにもない。明日をどうやって生きようか。なんて話しが出るくらいだ。　幸いなことに俺が人里で働くようになってからは、ほんの少しだけ余裕が出来たらしいが、貧乏なことにはかわりないだろう。　それと、これは純粋に驚いたことだが、意外にも人里の人達は霊夢のことを気にかけているらしい。それに魔理沙も。　あの年齢での一人暮らしってのはやはり幻想郷でも珍しいらしいし、霊夢や魔理沙は妖怪退治を生業としているから、意外と心配なのだと。

そんなに心配しているなら参拝に行けばいいじゃないかって？

それは流石に無茶ってもんだろ。人里と博麗神社はそれなりの距離があるし、なにより道中は妖怪だって沢山いる。妖怪は夜に活発だというだけであって、べつに昼は閉じこもっているだけではないのだから。

それにしても暑い

こう暑いと集中力が切れてしまいそうだ。

そう――――だからここで俺の集中力が切れてしまい、鏡の製作が上手くできなくても問題ないはずなんだ。　なんたって、かれこれ一時間も外で鏡の製作をしているのだから。先生曰く、『集中力を持続するのが難しい所でやるから、集中力というものはつくのよ』らしいのだが――――

パリンッ

「あ」

「はい、もう２０分追加ね」

集中力うんぬんの前に生命力のほうが持続しそうにない

▽　▽　▽　▽

「鏡を5枚出して、ゆっくりと時計回りに回してみましょうか」

博麗神社の縁側で、紅茶を啜りながら楽々と言ってみせるパチュリー。そしてさも当たり前のようにクッキーを食べる

「というか……なんでパチュリーが神社に来てるんだ？紅魔館から出ないんじゃなかったの……」

「あんたがサボるからでしょ。早く言われたことをする。じゃないと吐血するわよ」

脅迫で吐血すると言われたのははじめてです。……そういえば、確かにパチュリーに成り行きで教わることになった翌日は行くことができなかったけど……それだけでサボり認定か。そもそも行く時は電話すると言ったじゃないか。なんてことを言ったら、どうせパチュリーのことだから……

「教わることになった翌日からサボるなんて普通ありえないでしょ。」

でしょうね。というか、もしかして俺は口に出していたのか？

「あなたの考えてることなんて丸分かりよ」

「そうやってすぐ、私達をいやらしい目で見る。ほんと下衆だわ」

「おいそこのメイド。ちょっとこい」

「嫌よ。そうやって私まで毒牙にかけようとするんでしょ。」

見下した目で自分の身体を抱くようにして俺から一歩ずつ下がっていく紅魔館のメイド長こと十六夜咲夜。これが人里の男連中には人気なのだから本当に幻想郷はわからない。いや、まぁ……確かに可愛いし、料理もできるし弾幕も強いし一見完璧に見えるから、遠目からみたらいいのかもしれない。実際俺も初めはそう思ったし。ただ……口が異常に悪いんだよな。

「じろじろ見ないでよ、メイド萌えの変態」

「はいはい」

ナイフを構える咲夜に俺は手をひらひらと振ることで答える

さて……鏡を5枚だったな

一度目を閉じて、大きく深呼吸をする。

肺の中に溜まった不純を取り出し、新鮮な空気を肺に溜めこむ

想像するは長方形よりは、少しだけ丸みをおびた鏡

自分の顔が綺麗に映るくらいの――――宮殿にありそうな鏡をイメージ

そして少しづつ想いを高めていく

――――鏡を作りたいと

その想いに自分の中の何かが答えるように、自分の身体の奥深くから力が沸いて来る

そして――――その力を鏡という想像物に換える

1枚――――2枚――――3枚――――4枚――――5枚――――

自分の想いによって形を得た鏡をゆっくりと時計回りに動かす――
――ところで鏡が割れる

「う～ん……やっぱり動かそうとすると駄目だ。」

「はぁ……今日はもう終了ね。あんまりしても集中力が切れるだけだろうし。あなたもこれに集中力の全てを注いだみたいだし。今日はもう終わりね。で、明日は何時にするの？」

「もう明日のことですか……」

「人間は私達と違って生きる生が短いのよ。もたもたしてたらあなたが死ぬわ。それともなに、フラン辺りに噛まれて血族になるってなら別だけど。……いがいとそれもいいんじゃないかしら？吸血鬼になったら、いくらあなたでも性能は上がるわよ。はじめは慣れないだろうけど、どうせいままでと変わらない生活を送りそうだし」

「彼方を血族に……ね。なかなか面白そうじゃない」

先程まで俺とパチュリーの鏡製作を黙って腕組しながらみていたレミリアちゃんが俺を舐めまわすように見ながら呟く

それに触発されたのか、お気に入りのぬいぐるみを抱いてパチュリーから借りた絵本を読んでいたフランちゃんが顔を上げる

「おにいちゃんフランと同じになりたいの？フランならいつでもいいよ？」

純粋な眼差しで俺のほうを見てくるフランちゃん。

「いやいや、ごめんねフランちゃん。俺は俺が滅びるまでは『人間』でありたいから、流石に吸血鬼になるのは無理かな。それに俺は外来人――――いつかは外に帰らないといけないからね。外には友達や母親、それに大切な人も置いてきたんだから。」

「ふ～ん、そっか。でも、おにいちゃんは遊びに来るんでしょ？」

「えっ？遊びに？」

う～ん……それは無理だと思うけどな。紫さんは幻想郷が外の世界に流布されると幻想郷が保てなくなるから駄目って言ってたし。元に俺はそれで早苗ちゃんに手紙を送るときに苦労した。というか、早苗ちゃんからしたらまったく訳が分からない手紙だっただろうし……。

俺がフランちゃんになんと言おうか迷っているとパタパタと霊夢が縁側までやってきた

「彼方、そろそろ行く時間じゃない？」

「え？もうそんな時間なの？」

「うん」

それはまずったな……。汗だって流してないのに。……冷水でもぶっかけようかな

「おにいちゃんどこか行くの？」

二人の会話を聞いて、小首を傾げながら問いかけるフラン

「ああ、永遠亭に御呼ばれされてさ。永琳さんにはいつもお世話になってるし、鈴仙にも結構お世話になってるからお礼を言うには丁度いい機会かなと思ってね。」

「ふ～ん。フランもおにいちゃんとご飯食べたいよ」

結構な機会で食べてると思うんだけど、あれは全部俺の気のせいなのか？

「うん、そうだね。今度は紅魔館の人達皆と食べようね」

わしゃわしゃと少しだけ乱暴に撫でる。フランはそれが気にいったらしく、少しの間目を閉じ頬を緩めて俺に委ねる。もしも俺に妹がいたら……もしかしてこんな感じだったのかな？　多分、俺よりも早苗ちゃんに懐くだろうけど。

三分くらい撫でてからゆっくりと手を戻す。すると、フランは小さく「あっ」と声を出し彼方の手を自分の手で握ろうとするがすんでの所で戻す

「あ、彼方。私も永遠亭に行くから」

何時の間に外へ出たのだろうか。霊夢が俺の横に来ながらそんなことを言ってくる

「べつに俺はいいんだけど。永琳さん達は大丈夫なのか？」

「いいのよ。幻想郷ではさして珍しくもないことだから」

珍しくないのかよ。……言われてみればフランちゃんやチルノ、それに最近ではルーミアもだけど、全部アポ無しだったな。チルノなんて食事を狙ってくることもあるし、ルーミアなんて食事が目的だったりもするし。そのたびに断ることができなくて、霊夢が箸を折る音を聞きながら仕方がなく、食べさせてあげてるんだよな……。

「まぁ……確かにあまり問題でもないかな。」

うんうんと頷く

「あ、それなら紅魔館のみなさんも一緒にどうですか？」

それならフランちゃんとだって食べれるし。なかなかの名案ではないか。そう思った俺だったが

「いや、遠慮しとくわ。」

レミリアちゃんにあっさりと断られた。

その言葉を聞いて心なしかフランちゃんか涙目でレミリアちゃんの方をみている

「まぁ、幻想郷にも色々とあるのよ。幻想郷の重鎮達は我が強い人達が多いし」

まったく……。アホらしいわよね。霊夢はそう言いながら首を横に振る

「う～ん……。霊夢がそういうなら止めとくよ。部外者の俺が言ってもなんだし、紅魔館の主のレミリアちゃんが断ってるんだしね。」

「ええ、せっかくの食事なのに申し訳ないわね。代わりというのも少し変だけど、今度は紅魔館からも正式な招待状でも出すわ」

「はは、それは嬉しいな。楽しみにしとくよ。フランちゃんもそれでいいかな？」

「……うん」

目の下を手で擦りながら頷くフラン。そんなフランを見ながら彼方は少しだけ申し訳ない気持ちになったが、こればっかりはしょうがない。

「ほら、行くわよ彼方。あんたに合わせて私も歩くんだから早く出るわよ。それじゃ、後はよろしく」

俺の手を強引に握って神社の石段を降りて行く霊夢。その時に後ろを振り向き、（多分咲夜だと思うけど）神社のことをお願いする

神社の巫女さんが離れていいのか？　という気がしないでもないけど大丈夫だろう。悲しいかな参拝客も来そうにないし。

「ところで霊夢さん。そろそろ握っている手を離してくれませんか？　思いの外強い力で握られてるものだから、少しだけ痛いんですけど……」

もしかして緊張でもしてるのか？

「うっさい馬鹿。黙って歩きなさい。……なによ……ほんの少しだけお化粧したのに……彼方のバカ……」

「？」

後半は霊夢の口がもごもごとしか動いてなくて何を言っているのかわからなかったけど、取りあえずまたしても霊夢に怒られたことだけはわかった

▽　　▽　　▽　　▽

「やあ鈴仙。待ったかな？」

「べつに。私も丁度終わったところよ」

「そっか。それはよかったよ。お疲れ様鈴仙」

毎度おなじみの俺の案内人である鈴仙は、今日も俺とは目を合わさずに俺が来たことを確認すると永遠亭へと歩を進めた

「それにしてもありがとうな、今日は誘ってくれて。」

「べつに。お師匠さまと姫さまが決めたことですもん。私は逆らえないし。例え、私がその人を嫌っていたとしてもね」

あいかわらず鈴仙は俺のほうを見ないまま、可愛らしい外見からは想像もできないような毒舌を吐いてくる。なんというか……咲夜を彷彿とさせる

それにしても……嫌いか……。心にくるな。鈴仙の服装と相まってかなりくる。これが咲夜辺りならそこまでないんだけどな。

「あらら、嫌われてるみたいね。まぁ……それが普通の反応かもしれないけどね。」

横にいる霊夢が先を歩く鈴仙に聞こえない声で話しかけてくる

「う〝っ……！普通……ですか」

「まぁね。あんたの掲げる信念は立派だけど此処では甘いなんてもんじゃないわ」

ま、なにかあったら私を頼りなさい。

霊夢はそう切り上げて自分からこの話を終わらせた。

「もうすぐ着くわよ」

先を行く鈴仙が俺達に向かって少しだけ声を大にして話しかける

鈴仙がそう言ってから5分後、確かに俺の視界に見慣れた屋敷が見える

そこでは兎耳を生やした女の子達がそれぞれ遊びまわり、中には本を読んだり、竹で何かを製作したりと好き勝手にしており、それに混じって白ウサギがぴょこぴょこと駆けまわり、兎耳の女の子の膝の上に乗ってくつろいだりと、こちらもなんとものんびりした風景が続く。

永遠亭――――此処を一言で表すなら、

兎の楽園――――

幻想郷が妖怪達の楽園ならば、永遠亭はさながら兎限定の楽園であろう。

すくなくとも彼方はそう思う

「あら彼方、いらっしゃい。疲れたでしょ？診察室に行きましょうか？」

「毎回思うんですけど、なんで永琳さんは何故毎回毎回俺を診察室に連れて行きたがるんですか。」

永遠亭に来る理由の9割は怪我をしたから来るので当たり前なことではあるが、目の前にいる女性、八意永琳からはそれが以外の何かを感じる

「あら、あなたはすぐに怪我をすんだから私としては当然の反応よ。貴方には興味がつきなくてね。解ぼ――なんでもないわ」

「いま解剖って言いませんでした？ねぇ、完全にいいましたよね。一気に此処が怖い所に変わってしまったんですけど」

診察と思っていたものが解剖の準備とかだったら、マジで笑えないんだが。

「ふふふ。私がそんなことするわけないじゃないの。いやね、彼方ったら」

「そ、そうですよね。」

あははは。と笑う。頬に一筋の汗を垂らしながら

「そ、そうだ。あの、今日は食事に招いて頂いてありがとうござい

ます。」

頭を下げる俺に永琳さんは、俺の頬を優しく持って顔を上げさせてから至近距離で大人の笑みを浮かべる

「こちらこそ、来てくれてありがとうね。私も嬉しいわ。いま話題の貴方と一緒に食事ができて」

その話題にロリコン・自殺志願者・鬼畜・たらし・などの単語が入っていないことを願う。というか、あれはまったくの誤解だ。根も葉もない噂だ。誤解もはなはだしい。まったく……文に会ったらこの誤解が解かれるような記事を書いてもらおう

「けどごめんなさいね。まだご飯ができてないのよ。少しだけゆっくりしておいてくれないかしら。時間が来たら呼ぶから」

困ったように笑う永琳さん。

「いや……それはいいんですけど。俺も手伝いますよ。流石にタダ飯を食らうってわけには……」

なんというか……タダ飯を食らうのに躊躇いがある。

そう考える俺に対して永琳さんは

「いいのよ、彼方は。丁度、お手伝いさんも見つかったわけだし」

そう言って永遠亭を指さした。釣られて俺もそちらに振り向く。そこには――――

『な　ん　で　！私が手伝わないといけないのよ！　今日は私も彼方と同じ客よ！』

『まぁまぁ、ここでおいしい料理を出せば彼方もコロっと落ちるかもしれないよ？私が思うに彼方は家庭的な女の子ってのが好みなタイプだからね』

『えっ……。そ、そう……かな？』

『もちろん』

『しょ、しょうがないわね……。べつにアイツがどんな女の子がタイプとかは心底どうでもいいけど、確かに貴女達に任せると人参しか出てこなそうだし、特別に私が手伝ってあげるわ。本当にアイツとかどうでもいいけど』

話し声こそ聞こえなかったが、あんなに駄々をこねている霊夢をすっかりその気にさせるてゐはすごいと思う

「にしても霊夢が料理か。」

「あら、嬉しいの？」

「いや……毎日食べてますし。まぁ、おいしいから嬉しいんですけどね。どっちかというと、今日は永琳さんや鈴仙の料理のほうが興味があるかな……なんて思ったり」

少し冗談交じりに言った俺だったが――

「霊夢の前でそんなこといったら死ぬからね。くれぐれも気をつけるように」

永琳さんの目は死ぬほど本気の目をしていた。

▽　▽　▽　▽

そんなこんなで夕食の時間が訪れた

その間俺がなにをしていたのかというと、白ウサギ枕にして胸に別の白ウサギを抱いたまま眠っていた。てゐにいたずらされても気づかないほどに眠っていた。例えるなら泥のように。という感じだ。多分、疲れていたのだろう。永琳さんが言っていたことは本当みたいだった。

さてさて、それはともかく夕食である。

「へぇ……鍋ですか。」

テーブルには所せましと鍋に入れる食材が鈴仙と霊夢の手によって並べられている。どれどれ……なにがあるのかな?

にんじん・にんじん・にんじん・にんじん・豆腐・にんじん・にんじん・にんじん・にんじん・春菊・にんじん・にんじん・シイタケ・にんじん・にんじん・にんじん・にんじん・白菜・にんじん・にんじん・にんじん・にんじん・にんじん・にんじん

……予想はしていた。だって此処に居る子達の大半はウサギなんだから。

「……母さん、好き嫌いをなくしてくれてありがとうございます。」

もしも俺がにんじん嫌いだったら、豆腐と春菊とシイタケと白菜しか食べれなかったよ

「いやいや、これはそっちの因幡達の分だからね？　私達が食べるのかこっちよ」

呟く俺に霊夢は、手を左右に振ってからべつの鍋を出す。

そこには外の世界とまったく変わらない鍋の具材でとても食欲をそそる鍋があった

「へ～、うまそうじゃん。」

「彼方が来るから色々奮発したしね。今日の鍋は少し特別よ。　さ、いただきましょうか」

そういって俺の隣に座る永琳さん。……なぜ隣？

「あの……永琳さん？」

「あら、どうしたの？なにか困ったことでも起こった？」

ええ、おきています。現在進行形で。

てっきり永琳さんは上座のほうに座るのかと思っていただけに、俺の隣には霊夢が来るもんだろう。と思っていたので永琳さんが隣に座ったのにはかなり驚いた。

「えっと……永琳さんが隣に来るとは思わなかったもんで……」

「あら、それは私が彼方の隣に来てはいけないってことなのかしら？」

「い、いや……べつにそういうわけでは……むしろ少し嬉しかったり……」

顔を近づけてくる永琳さんの顔を見れない俺は顔を横へとずらした。

――――――――――そしてみてしまった

――――巫女服姿のあの子が針を持っている姿を

いまにも俺に向かって投げそうな霊夢。その目は完全に殺る気の目になっている。

「そ、そうだ。永琳さんが隣だと俺が緊張してしまうので、できれば霊夢が隣にいてくれたほうが気楽にご飯が食べれるかな～……なんて思ったり」

上ずった声で震えた声で永琳に話す彼方に、永琳は「そう」と一言だけいってその場を開けた。そして自分の定位置であろう場所に改めて座った。

いったい……いまのはなんだったんだろう？　十中八九俺で遊んでたのは間違いないけど

「そんなにあんたがわたしの隣で食べたいなんてね……。ふ～ん……」

先程までの表情はどこへやら。言葉とは裏腹に笑顔の霊夢。しかしその手には依然として針を持ったままである。

「それじゃ、食べましょうか。早くしないと野菜が溶けちゃうわ」

永琳さんの声とともに皆が手を合わせる

「あれ……？永琳さん。永琳さんの隣の席、空いてますけど……」

ふと永琳の席をみると隣に丁度一人分の空白があることに気付いた彼方が指さしながら永琳に話しかける。永琳はそんな彼方に少しだけ困った笑みを浮かべ

「ああ、いいのよ。この人は人里の子供達と遊んで疲れて寝てるのよ。」

やれやれ……とでもいうように永琳は苦笑いを浮かべる。

「へ～、子供達と遊んでるんですか。それならもしかしたら俺も会ってる人かもしれませんね。一応、非常勤に近いですか、寺子屋の教師をしていますので」

「ふふ、そうかもね」

そして今度こそ、手を合わせ食べ始める

数分後――――

「もう夏だっていうのに、なんで鍋なのよ。すんごいいまさらだけど。用意した私がいうのもなんだけど」

暑くて熱い

確かにうまいのだが、湯気と大人数のせいでみるみる額には汗が浮かんでくる

「いや、でも大人数ならやっぱり鍋じゃないかな。……まぁ、バーベキューとかもあったけど。下手したらこの竹林が燃えるかもしれないし。」

悪戯ウサギの手によって。

しかし霊夢が愚痴るのも分かる気がする。元に俺だって汗で服が張り付いて少しだけ気持ち悪い。けど……それに以上に大人数で食べるのは面白いかな。

「あ、てゐ。そこのポン酢とってくれ」

「あい」

「サンキュー。……なんでソーメンのつゆがあるんだい？」

「てへ♪てゐちゃん間違えちゃった」

この悪戯ウサギ……いつか絶対に泣かせてやる

「あっつ～い。彼方～、煽いで～」

あつさにダウンしたのか、霊夢がどこから持ってきたのかわからない団扇を俺に渡してくる

「それはいいけど……、そのただでさえ際どい巫女服でパタパタと煽ぐのは止めたほうがいいよ。」

色々と見えるし。俺も色々と危ないし。

俺の視線に気づいた霊夢は、文もビックリな機敏な動きで自分を守

るように肩を抱くと

「……みた？」

上目づかいでこちらを睨んできた。

「いや……ぎりぎりセーフじゃないかな」

霊夢の目を直視することができずに目をそらしながら答える

「……みたい？」

「……」

ここで見たいって言えばみせてくれるのだろうか。多分、霊夢のことだから俺が、イエスと答えた瞬間に針が飛んできそうだし……。

ああ、そういえば早苗ちゃんも俺をからかってよくこんなことしてたな。その時はいつも背筋が寒くなってたんだよな。

そっと霊夢をみやれば少しだけオドオドしながらこちらをみている。

何かを期待しているかのように――――

「え～と……」

そのときの俺は後で思い返せば、結構テンパっていたのだろう。じゃないとあんな失敗は起こさなかったはずだ。重ねていうが、俺はテンパっていた。そして疲れだとか、寝起きとかもあったのかもしれない。だから――――

「俺は霊夢の巫女服の丈が短くなって、パンチラとかが拝めることができるほうが嬉しいかな」

――――お願いだから皆で俺をそんなで見ないでください

「……そう、なんだ。パンチラねぇ。」

「いや、違うんだ!!頼む!弁明をさせてくれ!」

「彼方は俗にいうミニスカートとかが好きなのかもね。外の世界では男性はミニスカートが好きってのはかなりいるみたいだし。まぁ、彼方だって健全な男の子だもんね」

「……」

「違うんですよ永琳さん！いや、まぁ否定はしませんけど違うんです！鈴仙も無言で俺と距離をとるの止めてくれませんか！？」

それから３０分にわたり、俺の弁明は続いた。

絶対に誰も信じてないだろうけど

▽　　▽　　▽　　▽

「楽しい楽しい食事会のはずが、苦しい苦しい言い訳会になってしまった」

食事が終わり、もうすぐ帰る時間になってきた。　あの後は散々な食事会だった。まず鈴仙の視線。あれは咲夜を超えたかもしれないね。そして永琳さんの視線。これで永遠亭にやって来ることになるかもしれない外来人は強制的にミニスカ好きというレッテルが張られることになるだろう。そしててゐに至っては、明日あたり文に今日のことを詳細に話すだろう。そして文のことだ。明日の夕刊辺りには俺の項目に新しい項目が増えているはずだ。そしてなにより、霊夢だ。急に巫女服を縛ったりして生足をみせつけてくるもんだから、こっちの心臓はいつもよりかなり速い速度を出していただろう。

あぁ、早苗ちゃんも俺と遊ぶときは、どんなに寒くてもミニスカートだったな。いや、これは流石に関係ないか。

俺がなんともなしに月を見上げながら自分のまぬけぶりに嫌悪していると、後ろから忍び笑いが聞こえてきた

「くすくすくす。あら、気付いちゃった？ごめんなさいね」

「えっと……あなたは？」

「私？私は輝夜。この家の主人みたいな者よ。」

よろしくね。そういって俺に手を差し出してくる輝夜さん。

黒髪を長く伸ばし、ピンクに近い色の服を着ていることから、日本人形を体現したのなら、輝夜さんのようになるだろうな。なんてことを考えてしまうほど、輝夜さんは美しかった。

いつまでも差し出している手をとらないのはまずいだろうと思い、俺はその手をとったのだが。いきなり思いもしない力で俺は引っ張られた

「“久しぶりね。待ってたわよ”」

「へ？え？俺と輝夜さんが会うのは初めてだと思うんですけど……」

いきなり顔を近づけて、俺にそう言ってきた輝夜さん。しかしその目は俺をみているようで見ていない。そんな感じだった。

「あらそう？私はあなたと会うのは初めてじゃないわよ。寺子屋であなたのこと見たもの」

それは会ったというのかな……？

「隣いいかしら」

俺の言葉をまたずに俺の隣に座る輝夜さん。　何故、聞いたし

「そういえば輝夜さんは寺子屋の子達と遊ぶんでしたね。」

「ええ、やっぱり無垢な子供っていいわね。心が洗われる」

そういってにこやかに笑う。見た目が中学生くらいなもんだから違和感があるけど、多分俺より年上なんだろう。

あの酒飲み鬼と対面したときのような――――いや、下手したらそれよりも足が竦んでいるのだから。

「そういえば、あなたの噂もちゃんと聞いてるわよ。正義のヒーローさん」

「ははは……。止めてくださいよ、俺は正義のヒーローなんかにはなれませんよ」

正義のヒーローなんて俺には一番遠いところにあるだろうに。

「あら、でも人里を救ったのは事実でしょ？」

輝夜さんが首を傾げながら聞いて来る。……多分、レティさんのことをいってるのかな

「俺はレティさんを止めただけで人里を救ってなんかいません。人里を救うというのなら、俺はあの時、レティさんを殺すということになりますよ。」

しかし真実は違う。レティさんは生きている。いまは家でのんびりしているのだろうけど、冬になったら俺の所へ来ると思う。

「ふ～ん……。悲しいわね。子供達が泣くわよ。あの子達、あなたのことを本当に尊敬していたんだけどね。」

憧れ・尊敬――――それは俺にとって一番縁遠いものだと思っていたんだが。

「しかし変ね。子供達が憧れる者なんだから、てっきり強いと思っていたんだけど、見たところあなたは人里で農作業でもしてるほうが似合ってるのに。――――なんでかしら？」

――――なんでかしら？

――――あなたは何故、いまだに弾幕勝負なんてするのかしら？

俺には輝夜さんがそう聞いているように聞こえた。いや、実際そう言ったのかもしれない。ただ単に俺の耳がそう聞こえなかっただけかもしれない。

だから俺は輝夜さんに飾らず、気取らず、自分の想いをいった

「交わした約束を守るため。自分の信念を貫くため。俺はいまだに此処にいるんだと思います。」

約束は信念へと昇華され、自分の中に一本の決して折れない想いへと変わっていった

そんな俺を見て、輝夜さんは笑った。バカにしたような笑いではなく、おかしそうに笑った

「変わってるわね、あなた。けど、あなたのような男は嫌いじゃないわ。ペットにしたいくらいよ。」

＞ｉ２７５５―２９９２＜

なんだろう……。褒められてるのに素直に喜べない。

「ペットですか……」

「ええ、毎日遊んであげるわ。色々と教えてあげるわよ」

ほんと幻想郷の女の子達はわからない。中学生にたじたじの高校生ってどうなんだろう。

「えっと……遠慮しておきます。色々と後に戻れなそうな雰囲気が

ありそうなので。」

だから舌舐めずりなんてしないでください。

ひとしきり俺をからかって満足したのか、輝夜さんは大きく欠伸を開けて月を見た。俺もそれに合わせて月を見ようと思ったが、遠くのほうから俺を呼ぶ霊夢の声でそれは中断された。

「霊夢が呼んでいるので、今日は帰ります。本日は招いてくれてありがとうございました」

「ええ、こちらこそありがとね。……ああ、それと、鈴仙のこと頼んだわよ」

「へ？」

そのまま帰ろうとした俺の足が思わず止まる。

何故ここで鈴仙が？

輝夜さんは俺のことなど気にせず、一方的に喋る

「あの子と近すぎる私達じゃ、あの子の顔を上げるのは難しいのよ。その分、あなたなら問題なさそうだし」

あの子は、大切な家族なんだから――――

それだけ言って黙る輝夜さんに俺はその真意を聞こうと試みるも、業を煮やした霊夢がこっちに来たことで聞くことができずに終わってしまった。

そして引っ張られる俺を見ながら手を振る輝夜さん。

まるでドナドナみたいである

▽　　▽　　▽　　▽

帰りは霊夢におんぶされて博麗神社への家路を急いだ

ふと先程見ることができなかった月を見上げる

「なぁ……霊夢」

「なによ」

おんぶより抱っこがいいと駄々をこねたのを俺が却下したから、少しだけ機嫌が悪いようだ。

「月ってあんなかんじだっけ？」

俺の瞳に映る月はあんな感じだったかな？

自分の見ていた月がどういったものだったかもわからないまま、俺は博麗神社へと帰って行った。

## 25．かぐや姫（後書き）

ペットってことは襲っても罪にならないんだよな。

あ、近々吾木香とサイトを作ります。

更新はそちらをメインで。ここにはまとめて投下することになります。

# 26. 隠れた満月

日が沈み、黒の世界が辺りを支配し魑魅魍魎が跋扈しはじめてきた時間。幻想郷の境目に位置する家で一人の女性が空を見上げていた。綺麗な金髪に、右手には扇子を携え、その女性はただただ黙って空を――――月を見上げていた。

「まさか月を隠しちゃうなんて大それたことするとは……それも霊夢にも気づかれることなくね……。まぁ、彼方はおしいとこまではいったわけだけどね」

「紫様。流石にこうも続くと私達妖怪としても困るものが出てきますよ。……どうしますか？」

本来、異変に対しては妖怪である八雲紫は関わらない。その役割を担うのは博麗神社の巫女である、博麗霊夢の役目である。――――――が

「人間としては、さして問題ないことですものね。……しょうがない、今回ばかりは私も動くことにしましょうか」

「おや、紫様で参れらますか。お供は必要ですか？」

「大丈夫よ。流石に私一人は……ね。あくまでサポートよ。解決するのは人間よ。それじゃ、行ってくるわね」

「お気をつけて」

スキマを開きその中へはいっていく紫をうやうやしく見送る紫の使い魔、八雲藍。スキマが完璧に閉じ、その不気味な目が消えたときに下げていた顔を上げ、小さく息を吐いた。

「今晩は徹夜ですかね」

主人が働いているときは自分の共に起きている。主人が寝ているときは自分が代わりに働く。それが使い魔、八雲藍である。

▽　　▽　　▽　　▽

人里より離れた所に点在する神社、博麗神社。

もう時刻にしては寝てもおかしくない時間帯なのだが、一つの部屋には明かりが点いていた。その部屋の中には、一人の少年と、まだ

あどけなさが残る、少女がいた

「ねぇ、彼方……。もっと……出していいのよ？　私はまだまだ頑張れるから……」

「でも、霊夢……。俺は今日はもう無理だよ……。昼間だってあんなに激しくしたじゃないか……」

「でもあれくらいじゃ足りないの……。おさまらないの……。大丈夫、彼方なら出来るはずよ。ほら、まだまだそこは元気じゃない……。昼間にあれだけ激しくしたのに、もうこんなに元気になって……ほんと、彼方ったら……、ここなんてビクンビクンなってるよ？そろそろ我慢の限界なんじゃないの……？いいのよ、ほら、吐きだして……」

そういって彼方を見ながら、下唇を舌でペロリと舐める霊夢

そんな霊夢の言葉を聞いて、彼方もいままで懸命に我慢していたのだが、既に限界に達していた体ではどうすることもできずに彼方は叫んだ

「もう限界だよ、霊夢！！――――――空気椅子で弾幕製作終わらせてもいいよねっ！？」

「まったく……しょうがないわね」

その言葉を聞いた瞬間に重力に抗うことを止めた彼方がどさりと畳に落ちる

「まさか……アレ以上に訓練が厳しくなるなんて……」

「だって……パチュリーにとられたみたいで悔しいじゃない。」

ぷいっと彼方とは反対方向を向く霊夢

「あら……紫いたの？」

「ええ。あなた達がいかがわしいことをしているのかと思って、隠れてみていたの」

振り向いた霊夢の前方、見慣れぬものなら卒倒してしまいそうなほどのおびただしい目の中から幻想郷の管理者である、八雲紫が扇子で口元を隠しながらくすくすと笑う

「べ、べつに私達はそんなことしてないわよ……！」

「あら、声だけ聞いたらそうだったから、すっかり私はお邪魔なのかと思ったわよ」

「はぁ……はぁ……、これは筋肉痛で永遠亭に行くハメになりそうだ……。って、あれ？紫さん。こんな夜更けにどうしたんですか？もしかして眠れない……とか？」

「ふふ、こんばんは。彼方、私達妖怪にとって夜こそが活動時間なのよ？」

「あ、そういえばそうでした……」

目の前で上品に笑って見せる紫さん。こんなに綺麗な女性だからついつい忘れがちになるけど……紫さんって妖怪なんだよな。しかも幻想郷内でも上位に入るらしいし。

「けど……そうねぇ……。なんだか身体が火照って眠れなくなってきたわ。彼方、責任とってくれるかしら？」

「な、なんで俺なんですかっ！？」

にじりよってくる紫さんから遠ざかりながら叫ぶ。

「え……？」

後ろ手でシャカシャカと逃げていたのだが、ふと畳に触れている感触がなくなったことに驚き、したをみようとすると

「いやんっ。もう、彼方って大胆なのね。……本格的にわたしのここも疼いてきちゃったわ……。ねぇ、責任とってくれるかしら？」

俺は紫さんのスキマによって移動され、その終着点に紫さんの胸があり、おもいっきりわしづかみしていた。

紫の胸を掴んだまま固まった彼方に、紫は腕を首に回して彼方をその胸で沈みこませ、彼方の手をそのまま自分の腰より下に持っていく

「あんたはなにしにここにきたのよ！」

ところで、後ろに立っていた霊夢から蹴りをいれられ、可愛らしい声を出しながら彼方を離した。

「いったぁ～いっ！もうなによ、霊夢！」

「それはこっちのセリフでしょ！！」

「きゃぁ～！彼方～！霊夢がいじめるわ～！」

いまだ固まっている彼方に抱きつく紫

「彼方！！」

「えっ！？俺！？」

いきなり霊夢に睨まれてたじたじの彼方。そんな彼方をニヤニヤした顔で見つめる紫。

――――おかしい

なにが？　そう聞かれると具体的なことは言えないけど、いつもの紫さんじゃないことは分かる。

「……紫さん、どうしたんですか？　なんというか……いつもの紫

さんじゃないというか、焦ってるというか……とにかくいつもの紫さんじゃないですよ？」

心配そうな声を出す彼方に、紫は少しの間呆然とした顔をしたが、それもすぐに消え、笑顔を浮かべた。

「ふふ、優しいのね彼方って。でも大丈夫よ」

ほんとよくきづく子ね。大変な時期でなければもう少しこうやっていたいところだけど……残念ながら時間がないものね。

「ねぇ、霊夢？」

「なによ？」

「月、きづかないかしら？」

上を指さす紫につられ、霊夢は縁側へと足を進めそのまま真上を見る。そこには、夜の闇を優しく照らす月の姿があるばかり。

「……これは……！」

目を細め、月を凝視していた霊夢はハッと何かに気付き、後ろ……紫のほうを振り向く。

「やっと気付いたのかしら？……まあ、人間である霊夢達には関係ないことだから、これにかんしては責めるつもりなんてないけどね。」

妖怪である紫達にとって満月は死活問題である。

「それで、博麗の巫女はどうするのかしら？」

あくまで霊夢を挑発するようかのような紫

「行くしかないでしょ」

霊夢はため息をついて支度をする。

▽　▽　▽　▽

夜の迷いの森に、人形を肩に乗せて歩く少女が一人。

「まったく……。自分では手詰まりなのがなんとも情けないわね。不本意だけど魔理沙の力を借りるしかないわ。」

歩くこと数分、人形使いのアリスの眼前には一つの家が建っている。その扉をアリスはコンコンと叩きながら用がある人物の名前を呼ぶ

「魔理沙―、いるかしらー？」

『おーう、ちょっと待ってくれ！』

ドタドタドタ！

ノックをして数秒も経たない内にこの家の主人である、霧雨魔理沙がひょっこりと顔を出す。黒い帽子はかぶっておらず、水分を含んだ髪の毛と首にかけてあるタオルからもしかして風呂上がりであろうか。

「あら、もしかしてお風呂上がりだったかしら？　それなら少しだけ悪いことをしたわね」

「いや、きにしてないぜ。それよりどうしたんだ？借りてる本ならまだ読んでないから返さないぜ？」

「それはいつか返してもらうからいいわ。それよりも……ねぇ、魔理沙？」

「ん？」

「たまには身体を動かしたくない？」

▽　▽　▽　▽

真っ赤に染まった紅茶を片手に月を見る吸血鬼が一人。その瞳に映るは夜を明るく照らす月。

「なかなか面白いことするわね。わたしに断りもなく月をどうこうするなんて」

口を三日月のようにして嗤うレミリアに、紅茶のおかわりを注ぎに来た咲夜は話す

「もしかして……お嬢様、行く気じゃありませんよね？」

引き攣った笑みを浮かべる咲夜にレミリアは爽やかな笑みを浮かべ

「あとは頼んだわよ」

親指を咲夜に突き付けた後、背中の羽を大きく開き空へと飛んで行った。

困ったものだ……。額に手を当てた咲夜は、自分の主人に苦笑しながらもその後を追う。あんな主人なんだ。一人にさせておくとなにをしでかすか分からない。

空を飛ぶ寸前、咲夜は思い出したかのように手を誰もいない空間へと振った。

▽　▽　▽　▽

「あの……幽々子様、ほんとうに行かれるんですか？」

「ええ、もちろん」

「本当のほんとうにですか？」

「本当のほんとうによ」

白玉楼の門の手前、白髪おかっぱで此処の庭師である魂魄妖夢が主人である、西行寺幽々子を止めようとしている。しかし当の本人はそんなことなど、どこ吹く風でニコニコ顔で妖夢の通せんぼを押し通す。

「ちょ、ちょっと幽々子様!?目的とか、目星とかついてるんですかッ!?」

幽々子の笑顔に負けて、あっさりと押しとおされた幽夢が後ろから困惑気味に問うが、幽々子はかわらず、笑顔を浮かべて

「大丈夫よ、大丈夫。飛んでいるものを全部落とせばいいんでしょう?」

怖いことをいった。

意気揚々と屋敷を飛びだす主人をみながら、妖夢はなんとも微妙な気持ちで空へと駆けて行った。

様々な思惑が交差する中、本物の月を取り戻すため、妖怪と人間という異色のペアが幻想郷を巡っていくのであった。

▽　　▽　　▽　　▽

「……また留守番か」

そしてこの男も、部屋をぐるぐると回っていたのであった

## 26．隠れた満月（後書き）

今回は短め。　よーしっ！行くぞー！　みたいな感じの。

サイト作るのって難しいですね、四苦八苦ですよ。　そしてスカイプ接続ができなくてテンションガタ落ちですよ。

## 27．姫の気持ち／こりない馬鹿

霊夢と紫が博麗神社を出て異変を調査しに行っていたそのとき、彼方は一人ポツンと先程までいた部屋に取り残されていた。正確には留守番を任されていた。しかしこの男、この前の春雪異変からもわかるように留守番を任されたからといって、その任を忠実にこなす男ではない。本人は自覚がないが、進んで地獄のような道を進む男なのだ。弱いにもかかわらず。

「……さて、俺も行くか」

ふいに立ち上がり、部屋を出て霊夢から借りている自分の部屋へと進む。

「えっと……パチュリーと作ったスペルカードはっと……」

自分の棚の中をゴソゴソと探しながら、パチュリー指導の元、作ることとなった新しいスペルカードを探す。

「お、あったあった！」

そして一枚の札を取り出し、ポケットに入れる。そのときにホルスター越しに伝わるハンドガンの感触に思わず笑みが零れる。　大丈

夫だぞ、お前の傍には俺がいるからな。まるでハンドガンがそう彼方に言い聞かせている気分に陥る。

「さてと……いってきます」

誰もいない博麗神社に向かって小さな声で言う。もちろん返事は返って来ない。

そして石段をゆっくりと降りて行く。

「（光波動のパワーが安定しないからな、このスペルカードが頼りだぜ）」

彼方が向かう先は一度足を踏み込んだら、幸運の兎に出会わなければ帰ってこれない。そんな竹林だった。

▽　▽　▽　▽

夜の帳の中で紅白の腋出し巫女服を着て、異変の解決に乗り出した博麗霊夢。その顔はどこか浮かない顔をしていた。

「あら、どうしたの霊夢。なにか心配ごとかしら？」

「いや……そうじゃないけど。なんか胸がざわつく感じがするのよね。」

問われる問いに対して首を傾げながら、なんともスッキリしない返答を返す。自分自身でもよくわかっていないのだろう。

「ふ～ん……。まぁ、貴女がいうのなら何かが起こるのでしょうね。とっても厄介なことが」

「これ以上に厄介なことってなによ……。この異変の時点でだいぶ厄介なんですけど……」

うんざりとした表情で答える霊夢に、紫はくすくすと笑って見せた。

「それで、どこに向かっているのかしら？」

霊夢の隣をついていく紫は、霊夢が先程から一切の迷いや躊躇いもみせずにもくもくと前へ進んでいることから異変の元凶元へ進んでいるのだと確信して話しかける

「永遠亭よ」

「根拠は？」

「巫女の“カン”」

そう言い切る霊夢。普通であるならばカンなんて信じるか？と思わるが異変に関しての巫女の“カン”は異常ともいえる正確性を秘めている。そして紫自身も月に絡んでいることから、今回はあの二人が犯人であろうことは推測できた。遥か昔、妖怪を率いて攻め入ったが、その圧倒的な科学力で負けてしまった相手。月の住民であろうと

▽　▽　▽　▽

「やあ、彼方。どうしたんだこんな所で？」

神社を出て、いざ竹林に入ろうとした矢先後ろから声がしたので振り返ってみると、俺の仕事場の上司にして人里の守護者である上白沢慧音さんが立っていた。

「あれ？慧音さん。慧音さんこそ何をしているんですか？」

「私か？私は……まぁ、ぶらぶらとな。」

なんとも歯切れの悪い慧音さん。こうして困った顔をみるのは珍しい。フランちゃんに子供はどうやって産まれるのか聞かれていた時依頼だな、こういう表情をみるのは。

「いいんですか、人里のほうは？今は異変の最中ですから人里の人達も慧音さんが居なくと不安だと思いますよ？」

「いや、それに関しては大丈夫だ。妖怪達が絶対に手を出せない所に皆非難させているからな」

自信満々にいう慧音さん。……しかし幻想郷にそんな安全地帯なんてあったかな？どこもかしこも妖怪だらけだと思うんだけど……。慧音さんがそういうならそうなんだろう。

「それに君こそなんなんだ。異変の最中に出歩いて、冬の妖怪のときのように死の一歩手前……なんてことになったら今度こそ、色んなところから君は監禁あるいは監視されてしまうぞ。霊夢からもあの時は大目玉をくらったそうじゃないか」

う〝っ……。そいえばそうだった。あのときの霊夢は怖かったからな～……。それにこっちは留守番を任されている身だし。また勝手に家を出たなんて知られたらえらいことに……。それだけじゃなく、

手前みそな話になっちゃうけどフランちゃんは俺のことを慕ってくれてるみたいだし……。もしも俺がまた危ない目に会ったと分かったら眷属にしちゃうかも……いや、流石にそれはないか。

「あの……このことは内密に……。慧音さんの仕事を手伝うという形で手を打ってもらえませんか？」

「はぁ……。わたしの前で買収か？」

色々考えた結果、慧音さんには見てないことにしてもらおうとしたのだが、とうの慧音さんはそれが気に入らなかったらしくすごんできた。……めっちゃ怖い。

慧音さんの眼力をみて、身を震わせる俺。　そんな俺をみて慧音さんはふぅ……。とため息をついた。

「まったくお前には呆れるよ。……今回だけだぞ？」

そういってそっぽを向いてくれた慧音さん。やっぱり話が分かる人だな。

「ありがとう慧音さん！」

俺を抱きつきたくなる衝動を押さえながら頭を下げ、竹林の中へと入って行った。

さてと……あの人に問いただないといけないことがあるんだ。少しだけスピードを上げよう。

去っていく彼方を慧音は黙ったまま見送る

「……そういえば、彼方がここに来る理由とはなんだろうか？」

異変を解決？　それは巫女が乗り出している。その他にも色々な奴らが乗り出しているみたいだし、その線は薄いだろう。

筍でも食べたくなった？　いや、流石にそれはないか。

それともいかがわしい理由とか？　いや、その線は……だが彼方も男であることはかわりないし……。

うーむ……。妹紅も心配だが、彼方はもっと心配だ

「心配だ。隠れて様子をみていよう」

彼方が視界に消えてからまだ数分も経っていまい。探せばまだ近くにいるだろう。

私は飛びだした妹紅も探すのを一旦止めて彼方を探すことに専念した。

▽　　▽　　▽　　▽

「ときにお嬢様」

「なにかしら咲夜？」

「先程から色々な所を飛び続けているのですが……目星はついているのですか？」

「う～ん……とくにないわね」

「……ないんですか」

先程から異変によって活発化している妖精を倒しては、また次の場

所にふらふらと向かい、そこでみつけた妖精を倒してはまた別の場所に赴く。紅魔館の主、レミリア・スカーレットは先程からそんな調子でいる。そしてその後ろは咲夜は黙ってついていく。

「けどそうねぇ……あっちらへんとか怪しいかもしれないわ。行きましょうか、咲夜」

「はぁ……」

しばし考えたかと思うと、レミリアはいきなり指で方角を示し、その背中の翼を大きく羽ばたかせいった。　そんな主を咲夜は少しだけ気の無い返事をしながらも、ついていった。

レミリアが指した方角は奇しくも迷いの竹林であった。

――同時刻――

レミリア・咲夜が竹林に向かった頃、魔理沙とアリスもまた迷いの竹林を目指していた。

「はぁっ？満月がなくなったぁ！？　いやいや、満月ならあるじゃねえか、ほらっ！」

「だーかーらー、それが違うって言ってるのよ！　魔理沙は人間だからわからないかもしれないけど、私達からしてみればわかるのよ、その違いが。　ただ……今回は巧妙に隠されていて皆、気付かないけどね」

「ふ～ん……。あぁ、改めてみると、確かにそんなきがしないでもないぜ」

魔理沙は帽子が落ちないように手で押さえてから、満月を見上げる。道中、暇なので何故、自分を誘ったのか、だいたいどういう状況なのか教えてもらっていたわけだが……。

「なるほどねー。それで、アリスは自分で調査して解決しようと思ったけど自分一人の力だけでは無理があったから、私に助力を頼んだと。」

「う、うるさいわね。　しょうがないじゃない、私だってこの異変は早々に解決したいんだし……。　ってなに笑ってんのよ！？　なにか文句でもあるの！？」

自分の髪を手でいじり、くるくると指に絡めて言い訳気味になりながら、喋るアリスを魔理沙は隣で笑う。　その笑いにアリスが気付き、魔理沙に向かって少し語調を強くする。

「いやいや……、アリスって本当にあたしがいないとダメだな、と思ってさ」

アリスに向かってウインクを決める魔理沙。　そんな魔理沙にアリスは頭を抱え、嘆息を漏らす

「それはこっちのセリフよ。　本は借りっぱなし、部屋だってゴミゴミしてるし、食事だって摂ってないときはあるし、睡眠だってそうでしょ？」

早口でまくし立てるアリスに、魔理沙はほんの少しだけ自分との距離を離す。

「それに食事だってキノコばかり――って魔理沙どうしたのよ？」

「いや……どうしてアリスがそこまで知ってるのかな～、っと思って。正直、少しだけ怖いぜ……」

「なっ！？なにいってんの！べ、べつにあんたが不健康な生活を送って病気にならないか心配でこっそり様子を見に来るとか絶対にないから！」

「あ……うん。」

なにか怒られたけど、さっぱりわからないけど、心配して見にきてくれるってことでいいのか？

しかし……満月ねぇ……。　あたしとしては、それよりも少し気になることがあるなぁ。

「なぁ、アリス。ちょっと気になることがあるから、そっちを先に調べたいんだけどいいか？」

「？　別にいいけど……そんなに大事なの？」

「まぁ、ある意味な」

推測の域を出ないけど……まさか……な

▽　　▽　　▽　　▽

「やべぇ、迷った」

竹林を歩きはじめてどれくらい経っただろうか？　さっきから時間の感覚があやふやになってきた。　外の世界ではこういうときは携帯を開いて時間を確認すればいいんだけど……あいにくこっちにきてからはすっかりいらないものになったから、持ってきてないし、電池も切れてるよな。

それにしても……夜の竹林……にかぎらず森なんかはなんでこうも怖いのか。昼はそうでもないけど、夜となると表の顔を引っ込め、裏の顔を盛大に出してくる。　いまにも襲いかからんとするか、はたまたこの迷路からの脱出を拒むかのように思えてくる。

「なーんてな。そもそも俺は用があるわけで進まずにはいられないわけよね」

自分中にある、ひとかけらの勇気を抱きしめ、わざと楽しいことを考えながら俺は歩みを進める。

「にしても……ほんと此処って不気味だよな。いまにも誰か背後から襲ってきそうだよ」

あるわけないと分かっていながら俺は両手を横にしてやれやれと頭を振った。

「あら、中々の予感的中率をお持ちのようで。」

「……え？」

「フリーズ。夜の散歩はどうだったかしら、不知火彼方？」

俺の背後から誰かが指を押し付けているのがわかる。　そしてこの声にも俺は聞き覚えがある。

「やあ鈴仙。奇遇だね、こんな所で会うなんて。どうだい、俺と夜の散歩と洒落こもうぜ」

鈴仙に言われたとおり、俺はその足を止め、無意識に両手を上げながら慣れないアプローチというものをやってみたのだが……

「残念ね。あなたがもう少しかっこよかったらその話に乗ったけど――――」

鈴仙の言葉が途切れるとともに、俺の背中に痛みが発した。

「う……がっ！」

なにが起きたのか、俺はその疑問を持つ間もなく一気に前に倒れ込んだ。　背中を押さえながら俺はホルスターに差してあったハンドガンを抜き、構える。

「――――私、あなたみたいな人間、そもそもタイプじゃないの」

「はは……。それじゃ、俺がどれだけカッコ良くなっても意味ないじゃないか」

まったく……。恨むぜ？　輝夜さん。　俺と鈴仙の相性は最悪なんだからさ。

▽　　▽　　▽　　▽

永遠亭の一室にて、向かい合うように八意永琳と蓬莱山輝夜は座っていた。

「動きがありましたね」

「ええ、そうね。まぁいつかは気付かれることだったしいいんじゃない？　それよりも向かってくる相手よね。どっちが相手するかしら？」

「そうですね……。では、私が行きましょうか？」

「それじゃ、よろしくね」

最小限の会話だけで、席を立ってしまう永琳を輝夜は既にみていない。

すると、何かを考えていた輝夜は盛大にため息をついて、おそよ姫には似つかわしく動作で頭を掻きむしった。

「あぁ……あの子に鈴仙を任したのは少し危険だったかもしれないわ。いまさらになって不安になってきたわ」

一度はあの子に任せたものの、後から永琳にそれとなく聞いてみたら鈴仙以下の戦闘力みたいだし……そもそもあの新聞の記事を鵜呑みにしたのが間違いだったかもしれないわ。鈴仙もあの子のこと毛嫌いしているみたいだし……。　鈴仙は此処に来る前はエリートの軍人。いくら妖怪と人間が公平をきすための弾幕勝負といっても、地盤が違いすぎるわ。けど……いまは彼に賭けるしかないのも事実なのよね。

「すこし……様子を見てこようかしら」

カラカラと障子をスライドさせて誰もいない廊下を歩く。

「あの子が此処に来て、何年経つのかしら？」

『助けてください！』

そういって私の目の前で倒れながらも、懇願した兎。

“レイセン”という兎。

「あなたはあれから一度も笑った顔をみせてはくれないわ。」

私はわがままな姫だから、あなたが嫌といっても笑顔をみるまで止めないの。

本当の笑顔をみるまで、伸ばしたこの手を気付くまで決して止めないわ。

▽　　▽　　▽　　▽

その頃の幽々子ペア

「このウナギおいしいわー！　もっとおかわり頂戴！」

「はい！ありがとうございます！」

「あの幽々子さま……。当初の目的忘れてませんか？」

偶然みつけたウナギ専門の屋台で舌鼓をうっていた。

幽々子&妖夢ペア

離脱

## 27．姫の気持ち／こりない馬鹿（後書き）

更新しないのはお門違い。

ということで、まだまだかかりそうなので、こっちで通常更新。

輝夜の気持ちをギャル高校生風にすると

「まじさ～、鈴仙ってさ～、うちらとつるんでから全く笑ってなくなーい？　ちょっとそういうのあたし～、嫌いだから～、そこのバカ使って笑わせちゃおうぜ」

みたいな感じ。

ちょっとずつ原作と違っていくわ。原作愛してる人、まじすんません。　これからどんどん、違ってくるから今のうちにバックしたほうが吉ですぞ。いや、まじめに。

## 28．月の頭脳

神社を出てからどれくらいの時間が経っただろうか。異変のせいで活発化した妖精を倒し、永遠亭へと進路をとってどれくらいの時間が経っただろうか。

「ねえ紫。さっきから気になっているんだけど……」

「ええ、私もよ。なんで夜が止まっているのか。けど、早急にこの異変を解決しなければいけない事態が増えたことだけは確かね」

「あー……やっぱり。それにしても、さっきから出会うのは活発化した妖精ばかり。そろそろ飽きてくるわね」

「そうはいってもねえ……。」

いかにもうんざりした口調の霊夢が、これまたうんざりした目で紫をみる。　紫はなんとも苦笑い気味な顔である。

「あたしも丁度、飽きてきたところだったんだ」

霊夢と紫の所に星の形をした弾幕が突如降り注ぐ。

緑・赤・青・黄・白

綺麗な色をした星型の弾幕は霊夢と紫目がけて、さながら流星のごとく降り注いだのだが――――

「は～い、ここはおまかせ」

紫のスキマによってことごとく吸い取られていった。

「流石に一発で仕留めるのは無理があったぜ」

「いや、そもそもあんた反則になるんじゃないかしら、いまのは」

西洋の魔女が被るような黒いトンガリ帽子を指ではじき思案顔の魔理沙に、少し遅れてやってきたアリスがツッコミを入れる。

「ちょっと魔理沙。いまのはどういうことなのよ。」

そんな二人に紫のスキマによって守られた霊夢のイラついた言葉が飛ぶ。ただでさえ、異変の元凶のところまでたどり着いていなく、すこしばかりイラついているところにやってきた一発だ。霊夢のイラつき度も上がっていく。

「いや、丁度霊夢が通りがかってきてたから少しばかり話しを……と思ってさ」

「残念だけど、いまはあんたとお喋りしてるほど、余裕があるわけじゃないの。お喋りならこの異変が解決した後に付き合ってあげるから取りあえずそこをどきなさい」

シッシッと手で虫を追い払うような仕草をみせる霊夢。

「手早く済ませるからさ？　頼むよ、霊夢」

「……ったく、しょうがないわね。一分だけよ」

付き合わないと引かないだろう……そう判断した霊夢はほんの少しばかり魔理沙のお喋りに付き合うことにした。

「お、サンキュー。あたしが話すのはただ一つ。止めたのはお前か？」

「はぁ？止めたってこの夜のこと？」

「もちろん」

夜が止まったのは霊夢も気づいていた。しかしそれをいきなり現れて、犯人はお前だろ。そう言われるのは釈然としないものがある。

というか……頭にくる。

ゆえに霊夢が言い返す。

「なわけないでしょ。それより、あんたこそどうなのよ？　あんたが魔法で止めたんじゃないの？」

「おいおい、流石の私でもそこまでは無理だぜ」

片手をヒラヒラと振って、できないことをアピールする魔理沙。
ちなみに、アリスと紫は仲良く蚊帳の外。

「そ。それじゃ、あんたの話は終わったでしょ？　私達はもう行くわ。　いきましょ、紫」

魔理沙が知りたかったのは、霊夢が夜を止めたのか？　それについて霊夢は自分ではないと答えた。　そこで魔理沙の話は終了である。
そう思った霊夢は、横で黙って事のなりゆきみていたを紫に声をかけ、魔理沙の横を通り向ける。

――――と。通り抜けようとした、瞬間、ふいに霊夢が全力で横にのける

霊夢が数秒前までいた場所には弾幕。

「どういうことかしら、魔理沙。」

頬をひくつかせながら、声を震わせながら、なんとか魔理沙に説明を求める霊夢。

そんな霊夢に魔理沙はあっけらかんと答える。

「なーに、丁度ここで会ったんだし、弾幕勝負でもと思ってさ。お互い退屈してたんだしさ？」

「へー……、いいわよ。こっちも退屈してたのよね。」

「ちょ、ちょっと霊夢！？異変は……」

「大丈夫、すぐに片をつけるから」

魔理沙の挑発に乗った霊夢の肩を掴む紫に霊夢は爽やかな笑顔で返す。　頬を引きつかせながら。

そして始まる弾幕勝負。

巫女と魔法使いが夜空に星や針を散りばめる様子を眺めながら、紫は頭を抱えた。

▽　　▽　　▽　　▽

霊夢と魔理沙の弾幕勝負が始まった一方、こちらでもまた弾幕勝負が始まろうとしていた。

「ほら、咲夜。こっちには何かあったでしょ？」

「はぁ……まぁありましたね。異変の元凶が」

咲夜の眼前には弓を持った永琳が優しい笑みを浮かべていた。

「あらあら……大変だったでしょうね、此処まで来るのわ」

「そうでもなかったわよ。私からすれば簡単すぎるくらいかしら」

余裕たっぷりのレミリアに永琳は笑みを返すのに。

気持ち悪い。それが咲夜の第一印象だった。

自分の主人を前にしても決してその張りつかせた笑みを剥がすことはなく、ここからでも感じる強大な力を隠そうともせずにしていることを。

自分の髪と同じ色をしたこの女性を、十六夜咲夜はなんとなく気持ち悪く思った。

「ところで……一つ聞いてもよろしいかしら？」

「ええ、どうぞ。折角ここまで来たんですもの。なんなりと聞いてください」

「そ。それじゃぁ――――貴女が張本人かしら？」

スッ―とレミリアの目が細まる。　そんなレミリアを前にしても永琳の態度は変わらない。

「あらあら、異変にしたのはそっちじゃないかしら？　まったく、困ったものだわ」

あらあら、うふふ――――。まるで淑女のように笑う永琳

「あら、そうなの。まぁ……べつにいいわ」

「他に聞きたいことはないかしら？」

永琳の言葉にレミリアは童女のような頬笑みを浮かべ

「ええ、もうないわ。とりあえず、気にいらないから――咲夜、やりなさい」

「――仰せのままに」

悪魔のような指令をだした

レミリアが口にした瞬間、先程までレミリアの傍にいた咲夜が永琳の背後から現れ、その首を貫いうけようとナイフを一閃。なんともあっけなく、それでいて楽しくないものだ。そう咲夜は思った。

「……なっ……!?」

しかしその考えは甘かった。

咲夜が振り向いた先には、無傷の永琳がいて――もっていた弓を構え、自分という的に向かって矢を放とうとしていた。

「おしいわね――ほんとうに」

ふいに永琳の声のトーンが下がる。　そして放たれる矢。

夜を裂き、唸りを上げて咲夜に向かってくる。

「くっ……！」

その矢を左に全力で飛び退く形でやり過ごし、新しいナイフを手に持つ。

ドスッ――――

ふいに肩に何かが刺さり、その手にもっているナイフを落とす。

咲夜は舌打ちをして、前方ではなく後方へとナイフを投げ、自分はその場から急いで距離を離す。　咲夜が距離を離した瞬間、まっていましたといわんばかりに降り注ぐ、矢・矢・矢・

「あらあら……なかなか避けるのが上手いお嬢さんね」

咲夜の後方、咲夜が放ったナイフを片手で掴みながら永琳は咲夜をそう評価する。

「それはどうもありがとう……。けど、流石に貴女も飽きてきたんじゃないかしら？私が避けるばかりだと」

「ええ、ほんの少し。残念ね。まぁ、貴女のご主人様に期待するわ」

場からはナイフと矢がいつの間にか消えていて、咲夜と永琳。そしてそれをほんの少し遠くで腕組しながら見守っているレミリア。

それにしても――――

永琳は改めて咲夜をみる。あのポケットに放り込まれいる懐中時計や銀髪の髪といい……本当に似ている。　本当に私達に似ている。　まさか、この子も月の民？　いや、まさか。そんなことはあり得ない。あっていいはずがない。

「あら、どうしたのかしら？手が止まっていますよ？」

目の前の少女は両手にナイフを構え、余裕の表情をみせる。　さっきまであんなに苦悶に顔を歪めていたというのに……

「ごめんなさいね。こんなに従者が頑張っているのに、とうのご主人様はあんな所で腕組しているのが、可笑しくて。」

「あら？別になにも可笑しくないわよ」

咲夜がふいに笑顔になる。　その笑顔は背後に煌々と照らされる月による効果なのかわからないが、とても儚げで、それでも夜に美しく咲かす花のようだった。

その笑顔をみて、レミリアが口を動かす。　それは本当に小さな小さな声量で、レミリアの口元に耳をもっていかなくては聞こえないほどの声だった。

一人の従者を除いては――

「了解です、お嬢様。」

咲夜の手からナイフが消える

「あなた――その眼ッ！？」

永琳は驚く。

いきなり咲夜の手から消えたナイフではなく――

いきなり眼前に現れた咲夜ではなく――

自分をみる咲夜の眼に驚いた

赤く――

紅く――

透き通るような、赤い紅

人間の血よりも、妖怪の血よりも、綺麗で鮮やかな、そんな眼で永琳を凝視していた。

「さっきの話の続きで悪いけど……お嬢様はなにも可笑しくないわ。」

だって――――私が貴方に勝つのだから

幻葬『夜霧の幻影殺人鬼』

夜霧に混じり、幻を魅せ、影の中へと入り込む殺人鬼のように――――

動くさえ、ままならないほど、目を開けることさえできないほど、正常を保てないほどのナイフが永琳を襲う。

それはあたかも磔のように――――

――――その身へと群がる

そんな状況下でも、永琳は笑い、初めて嗤う。

隠していた牙をさらけ出すように、はじめてその張りつかせた笑顔を脱ぎ捨てた。

幻影には見向きもせずに、敵に狙いを定める。的に狙いを定め、穿つ――――

天呪『アポロ１３』

それはさながら侵略者のように――――

届かない天へと向けて呪いを放つかのように、その一筋はナイフの軍勢を蹂躙し、貪り、喰い散らかし、咲夜へと向かう。

「ちッ――――!?」

それをみて、たまらず時間を停止させて避けようとする咲夜に永琳が間をおかずして矢を放つ。

「面白い能力を持っているみたいだけど、それってかなり集中が必要なんじゃないかしら」

「ええ、ご名答。それにしても、あの馬鹿から聞いていた情報だと優しいお医者さんじゃなかったかしら？　それともそれが貴方の本性なのかしら？」

「さあ、どうでしょね。　私を倒すことができたら教えてあげるわよ」

天へと向かって矢を放つ――――

それと同時に咲夜は時間を止め、永琳の背後へと回り込む。　そこで、世界が動きだす。

咲夜の眼前には永琳が弓を引いてまっていた。　まるで、咲夜がそこにいるとわかっていたように。はじめから知っていたみたいに。

「なッ……！？」

その驚きが勝敗を決した。

天に向かって放った矢は、その頂きに届くことなく落ちていき、咲夜の肩を刺した。

完敗だった

その頭脳の前には時間すら敵わなかったのだ

呆然とする咲夜をみて、永琳は構えを解いた。

「ねぇメイドさん。あなたは何者なのかしら？　その髪、その眼、その時計。　彼も気になるけど貴女も気になるわ。貴女は何者なのかしら？」

咲夜は答えない。　言いたくないのか、言えないのか。

そんなとき、咲夜と永琳以外の声が入る。

「その子は十六夜咲夜。夜の支配者にして、絶対的な強者。紅魔館の主、レミリア・スカーレットの忠実にして、最高の従者よ。　悪いけど、その触れようとしている手をどけてくださるかしら？」

その声に、竹林がざわめき、鳥が慌てて逃げるようにこの場を去り、妖精が怯え、妖怪が本能的に死を感じた。

「咲夜、お疲れ様。ゆっくり休んでいいわよ。」

瞳孔が縦に割れ、その瞳は紅く

「ああ、けど終わったら後には紅茶が飲みたいからそこだけは用意してくれるかしら」

その爪は、肉を裂き、抉り

その牙は、皮膚を破き、血を吸い、ときには滴らせる。

「ここから先は私ということでいいかしら？」

「ええ。時間潰しのはずだったけど……とても有意義な時間が過ごせそうだわ」

かつて幻想郷を相手どった吸血鬼が、今宵は月の民を相手どる。

## 28．月の頭脳（後書き）

更新が遅れて申し訳ない。

霊夢と魔理沙のバトル、そしてレミリアと永琳のバトルはここでおしまいにします。　原作キャラの強さは、皆さん色々言いたいことがあると思いますが、ストリーに合わせています。そこをご了承ください。

さて、永夜異変ももうすぐ終わりますが挿絵を頼んでおりますので少し更新が遅れることとなります。　長くなりそうなので、もしかしたら二話に分けるかもしれませんが。

ではでは、今回はこの辺でノシ

# 29．狂気に隠された本音

ときは少し前に遡る――――

空で咲夜たちが交戦しているとき、地上でもまた一つの戦いがはじまろうとしていた。

異変の調査に向かった霊夢より、留守番を任された外来人である不知火彼方は見事にそれを無視して迷いの竹林へとやってきた。

夜の竹林は見る者に恐怖と混乱をプレゼントし、希望と勇気を奪い去っていく。　もちろん、空を飛べるものたちであるならばそこまで怖くはないだろう。　しかし、空を飛ぶ術をもたない者達としては怖いことこのうえない。　不知火彼方もそんな者の一人であった。

はじめは笑いながら進むことができた。　しかし、時間が経つにつれその笑いは乾いた笑みへとシフトチェンジし、『大丈夫、なんとかなる』という思いは『不安』に変わってしまった。　こんなことなら、やっぱり慧音さんについてきてもらったほうがよかったかな？　と考えはじめていた頃、彼方を探し、見つけたものがいた。

弾幕というプレゼントを持参して

▽　　▽　　▽　　▽

突然の背後からの弾幕を受け、負傷しながらも自分もハンドガンを構える。

「おいおい……いきなりの攻撃は卑怯じゃないか？　鈴仙さんよぉ」

いまだに痛む背中をそっとさすりながら、自分の目の前で指を銃の形に構えている鈴仙に向かって話しかける

「あら、ごめんなさいね？　嫌いな人から気色悪いナンパをされたので、ついつい勝手に手が動いちゃったわ」

笑いもせず、怒りもせず、鈴仙はただひたすらに無表情で彼方をみていた。

「それは災難だったな。」

「ええ……本当に――――災難よね」

言い終わると同時に鈴仙の指から弾幕が放たれる

「うおっとッ！？　てかあの形どっかでみたことがある――――」

鈴仙の弾幕を右に避けることで間一髪かわした彼方は、いましがた通過した弾幕をみながら呟く

「（あれは……銃弾――――じゃなくて座薬っぽいけど……）」

鈴仙の弾幕って座薬みたいだね！　なんて言うことはできないだろうな。　ただでさえ、嫌われてるのに、そんなこと言ったら治療するときに毒でも塗り込まれそうで。

自分のそんな姿が安易に想像できるのもどうかと思うけど

「考えごとかしら？　よかったら私にも聞かせてくれるかしら」

「え……？」

弾幕の軌跡を追っていた眼を前方に向けてみれば、目の前には足を振り上げる鈴仙がみえる。

「いまは弾幕勝負の真っ最中よ！」

脳天を割る勢いで落とされる踵

「がッ……！？」

それに彼方は反応することさえもできず、地面に濃厚なキスを交わ

す。

鈴仙の攻撃はそこで終わらない。　地に伏した彼方に鈴仙は容赦なく弾幕を浴びせた。

▽　　▽　　▽　　▽

「分かっていたこととはいえ……ここまで一方的な展開になるとは……」

彼方の後ろをこっそりついてきていた人里の守護者である慧音は、目の前で行われた勝負をみてそう漏らした。

「いや……そもそも勝負にもなっていない」

鈴仙の弾幕を眼で追っている間に距離を詰められ、かかと落としを脳天に喰らい地面に濃厚なキスをした状態から動かない彼方。　ハンドガンを装飾銃に変えるする暇もない。　いっさいのタイムラグ

もなく流れるようで鮮やかな攻撃。　これが“差”なのだ。　こちら側とあちら側との明確な差。

「あら？ちゃんとやってるみたいね。……って、彼なにしてるのかしら。」

竹林の奥より響く若い声。　鈴仙達からの距離では聞こえることはないけれども、慧音からはその声が聞き取れた。　いや、むしろその者は慧音に声をかけていた。　綺麗な着物のような服を纏い、流れるような黒髪、可愛らしい声。　妹紅の天敵にして最大のライバル、蓬莱山輝夜が慧音にせまっていた。　鈴仙のほうに意識を向けながら、地面に倒れ伏している彼方を見ながら。

「いいところにきた、輝夜。鈴仙に一言いってくれないか？あれはいくらなんでも、彼方が可哀想だ。」

彼方達のほうを指さしながら隣にきた輝夜にいう。既に勝敗は決まっていた。　誰がみても彼方の負けだと。

「いったいなんのことかしら？」

「なッ……！？　大方、この戦いをしむけたのは貴様だろう！」

「ええ、確かに私は彼に鈴仙を頼んだわ。ただ……決めたのは彼」

そういって彼方の方を指さす。

「ほんと、男の子って強いわね」

▽　▽　▽　▽

身じろぎひとつしない彼方に冷たい視線を浴びせ鈴仙は、黙って後ろを振り向き去ろうとする。

自分の渾身の一撃を防御もなしに喰らったんだ。これが弾幕勝負なのかと問われれば違う気もするけど、いいだろう。そもそも、私と彼とじゃ話にならない。もう立ち上がってこないだろう。もう私に声をかけることはないだろう。　だがそれでいい。それがいい。私はそうやって今まで生きてきた。戦争から逃げた時から、私はそう

やっていきてきた。

鈴仙が歩く。一歩一歩、ゆっくりと。

「……まてよ……。まだ、終わっちゃいねえよ……」

声量は小さく、か細い声で、しかし透き通るように、染み込むように鈴仙の耳に頭に入り込んできた。

「はぁ……はぁ……。いまのは聞いたよ、美鈴もビックリなかかと落としだ。危うく脳天カチ割れるところだったぜ……」

よろよろの状態で、ふらふらになりながら、痛む頭をさすりながら鈴仙に声をかける。

「どこ……いくんだよ、鈴仙。俺はまだまだ戦えるぜ？」

「ふん……。あんたみたいな死にぞこないの相手をしている時間はないわ」

彼方なぞまるで眼中にないかのように、鈴仙は振り向くことなく歩き去ろうとする。

「逃げるのか？臆病者だな」

その一言が歩き去ろうとした鈴仙の足を止めた。　鈴仙は振り向く。その眼に狂気を宿しながら、憎悪を宿しながら、無知な人間を睨みつける。

「いま……なんていった？」

「あ゛？聞こえなかったのか、――――臆病者」

人にはトラウマというものが存在している。嫌な記憶、思い出したくない記憶、そういった記憶が生きていく中で存在する者もいる。
トラウマが全員にあるわけではない。世の中にはトラウマなぞ抱えずに日々を毎日を楽しく、おかしく面白く生きている人たちだって存在している。

「――――なにも知らない人間風情がッ！！」

ただ、鈴仙がその前者であったというだけの話である。　無知とはとても恐ろしいもので、知らず知らずの内に他人の心を抉り、犯し、掻きまわしている、いわば悪意なき悪である。

「私をそんな名前で呼ぶなッ！！」

『仲間を見捨ててまで、あなたは生きていたかったんですか？』

鈴仙の脳裏に浮かぶのは、遠い昔の自分の姿。　軍服に身を包み、銃を片手に戦場を駆け、自分が褒められることを夢に見、そのためだけにがむしゃらに頑張ったあの頃。

「ちッ……。やっぱ強いわ！避けるだけで精いっぱいだ……！！」

鈴仙の弾幕を紙一重のギリギリでかわしながら、彼方は自分の負けじと弾幕を撃つ。　その弾幕は鈴仙へと当たり、その身をふっ飛ばす――――はずだった。

「……え？」

吹っ飛ばすことはできなくても、少しよろけてくれることは予想できた。

避けられ、そのまま自分に攻撃がくることは予想できた。

しかし、鈴仙だと思って撃ったものが全く違う、木の枝だったとは予想できなかった――――

人間に限らず、自分にとって予想外なことが目の前で起こったら脳がそれを処理するまでのタイムラグがある。　彼方にとってそれはほんの少しだけのタイムラグであった。　しかし、鈴仙にとってみれば、そんな少しのタイムラグでさえ彼方へと接近し、その無防備な懐に弾幕をぶち込むことなど造作もなかった。　それどころか、その勢いのまま顔に爪先キックをお見舞いほどの時間があった。

「が……は……！」

無様に惨めに竹林の中を転がる彼方。　それでも落とさないようにしっかりと握りしめていた装飾銃をもう一度、掴み直して前を向く。

――――そんな彼方の眼に映っていたのは数えるのも嫌になってくるほどの弾幕だった。

「おいおい……こんなに大量の弾幕はちょっと無理っぽいんだけど……」

冷や汗をかきながら、ついついそんな言葉が漏れるほど、彼方の目の前は弾幕で埋め尽くされていた。

「ようこそ、狂気と凶器が入り混じる私の世界へ――――。」

狂符――――幻視調律＜ビジョナリチューニング＞

鈴仙の声とともに大量の弾幕が彼方へと降り注ぐ。

「チッ――――！」

なんとか右へとかわした彼方。　もつれそうになる足に力を込め、なんとかふんばりその場で回転。　自らも弾幕を放ち、鈴仙の弾幕を相殺する。

装飾銃より撃ち出された微々たる弾幕は、その勢いで鈴仙の弾幕に当たり相殺する。

それを眼で確認した彼方は、その場から急いで離れようと足を上げた。

その瞬間――――彼方の足に弾幕が飛来した。　それを受け、よろける彼方に猛追するように彼方の腹に肩に腕に足に鈴仙の弾幕を受ける。

「どう……して……？」

全身に弾幕を受けながら、彼方は疑問で頭がいっぱいだった。

――俺は鈴仙の弾幕を凌いだはずでは？

――この目で確認したはずだ。鈴仙の弾幕を俺の弾幕で相殺したことを

――なんで……？

うずくまる彼方に鈴仙は近寄り、そのまま強引に立ち上がらせる。

「不思議かしら、あなたの弾幕で相殺したはずの私の弾幕が相殺されずに貴方に襲いかかったことが。　不思議かしら、私と思っていたものがただの木の枝だったことが。」

「はぁ……はぁ……」

鈴仙の言葉に彼方は喋ることができず、必死に酸素を取り込もうと口を大きく開けるのみ。　そんな彼方の反応を無視して鈴仙は続ける。

「これが私の能力。あなたに幻覚をみせ、気の枝を私だと勘違いさせ、弾幕があると勘違いさせたの。」

そして鈴仙は彼方の瞳をみながら、ゆっくりと口を動かした。

――――ようこそ、狂気の世界へ

▽　　▽　　▽　　▽

「あ～……ちょっとこれはマズイわね……。完璧に鈴仙は倒しにきてるわよ。」

「なにを呑気にしているのだっ！早く止めないと彼方が死んでしまうぞ！」

「いやいや……流石に鈴仙も殺しはしないわよ……たぶん」

彼方と鈴仙の勝負を遠くから見守る二人の間でも、焦りと不安が出てきた。　それもそうだろう。弾幕勝負とは本来、“遊び”感覚で幻想郷の者達が使う手段である。　それが、今回のような幻想郷の事件でも使用されるだけであり、本来は“遊び”。

「たぶんじゃ心配なんだよ、たぶんじゃ！　鈴仙のあの表情を見てみろッ！　あれは明らかに殺す眼だろうッ！」

「いや……でも弾幕勝負は殺すことがないようにできたものだし……。」

「当たり所が悪ければ人間は死ぬことだってあるんだッ！　彼方は霊夢や魔理沙のようにできていないんだぞ。　このままでは死んで

しまうッ！」

頭をぽりぽり掻く輝夜に怒鳴り、単身で二人の間に割ってはいるべく駆けだそうとした瞬間、慧音の腕を誰かが掴んだ。　その反動で、くんッと戻されこけそうになる慧音。

「まあまあ……もう少しだけ様子をみましょうよ」

慧音の腕をとり、引っ張った犯人、漆黒の翼をはばたかせ片手にカメラを持ちながら笑顔で慧音を止める、射命丸文であった。

「きさまは――――」

「いや～、この異変は他の異変より事が大きいようですからね。私も独自に動いていたのですが。なにぶん、空は霊夢さんと魔理沙さんが勝負していますし、もう少しいった先にはおっかなくて近づきたくないほどのオーラを出した二人が、なにやら本気で勝負していましてね。　そんな時に貴女達を発見した次第ですよ。　あそこでボロボロになっているのは彼方さんですよね？　ちょっと写真撮っておこ」

ニコニコ顔で極上の笑みを浮かべながら隠し撮りを開始する文。

「それにしても、どうして彼方さんボロボロにされてるんですか？
これが霊夢さんなら分かるんですが」

シャッターを押す手を止めて後ろで、いきなりの文の行動に目を丸くしている二人に話しかける。

「もしかしてパンツでもみたんですか？それとも溢れ出る青少年の熱いパトスを押さえることができずにこんな所で押し倒したけど、相手が相手だけに逆に返り討ちにあったんですか？」

「いや……まぁ……ちょっとしたスイッチを踏んだというか、なんというか。」

どう説明しようか迷う輝夜。　そんな輝夜にすり寄る文

「も～、輝夜さんってば、少しだけでいいので教えてくださいよ。大丈夫、誰にも言いませんから」

「いや～……まぁ……うん。　ちょっと彼に鈴仙を頼んだんだけど……」

やっぱり難しかったかな～……。と愚痴る輝夜。その横でやっぱり自分が行く。と走ろうとしている慧音をまたもや止め、輝夜に笑顔を向ける。

「ああ、そういうことですか。　それでしたら、彼方さんは大丈夫ですよ。　あの人のしつこさと頑固なところと、貫くところは極一部では有名ですから」

▽　　▽　　▽　　▽

ひゅーひゅーという音をさせながら、彼方はじっと鈴仙を見る。その狂気で染められた瞳を。

「（こうしてみると……綺麗な瞳だな……。）」

満足に息を吸い込むことができずに、頭がぽ～っとした状態でそんなことを考える。

くっそ……。身体が思うように動かないや……。

腕に力を込めるも、手が震えるばかりで、ろくに力を込めることもできない。かろうじて、指に装飾銃が引っ掛かっている今の状態が奇跡である。

あ～……これはちょっとヤバイかも……。いまの状態で弾幕撃たれたら……

そんなことを思いながら、これからされるであろうことを予想していた彼方であったが、いつまで経っても鈴仙から何もこないので小首を傾げる。　すると微かながら、鈴仙の腕を通して彼方の胸ぐら

が揺れていることに気がついた。　ぷる……ぷる……ぷる……ぷる……と。

「（？……いったいどうしたんだ……？）どうした……鈴仙。手が震えてるぜ？」

その声に肩をビクッと反応させる。　と、思いきや直後に勢いよく放り出され、俺はなすすべもなく地面へと尻を強打した。

「へへ……どうしたんだよ？　もしかして、怖いのか？」

「……うるさいわね。その減らず口に風穴開けてもいいのよ？」

「それはごめんこうむるよ……。おっと……」

やばい……足に力が入らない……。　おかしいなぁ……これでも美鈴の特訓を受けているはずなんだけど……。ちょっとへこむかも、こんなに簡単にやられちゃうと……。

立っていられなくなってきた俺は、背中を竹にあずけるような形で座り込む。　なんとかして、足が回復するまで粘らなくては……。

「なぁ、鈴仙」

俺の呼びかけに鈴仙は答えずに黙って俺のほうを向いている。指を拳銃の形にしながら。　まるで、いつでもお前を倒すことができるんだぞ。と示すかのように。
それでもまだ、鈴仙が俺の方を向いているということは話しを聞いてくれるということ……だと思いたい。

「少しだけ、話しをしないか？」

「話すことがないわ」

「そうつれないこというなよ……。俺とお前の仲じゃないか」

「誤解されるようなこといわないでくれる？　それに、言ったでしょ？　私は貴方みたいなタイプが大嫌いなの」

一歩、鈴仙が俺に近づいて来る。　どうしたことやら……とりつくしまもないし、なんか、段々と吐き気もしてきた……。おかしいなぁ……。

「そういわずにさ。そ、そうだ、俺が此処に来る前のこととか話しちゃったりして……」

「ねぇ――――楽しい？」

「……へ？」

いきなりの鈴仙の質問に訳が分からず、変な声を出してしまった。

「ど、どうしたんだ？いきなり――――」

「ねぇ――――貴方は此処での生活が楽しい？」

はぁっ？いきなり何を言ってるんだ……。

「それは……確かに、外の世界の人達に会えないのは寂しいけど……。此処での生活も充分楽しいよ。霊夢がいて、フランちゃんがいて、咲夜や美鈴にレミリアちゃんに慧音さんや人里の皆に紫さん。みんな良い人たちばっかで、楽しいよ。」

ついつい、帰ることを忘れちゃうくらいに。

「けど、それは鈴仙だって同じだろ？」

俺は同意を求めるように鈴仙に渾身のスマイルを浮かべた。

「どうだろうね――――」

しかしそのスマイルは鈴仙の言葉であっさりと剥がれおちた。

――――その時の鈴仙の笑みは泣いているみたいだった

顔で笑って心で泣く。という言葉が咄嗟に浮かぶほど、鈴仙の表情は似合っていた。

そして小さく呟いた

「あなたなら――――、一緒だと思ったんだけどね」

それが出会ってから今まで、はじめてみた鈴仙の笑顔だった。

とてもとても――――不細工な笑顔だった

▽　　▽　　▽　　▽

「お～い、彼方さ～ん。生きてますか～？」

「ん……あれ、文……」

目を開けると、俺は上から覗き込んでいる文と目があった。

文は俺の頭のほうにしゃがみこんでいて、その……なんというか……パンツが丸見えである。

「あ、いまパンツみましたね？　お金払ってください」

「とんでもねえ商売だなっ！？　だったら、そんな短いスカート履くなよっ！？」

文のとんでも請求に俺は立ち上がり抗議をする

「ッ！？」

「こら、彼方。無理しちゃダメだぞ。傷はまったく癒えてないんだから」

「あれ……慧音さん。確か別れたはずじゃ……」

「いやっ！？まぁー、そのー、弾幕勝負の音が聞こえてきてな？

べつに黙ってみていたというわけでは……」

「は、はぁ……」

珍しいな。あの冷静沈着な慧音さんが慌ててるなんて。よっぽどのことがあったんだろうか？

ふと俺の手に装飾銃が無いことに気付く。

「あ、あれっ！？　俺の装飾銃は――――」

「はい、あっちに転がってたわよ」

俺が慌ててると、わざわざ拾ってきてくれたのであろう、輝夜さんが俺の装飾銃を渡してきた。

「ど、どうもありがとうございます」

俺は受け取り、その感触をしっかりと確かめる。　うん、やっぱり落ち着くな。

「こちらこそ、悪いわね。鈴仙のこと」

輝夜さんが困ったような、どこか申し訳ないような顔で謝ってくる。

「私の勝手なわがままで彼方には、こんな痛い思いをさせちゃって。後で因幡に薬を届けるからここで待っていてもらえるかしら？」

そうだ――――。俺はあの後、鈴仙の弾幕を至近距離から受けてそのまま昏倒したんだった。　だったら――――鈴仙はいまどこに！？

「鈴仙さんなら奥に行きましたよ」

まるで、俺の心を読んだかのように文が俺に向かっていってくる。

「そっか。サンキュ」

俺は文に一言だけそういって、奥のほうへと移動しようとする。
いや、正確には移動しようとした。

「まて、彼方。　これ以上は私が行かせない」

背後から声をかけられたと思いきや、力いっぱい後ろへと引っ張られ、勢い余って投げられる形で俺は尻もちをついた。

「いって……」

尻をさすりながら俺は目の前の人を睨む。

「なにするんですか、慧音さん」

「お前を行かせないようにだ」

「そこをどいてくださいよ」

「だったら、立つことだな。　もっとも、立てればの話だが」

慧音さんが俺を睨みつける。　正確には俺の足をだが。　まいったな……。慧音さんにはバレてたのか

「どうした？早く立ってみるんだ。簡単なことだろ？」

ほんと、慧音さんの洞察力には敵わないや。そして、意地悪だなぁ。
俺の足のことを気付いてそんなこというんだから　でも――――

「いやはや……ほんと、簡単ですよね。一人で立つなんて」

――――でも俺だって男なんだ。多少、骨が軋む音がしようとここで立たなきゃいけないんだ。

「おっと……」

「あやや。大丈夫ですか？」

「ああ、これくらいいつものことさ」

「まぁ……そう言われればそうでしたね。それで、今回もですか？」

「まあな」

呆れたように両手を肩まであげて、やれやれ……と頭を振る。

「でましたね、貴方の持病が」

「おい、その言い方はないだろ」

「まぁ、いまのは冗談として……本当にどうしたんですか？」

どうしたって言われてもなぁ……。

「そうだなぁ……パンツ……かな」

「「「は？」」」

「俺が鈴仙に昏倒される前に、チラってパンツが見えたんだけど…

…鈴仙のパンツの柄がさ、真ん中に兎がプリントされてあって、その周りに色んな人達がいてさ。　その兎、とっても嬉しそうにしてたんだよ。――――ってのは冗談なんですけど」

本当は鈴仙が見せた、あの表情が――――

「うわ～、パンツのために鈴仙さんを追っかけるんですか。最低ですね、変態ですね、キモイですね。これは号外レベルですね」

「貴様には、寺子屋の敷居をまたぐことは許さん」

「あ、彼方。もう大丈夫よ。ゆっくりそこで寝てていいから。むしろ、寝ててくれるかしら？」

冗談が洒落にならないレベルに一瞬に達してしまった。

「いや、あの、冗談ですから？　お～い、皆待ってくださいよ。俺一人で歩くのかなりしんどいんですけど……。あ、文ちゃ～ん？

慧音さ～ん？　か、輝夜さ～ん？　え、ちょっとまじで皆無視なのっ！？　いや、ほんとうに違うからっ！？」

## 29．狂気に隠された本音（後書き）

幻想郷に行ったら、性欲処理に困ると思う。マジメな話。

あ、今回は長いんで二話に分けます〆（・ω・。）

## 30．シアワセうさぎ

場を少しでも和やかにさせようといったパンツ発言が一瞬で俺の幻想郷での地位を脅かすものにまで至ったけど、それを必死に弁解してなんとか皆が分かってくれてから、5分くらいが経っただろうか。

俺は文に手を借りながら、足を引きずるようにして竹林の奥へと進んでいく。

「パン……彼方さん。　怪我のほうは大丈夫なんですか？」

「ちょっとまって。　いま、パンツって言いかけたよね？　文さん、本当に分かってくれたんだよね？」

手を借りている手前、強くいえないんだけど……どうも文は分かっていないような気がする。　いや、わかっていながら遊んでいるような……。どっちにしても、文のニヤニヤ顔を間近で見るのはいまはツライ。

「だが彼方。このままでは、まともに戦うことすらできんぞ？　せめて消毒するとか、包帯を巻くとかして戦えるような状態にしないことには、同じ土俵にも立てん」

「いや、このままでいいんです。　俺は鈴仙との弾幕勝負が終わったなんて思ってないので。　いまはあれですよ。場所移動ってやつ

ですよ」

それにいまだって俺は文に手を借りている状態だ。これ以上、誰かの手を借りるわけにはいかないし。

「それよりも、輝夜さん。　少し聞きたいことがあるのですが……よろしいでしょうか？」

「ん？どうしたの彼方。　そんなに改まって」

「えっと……鈴仙について聞きたいんですけど……」

前を歩いている輝夜さんは俺の呼びかけに振りむき、少し言いずらそうに聞いた俺の言葉に苦笑を浮かべた。

「鈴仙……ね。どっから話せばいいのやら。　そうねえ……鈴仙は元々月の兎だってことは知ってるかしら？」

「いえ……初耳です」

「あれ～……永琳そんなことまで教えてないの。　まぁ、鈴仙は月の兎でね。　そこから逃げてきたのよ。ボロボロの格好で。いまの

貴方のような状態で。　私にすがりつくようにして『助けてくださいっ！』って言いながらね。　とてもビックリしたわよ」

なんたって、夜の散歩に出かけているときにいきなり私の前に現れたんですもん。　ボロボロで泣きそうな顔で、助けてくださいっ！って。　すぐに分かったわ。鈴仙が月の兎だってことは。　それから私は鈴仙を永遠亭に連れて帰ったわ。　そこで事情も聞いたわ。まぁ、詳しい話は省くけど簡潔にいうと、月での戦争が怖くって逃げてきた。ってところかしらね。　それから、鈴仙は永遠亭で匿っているという形をとっているわ。　月との交信もできるみたいだからね。　月の情報も分かって万々歳ってかんじね。

「だから鈴仙だけが、因幡達とは違うんですね。　それにしても戦争ですか……。」

「そう。それが鈴仙にとって負い目になっていてね、闇魔にも言われたみたいよ。闇魔は歯に衣着せぬ言い方、まぁ良いか悪いかをストレートにはっきりと言うからね。　生真面目な鈴仙にはかなりこたえたはずよ。　ほんと……闇魔もやってくれるわよね。まぁ、あっちとしては善意でやった行動かもわからないし、そもそも闇魔と私達ではものの捉え方が違うから、どうこういうこと自体が間違っているのだけど」

まるで自分の子供が怒られたときのように、輝夜さんはため息をつく。

「はいはい！輝夜さん、質問してもいいですか！」

俺の隣にいる文がおもちゃ箱を目の前にした子供のように、キラキラとした目で手を上げる。……完全に野次馬根性丸出しの記者の目で。

「答えられる範囲ならね」

「はい、大丈夫です！　えっと……鈴仙さんって妙に名前が長いですよね。もしかして、それも永遠亭に来たときに輝夜さんが付け足したんですか？」

「ああ、そのことね。　因幡は私がつけたわ。正確には“イナバ”だけどね。　優曇華院は永琳がつけた愛称よ。」

優曇華院……意味はまったく分からないけど、永琳さんも変な愛称つけるな。

すると俺達の会話を黙って聞いてた慧音さんが顎を撫でながら、思案顔になる。

「どうしたんですか、慧音さん？」

「ん……いや、その優曇華院の優曇華って確か面白い意味があったような気がしたんだけど……。いかん、ど忘れしてしまったのかな？　思い出せん……」

珍しいこともあることだ。　寺子屋の教師をしていて、博学な慧音さんが首をひねって、「う～ん、う～ん」と悩んでいる姿を拝む日がくるなんて。　そんな慧音さんを横目に輝夜さんは、くすりと笑って指を立てた。

「優曇華――滅多にない吉祥、という意味で使われているわ。まぁ、平安関係でも由来はあるみたいだけどね。　でも、鈴仙はこれが気に入らないらしくてね、うっかり怒っちゃって。　スペルカードにも変な名前をつけはじめたし……。　ほんと……どうしようかしらねぇ」

そういってまたもや苦笑する輝夜さん。　いまの話しが本当なのだとしたら、永遠亭の人達は鈴仙に……ずっとその手を伸ばしていたののではないか。　遠回りするように、回りくどく、それでいて、一心に。　鈴仙だってそうなんだと思う。　俺にみせてくれたあの笑顔。　俺には鈴仙が魅せた幻覚だとは思わない。狂気の中に隠れていた、本音を垣間見たようなそんな気分だった。　本当は、手をとりたくて……だけど怖くって、不安で、前を見ていたその瞳の視線は、だんだんと下がっていったのかもしれない。　そうして……自分から殻にこもった。　いや、殻に籠ったんじゃなくて、この場合は自分自身に幻覚を魅せているといったほうがいいかもしれない。

手を伸ばしているのに、相手は顔を下げている。

だったら――――

「大丈夫ですよ、輝夜さん。　輝夜さんの想い、必ず伝わりますよ」

だったら――――俺が顔を上げさせる役目になればいい

▽　　▽　　▽　　▽

竹林の中を歩きながらも、私の脳内には先程の彼の言葉が反芻していた。

『逃げるのか？　臆病者だな』

彼に言われる前に一回だけ言われたことのあるセリフだった。　そのときの私は、正座をして俯きながらあの人の説教に耐えるしかなかった。　だって……戦争が怖くて逃げたのは本当だったから。仲間を見捨てて、逃げてきた。　人を殺すのが怖くて逃げてきた。　殺されるのが怖くて逃げてきた。　だから私は耐えるしかなかった。　なんせ相手は闇魔さまで私は臆病者の罪人だから。

だったら――――何故、彼のとき、あんなに反抗したかったの？

そんな名前で呼ぶなと、知らない人間風情が、と。

私は誰かに知ってほしかった？

臆病者な自分の姿を？

認めてもらいたかった？

なにを？

思考の堂々巡りは続く。　答えのでない、問題に頭を悩ませる。――いや、答えは出ている。　私は月を見捨てて逃げ出した臆病者で、彼にただイラついただけ。

「はぁ……これからどうしようかしら。　いっそのこと、このまま月に帰れたらどんなに嬉しいことなんだろう」

『おかえり』って言ってくれる仲間がいて、私のことを大切にして

くれる姫さま達がいて。

戻れないからこそ、募る想い

私はただただ月を見上げる。

「――――やっとみつけたぞ、鈴仙」

背後から聞いたことのある、声が聞こえてきた。　荒い息をはきながら、片手は竹に捕まり、もう片方の手で私を指さしながら。　自分とは似て非なる男が声を荒げた。

「てめぇ何勝手に逃げてんだよ！　勝負はまだついてないだろ！」

竹を捕まえていた手を離し、私に突き付けながらそうのたまった。

呆れたわ……。あんなにやられたというのに、負けてないと思っていただなんて。　傷は治せてもこういう類のものを治す治療というのは見つからないのよね。

「なにいってるのよ……。　貴方は負けたでしょ？　弾幕を浴びて、そのまま昏倒しちゃったのよ。誰がどうみても完全に貴方の負けよ」

「残念ながら、あの時、あの場所にいたのは俺とお前だけだろ？　鈴仙は、俺が負けたに1票で、俺はまだ負けてないに1票。　ほら、同列じゃないか？」

「……ふざけた理屈ね」

「それほどでも」

彼のニヤついた口が動いた瞬間、私は瞬時に飛び出し、先程のように彼の頭めがけて蹴りを放つ。

「同じ手は喰らわねえよッ！」

彼方は自分の上半身を極限にまで後ろにずらし、その勢いのまま足を振り上げ、爪先から鈴仙の肩めがけてくりだす。

「美鈴直伝の蹴りだ！喰らいやがれ！」

大きく蹴りを放ったために、両足が宙に浮く形となったがそれすらもかまわずに彼方は鈴仙の肩めがけて全力で振り抜く。　彼方と鈴仙の足が互いに肩と頭に直撃する。

「ぐッ……！」

「……がはッ！？」

美鈴に習っているだけあって、妖怪にもそれなりに通じる彼方の蹴りは鈴仙の顔を苦痛に歪めるくらいではあった。

一方の彼方はというと、耳からパンッという嫌な音が聞こえたかと思うと、あまりの衝撃にきりもみしながら飛んで行き、竹を2本ほど折ったところでようやく止まった。

「……ぐ……やっぱ強いわ……。」

背中が痛い。　ハサミで背中をザクザクと刺されてるような痛みが断続的に襲ってくる。　それにさっきから右耳から音が聞こえない。　もしかすると、もしかしなくても鼓膜が破れたかもしれないな……。

「わかったでしょ？　貴方がいくら挑んでこようとも……私には勝てないの。これが妖怪と人間の差。これが貴方と私の差。」

鈴仙が俺の元へ歩いて来る。　それは奇しくも先程俺が倒れたときと同じ状況だった。

「……なぁ、鈴仙」

「遺言かしら？」

「いや、遺言じゃないさ。　ただ、鈴仙って可愛いパンツを履いてるんだなと思ってさ」

「なっ……！？」

予想外の言葉に顔を赤くした鈴仙。　俺はそのわずかな時間を見逃さず、ホルスターにいれていた装飾銃を、地面が削れることを厭わずに無理やり引き抜き、鈴仙に向けて至近距離から弾幕を浴びせる。そしてその隙に歯を食いしばりながら、立ち上がり横へと駆ける。

「はぁ……はぁ……。くっそ……痛いと思ったら、竹が刺さっていやがったか。　どうりで痛いはずだよ……」

背中から竹の破片を一気に引き抜く。　引き抜いた途端に、ブシャーというなんとも嫌な音が聞こえてきそうなほど、血が背中から流れたことがわかる。

しかし俺にはそんなことに構っている余裕はまったくもってなかった。

「ほんと、弾幕勝負の最中に、愉快になったのははじめてよ」

赤い瞳で、今にも殺しそうなオーラを出している鈴仙が目の前に立っていた。

鈴仙が指を銃の形にして、俺に突き付ける。　そして、弾幕を放つ。

その弾幕をかわそうとして、俺はよろけ、弾幕は俺を待つことなく俺の腹に飛び込んでくる。

――――こうなると、俺はなにもすることができない

ただただ、流れに身を任せ鈴仙の弾幕をくらうしかない

左手・右手・右足・左足・腹・頭・左肩・右肩

ひとしきり撃ち終えて、鈴仙は満足したのか、はたまた彼方が動か

ないと思ったのか。　弾幕を撃つのを止めた。

「これだけ撃っとけば……さすがに無理でしょうね。　私とも関わることを止めるかもしれないし。」

それでもいいけど。　それがいいけど。

彼の頭の上をまたいで、私は歩いた。いや、歩こうとした。

「――――まてよ」

その声は私に驚きを与えるには充分すぎる声だった。

「まだ終わっちゃいねえ……」

「……あんた、タフすぎじゃない……」

その男は、頭から血を流しながら断言した

「俺を倒したかったら、再生できないくらいまで、壊すことだな」

☆

あ～……血が足りねえ……。頭がくらくらするし、吐き気もぶり返してきた。くそっ……さっきから血が目に入ってきて邪魔だ。それにしても、鈴仙って強いなぁ……。

「なぁ、鈴仙……。お前ってどこかで戦いとか習ってるの……？」

「……ええ、習ってた。と、いったほうがいいかしらね」

ダメ元で聞いてみたのだが、鈴仙は俺を嬲ることに飽きたのか話にのってきてくれた。

「私って元は月の兎だったのよ。玉兎っていってね。……そこは此処よりも遥かに文明が高くてね。あなたが持っている装飾銃さえも私からしたらしょぼいものなのよ。」

月ってそんなに文明が高いのか……。もしかしたら外の世界よりも高かったりするのかな？

「その月でわたしはある人に習ってたの。正直いってその人は怖かったけど……それでも……それでも月にいた仲間たちと過ごした時間は……わたしにとって大切だった。」

「……だったら何故……？」

輝夜さんから道中聞いた聞いたけど……どうしても鈴仙の口から聞いておきたかった

「――――戦争が怖くて逃げてきた。　ただ、それだけ。　それ以上でもなければそれ以下でもない。」

「……帰りたいと……思ったことはないのか？」

俺の言葉に鈴仙は自嘲気味に言葉を吐いた

「いまさら、どの面さげて帰れっていうの？　月での私は戦争が怖くて逃げ出した臆病者。　月に帰る居場所なんてないわよ。」

もしも……もしも俺が早苗ちゃんから『もう家には来ないでくださいね』って言われたら。　母さんから『敷居を跨がせない』と言われたら……。

「……だったら、永遠亭はどうなんだ？　お前の第二の居場所じゃないか。　永淋さんや輝夜さんだって優しいし。……その……てゐだって、悪戯すらけど悪い奴じゃないし。それに――――」

「――――そうでもないわよ」

「……え？」

「だから、そうでもないっていってるの。　私はそこまで永遠亭の人たちのことを思ってないわ。」

やれやれ……とでもいいたげに鈴仙は肩をすくませる

「なんで永遠亭の人達が私を匿っているかくらい……私でも想像がつくわ。　私は月と交信することができるの。ようするに、月の情報を手に取ることができるってことね。　大方、師匠だってそれが目的で私を匿っているんだと思うの。　だってそうでしょ？　普通に考えて、私みたいな厄介者を置くとは考えられないもの」

自分は厄介者なんだと。　そうやって言い聞かせるように、鈴仙は小さく呟いた。

その小さく発したその言葉にどれほどの想いが込められているのか。

「本当はね、わかっているんだよ。私だって、自分がどれだけ厄介者なのかなんて。でも……月には帰れないし、此処で生きていくには永遠亭に住むしかない。　本当は分かっているの。　師匠たちが私のことをどう思っているかなんて。」

なんなんだよ……それ。　これじゃまるで……鈴仙は此処に来てからずっと一人で生きてきたみたいじゃないか。

「だからね？　正直な話、あなたの話を聞いたとき私と同じなんだなと思った。　……けど、それは私の思い違いだったわ」

睨むように、縋るようにその赤い瞳で俺を射抜く

「あなたは此処でも大切なものを既に手に入れていた。　あっさりと、息をするように、なんなく、嫉妬してしまうほどに」

『あなたみたいなタイプって嫌いなの』

あのときの言葉が蘇える

「気がつけばあなたの周りには沢山の人がいたわ。　お師匠さまも姫さまも、てゐも因幡たちも人里の人も……あなたはあっさりと手に入れた。」

「べ、べつに……そんなことは……！」

「そんなこと？　あぁ……そうね。あなたからしてみれば、〝そんなこと〟なんでしょうね」

鈴仙は俺ほうへゆっくりと歩いてくる。　狂気に満ちた目で俺のことを睨みながら

はは……傑作だな。　本当に笑えてくるくらい傑作だ。　そして……ここまで屑な男も珍しいよ。

「聞いてくれてありがとうね、少しだけ楽になった気がするわ。」

ほんと――――――真っ赤になるまで泣きはらした女の子の想いを

ようやくわかるなんて

▽　　▽　　▽　　▽

最初は何が起こったのかわからなかった。

いきなり頬に強い衝撃を受けたかと思うと、体は勢いよく後ろへと吹っ飛んでいた。

いったい何が起こったの？

飛ばされ、地につき、頬を押さえ、ようやく前を向いて理解した。

その原因をみた。

握り拳を思いっきり振りぬいていた。　どこにそんな力が残っていたんだろうか、なんて考える余裕もなくその男は大声で私を指差し叫んだ。

「いまから道徳の授業をはじめるッ！！」

そんなことをのたまいながら。

「あ、あんた大丈夫……？　あんたが寺子屋で教師をしているのは知っているけどさ……」

「うっせえッ！！　黙ってろ！！」

な、なに訳のわからないことを……。言ってることが支離滅裂すぎて、さっぱりわかんない……

そう考えていた私にアイツはそれ以上に訳のわからないことをしゃべりだした

「知ってたか？　お前って人里の人たちのアイドルなんだぜ？」

「……は？」

「お前って人里で薬売りをしてるだろ？」

「してるけど……」

「お前が人里に来るたびに、皆少しだけ浮き足立つんだぜ？　なんせ、可愛い子が薬を売りにくるんだ。当たり前の反応だろ」

お師匠さまに言われて、薬を売りはじめたのはいつのことかは覚えてないけど……私が人里へ来ると妙に人里が騒ぐのはわかっていた。
でもそれは、妖怪が薬を売りにきてるから珍しいのであって……

「それに――――俺だってそうだよ」

「え……？」

頭から血を流しながらも、彼は私に向けてそう言って優しそうに微笑んだ。

「俺さ、霊夢から『いつもいつも無茶ばっかりして！』って怒られるんだけどさ……。それって、永淋さんや鈴仙がいるからこそできる無茶なんだよ。　どんなに怪我をして、永淋さんなら治してくれるだろうし、それに……鈴仙みたいな子に看護してもらえるならそれはそれでアリだしな」

「う、嘘言わないでよ……！　そうやって私を――――」

「嘘なんて言ってないよ。　鈴仙に嘘なんて誰もついてないよ。」

彼はなにを言っているのだろう……。　私にはまったくもって理解できない

「鈴仙はちょっと誤解していただけなんだよ。　永淋さんの言葉を、輝夜さんの言葉を、てゐの言葉を、人里の皆の言葉を視線を」

彼は思う。　もしも――――もしも目の前にいる女の子が少しだけ見る目線を変えたのなら、ちゃんと伝わっていたのかもしれない。

「鈴仙が輝夜さんに匿われたとき、多分だけど永淋さんは優しく、暖かく迎えてくれたんじゃないかな？」

母親が子供の帰りを玄関先で待っていたときのように――――

「輝夜さんが鈴仙に”イナバ”ってつけたのは、他の兎と区別をなくすためといっていたよ。　けどさ、それって『月や地上なんて関係なく、あなたの周りにはこんなにも仲間がいるんだから』って……照れ屋な輝夜さんなりの言い方じゃなかったかな」

『あなたには”イナバ”をあげるわ。　これで、てゐ達とおんなじね』

それは嫌味でもなんでもなく、ただの喜びで。　あのときの姫さま

の笑顔がそれを物語っていて

「てゐだって、本当は素直に遊びたかったんだと思う。　ただ、てゐの性格上それが……ちょっとだけ無理だったわけだけどさ」

『なにやってんのさ鈴仙。　早くしないと、日が沈んじゃうよ』

捻くれた彼女なりの精一杯の遊びの誘いで、日が暮れるから早く遊ぼうよって意味で

「それにさ、知ってたか？　優曇華って『滅多にない吉祥』って意味があるんだよ。　吉祥ってさ、めでたい兆しって意味なんだよ。　考えてもみろよ？普通そんな愛称なんてつけると思うか？」

『そうねぇ……あなたには優曇華院の愛称をあげるわ。　これから頑張ってね？』

お師匠さまは……私が邪魔でどうでもい愛称をつけたんじゃなくて

---

『レイセン？　だめよ、だめ！　月にバレちゃうかもしれないじゃない！　今から鈴仙に変更よ！』

あの時、私の名前を当て字にしたのは、これからともに過ごしていくのだから新しい一歩を歩んでほしくて――――――

「ほんと……永遠亭の人達も回りくどいやり方を選ぶよな。　けど……ほっとけなかったんだよ。　目を真っ赤に腫らして泣いている女の子をおさ。」

それが限界だった――――

「じゃぁ……どうすればいのよ……？」

もしも彼がいうように、ずっと手を伸ばしてたのならば私はずっとその手を振り払ってきたということになる。

「さぁな。　ああ……そういえば弾幕勝負の途中だったな？　続きやろうぜ」

「は？」

突然の話しの切り替わりに、疑問符を浮かべる。

そしてそれが命取りだった

私の目の前に散りばめられた弾幕。

私は考えるよりも早く瞬時にかわす体制に入った。　考えるよりも先に動くことができた私の身体に感謝しとこう

「あめえよッ！」

弾幕をかわした先には、彼が私の動きを読んでいたかのように先回りをしていて、私がかわしたのに合わせるような形で頭部に蹴りが放ってくる。

「くッ……！？」

彼はそんなことおかまいなしに弾幕と蹴りを交互に放ってくる。すでに息も満足にすえないにもかかわらず、目だって血が入り込んでろくに開けることができないのに。　それでも彼は私に獰猛な蛇のように襲ってくる。

「はぁ……はぁ……。ようやく……当たりはじめたな。　といっても……そろそろ限界なんでここはお互いラストカードといこうじゃないか」

「……ええ、そうね。　そろそろ終わりにしましょうか？」

汗をぬぐいながら、私はポケットから一枚の札を取り出す。

散符――真実の月（インビジブルフルムーン）

「ひゅ～……最後の最後でこんな大量の弾幕をだされてもな……」

「すべてが偽りなき弾幕。　その身に喰らうがいいわ」

「おいおい……まずはこっちのスペルカードもみてくれよ！」

曲符――七曜鏡花（しちようきょうか）

彼方の周囲には5、いや、１５の丸みを帯びた鏡が出現し、鈴仙を囲む。

そこに彼方は弾幕を撃ち込んだ。

弾幕は鏡に向かって突き進み、鏡に当たったかと思うと跳ね返り、また別の鏡へと突き進んでいった。

ピンボールのように跳ねまわる弾幕。　そうして鏡から鏡へと進んでいく弾幕は最終的には鈴仙を逃さぬように一種の結界へと変わっていった。

囲うように、決して逃がさぬように

しかし、彼方の追撃はそこまでで終了してしまった。

鈴仙と勝負を始めてから、どれくらいの量の血を流しただろうか。

どれくらいのダメージを体に負っていただろうか。

倒れまいと、どれほどの時間、集中していたのだろうか。

彼方は自分の体が、もう動かないことに気づいた。

目が霞み、頭がくらくらして、背中が痛み、手足が動かない。

そして目の前には自分の弾幕と鈴仙の弾幕。

「（これは……終わったな……）」

二つの弾幕を浴びて、足が踏ん張りきかずに後ろに大きく吹っ飛ばされる。

鈴仙はというと、大きく肩で息をして、吹き飛んだ彼方へと歩みよろうとした。

その瞬間、後ろから声がかけられた。

「お疲れ様、鈴仙。　流石ね」

▽　　▽　　▽　　▽

振り向いたその先には、姫さまが手を叩きながら立っていた。いつからいたのか、どこからいたのか。

「あの……」

言わなきゃいけないことは沢山ある。　確かめないといけないことは沢山ある。

それなのに、私の口は動かなかった。　いや、口は動いているのに音が聞こえてこなかった。

そんな私の反応をみて姫さまは私を優しく抱きしめた。　私より小さい体なのにもかかわらず、大きく包み込まれている気分になった。

「すごいわね、鈴仙。　彼、吸血鬼に勝ったことがあるらしいのよ。そんな彼に勝ったあなたは、吸血鬼より強いかもしれないわよ」

「へっ!?そ、それは流石に言いすぎじゃ――――」

「言いすぎじゃないわよ。　だってあなたは私の家族なのよ。それくらい、できて当然でしょ?」

ああ……この人はいつもそうだった。　私が助けを乞ったときも、この人はこうやって笑ってくれた。　私が永遠亭にきて不安だったときもこの人はこうやって笑ってくれた。　いつもいつも……笑顔を向けていてくれたんだ。

「それとも……鈴仙は家族だと思ってくれてなかったのかしら？」

「いえっ！そんなことは……」

「べつに私は家族とか思っちゃないけどね」

「こらこら、すぐにそうやって鈴仙を苛めようとして……本当に困ったものね」

そんなことをいいながら、竹林の奥のほうから私の知っている、毎日会っている人達の声が聞こえてきた。

「……てゐ……お師匠さま……」

「あらあら……こんなに服を汚しちゃって……。大丈夫かしら？」

お師匠さまは私の顔をみて、服をみて苦笑しながらポケットから取り出したハンカチで私の顔をぬぐった。

「お師匠さま……わ〝だじは……」

＞ｉ３００２２―２９９２＜

もう止めようとも思わない涙が、どんどんあふれてくる。

ダムの決壊のように。　拭っても拭っても、後から後から流れてくる。

そんな私をお師匠さまは姫さまと同じように抱きしめてくれる。

「いいのよ。こちらこそごめんなさいね。　あなたには寂しい思いを沢山させて」

何も言わずに、ずっと私のことを見守っていてくれたお師匠さま。

私に薬のことを一から教えてくれたお師匠さま。

「彼方相手にここまでやられるなんて、もしかして鈴仙って弱いんじゃ」

「べ、べつに弱くないわよっ……！？」

私が昔のことを思い出す暇さえ与えないように、ずっと遊びに誘い続けていてくれた、てゐ。

少し捻くれ者だけど、一番話しやすい相手だった。

「ねえ、鈴仙」

姫さまが私に優しく語りかける

「あなたは昔、月で怖い思いをしたかもしれない。　忘れられないようなことがあったかもしれない。　それは忘れなくてもいい。あなたの思い出としてしまっておけばいいわ。でもね、あなたが永遠亭に来た瞬間から、私達は家族なのよ。永遠の絆で結ばれた家族なの。　あなたが泣きたいときは私達が傍にいてあげる。　なにか困ったときは私達を頼りなさい。」

「は……い……」

へたりこむ私。顔はぐしゃぐしゃで声だって変になっている。けど、そんな私をみても皆は笑顔を向けてくれていた。

「ねぇ、姫さま？　やっと鈴仙が帰ってきた気がするわ」

「あら、それは奇遇ね。私もいまそんなことを考えていたの」

「まぁ……私はべつに帰ってこなくてよかったけどさ。……私が探しにいけばいいんだし」

おもむろに立ち上がる三人。

そして私のほうに、姫さまが手を差し出してきた。そしてハモる三人の声

「「「おかえり、鈴仙」」」

そのとき、私ははじめて顔を上げることができたのかもしれない。

やっと自分にもみえた暖かくて、優しいその手を私は思いっきり掴んだ。

「ただいまっ」

▽　　▽　　▽　　▽

「お～い、彼方さ～ん。聞こえますか～？」

「右耳は死んでるから、左耳で頼む」

「あ、生きてたんですね」

現在、俺がいるのは鈴仙たちから１０ｍくらい離れているところだと思う。　ちなみに立つ気力さえない俺は竹に背中を預けた状態で文と話している

「にしても……すごい役者ぶりでしたね～。　ついつい撮ることすら忘れていましたよ」

「台本もなれけば打ち合わせもないからな。　俺は今回は噛ませ犬

って訳だよ」

「けど彼方さんがいきなり弾幕勝負をはじめたときは、驚きましたね。　私だってこういうことになるなんて思いもしませんでしたから」

「それは文がキャストに入っていなかったからだろ。　知ってたのは、永淋さんと輝夜さんとてゐだけだよ」

もしも――――もしも今回の異変を映画で例えるとしたらこんな感じだろう。

赤い瞳の小さな兎は、とてもとても怖がりで近づく者全てを遠ざけようとしていました。　兎は世界の全てが敵だと思いこんでいたのですがそれは違っていて、世界はその兎を大切に大切に壊れないように、ずっと抱きしめていた。　そしてあるところに事件がありました。　その事件でようやく兎は世界が自分のことをずっと守っていたのだと気がつく。

ちょっと変だけど、大方こんな感じだろう。

そしてこの映画の監督が輝夜さんで、脚本が永淋さん。

主演が永遠亭の全員で、モブはその他大勢。

「それにしても……怒らないんですか？　今回、彼方さんはいいように利用されたんですよ？」

まぁ……確かに利用されたのは確かだし。　それでこんなになったのは正直、怒りたいけど……

「でもなぁ……あんな笑顔を見せられたらな」

「ほんと……嫌になるくらいお人よしですね」

俺と文が見つめる向こう側。　永遠亭の人達が笑顔で何か話していた。　この人達の笑顔をみるために、頑張ってきたと思えば怒りはどこかにいってしまうさ。

「さて……文。　だっこしてくれ。一歩も動けん」

「霊夢さんにでも頼みましょうか？」

「え〝っ！？」

そういえば、この映画のタイトルを考えていなかったな。

そうだなぁ――――シアワセうさぎ

なんてのはいいかもな。

## 30．シアワセうさぎ（後書き）

お久しぶりです。　なんとか8月までに投稿できました（；´∀`）

とりあえず書きためたところまで、一日一話で投稿していきます。

といってもそこまで書いていませんが（；＾ω＾）

さて次話で、第一部がようやく終わります。　イェ――――ヽ（。Д。）人（。Д。）ノ――――イ!!　結構長かったです。

ちなみに今回の突っ込みポイントは、

「俺を倒したかったら、再生できないくらいまで、壊すことだな」

間違いなくここだと思う。

ではでは、今回はこの辺で（´Д`）ノ~　バイバイ

※挿絵を書いてくれた人を明記してませんでした。　前回と同じく吾木香です。

## 31．そんな関係

「えへへ～、おにいちゃん。　フランが乗るときもちいい？」

「う、うん。きもちいいよ。」

「不知火、アタイのほうがきもちいでしょ？」

「え、あ、そうかもしれないね」

「ルーミアは？ルーミアは？」

「そ、そうだね。ルーミアのもきもちいよ。　けど、そろそろ降りてくれると助かるかな」

傷口が開くから

現在の俺の状況はというと、遊びにきたフランちゃんとチルノちゃんとルーミアちゃんに馬乗りの状態で乗られている形である。　いっておくが俺が望んでこんな体勢になっているのではないことは伝えておく。

「そ、そうだよ三人とも。　彼方さん、只でさえ絶対安静って言われてるんだし、あまり負担をかけるようなことしちゃダメだよっ！？」

チルノちゃんの横で大妖精の大ちゃんが必死に手を振り上げて三人を引き剥がそうとしているが、それも徒労に終わりそうだ。

「けどおにいちゃん、ずっとお布団から出てないの？」

「いや、トイレに行くときは霊夢の手を借りて布団から出てるよ。　まぁ、それ以外の時は出れてないけど。」

前回は許してくれた霊夢であったのだが、同じことが二度も続くとそうはいかないみたいだ。炊事や洗濯のとき以外は俺を監視するために、この部屋から一歩たりとも出ようとしない。　食糧だって魔理沙にお願いするくらいの念の入れようだ。　ずっと俺の傍を離れようとせずに、１０分おきくらいに「困ったことはない？」だとか「なにか持ってこようか？」とか、なんというか……くすぐったいようなことをしてくれるので、夢でも見ているのではないかと思っ

てしまうこともあるけれど。

「ふふん――――だったらアタイのぶゆうでんを特別にきかせてあげる！」

「だったらフランが絵本をよんであげる！」

「だったらルーミアがおはなししてあげる！」

同時にハモル三人の声

「ちょっと、アタイは不知火のおやぶんなんだから、ここはアタイでしょ？」

「違うよ、おにいちゃんはおにいちゃんなんだからフランだよ」

「あのね？あのね？ルーミアね？」

いきなり可愛い口喧嘩をはじめるチルノとフラン。　そんな二人を無視して彼方に自分が体験したことを話し始めるルーミア。　ルーミアの話しを笑顔で聞きながら、彼方はあの後の出来事を思い出す。

家族の絆を見た後に待っていた罵詈雑言の嵐を

▽　　▽　　▽　　▽

――回想――

俺はあの後、すぐさま永遠亭の診察室に運ばれた。早く止血しないとまずい状態に陥るらしかったと永琳さんは言っていた。というか、片足突っ込んでいた。

「はい、リラックスしてね。　ちょっとだけ痛いから」

診察室に運ばれる頃になると、ぼーっとしていた頭がクリアになり消毒液の独特な臭いが鼻を刺激してくる。　永琳さんは注射器を取り出して、なにかの液体を俺の身体の中へといれてくる。　火照っていた身体が急激に冷めてくるのが実感できた。

「嬉しそうですね、永琳さん」

「ふふ。やっぱりわかっちゃうかしら？」

聖母のような頬笑みを浮かべながら、鼻歌混じりに俺の処置を施していく。　それでいてその処置が完璧なんだからつくづく脱帽ものである。

「一つだけいいですか？」

「ええ、どうぞ」

「いつからこの計画を？」

ほんの一瞬だけ永琳さんの動きが止まる。　しかしそれは、ほんとうに一瞬ですぐに永琳さんの手は動き始める。

「そうねぇ……いつからだと思う？」

俺の目を覗きながら聞いて来る永琳さん

「……最初に会ったときからだと思います」

「その根拠は？」

面白そうに、探りをいれてくる永琳さん。　なんでそんなに嬉しそうなんだろうか……

「俺が初めて永琳さんに会ったとき貴女はこう言いましたよね？『あの娘はね、兎なの。臆病者で人の目ばかり気にして、そのくせ振り向かれたら怖くて逃げだしてしまう、そんな兎なのよ。だからね、見逃してしまうのよ。誰かの優しさや、温もりを』　あの時はなんで俺にあんな話しをしたのかさっぱり理解ができませんでしたけど、今日やっと理解できましたよ。あの言葉に隠された意味を」

『あなたの目の前にはいるのは、そんな兎よ。　さて……あなたはどうするのかしら？』

「実際は賭けだったけどね。期待通りのことをしてくれて助かったわ。　流石人里のヒーローさんね」

「ははは……。　それは文がでっちあげた称号ですよ。俺にはヒーローなんて言葉、似合いませんよ」

ぎゅっと胴体に包帯が強く巻かれて、思わず顔を歪める。

「……あなたがそこまで言うのなら、別にいいけどね。　とにかく、助かったわ。――――それに益々興味が出てきたわ」

「……え？」

怪しく光る目を隠そうともせずに、体が動かない俺に詰め寄り、その指で俺の顔をあげ、永琳さんを少し見上げるような形にする。
永琳さんは俺の唇をゆっくりと撫でながら

「仮にもエリートである鈴仙相手にあそこまで戦えたこと。そして自分の体を顧みずに行動するところ。そしてその体。依然みたときよりも、ずっと引き締まっているわ。能力も変わっているわね。まぁ……それについては心当たりがあるけどね。」

唇から下へと降りて行き、肩を撫で背中へと移り、背中に付着していた血を一すくいして自分の唇へと持っていく。

ゆっくり、舐めまわすように、上品に、しゃぶるように、血を舐め取る。

「あなたを観察することができたら、とても有意義なことになるでしょうね」

すでに俺と永琳さんとの距離は数センチだけ。　俺が少し前にいけば――――――

「診察室に運ばれたと聞いたから来てみれば……随分は楽しいことしているな、彼方」

「ええ、ほんとうにね……」

いきなり聞こえてきた聞き覚えのある声に、俺はすかさず永琳さんとの距離を離す。が、なにもかもが遅かったみたいだ。

「れ、れれれれれれれれれれれれれれれれれれれっ……！」

その者は一瞬にしてその場の空気というものを支配した

その者は一瞬にして彼方の喉を痙攣させ、体すらも痙攣させた。

「文から色々と聞いたわ。私と魔理沙が弾幕勝負をしている間に、随分と面白いことをやっていたそうじゃない？」

「ち、違うんだっ！霊夢っ！俺の話しを聞いてくれ！」

「……あいつ……完全に浮気がばれた男みたいな反応してるぜ」

ゆっくりと俺に近づいてくる霊夢。後ろのほうで魔理沙が何か言っていたけど、いまの俺には関係ない。というか、霊夢が怖すぎて目が離せない。　自分の全てが霊夢に集中しているみたいだ。　怖すぎる……これがスペルカードの創設者にして右のでる者はいないとさえ言われる博麗の巫女のプレッシャーか……！

「ねぇ、なんであなたが此処にいるのかしら？」

「いや……それは」

「ねぇ、今頃あなたは私の帰りを神社でまっているんじゃないのかしら？」

「えっと……ですから」

一つ言葉を発するたびに、一歩づつ距離を詰めてくる霊夢。

「今度という今度は――――許さないわよ？」

いまここに宣言しよう――――

不知火彼方は翌日、鈴仙並みに目を赤くし、腫れあがっていると――

――――

▽　　▽　　▽　　▽

いまは治療中で、患者の傷に響くから。という名目で顔で笑って、心がマグマのような状態の霊夢と顔で笑って心で大爆笑の魔理沙を永琳さんが追い出してくれてから、数分。　お互い何も喋ることなく、医者と患者の役割を果たしていた。

「ねぇ……彼方？」

そんな中、永琳がふいに話しかける

いまは背中の治療の最中でうつ伏せの状態である。永琳は独り言のように彼方の反応をまたずに話し続ける。

「今回……私はあなたを利用したわ。　そのとき、あなたはどう思

った？　怒り？それとも悲しみ？」

永琳の声のトーンがきもち低く聞こえる

「私はあなたに会ったときから、ずっとこの計画を立ててたわ。
そしてあなたは私の目論みどうり……私達の手のひらで十二分に踊ってくれた。それは私達にとってみれば嬉しいことだけど……あなたにとってどうかはわからない。」

もしも……もしもこの日のためだけに、永琳さんが俺に接してくれたなら。　先程の言葉は全て嘘だったなら。

もしもそれが本当だとしたら、少しだけ……いや、大分悲しいことだけど――――

「幻想郷に来る前、いや、それよりも昔に一人の女の子と、とある約束をしたんです」

「約束？」

「はい。それは只の口約束なんですけどね。　俺の中で奥で……いまもずっと燦然で消えることなく、色あせることなく、光り輝いているんです。」

口約束なんて、簡単に忘れてしまうはずなのに。　これだけは、守ろうとしている。　芯となって刺さっている

「できることなら……その約束というのを教えてくれないかしら？」

そう言いながら、永琳さんは優しく俺の背中を叩いた。　どうやら、治療は終わったらしい。

起きながら、永琳さんを正面から見るような形に座り直して俺は誇らしげに堂々といった。

「『周りの人達だけでも笑顔にさせる』。これが俺と早苗ちゃんが交わした約束なんですよ。　俺は正義のヒーローみたいに世界中の人を助けることなんてできないから、せめて自分の周りの人は、笑顔にしようって決めてるんです。　確かに、ずっと駒として使われたのは少なからずショックでした。けど、鈴仙や永琳さん、輝夜さんにてゐの笑顔をみたときに、ショックよりもずっと大きな喜びがこみ上げてきました。だからいいんです。　――それに、伝わりましたよ。永遠亭の人達の想い」

そういって彼はあどけない笑顔を私に見せた。

まったく……。今回の計画は、彼の行動にも釘を刺すという名目も入っていたわけだけど……これは完璧に完敗かな。

「ほんと……面白い子ね。　ところで、その早苗ちゃんって子が彼方の好きな子なのかしら？」

「へっ！？いや、その、ｚｓｘｒｄｃｔｙヴお.ｊｙｈｔｒざｒｓｘｙるいい」

いきなりの質問に顔を赤くさせて、必死に理解不能な言語を喋り続ける彼方であった

――――回想終了――――

▽　　▽　　▽　　▽

「だから、おにいちゃんはフランのおにいちゃんであって――――」

「だから、不知火はアタイの子分で――――」

「それでね？それでね？その人間の人はルーミアをみるなり――――」

いつまでも平行線のままのチルノとフランちゃんの可愛い口論、そしてちょっと本格的に怖くなってきたルーミアの話しを聞きながら、俺は昨夜の回想を終わらせた。

治療の結果としては、3日間は絶対安静で、それから少しづつ動いていくことを許す。ただし、霊夢から離れないように。鼓膜は自然に治していく。ということだった。　あんなボロボロだったのに……本当に美鈴の訓練をして良かったと思った。　霊夢から離れないように、というのは俺の状態で一人で行動しようものなら、妖怪の餌になるからだろう。万全な状態ならいざしらず、いまの俺は恰好の餌というわけだ。

普通なら俺みたいな奴と一緒に、四六時中行動を共にしないといけないのは嫌なはずだけど霊夢はその説明を受けた後、笑顔で承諾してくれた。嫌な顔一つせずに。咲夜あたりなら、共にいる間、ずっと暴言を吐くか、舌うちのマシンガンなのに。

本当に此処にきてから、霊夢には迷惑ばかりかけているな……。いつかお礼に何かプレゼントしたいな。リボン……はあるから、簪なんかどうだろう？いや、ストレートに花なんかもいいかもしれない。

「彼方、入るわよ？　……って、チビッコ共はなにしてんの……。ほら、おりなさい。彼方は怪我人なんだから。　あ、あんたは入っ

てきなさいよ」

いまだに言い合っている二人を抱きかかえると、霊夢はルーミアの首根っこを掴んで、大ちゃんと一緒に出て行き、外の誰かを手招きする。その際に俺のほうをチラッっとみて目が訴えてきた。

『なにかあったら……分かってるわよね？』

俺はただただ首振り人形のように頷くだけしかできなかった。

☆

皆が部屋から出て行き、無音な世界がやってきた。

おかしいな……。　霊夢が誰かを呼んだことは確かなんだけど……。

「隠れてないで、出ておいで～……なんつって」

「よ、よくわかったわね。わ、私が隠れていただなんて……」

「……え？」

冗談半分で、誰もいない空間に向かって話したら、そこから兎さんがでてきました。

俺が思考停止している中、鈴仙は早口になにかを捲し立てる

「べ、べつに私があんたの所に来ることなんか、これっぽっちもないんだけど、まぁ、あんたのおかげっていう考え方もあるし、その点だけは褒めようと思ってね！」

ほとんど分からなかったけど、なんとなく褒められた感じはする。

すると鈴仙は、後ろ手で隠し持っていた何かを俺の胸に投げ込んできた。

「これ私が調合した薬。し、お師匠さまのようには作れなかったから使ってもらわなくてもいいけど……草で切ったときにでも使って。」

「お、おう」

「それと、その怪我のこと、謝らないから。」

何故かえらそうにふんぞり返っている鈴仙。　まぁ……それにかんしては俺も謝られると困るけど。

「当たり前じゃないか。俺は本気の弾幕勝負で鈴仙に負けたんだし、元々、『ごっこ』遊びだしな。　終わったら、普通にしてればいいんだよ。」

それにパンツもみれたし。というのは言わないでおこう。これ以上、傷を増やしたくない。

「……よけいな弾幕までみようとするから、ついていけないのよ」

顔を横にそらしながら、小さな声でそんなことを言ってくる鈴仙。もしかして、俺にアドバイスしてくれてるのか？

「あ、ありがとう。今度から気をつけるよ」

「べつに……いまのはただの独り言よ。」

なんて都合のいい独り言だこと。

「そんなことより、あなた友達いないでしょ？」

「人をさびしんぼみたいに言わないでくれ」

それが本当なら、ルーミアは俺のことを食べようと思ってきてるわけで、フランちゃんは破壊しようときてるわけじゃないか。

俺の反論に鈴仙は少しばかり、悩んであと、指を突き付けて言いなおしてきた

「常識人の友達いないでしょ？」

人形使いあたりが聞いたら絶対にキレてると思う

「あんたの周りは変な人物が多いみたいで、一般常識の友達が欠落してるみたいだから、そんな可哀想なあなたに私が救いの手を差し伸べてあげるわ」

「それって……友達になってくれるってことか？」

「う〝っ……。　べ、べつに友達とまでは……。ただ、相談とかお互いの故郷のこととか……そういったものを話せる仲なのは、いまのところ該当者としてはあんたくらいなわけで……べつに私は……」

えっと……よくわからないんだけど。とりあえず――――

「えっと、よろしくな？うどんげ」

「うどんげ言うな。よろしく、彼方」

そんな軽口をかわしながら、俺達はお互い握手をした。

☆

握手をしたあと、風のような速さで鈴仙は部屋から出て行ったきり帰ってこなかった。永遠亭に戻ったのかな？

「あら、彼方。ずいぶんと嬉しそうじゃない」

「まあね。友達が一人増えたからさ」

フランちゃんとチルノちゃんと大ちゃんとルーミアちゃんが帰り、二人だけの夕食の席で霊夢はご機嫌な俺をみてそういってきた。
それにしても、フランちゃんは一人で帰るって言ってたけど……ちゃんと帰れてるのか？

「あんまり無茶をしてると、早死にするわよ？　とくに此処じゃ」

今日の夕食のてんぷらを食べながら、俺のほうをみる霊夢。

「それくらいわかってるよ。　退くときは素直に退くさ」

「どうだか」

それっきり喋ることなく箸を動かしていく。　うん、やっぱ辰五郎さんところの野菜はうまいな。

だが、そんなゆったりとした時間は玄関から聞こえてきた泣き声で終わってしまった。

「この声……フランちゃんじゃないか？」

「はぁ……大方、道が分からなくて帰れなくなったんじゃないかし

ら。　まったく……咲夜に電話で一人で帰るなんて威勢のいいことを言っていたくせに」

「はは……。たぶん、チルノちゃん達が皆自分達で帰るのをみて、自分もできると思ったんだと思うよ」

それか、まっすぐに紅魔館に帰らず遊んでいたか。

玄関から聞こえていた声は、だんだんとこちらに近づいてきており、その音も大きくなっていた。

霊夢は、やれやれ……とでもいいたげに泣きながら俺の腹めがけてダイブしてきたフランちゃんを抱き上げ、紅魔館に送り届けるべく、神社を後にする。

手を振るフランちゃんに手を振り返しながら、俺は霊夢と一緒に食べるべく、箸をおいて一人、天に浮かぶ月を眺めるのだった。

## 31．そんな関係（後書き）

ようやっと第一部が終わりました。

それに伴いまして、投稿した分の話を読んだのですが、この作品って『弾幕ごっこ』をしてないじゃないですか。　肉弾戦とかいれてますし。　言うならば、弾幕＋格闘ごっこ　みたいなかんじで。しかも「ごっこ」なのに皆さん本気ですし。　それこそ格ゲーみたいなかんじですよね。　できれば、格闘なんかいれずに文で弾幕勝負を描写できればいいのですが、私の力不足ゆえにこのような状態になります。

（略）

まぁ、何が言いたいかというと、読んでくださる読者のみなさんに「ああ、たまにはこういった格闘＋弾幕ｓｓもあっていいかもな」と思ってもらえるように努力します。　ということです。

# 外伝？～追憶～

幻想郷中に綺麗な花が咲き乱れる。　自然そのものである妖精達はそのことに無邪気にはしゃぎ、喜んでいた。

それは幻想郷ならばどこでもいっしょであり、女性が立っているこの場所にも花が咲き乱れていた。　流れるような金髪に、妖艶なオーラを醸し出しているその女性は、手に一輪の花をもち、その場所に立っていた。

小さな小さな墓の前に――――

それを墓というのには抵抗を感じるところであるが。　まるでペットが死んだときに建てる墓のようにその墓はポツンとそこにあった。
　一部の者達を除いて、その墓が誰の墓なのか知ることはない。なぜなら忘れてしまったから。そもそもその者が本当に此処に“いた”のかすらわからない。　答えることはできるだろう、“いた”と。
　しかし断定することはできないだろう、“いた”と。

「あなたとはじめて会ってから１０００年、いやそれよりも長くなるかしら。　こっちはあなたが言ったとおりになったわ」

女性は墓の前に花を置き、愛おしそうに撫でる。　何回も何回も。

「あなたも毎年毎年飽きないですね。」

そんなとき、女性の後ろから声がかかる。　黒い羽をはばたかせ、花を踏まないようにして、幻想郷のブン屋である射命丸文が八雲紫に声をかける。

「そういう貴女も毎年毎年飽きないものね。手に持っているのは花かしら？」

「これは自分の家に飾るようですよ」

文は紫の隣にきて、しゃがみ、もう片方にもっていた花を墓の前に置く。そして合掌。

「早いものですね、もう１０００年ですか。」

「ええ、もう１０００年よ。でも、されど１０００年。」

そう言う紫の顔は少し寂そうだなと文は思った。

しばし二人の間に無音の世界が広がる。

「ねぇ……」

紫は墓を一心に見つめたまま、横にいる文に話しかける。それは自分の考えていることを確認するように。確定するように。

「彼……どう思う？」

「彼……ですか」

他の者が聞いていたら、彼が誰なのかわからないだろう。しかしこの場にいるのは、文と紫だけ。無邪気にはしゃぎまわる妖精すら此処には誰も立ち寄ろうとしない。ある種の神聖な場所。いや、忘れ去られた場所……といったほうがいいかもしれない。

「ええ、彼よ。私は彼と“彼”はなにかしら繋がりがあると思うわ」

「ははっ……。冗談はよしてくださいよ。……あんな卑怯者な人と彼とが繋がりがあるだなんて……？あんなに一生懸命に頑張っている彼とあの人が繋がっている訳ないじゃないですか」

文は立ち上がり、肩をすくめる。なにを言っているんだと。　あんなに愚直なまでに一生懸命に頑張っている人間が、卑怯者な妖怪と関係があるなんて考えられない。　考えたくない。信じたくない。

「でも……彼と初めて会ったとき、かすかにあの人を感じたのは確かよ。　彼の奥深くにあの人はいるわ。だから――――」

「だから彼方くんに取り入ったんですか？　頼れる妖怪のフリをして。良き相談相手として。偉大な人として」

「……」

「いい加減にしてくださいッ！あの人はいないんですよっ！？　私だって初めは彼方くんとあの人は何か関係があるのかと思いました。でも……彼方くんとあの人とは……違いすぎるんです。生まれも、育ちも、生き方も、価値観も、全て違うんです。……いつまで過去を引きずるつもりですか？　あの人はもういないんですよ。貴女の目の前で消えたんです。いつものように、ニヒルな笑みを浮かべて、嫌みを言いながら、結局一度も勝てないまま、散歩にでも行くかのように……私達の前から消えたんですよ……。」

最初こそ語気を強めていた文だったが、しだいにその語気は弱くなり最後らへんは、小さな小さな声で、拳を握りしめながら、文は紫

に告げた。

はじまりは１０００年前。

妖怪の楽園を作ろうと奮闘する少女と、嘘つきな妖怪が出会ったことからはじまった。

▽　　▽　　▽　　▽

昔々、小さな島国の東の端に、妖怪の楽園を作ろうと奮闘している少女がいた。

少女の名前は八雲紫。一人しかいないスキマの妖怪である。

「あ～……藍、あと……どれくらいの妖怪がいるかしら？」

少女は傍らに控えている自分の従者に、気だるそうに尋ねる。朝からずっと活動を続け、そろそろ体の限界が近づいていた。

「そうですね……もう少しでいいと思います」

本当はかなりの数がいるのだが、自分の主人の疲弊ぶりをみていると正直な数は到底いえなかった。

「そう……。ちょっとそこら辺をうろついてくるから……後よろしくね？」

足取りがおぼつかなくなりだした紫は目の前に開いたスキマに向かって、ダイブする形で中へと入って行った。　そんな様子を藍は困った顔をしながら手を振ることしかできなかった。

☆

スキマで移動した紫は古くからの友人の元へ訪れた。　その友人は元は人間で、とても悲しい過去を持っているのだが、それを知っているのは自分と友人の従者だけである。

「大丈夫、紫？　少し疲れているんじゃないかしら？　休んでいく？」

開口一番、友人である西行幽々子は紫の額に手をおき、ついでその手を顔へと移しそのまま顔全体を触ったかと思うと、そんなことを

いった。

「いや、大丈夫よ。元々、妖怪の楽園を作るのは私の夢だからね。そのためにいま頑張っているのだと思うとそうでもないわよ。それに……月に仕掛けた戦争で、思った以上に妖怪が死んでしまったからね。」

「ふふっ……。ボロボロな姿で戻ってくるんだもん。驚いたわ」

いきなりスキマが開いたかと思うと、親友がボロボロな状態で倒れてきたのだ。焦るなというほうが無理である。　そんな苦々しい過去を思い出した紫は、顔を引き攣らせる。

「う〝っ……。ちょっと想定外だったのよ。よく分からない物でこっちの勢力がどんどん減っていくんだもの、あんな体験はじめてよ」

ぶるぶるっと身震いした紫は、もらったお茶を飲み干し、茶菓子として出てきた和菓子を受け取り、スキマを開いた。

「もう行くの？」

「ええ、これからが頑張りどころだからね。」

背を向けてスキマへと入っていく親友を、幽々子は手を振りながら見送った

☆

幽々子とお喋りをして少しだけ気分がまぎれた紫は、こんどこそ本当にぶらぶらとさ迷っていた。スキマの中で。　スキマで移動しつつ、なにか面白そうなものはないかと探す紫の目に一人の男の姿が映った。

黒髪にところどころ混じっている赤い髪。　どことなく病んでいる印象を受ける目。　そしてどことなくかんじる変な違和感。

そんな奇天烈な髪と、瞳。　そして違和感に興味を抱いた紫は、少しだけ観察しよう男の近くに移動した。

もちろん、スキマの中なので男からは分かるはずもなく、男はゆっくりと山を登っていた。

そんなときだった。男から声をかけられたのは。

「『なにか用があるのかい?お嬢さん。　まぁ、俺のほうは君に用

があるんだがな』」

はじめは幻聴だと思った。最近、頑張りすぎてたし、疲れているのだろうと。　しかし、その考えはあっさりと砕けた。

「『そこにいる金髪のお嬢さん、君のことだよ。　そんな所に隠れてないで、その麗しい姿をみせてくれないかい？』」

キザったらしいセリフを吐きながら、男は迷うことなく手を出した。

――――紫のいるスキマのほうに

それを見て、紫はスキマから出る。

「『これはこれは……なんとも美しい妖怪がいたもんだな。』」

男は紫の姿をみると、体全体を舐めまわすようにみやる。　そんな男を前にして、紫は驚いた。

本当にこの男は生きているんだろうか？　この男は存在しているんだろうか？

それが紫の第一印象だった。

スキマから出て、はじめて思ったのがこの男の存在の希薄さだった。
集中していないと、この男のことなど絶対に見つけられないかもしれない。　不思議な妖怪だと思い、同時に興味が出てきた。

「はじめまして、スキマ妖怪の八雲紫よ。　あなたは？」

精いっぱいの慈愛と、沢山の威厳を込めて紫は男と会話する

「『俺かい？　俺にあんたみたいな“名”は無いんだけどな……。どうしても呼びたいのであれば、こう呼んでもらおうか。』」

男は一拍あけて、透きとおるような声でいった。

「『不知火』」

――――最弱の鬼火妖怪さ

## 外伝？～追憶～（後書き）

※鬼火が最弱というのはここだけの設定です。

不知火とは鬼火の一種です。

天狗にも種類があるように、犬に種類があるように、鬼火にも種類があります。

そんでもって、そのうちの一つが不知火というわけです。

これから、過去の話の中にちょくちょく現代の話もいれていきたいと思ってます。　それに伴いまして、読者のみなさんが困惑しないように、過去を『外伝』とさせていただきます。　ご了承ください。

ではでは（´∀`＊）ノシ

## 32．ちょっとした違和感

先の異変で怪我を負った俺は、あれからほとんどの行動を霊夢によって制限されていたわけだけど、今日この日をもってようやく解放された。　ごめん、逃げだした間違いだった。

「さて……手引してくれた萃香には後でお礼をあげるとして……。まずは紅魔館に行かないと。」

スペルカードを考えてくれたパチュリーにお礼を言わないといけないし、あれから咲夜もたまに俺の様子をみにきてくれた……でいいんだよな、なんか俺の怪我の様子をみて心なしか嬉しそうにしていたけど。

「でも……できることなら行きたくない……。　ぜったい、なにか言われそうだし……」

まだ本調子じゃない体に、行きたくない病を発症させながらも俺は博麗神社への石段を降りようと足を階段につけた瞬間、膝かっくんのような状態になり一気に階段を転げおちた。

「いっつ……。」

ぎりぎり受け身をとることができた俺は、腕についた小石を払いながら鳥居のほうに目を向けた。

「おかしいなぁ……。　いま誰かに膝かっくんされたような気がしたんだけど……。」

気になって周囲に目を向けては見たものの、人影の姿はみえず。また、俺のほうもいまだに本調子ではないのであんまり考えないようにして紅魔館への道のりを歩くことにした。

☆

「あっ！彼方さん、もう調子は大丈夫なんですか？」

「激しい運動はまだ危ないけどね。　耳のほうはなんとか。　今日は霊夢が萃香と人里で買い物に行ってるからその隙に逃げ……いや、なんでもない」

いつもニコニコ紅魔館の門番は、俺の口から大丈夫だという旨を伝えるとよりいっそう笑顔を深めた。　美鈴は紅魔館の門番という立場から俺の見舞いに来れなかったことを少し悔いているみたいだったが、俺からしてみれば正直な話、美鈴が来なくてよかったと少しだけ思ってしまった。　だって、あんだけ一生懸命に俺に教えてく

れているのに、当の俺は鈴仙に手も足も出ずに負けたのだから。
弾幕にしてもそうだ。　幻想郷でも最強格に位置する霊夢に教授してもらっているのに、あんな体たらく。　霊夢は「これからよ。それに頑張っているのは私がよく知っているから大丈夫よ」なんて優しい言葉をかけてくれたけど……やっぱり申し訳ない。　というか、悔しい。

「ん？　どうしたんですか、彼方さん。　門を開けましたよ？」

「へっ……？　あ、ああ、悪いな。　それじゃ、お邪魔します」

「はーい！」

手を振ってくれる美鈴に手を振り返して、俺は紅魔館の敷地に足を踏み入れる。　いつみても立派な館だなぁ……。　いや、博麗神社が立派じゃないということではないんだけどね。　それにあそこには亀がいて餌やりとかも面白いし。　家主が霊夢なだけあって結構行動に制限されているというわけでもないし。　って、なんで俺は博麗神社のフォローみたいなことしてるんだろう？

とりあえず紅魔館の屋敷内に入った俺は、地下への入口を探す。あいかわらず広い場所なので迷いそうだ。　たしか、こっちでいいはず……。

「……あれ？　あそこにいるのは咲夜じゃん。」

角を曲がったところに、咲夜がモップを片手に床を掃除している姿が目に入った。　こうしてみると、咲夜もほんとにメイドしてるんだなぁ……。　……あれ？　そういえば咲夜なら俺が屋敷に入って来たことくらい知ってると思うけど……。　もしかしてそんなことも忘れるくらい掃除に集中してたのかな。

☆

今日は博麗結界が新しく構築される関係で花がどこもかしこも咲き乱れ、自然そのものである妖精たちも活発化する。　それでなのかわからないが、家のう妖精メイドたちもいつにもまして騒がしい。　ほんと……壊してばっかりでろくに掃除をしないんだから。

「花が綺麗だから、今夜はテラスで食事なんてのもいいかもしれないわ。　お嬢様と妹様、パチュリー様に小悪魔。　あぁ……美鈴も特別に呼んであげてもいいかもね。」

あらかたモップがけを終えた私は、傍に置いていたバケツにつけて一息いれる。　そういえば、彼は今頃なにをしているのかしら。　妹様がよく遊びに行かれていたようだけど……体に触らなければいいけどね。　彼の性格上、こういう日に出歩いてなにかしら事件に巻き込まれるし……。　そもそも、たいして強くない癖に口だけは達者なのよね。　犬みたいによく吠えて。　周りの支えもあってか、

なんだかんだいって結果は良いみたいだけどね。

「って、なんで私がアイツの心配をしないといけないのよ……。こっちだって色々と大変なのに」

この前の異変、たしか永夜異変だったかしら。　その異変のときにお嬢様は永遠亭の医者と弾幕勝負をしたのだけど……決着がつく前に相手がその場を離脱。　本気のお嬢様を前にして逃げおおせたことも凄いのだけど、それよりもなによりも……それからというものお嬢様は大変月に興味を示したみたいで、なにやらパチュリー様と計画を立てている始末。　その計画に合わせて、私も幻想郷の中を動き回ることに。　お嬢様のためなら、喜んで動くのだけどね。

「誰か肩でも揉んでくれないかしら」

丁度、横にいる妖精メイドが首を傾げたがそれを、半ば無視する形で私はバケツとモップを持ってこの場を後にしようとした。　それより、この妖精メイドは虫取りアミなんてもってどこへ行く気なのかしら……。　あぁ……ほんと頭が痛くなってくるわ。

私は頭を押さえながら歩こうとしたが、前方で何かにぶつかり尻もちをついた。

「いった～……。　こら、妖精メイドっ！って……誰もいない……」

あれ？　たしかに誰かとぶつかったんだけど……。　てっきり妖精メイドだと思ったけど、考えてみるとおかしいわね。　妖精メイドは私よりも背が小さいわけだし、そもそも紅魔館の妖精メイドで私に悪戯をしようと思う子なんていないはずがないし。

「まさか、侵入者？」

だとしたら、美鈴から連絡ないしは戦闘の音で気がつくはずよね。

……まさか、また寝てたりなんてことはないでしょうね。

「ちょっと様子を見に行こうかしら。　……いや、それよりもさっきの場所に何があるのか調べるほうが先決ね。」

美鈴の様子を見るのは後回しにして、いましがたぶつかった所に手を伸ばす。　すると手はなにかにぶつかり前進を止める。　私はそのぶつかった所を中心にゆっくりと左右に動かす。　右へ動かすと何か尖った部分にいきあたり、左に動かすと柔らかいものに触れる。

その感触にすこし驚きながらも、私は意を決して手を下へとさげる。　ふと、いままでとは違う感触にいきあたり一瞬手を引っ込めたものの、もう一度ゆっくりと触れる。　それは強く押すと反発でもどってくるようで、ちょっと面白い。

「……これはなかなか……」

ちょっと楽しくなりはじめた咲夜は、年相応の可愛らしい笑顔を浮かべ正体不明のなにかをずっと弄り続ける。

「ふむ……押したときの力によって反発する力も変わりますね……」

「あの～……咲夜さん？」

「ふむ……なぜあなたが私の目の前にいて、私に唇をプニプニされていのでしょうか……」

「いや、それは俺が聞きたいんだけど。　さっきから呼んでたじゃん」

いきなり現れた彼は、およそ常人には理解不能な言葉を喋る。　かわいそうに……、霊夢が外に出さないからきっとストレスでおかしくなっちゃったのね。

「それはそうと、どこから入ってきたのよ」

「いや、美鈴が門を開けてくれてそのまま玄関から入ったけど……」

「ふ〜ん……」

美鈴ったら、また報告し忘れかしら。

「それで？　今日はなんのようなの？」

立ち上がり、スカートを直しながら聞く。

「えっと……パチュリーに用があってきたんだけど」

「そう。　ならこんな所で油を売ってないで早くいきなさい」

置いていた掃除道具を持ち、それだけ言って私はその場から時を止めて後にした。

……姿はおろか、気配すら気がつかないなんて、ちょっとおかしいわね。　あ、ビンタうつの忘れてたわ。

▽　▽　▽　▽

咲夜からの一方的な別れを済ませたのち、俺はふたたび地下への階段を探しだし自分の力では無理だったので、妖精メイドに案内されて目標地点に到着した。　それにしても、咲夜は本当に俺の姿に気づいてなかったのかな？　声だって何度もかけたのに……無視という様子ではなかった。　う～む……。　すこしだけドキドキしてた俺が馬鹿みたいだ。　まぁ、そのことは後回しにしていまはパチュリーに会いに行くとしよう。

コンコンと控えめにノックをする。　べつに図書館だし、出入り自由な気がしないでもないのが……ほとんどパチュリーの部屋状態なのでノックをすることに。　ちょっと力が弱かったかな？　なんも反応がない……。

「開けちゃえ」

「あ、彼方さん。　待ってましたよ？」

丁度開けようと、前に押し出した瞬間に向こう側からも、小悪魔が同じタイミングで開けたようで、おもわずつんのめる形になる。

「おっとっと……。　やあ、小悪魔。　久しぶり、元気にしてた？」

「元気にしてましたよ。　彼方さんも色々と大変だったと伺っております。　お怪我はもういいんですか？」

さりげなく俺の体を止めてくれた小悪魔は、俺を心配そうにみつめる。　おおよそ、咲夜かフランちゃん辺りから聞いたのかな。　小悪魔は一日のほとんどをここの図書館で過ごすみたいだし。

「う～ん、身体のほうはまだ本調子じゃないけど、行動するのには支障はないと思うよ。　さすがに弾幕勝負は無理だと思うけど。」

定期検査をしてくれている永琳さんによると、みえないところで身体が無理をしているみたいだから、やっぱり休んだほうがいいとのこと。　そしてそれを聞いた霊夢が厳戒態勢を敷き、今日までずっと過ごしてきました。　正直な話、やりすぎなんじゃないかと思うけど、あんなにも一生懸命にしてくれたので言いだせなかった。いや、これで俺が文句を言おうものなら罰が当たっちゃうな。　それに異変なんてものは、そんなしょっちゅうあるわけでもないし、俺が養生している間はすんごい平和だった。　やっぱり、幻想郷は基本的に平和が日常というか、一番というか、自分でもまとめることができないけど、そんな感じだ。

「今日はパチュリー様に会いに来たんですか？」

「うん。　スペルカードでお世話になったしね。　……ちょっと怖くて足が若干震えてるんだけどさ」

「あはは……ご愁傷さまです」

困った笑みを浮かべながら、俺に手を合わせる小悪魔。　その可愛らしい笑みに騙されそうになるけど、この子俺を見捨てたよね？　完全に見捨てたよね？

「パチュリー様―。　彼方さんが来ましたよ～」

そうこうしているうちに結構歩いたみたいで、小悪魔が背中を向けて熱心に本を読んでいるパチュリーに話しかける。　しまったッ……完全に好機を逃した……！

「あ、あのさ小悪魔。　パチュリー一生懸命に読書してるし、今日のところはやっぱり帰るよ。」

「あら？　そんな気を使わなくてもいいのよ？　丁度いま読み終えたところだったし。」

パタンと国語辞書くらいの厚さがある本を閉じ、椅子を回しながら俺のほうへと振り向くパチュリー。　あいかわらずの色白です。

「久しぶりね。　元気にしてたかしら？」

「ええ、あれからの日常は平和そのものでしたよ。」

なんでだろう……普通に会話をしているだけのはずなのに、俺の身体からべたつく汗が噴き出て止まないのだが。

「ところで今日はなんの用事かしら？」

「あ、えっと……前の異変のときにさ、その……パチュリーが一緒に考えてくれたスペルカードが役に立ったから……そのお礼を言おうと今日は来たんだけど……」

長く喋るにつれ、どんどん尻すぼみになっていく俺の声。しかし流石にこの距離ならパチュリーには全部聞こえていたようで

「役に立った？　おかしいわね、私が咲夜に聞いた話だとそのスペルカードを使って盛大に自爆したと記憶されているのだけど」

「う〝っ……！？　いや……あの……そもそも『七曜鏡花』って俺の体力と集中力が持続するときじゃないと使えないというか……。あそこで出したのは間違いだったな～……なんて」

「それはそんな体力と集中力が持続しない状況に陥ったあなたが悪

いの。　それを巣終えるカードのせいにするんじゃないの。」

「……はい、ごめんなさい」

素直に頭を下げる。　それもそうだよな……結局俺の力不足だったという真実しかないわけだよな。

「まぁ……それとこれとは別として。　彼方、“七曜”までつけてあげたのに……ちょっとがっかりだわ」

はぁ……と視認できそうなほどのため息をつくパチュリー。　そのため息が俺の心を抉ってくるのをこの方はわかっているのかな。たぶんわかってないと思うけど。

「パ、パチュリーさまっ!?　それはいくらなんでも……」

「いいのよ。」

「はぁ……」

「いい、彼方。　いまや幻想郷であなたは注目の的なのよ。　何故だかわかる?」

人差し指を立て、俺の目の前にその指を持っていきながらパチュリーは真剣な表情で俺に問う。　もちろん、俺にそんなのがわかるはずもなく俺はパチュリーの期待にそえるような解答を出すことができず、黙るより他なかった。　そんな俺をみてパチュリーはゆっくりと話し始めた。

「空を飛ぶことも出来ず、弾幕も少量、とくに秀でている才能があるわけもない。　そんなただの人間がどこまで生き延びていけるのか？　あまっちょろい目標をかかげてね。もちろん、そんな貴方が気に食わない者は沢山いるけどね。　ああ、安心して。　私は期待すらしてないから。」

最後の一言は余計だと思うが……。

「いまは失笑しかされないだろうけど、頑張って強くなったら、いずれ認めてくれるかもね。　ああそれと、さっさとその妖精たちも連れ帰ってもらえるかしら。　本を汚されでもしたらたまったもんじゃないわ」

満足したのだろうか、パチュリーは喋り切った後、俺に背中を向けそのまま横に積んであった本の中から一冊を取り出し、まるで俺の存在なんて消えたかのように本を読み始めた。

「えっと……彼方さん？　あの……どうか気を悪くしないでください、というかなんというか……。」

「いや、べつにきにしないさ。　それより今日はお暇するよ。　パチュリーも御覧の通り俺にはもう興味ないみたいだしね。」

申し訳なさそうな顔をする小悪魔に、きにしてないとアピールするように笑顔で手を振る。　小悪魔はせめて図書館での見送りだけでもと、わざわざ扉の前で、またきてくれ、との旨を伝えて自分の持ち場へと戻っていった。　さてさて……俺も出るとするか。

☆

咲夜やレミリアちゃんやフランちゃんに会うことなく、紅魔館の玄関から出た俺は真っ直ぐに門へと足を進めて行く。

「あ、彼方さん。　もうお帰りですか？」

「うん。　用事は済ませたしね。　それに本調子じゃないからかもしれないけど、なんだか体が重くかんじるし、たまに声が聞こえなくなるんだよね……。」

両耳をトントンと叩きながら首をひねる。　パチュリーとの会話の

ときも、最後にパチュリーは何か言っていたみたいだけど、俺には音として届いてなかった。　口を開けてたし、その後に小悪魔からフォローがはいってたから、俺が見てる夢とかじゃないんだよな。

「あらら……。　う～ん、それは危ないかもしれませんね。　またお医者さんに見せに行かれては？」

「う～ん……。　そうしようかな。　ねえ美鈴。　ところで……今日はやけに妖精たちが活発みたいだけど、なにかあるの？　それになんだか花も沢山咲いてるし」

門番をしている美鈴の横に立って、改めて外をみる。　やはり自分の勘違いなどではなく、門の前や、湖の畔には沢山の綺麗な花が咲いており、その花の周りで妖精が楽しそうにクルクルと踊っていたり、おいかけっこをしたりしている。　自分の記憶が正しいのであれば、こういったことは今日が初めてだと思う。

「ああ、そのことですか。　これは６０年周期で起こることなんですよ。なんでも、６０年に１回の割合で外の世界で発生する幽霊が増加して、幻想郷の花に憑くみたいですね。　妖精は自然そのものですから、嬉しいのかどうかはわかりませんが、いつもより騒いでいるのですよ。」

「異変って……。　大丈夫なのかよっ？」

「ええ、死神さんがちゃんと処理をしてくれるので、放置してても問題ないそうです。　それになにかあっても、霊夢さんが解決するでしょうし。」

う～ん……そういうものなのだろうか……。　けど美鈴の口ぶりからすると、何度もこういったことは起こっているみたいだし、俺より幻想郷のことを知っている美鈴が大丈夫と言うなら大丈夫なのだろうな。　それに霊夢だっているわけだし。

「それよりも、鍛錬は怠っていませんか？　そっちのほうが私は心配です。」

手を後ろに回して、下から俺の顔を覗き込むようにして可愛らしく首をコテンっと傾ける。

「もちろんだよ。　無理なく頑張ってるよ。」

俺の答えを聞いて満足したのか、美鈴は何度も何度もうんうんと頷いた。

「えへへ……。　なんだか嬉しいですね。　私が頑張って練った計画を彼方さんが一生懸命にやってくれるなんて。　教える側としても嬉しいかぎりです。　いつの日か、彼方さんと対決できる日が来

るかもしれないですねっ！　期待してますよっ！！」

「いやいや無理だってっ！？　美鈴と対決なんて考えられないよっ！　それに期待なんてされても……」

期待なんてされてもほんと困る。　これが物語の主人公とかなら、『まかせとけっ！』なんてカッコイイ台詞が吐けるのかもしれないけど、俺はそんな大層なものじゃないんだ。　よくて村人Ａとかそんな配役なんだよ。

「ふむ、たしかにそうですね。　過度な期待は重荷にしかなりませんよね。」

ああ、そうなんだ。　だから止めてくれ。

「ではでは、彼方さん。　お詫びにこの異変の時だけの限定スポットを紹介しちゃいますよっ！」

「限定スポット？」

「はいっ！　まぁ、三途の川なんですけど。　そこにはいまなら沢山の花が咲き乱れていて、とても幻想的な空間になってますよ。　ずっと神社で過ごしてきたみたいですから、良い息抜きになるので

はないかと。」

両の手を胸の前で組み合わせ、キラキラとした目で語る美鈴。　自分が門番で行けないから、是非とも俺にいってくれと目で訴えかけているみたいだ。　それにしても花……か。　日頃のお礼も兼ねて霊夢にあげるのもいいかもしれないな。　よしっ！　そうと決まれば行くとするかっ！

「ありがとう美鈴っ！！　早速行ってみるよっ！」

かくして俺は美鈴に三途の川までの道を書いてもらい、その足でそのまま向かうことにした。

☆

そんな彼方の後ろを尾行している妖精が三人。

一人は赤いヒラヒラの服を着て、金髪を赤いリボンでツインテールのようにしている妖精

一人はちょっと澄ましたような顔をしながらも、心なしか楽しそうにしている、白い服に黒いリボンを胸につけ、さらに白い帽子をかぶっている妖精

一人は青と白の服を着て、頭にちょこんと可愛らしく青いリボンをのせている黒髪の妖精

そんないかにも悪戯大好きです。　と体からオーラを発してそうな三人組はポケットに手を突っ込んだまま、三途の川へと向かっている彼方の後ろを話しながらつけていた。

「危なかったわね、あそこの魔女。　私が咄嗟に音を消さなかったらバレていたわよ。」

「元々バレてたよ……。」

金髪で太陽を彷彿とさせるような妖精、サニーミルクが腰に手を当てて、へへんっ！とふんぞり返ると、横にいた黒髪の妖精、スターサファイヤがため息を吐きながら呟く。

「だ、大丈夫よっ！！　そこの人間にさえ気づかなければいいんだしっ！」

びしりっ！と空気を裂くかのごとくサニーミルクは指を彼方へ突きつける。

「でもさー、この人間まったく気付かないから面白くない。　膝かっくんの時は反応したけど、それ以外は目立った反応してないし。」

「う、うるさいわよっ！ルナ！　それに膝かっくんだって、ルナがいきなりやりだしたんでしょっ！？　私だってビックリしたわよ？」

全身を白い服で固めたルナチャイルドがすこしだけ面白くなさそうに彼方をみる。　そんなルナチャイルドにサニーミルクは、ちょっと怒りながらルナチャイルドに視線を向ける。

「まぁ、なんにしても……。　もう少しだけこの人で遊びましょう。結構弄りがいがありそうだし」

「たしかに。　じゃあ、さっそく肩車して遊びましょっ！」

黒髪の妖精、スターサファイヤがいうやいなや、サニーは彼方の肩に飛びつき、よじ登る。　そんなサニーの行動に二人はあたふたするが、一方の彼方はというと、いきなりきた肩の重みで若干足がぐらついたもののなんとか立てなおし、頭にクエッションマークを浮かべたまま三途の川に向かうのであった。

## 32．ちょっとした違和感（後書き）

とらドラの副会長は何故金髪にして怒られたのか。

## 外伝？～氷上の嬢王と鬼火～

見渡すかぎり一面が木々に支配されている場所で一人の青年と少女が口論をしていた。

青年のほうは、黒髪に赤い髪が混じっており、目は挑発的というか、ほんの少し病んでるような、射に構えたような目をしており、どこか取っつき難そうな雰囲気を醸し出しており、対する少女のほうは流れるような金髪に透きとおるような白い肌、ふわふわした服にお姫様を守るかのように太陽と少女を遮る日傘、それでいて妖艶かつ甘美な雰囲気を醸し出す。　そんな二人が口論していた。　正確にいうならば、少女のほうが一方的に怒っているようだ。

「だから昨日の晩何処に行ってたのか聞いているでしょう？　なんでそんなことも忘れるのっ！？　鬼火の頭の容量は昨日の晩に自分が何をしたかも忘れるほどの容量なの？」

「『そもそもなんで俺がアンタにわざわざ行動を逐一報告しないといけないんだ？　アンタにはそれを知る義務でもあるのかい？」

「あなたは私が面倒をみることになったのよ？　それを知るのは当然じゃない。　ましてや貴方は最弱の存在。　その貴方を匿うのだから本来ならば感謝されるべきよね。」

「『ふむ……しかしながらそれはそちらが勝手に決めたことだろう。俺は匿ってほしいなんて一言も言っちゃいないさ。』」

ああいえばこういうとはこのことである。　金髪の少女、八雲紫は震える拳をぐっと力で抑え込み、なんとか笑顔を浮かべる。

「（落ち着いて……この男はこういう男よ。　紫、耐え忍ぶのよ。）」

そんな紫の心境など露知らず、青年はさっさと何処かへ歩き始めた。

「ちょ、ちょっと何処行くのよ？」

声を張り上げ、怒った口調で呼びとめる紫に青年は紫のほうなど一瞥もくれずに歩き去った。

「『面白い人物に会ってくる。』」

そう言い残して。

追うことを諦め、青年の――――不知火の背中を黙って見つめながら紫は、大きく長い溜息を吐いた。　なんで私はこんな男を保護し

ようと思ったのだろうか……とあの時の自分を叱りたい気持ちを押さえながら。

▽　　▽　　▽　　▽

――――回想――――

自分のことを最弱だと名乗った青年は、そのまま紫に一つだけ質問をした。

「『お譲さん、龍の神を知らないかい？　詳しくは居場所なんだけどさ。』」

「龍の神……？　もしかして龍神様のことかしら？　だとしたら居場所を私は知らないわ。　そもそも滅多に姿なんて見せないわよ。」

そう答える紫に、不知火はあからさまに落胆したような顔をして、小さくぼやいた。

「『まったく……呼びだした後は放置プレイかい。　することがサディスティックだねぇ。　おもわず燃やしたくなるよ。』」

しかしながらそれも一瞬の出来事で、不知火はすぐさま足を先程行

こうとしていた方向に向けた。

「『時間を取らせて悪かったな、お嬢ちゃん。』」

そう言って不知火は紫のほうを見ずに歩き去ろうとする。

「まちなさい」

が。　しかしそれは紫が腕を掴んだことによって実現することはなかった。　腕を掴まれた不知火は一度強制的に止まり、ゆっくりと振り向く。　紫はそんな不知火に対し

「あなた、どこへ行くきかしら？　そこから先はオススメしないわよ。　鬼のテリトリーですから」

キツイ眼差しで止めた。

“鬼”――それは妖怪の種族の中で最強を地でいく存在。　嘘が大嫌いな存在。　八雲紫ですら能力がないと倒されてしまうかもしれない。　ましてや目の前にいる男は自分よりも遥か下に位置する力の持ち主である。　自分がここで止めなければこの男は“鬼”のテリトリーにはいり殺されてしまうだろう。　それはいくらなんでも後味が悪い。　月に攻め込み同胞の死を沢山みたいまの自分に

は、ここで彼を見送るという選択肢はない。

そう思う紫であったが、目の前の男は若干口角を釣り上げ、自分が行こうとしている道、そしてその道を遥か登った所にそびえ立っている山。　すなわち“鬼”と“天狗”が住んでいるであろう場所を見つめる。

「『へー……あの種族最強の鬼があそこの山にねぇ。』」

「ええそうよ。　他にも天狗だっているんだから、貴方には危険な地帯であることには違いないでしょ。」

腕を掴みながら不知火に言い聞かせようとする紫。

「『たしかに危険だな。　……けど俺のような存在から言わせてもらえば、何処にいても危険な場所であることにかわりないよ。　まぁ……スキマ妖怪様にはわからないと思うけどね。　強者の気持ちが弱者にわからないように、弱者の気持ちもまた強者にわかるはずがない。　まったく、嫌な世の中だことで。』」

やれやれと頭を振りながら不知火は、オーバーリアクション気味に言う。　そんな様子をみて紫は反論する。

「そんなことないわ。　現に私には貴方の気持ちがわかるもの。」

そんな紫に一言に、不知火は眉を顰める。　顰めてから、紫の正面を向き試すような口ぶりで挑発するように笑いながら話す

「『それは愉快な頭をお持ちだこと。　だったらいまの俺の気持ちというものを教えてくれないかい？』」

その言葉を聞いて、紫はニヤリと笑い不知火と話していたときに閉じていた扇子を、勢いよく開き、そのまま不知火が立っている場所を空中で横に裂いた。　その一連の行動を黙って見ていた不知火であったが、次の瞬間にはその場から消えていた。　正確に言うならば、八雲紫が開いたスキマの中へと落ちていった。

☆

突如やってきた浮遊感に、驚く時間も疑問に思う時間すらないまま飲みこまれ、数秒もしないうちに吐き出された。　辺りを見渡すと、木のテーブルや畳があるので、どうやら家のようだ。　それに誰かが現在進行形で生活をしているようで、そこかしこから生活臭がする。

いきなりなんなんだ？

そう思った不知火に、答えるように目の前にスキマが開き中から紫が出てきた。

「どうかしら？　私なりに貴方の気持ちをくみ取ったのだけど」

「『どこをどう汲み取ったのか教えてほしいものだな。』」

その言葉を聞いて、待っていましたといわんばかりに紫は扇子を突き付けて言った。

「あなた、住む家がなくて困ってるでしょ？　特別に妖怪の賢者である八雲紫の家で匿ってあげる。」

悪戯兎がいたずらを企てているときのような笑みで、楽しそうな笑みで、優しそうな笑みで紫は不知火に手を差し出しながら言う。

そんな紫に不知火は呆然とし、一拍して差し出された手を無視してそっぽを向きながら、なにかを諦めたような顔で言った。

「『アンタは俺の嫌いなタイプだよ。　勝手にしてくれ。』」

――――回想終了――――

☆

それから私は、彼を家に置くことを藍に伝え、藍も最初は眉をひそめたものの流石に追い出すようなことはせず最終的には了承した。

その日はそれだけで終わるはずだったのだが、私は彼のことを見誤ったらしく、彼は夜中に気配を隠すような真似は一切せずに堂々と玄関から外へくりだした。　妖怪の本来の活動時間は夜である。

そのことを考えると彼の行動はべつにおかしくはなく、私も追うようなことはしなかった。　というか、私だって眠いのだから自分の体に鞭打ってでも追うようなことでもないだろうと思った。　そして2時間くらい経った頃だろうか……。　ふと気配を感じて寝惚け眼をこすりながら、その気配のしたほうに視線を向けると服全体に血をつけた状態の彼が何食わぬ顔で自分に宛がわれた部屋へと帰って行くのを発見した。　私はその場で彼を捕まえて何処に行ってたのか、何をしてたのか、聞こうと思ったのだが夜も遅いし、なにより自分が睡魔に勝てなかったので昨晩は何も聞かずに今日になってまたもや一人で出かけようとしていた彼を捕まえて、尋問をしていたのだが……結果は燦々たるものだった。　まず彼は自分が何をしていたのか絶対に話そうとしない。　朝食の時間にもそれとなく聞いてみたのだが、『――アンタには関係ないだろ。』　『しつこい女は嫌われるぞ』と、だんまりどころか挑発してくる始末。　そんな彼に藍も鋭い目線を向けるわけだが、その視線さえもどこ吹く風で自分に与えられた物を食すのみ。　そのあまりの態度っぷりに卵

かけご飯用の卵を投げつけたほどだ。　当たらなかったが。

「ここに居られましたか紫様。　探しましたよ」

「あら、藍。　どうしたの？」

「ええ、すこしばかし面倒なことがありまして……」

藍は申し訳なさそうな顔をいて紫を見る。　ここに妖怪の楽園を作るにあたってかれこれ“面倒”なことを１００回以上も経験し、解決してきた。　妖怪というものは“我”が強いものであまり協力というものをしようとしない。　これは力が強い者ほどその傾向にあるみたいだ。　その最たるものが花の妖怪であり、ひまわり畑をテリトリーとしている風見幽香である。　まぁ……彼女にそういうものを求めること自体が無理難題であるので、このさい置いておこう。
　いまはそれよりも、藍がいう“面倒なこと”がどういったものなのかを聞くことのほうが大切だろう。

「その面倒なこととは、何かしら？」

「はい。　紫様は氷上の嬢王を知っていますか？　氷帝とも呼ばれているそうですが。」

「氷上の嬢王？　氷帝？　随分と大層な名前ね。　そんな名前なら私の耳にも届くと思うのだけれど……残念なことに私は知らないわよ。　それで、その氷帝がどうかしたの？」

「はい。　その氷帝を名乗る者は妖精なのですが……。　どうもこの妖精、突然変異のようなものでして、妖精としては破格の力を持ちその力で暴れているようなのです。」

「随分困った妖精ねぇ……。」

口でこそ軽く言っているものの、内心紫も驚いている。　妖精は自然現象が具現化したものである。　元々、弱小の存在であり、人間より弱い存在だと言われている。　小さいものは手の平におさまるくらいで大きくとも人間の幼子ほどだ。　その妖精が突然変異で、しかも妖怪と張り合おうなんて……。

「妖精は自然のようなものですから、殺されてもすぐに復活するでしょう。　それにいくらその妖精が強くとも流石に妖怪に勝てるとは思わないわ。　それよりこれから天魔の元へ行くのだけれど、藍もくるかしら？」

「はい」

そう結論付けて紫はこれからの話しあいをしに、天魔が住んでいる

妖怪の山へのスキマを開いた。

▽　　▽　　▽　　▽

紫たちのいる場所よりずっと東の湖にその者はいた。　透きとおる氷の羽は天使を彷彿とさせ、青色の腰まで届く長い髪は同じく可愛らしい青色のリボンで結わえられており、その眼光は鋭く冷徹で、その眼光で睨まれた者は氷漬けにされたかのように動くことができなくなってしまうだろう。

「そこにいる者、出てきたらどうだ？」

「『べつに隠れていたわけじゃないのだけどな。　ご機嫌はどうだい？』」

「たったいま気分が最悪になったところだ。　昨晩あれだけ氷の槍に貫かれたというのに、よくくるものだな。　それとも、作晩の記憶を既に失くしてしまったのか？」

「『……つい先程、同じようなことを言われたよ。』」

茂みから詫びることなく現れた不知火は、丁度いい具合の石に腰かけその者を見る。

「ほう……。　その者とは相性がいいかもしれぬな。」

「『やめといたほうがいいよ。　あれはなにを考えてるか分からないから。』」

親切心で止める不知火に、何が可笑しいのかその者はいきなり笑いだし、あまりに笑うものだから目には涙を溜めるほどであった。

「くくっ……。　そなたほど何を考えているのか分からない者はいないであろうに。　そんなそなたを、何を考えているのか分からないかと言わしめる人物か……。　益々興味がわいてきた。」

「『行き過ぎた興味は時として身を滅ぼすこともあるってことを覚えておくことだな。【しょうがないさ。　俺はこういう風にしか生きていけないのだから。】』」

「ほう……まるで実体験を元に話しているみたいだな。」

女性は笑うことを止め、氷上から不知火が座っている石へと歩く。

「『べつに。』」

自分の目の前まで来た女性と目を合わせないようにしながら、不知火は吐き捨てるように言った。

「ふん……まぁ、いいだろう。　それで？　此処へは何用で来た。　また無様に貫かれにきたわけではなかろう。」

いやらしい笑みを浮かべながら不知火に挑発的な眼差しを向ける。　そんな目で見られながらも、不知火は至って普通に自分がきた要件を喋り出した。

「『昨日殺し合いをしてわかったけど、あんた強いな。妖精としてのその強さで、どこまでいけるのか興味がわいてきてな。』」

「なんだ……そんなことか。」

「『ん？　そんなことって……随分楽しくなさそうだな。』」

「当たり前であろうに。　このような力が何になるというのか。」

妖精にしては破格な力をもったこの女性は、この力を異様に毛嫌いしていた。　歩けば力によって歩いたきた道のりが凍り、腕を振る

えば結晶となり、その身に近づく者は皆、絶対零度の寒さゆえに凍ってしまう。　そのような力を女性は嫌っていた。　そんな力、自分は一言もほしいと願ったことはない。　そしてその力だけが独り歩きをし、変な異名を持つことになった。

「私は他の妖精と同じようにただ遊びたいだけだったよ。　まぁ、いまじゃ皆私を恐れ近づく者はいないが。　そしてそれは変わることがないだろう。　この力があるかぎりな。」

女性は先程とは打って変わった様子で、しんみりしながら話した。
　そんな様子を不知火はどこかつまらなそうに、白けた目で見ていた。

「『つまんねえな。　ガッカリだ。』」

唐突に、ほんとうにつまらなそうに不知火は女性は見る。　さっきまどの興味はいまや微塵も存在していないだろう。

「『自分には過ぎた力だからいらないか。　あーあ、さっきまでの興味が失せた。　もういいよ。』」

そう言って立ち上がる不知火。　自分よりもほんの少しだけ背の低い彼女を見下げながら、おもむろに手をかざし手の平に十徳ナイフくらいの大きさのナイフを出現させると、そのナイフで彼女の胴体

をなんの躊躇いもなく切り裂いた。

「……なっ！？」

いきなりの行動に困惑する彼女。　しかしもっと困惑することが起こった。

「『あんたにゃその姿がお似合いさ。』」

そう言ってくる不知火と自分との身長差が明らかにおかしいのである。　それこそまさに、人間の幼子くらいの大きさしかないくらいに。

「え……？　ってなにこれっ！？　身長が縮んでる？　アタイどうなって――――あれ？　アタイってなにアタイって！？」

不知火そっちのけで喚きだす彼女。　先程まで彼女の周りにあった氷は既に溶けかけていて、彼女の周りにいてもひんやりする程度にしか感じなかった。

「『精々その姿と、その程度の力で頑張ることだな。　……いつの日か、アンタと一緒に行動してくれるもの好きが現れるかもしれないけどな……。』」

背を向けて去ろうとする不知火を彼女は呼びとめる。

「あんたって、ほっっんと素直じゃないんだね。　アタイそういうの大嫌い」

「『嫌われるのには慣れてるさ。褒め言葉として受け取っておくよ。』」

「ふ～ん……。　それじゃアタイあんたのこと大好き。」

不知火の足が止まる。

「なんてね。　冗談に決まってるじゃん。」

「『それはよかった。　その単語が死ぬほど嫌いでね。　あやうく昇天するところだったよ。　それじゃあな、氷精さん。』」

軽く手を上げ、不知火は去っていった。

☆

「おい、確かこっちのはずだよな？」

「ああ、そうに違いねえ。　ったく……妖精ごときが好き勝手暴れやがって……！」

「けどよー。　本当にやるのか？　ちょっと可哀想じゃないか？」

三匹の妖怪が、そんなことをいいながら森を歩いていた。　牛の皮を体に纏っている牛打ち坊と呼ばれる、牛や馬をもっている猛毒で殺してしまう妖怪である。　そんな三人は、あーだこーだ言い合いながらも、真っ直ぐに湖がある場所へと足を進めていた。　そんなとき、いま彼らが向かおうとしている場所の方角から、青年が一人歩いてきた。

「おいあんちゃん。　ちょっと聞きてえことがあるんだけどよ。この先に妖精のくせに俺らと変わらないほどの力を持った妖精がいるらしいんだが、見たことあるかい？」

「『さあ？　悪いがみてないね。ちなみにアンタ達が向かおうとしている場所には、ちょっとだけ力が強い氷精しかいないぜ。そもそも聞き間違いじゃないのかい？　そんな強い妖精がいると本気で思

うかい？』」

「う～ん……。　言われてみれば確かにな～……。」

「ほら、やっぱ嘘だったんじゃないか？」

「まぁ、普通に考えたらおかしいよな」

青年の言葉を聞いた彼らは、そんなことあるわけないか……。と言い残していま来た道を戻っていく。

「『べつに威厳とかまで消したわけじゃないけどね……。　やっぱこれを扱うのは難しいな。　まぁ、できるといいな。　そばにいるだけで安心する存在が。』」

誰もいない空間が不知火は小さく、ほんとうに小さく呟いた。

# 外伝？～虚言と闇魔～

周りが緑一色の森の中で、不知火はどこかの妖怪によって綺麗に切られた丸太の上に胡坐を掻いて考える。

此処に来て幾日が過ぎただろうか。　スキマ妖怪に匿われる形になってからというもの、なんともつまらない毎日がただ淡々と過ぎていくだけである。　せめて何か面白いことでもあればよいのだけど、スキマはスキマで忙しそうにしているし、その従者である九尾のほうもまたしかり。　まぁ……これは俺には関係ないからどうでもいいや。　倒れて世話することがないように祈るくらいだ。

スキマ妖怪は此処に妖怪の楽園を作るらしく、それのために奮闘しているとかなんとか。　大層御苦労なことで。　いやはや、俺にはできないことなので素直に拍手を送りたいものだ。

「『鬼に挨拶しにいくのも悪くないかもしれないな。』」

依然はスキマに止められたが今日はいないだろう。

その足で鬼が住処としている妖怪の山と呼ばれる所へ歩を進めようとしているところに、上空から見知らぬ声が聞こえてきた。

「あ、発見っ！　こんにちは、あなたが噂の妖怪ですか？」

胸のふくらみは中々。　肩にかかるくらいの黒髪に、白いシャツを着て下には上空からは下着が丸見えになるスカートを履き、背中の漆黒の翼を大きく羽ばたかせながらその少女が降りてきた。　少女は降りてすぐに不知火の体を上から下に穴が開くほど見つめ、ため息を吐いた。

「はぁ……。　鬼を相手取ろうとしている妖怪がいるというから探しだして来てみれば、こんな人とは……。　ちょっと期待してきたのに」

「『人の体を舐めまわすように見つめた上にため息を吐かれるのは生まれてはじめてだよ。』」

「あやや……これは失礼しました。　私は妖怪の山に住んでいます、鴉天狗の射命丸文と申します。　失礼ですが、お名前を聞かせてもらっても？」

「『名前なんてないよ。　呼びたければ不知火とでも呼んでくれ。』」

「名前がないんですか？」

瞳をパチクリとさせながら射命丸が問う。

「『“名”とは縛り付けるためのものであり、その存在を確定させるものだ。　名を得ることでその存在は初めて“そこにいる。”だとするならば俺には必要ないし、欲しいと思ったこともない。』」

「……なんだかよくわかりませんね。　アレですか？　そういうこと言ってる俺カッケーみたいな？」

「『……もうそれでいいよ。　さっさと消えろ、目障りだ。』」

手で虫を追い払うように、射命丸に向けて手を払う。　そんな行動を無視するように射命丸は不知火の隣へと腰を下ろした。

「まあまあ、ここで会ったのも何かの縁ですし。　色々とお話しましょうよ。　あ、私のことは親しみを込めて文と読んでくれても構いませんので。」

「『弱い者には傲慢で、強い者には媚びへつらう天狗様が、俺のようなか弱い存在に対して親しみとは笑わせてくれるねぇ。　なにか企んでいるのかい。』」

挑発的な瞳で、隣に座る射命丸を目を向ける。

その言葉を聞いた射命丸は、一瞬驚いたような顔をさせるが、すぐに先程のような笑みを消し、目を細め足を組みながら喋る。

「おやおや……。　折角この射命丸文が友達になってあげると言ってるのに、それを無下にする気かしら。」

「『べつに頼んじゃいないよ。　それに友達なんていらない。　鬱陶しいだけだ。　友情ごっこなんて片腹痛いよ。』」

座っていた丸太からどき、背伸びをしながら森の中を再び歩こうとする。

「『興が冷めた。　鬼は今度の機会に行くとしよう。』」

「おや？　その程度の力で鬼を相手にしようとは……そちらのほうが片腹痛いのでは？」

不知火が丸太からどき、足を進めたことで射命丸はそこそこ広い丸太を一人占めしながらクスクスと嘲笑しながら不知火を見送った。

☆

射命丸と一方的に別れ、ぶらぶらと歩いて森を出る。　森を出てからどうしようかと数秒間考えたのち、不知火は花が咲いているほうへと歩みを進め、辿りついて呟く。

「『まいったね。　柄にもなく花が綺麗に咲き誇る場所に歩いてきてみれば、彼岸へと続く場所に出るとはね。　いや、今後のための下見にはいいかもしれないがな。』」

「ほう、私がいるのにもかかわらずそのような言葉を述べるとは。
あなたは善行を積まねばなりませんね。」

後ろから聞こえてきたそんな声に不知火は振り向く。　緑髪を丁度肩の高さで切り揃え、頭にはけったいな帽子をかぶり、白い長そでのシャツの上に真ん中にボタンをつけて着脱可能な服を着て、手には棒を持っていた。

「はじめまして、こんにちは。　私の名前は四季映姫といいます。」

「『これはこれは、ご丁寧にありがとうございます。　その持っている棒は悔悟棒かい？　だとしたら、地獄の閻魔様が何故こんなところに？』」

「ええ、丁度時間ができましたので気分転換に散歩でもしようとしたときに、あなたを見つけましてね。」

「『それはそれは。　閻魔様の瞳の中へ俺の姿が映るなんて光栄なことこの上ない。　しかしながら生憎俺は多忙の身、ゆえにここでお別れすることとなります。　それでは閻魔様。　またこの地に赴くことがありましたら、是非ともゆっくりと、じっくりと、貴女の素晴らしい考えをお聞かせ願います。　それでは、ご機嫌よ。』」

大仰に盛大に、左手を腹の所にくるように置き、うやうやしく頭を下げてその場を後にしようとする。

「まちなさい。　ここで会ったのも何かの縁です。　少しだけお話いたしましょう。」

閻魔は不知火を止め、笑いかける。

「大丈夫です。　そこまで時間は取らせません。」

「『断る……と言ったら？』」

「私の前で、そのようなことが言えるのですか？」

沈黙が場を支配する。

折れたのは不知火のほうだった。　ため息を吐きながら、閻魔を真正面に見つめる。

「『閻魔相手にそんなことできるはずがないさ。』」

「ふふ……。　それは褒め言葉として受け取っていいのですかね。」

「『どーぞ、ご自由に。』」

不知火がニヤリと笑う。　だがしかし、そんな彼の顔は一瞬にして掻き消えることになった。

「では、早速質問をします。　――あなたは本当に存在しているのですか？」

「『……不躾な質問だねぇ。　質問の答えなら一応“ハイ”と答えておくよ。』」

「一応ですか。　正確に確定的に確実に的確に、あなたは答えることができないと。」

まるで死者を裁くかのごとく閻魔の瞳が不知火を捕えて離さない。
そして閻魔も離すつもりなどない。

「『棘のある言い方だね。』」

「私はこういう言い方しかできないので。　まぁ、確かにあなたが不明瞭な回答をするのもわかります。　なぜならあなたは、地に足をつけないふよふよとした存在だから。　消えたかと思えば現れ、現れたと思えば消える。　あなたはそういう存在。　不知火――――確かにあなたに相応しいですね。　手を伸ばせば伸ばすだけ不知火の玉は遠くへ行き、その手を戻せばまた戻ってくる。　誰も触れることができず、ただただ見ていることしかできない。」

「『「ゆえに貴方の本心に触れることもできない。」そう言いたいのかい？』」

言ってから不知火は、後ろを振り向き肩をすくめた。

「『とんだお節介さんだな。　スキマ妖怪様よりお節介さんだ。ああ、涙が出てくるぜ。』」

出てもいないのに、手で顔を覆うようにして涙をみせないように演技をする。

「『流石闇魔様だ。　どこぞの鴉天狗より胸を抉ってくる攻撃をお持ちだこと。　ああ、痛い。　痛いねえ。』」

「あなたも大したものですね。　その役者っぷりには脱帽ものです。嘘を嘘で塗り固め、近づく者全てを遠ざけ、弱者という立場に甘えるあなたは大変素晴らしくもあり、醜くもあります。」

闇魔は歯に衣着せない物言いで、不知火を追い詰めていく。　そこに私情が挟むことなど一切ない。　それが彼女であり、それが地獄の裁判官なのだ。　彼女には『白黒はっきりつける程度の能力』がある。　その能力を用いれば彼の本心を知ることができたかもしれない。　しかし彼女はそれをすることがなかった。　無意識に思ってしまった。　そんなことしたくないと。

「『くだらない。【やめてくれ】』」

吐き捨てるように不知火は言った。　それは誰がどうみても負け犬の遠吠えにしか聞こえなかったが、純粋に無垢にそう思った。

「負け犬の遠吠えみたいですね。」

「『負け犬で結構だよ。　そんなもの言われなくてもわかってるよ。負け犬で醜く、泥臭く、地べたを這いずりまわりながら生きていくのが俺なのさ。』」

そしてこの場から歩きだす。　もう喋ることなどないかのように。

これ以上、四季映姫と喋りたくないかのように。　四季映姫のそれを止めることなどせず、黙って見送ろうとする。　が、ふと気がついたかのように、不知火に声をかけた。　既に歩き始めていた不知火は振り返ることなどせず、ただ止まるだけである。

「貴方の進む先に、一筋の光があらんことを願います。」

それは四季映姫の本音であった。　私情を挟むことなく淡々と話してきた最後に、彼へと送る閻魔なりのプレゼント。　そのプレゼントは不知火に届いたのかどうかは分からないが、誰に話すでもなく、しかし閻魔にも聞こえる声量で話す。

「『そういった言葉は嫌いなんだけどな……。　閻魔様のありがたいお言葉だし貰っておくよ。』」

そんな台詞を吐いて、今度こそ来た道を戻っていった。

☆

不知火が去った後、映姫はため息をついた。

「おや？　めずらしいですね、映姫さまがこんな場所に来られるなんて。　仕事のほうが大丈夫なんですか？」

ふいに後ろからかけられた声に、映姫は先程とはベクトルの違うため息が自然と漏れた。

大きな鎌を肩に担ぎ、真っ赤な髪を両サイドの高い位置で可愛らしく結び、ワンピースのような形の白と青の綺麗なコントラストの服。
そして腰のあたりに銭を結びつけたベルトのようなものを巻いている、四季映姫の部下にあたる小野塚小町が陽気な声を出しながら頭にクエッションマークを浮かべてやってきた。

「そういうあなたはいつもどおりですね。　はじめは真面目で優秀な部下だと思っていたのですが。」

「う〝っ……。　あ、アタイは自分のペースで頑張っているというか、なんというか……。」

「はぁ……。」

いつもはこの悔悟棒で叩くところであるが、いまはなんとんなくそんな気分にはなれず、やはりため息をすることだけで終わった。

咄嗟に頭を両手でガードしていた小町としては、そんな上司の態度をみて首をひねった。

「どうしたんですか、映姫さま？　いつも叩いてくるのに今日もなにもしないなんて。　仕事のしすぎでおかしくなりました――きゃんっ！？」

言葉にしなければいいものを、小町は疑問に思ったことをそのまま口に出し、その結果として映姫の悔悟棒の餌食となった。　それにしてもなかなか可愛らしい声をだすものだ。

「上司に対しての口の訊きかたがなってませんよ。　……小町。あなたは嘘をつくときにどのような感情を抱きますか？」

映姫はしゃがみこみ自分の下に咲いていた彼岸花を愛でながら小町に問う。

「え～っと……いきなり唐突な質問ですね。　う～ん……嘘ですか。アタイは嘘をつくことが少ないのですし、嘘をつくとしてもちょっとした冗談程度なので、なんとも。　強いていうなら引っ掛かってくれればいいなと思うくらいですね。　して、それがどうしたのですか？」

「いえ、参考までに聞いただけです。　ありがとうございます。」

いまいちはっきりとしない上司の行動、言動に部下の小町はますます意味が分からなくなるばかりであった。

▽　▽　▽　▽

「あ、負け犬さんではありませんか。　こんな所で会うなんて偶然ですね。」

「『俺はいまだに丸太にいることで驚きを隠せないよ。』」

帰り道、あの鴉天狗がいまだに丸太に座っていた。

射命丸はニタニタ顔を隠そうともせずに、丸太から降り不知火へと

顔を近づける。

「負け犬でもいい。　なんてやっぱりカッコつけ野郎なんですね。」

「『人の説教される様を見るなんて、中々愉快な趣味をお持ちだな。』」

自分の周囲をぐるぐると回る射命丸に少しだけ鬱陶しく思いながらも、別段なにかするわけじゃなく帰り道を歩いていく。　そろそろ帰らないとスキマ様がご立腹で何をするかわからない。

「私ですね、あなたに大変興味を持ちました。　天狗の中にもここまでの逸材はいません。」

ですので――――私、あなたを観察しよう思います。

そう心の中で宣言する。

この地についたのはここ最近であるが、妖怪の山には鬼がいるし、天狗仲間は内のことばかりに目を向けているので、まだまだ若く好奇心旺盛な射命丸文には不知火は丁度いい、暇つぶしになったのだ。

友人である河童の川城にとりはこういうことに消極的なので自分一人になるがそれはしょうがない。

「『嬉しいねぇ、こんな美少女に興味をもってもらえるなんて。もうすこし胸が膨らんでから出直してきな。』」

「それはどういう意味かしら？　自慢じゃないけど、結構なプロポーションだと思うのだけどね。」

「『そういう奴に限ってたいしたことないんだよ。　ブスが自らのことを美少女と勘違いするようにな。　分かったらとっとと自分の巣へ帰ることだな。　鴉ちゃん。』」

訂正、この嫌みったらしい男の恥ずかしいところを集めて、泣いて懇願させ、射命丸文様、私が悪かったです。　どうかバラさないでください。　ごめんなさい。　と言わせよう。

好奇心は一瞬にして憤怒にかわり、射命丸文は後ろで小さく拳を握りしめながら仮面の笑顔を張りつかせ不知火の隣を歩くのであった。

## 外伝?～『』つけない言葉～

ある晴れた日、朝餉を済ました不知火が、家を出ようとしているところに八雲紫から話があると声をかけられた。

「『いったいなんのようだい?』」

「穀潰しの貴方におつかいを頼もうと思ってね。」

「『へえ……。　いったい何処まで?』」

穀潰しと言われも怒ることもせずにいるが、もしかしたら不知火も若干そう思っているのかもしれない。

そんな穀潰しの不知火を見ながら、紫は一つの場所の名前を告げた。

「妖怪の山。　これから知人の所に向かうから、貴方には天魔と鬼宛ての手紙を渡してきてほしいの。　といっても、渡すのは天魔だけで充分よ。　その中に二つとも手紙が入ってるから。」

「『あくまで鬼と合わせないってわけか。　悲しいねえ、家族の信用すら得られないとは。』」

「感謝こそされど、非難されるいわれはないわね。　こちらとしては、貴方が傷つかないようにしているのだから。　……それにしても意外ね。　あなたの口から“家族”なんて単語が飛び出してくるなんて。」

此処に来てからから、此処に住みついてから一カ月が経とうとしていたが彼は私達のことを決して名前では呼ぼうとしなかった。　私のことはスキマ。　藍のことは九尾……と。　既にその呼び方に慣れていた私達であったが、そんな彼から例え嘘だとしても“家族”という単語を聞くことができたなんてね。　ふと隣を見ると、藍もいまの彼の発言に気付いたのか私のほうを向いて微笑んでいた。

不知火はいまさらながら自分が発言してしまったことに驚き

「『……いまのは“ナシ”だ。』」

そう言って家を出て行った。

それはほんの小さな変化かもしれない。

だが、そんな小さな変化でもこの二人には、とてつもなく大きな変化に感じ、とても嬉しく思った。

☆

「『“家族”なんて馬鹿馬鹿しい。　自分の発言を消したくなったのは、生まれてはじめてだよ。』」

妖怪の山へと続く道を歩きながら、不知火は先程のことを思い出す。
いま思い出しても寒気がするほどの、愚かな発言であった。　不知火の中ではそう思っていた。

「カッコつけ野郎さん。　何処へ行くのかしら?」

その声が聞こえてきたとき、不知火はまたか……。　と半ばうんざりしながら声の主を無視した。

「無視するなんていい度胸ね。　それともその衰えた耳では私の可愛らしい声が聞こえてこないのかしら。」

「『それを自意識過剰と言うんだよ鴉(しゃめいまる)。　丁度いい所に来た。　天魔の所まで案内しろ。』」

当たり前のように自分の傍に来ている、鴉天狗の射命丸文にデコピ

ンを食らわしながら言う。　射命丸はというと、頭に疑問符を浮かべながら何故案内が必要なのかと問うた。

「『スキマ様が天魔と鬼の大将に向けて手紙を書いたらしくてな。それの雑用だよ。』」

「ふ～ん……らしくないですね。」

まったくだ。　自分でもそう思う。

「まぁ、案内くらいならしてあげてもいいですよ。　射命丸文さま、ありがとうございます。　一生わたくしを下僕として使ってください。　と言うのであれば。」

「『やっぱり自分で探すことにしよう。　それじゃあな鴉（しゃめいまる）。』」

ひらひらと手を振りながら続く道を歩き始める不知火に文は、すかさず追いつき

「冗談ですよ、冗談。　いくら私でもそこまで意地悪じゃありませんよ。　案内くらいならしてあげますって。」

決して冗談には見えなかったのだが、射命丸文からすれば先程の言動は冗談だったらしくからからと笑いながら不知火よりも前を歩き、先導するのであった。

☆

射命丸文を先頭に歩き始めること、１０分。　目の前には他の山よりもひと際大きい山が広がっていた。　射命丸いわく、此処が妖怪の山らしい。

「此処には鬼がいますので、くれぐれも私とはぐれることのない様に。　一応使者として天魔様にお会いするのですから、何かあった場合には私が怒られてしまいますので。　言っておきますが、くれぐれも喧嘩など吹っ掛けることがないようにお願いしますね。」

口酸っぱく、耳にたこができるほど言われている台詞である。

妖怪の山には鬼と天狗が住んでおり、鬼は天狗の上司にあたる存在である。

「『なるべく努力はするよ。　なるべくな。』」

この人は本当にわかっているのだろうか、鬼の怖さを。　強さを。

射命丸は疑問に思う。　もし……もし目の前にいる男が鬼の怖さを知っていながら鬼に挑もうというのであれば、それは只の自殺行為でしかない。　そもそも、何故そこまで鬼に拘る？　鬼との深い因縁でもあるのだろうか？　しかし、もしあったとしても自分には関係ないことだ。　ハッキリ言って私が鬼に会いたくない。　そして今回ばかりは彼も使者として来ているので、天魔さまに送り届けなくてはならないのだ。

「（私が鬼に会わないようなルートでいけばいいのですけどね。これに関しましてはそこそこ自信はありますし。　個人的に会うのが嫌なので。）」

そう結論づけて、射命丸は不知火の名を呼ぼうとした――が、それよりも早く誰かが自分の名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

「鴉天狗じゃないか。　こんな所でなにしてるんだい？」

その瞬間、射命丸の体毛という体毛が逆立ち、一瞬にして冷や汗が流れてきた。

「ん？　どうしたんだい？」

「勇儀がいきなり声をかけるから驚いたんじゃない？　天狗に限らず妖怪は皆そうじゃないか。」

どくんどくん、と鼓動が早鐘を打ち、冷や汗は既に滝として流れ、先程から潤っていた口の中はカラカラに乾き潤いを求めて唾を出そうと躍起になる。

鬼と出くわしたのだ――――

天魔ほどになると、この場にいる鬼と睨みあっても目を逸らすことはないだろう。　しかしながら、射命丸文は天狗の中ではまだまだ新人の粋を抜け出していない。　これがもっと年を取れば変わってくるのかもしれないが、いまの射命丸文はただただ頑張って作り笑顔を浮かべて鬼たちの機嫌を伺いながら話すことしかできないでいた。

「こ、こんにちは。　勇儀さんに萃香さん。　こ、ここんなところでなにをしているんですか！？」

反射的に頭を下げながら、上擦った声で聞く射命丸に

「ただの散歩さ。　喧嘩売る奴もいないしね。　どうだい？　やるかい？」

「やめときなよ勇儀。　こっちから喧嘩売ったんじゃ、鬼が廃るっ

てもんだよ。」

長身で額に一本角、腰より長い金髪は綺麗に手入れされており、右手に持つ顔と同じくらい大きく赤い杯には並々と酒がつがれている。

その風貌とあわさりどことなく頼れる姉御といったオーラを感じさせてくれるのが星熊勇儀、そしてその横にいる小鬼程度の身長しかなく、左右に大きい二本の角が頭から生えている鬼のほうが伊吹萃香。

腰には大きな瓢箪をかけている。一見普通にみえるかもしれないがこの二人、鬼の中でも巨大な力を持っており、四天王とさえ言われている。

そんな二人のかけあいを、ぎこちない笑みを浮かべて射命丸はただただ愛想笑いをするしかなかった。

「そ、そんな、勇儀さんと萃香さんに挑もうなんてもの好きいるはずないじゃないですかっ！　い、いやだなぁもう」

ここで射命丸文は重大なミスを犯してしまった。もし此処で星熊勇儀、伊吹萃香に出会ってのが自分だけだとするならばこの場は丸く収まったのだろう。元に鬼達は自分達からは喧嘩を売らないと明言したのだから。しかし、残念ながら此処にはもう一人存在していた。同じ“鬼”の字を持つ妖怪が。

「『なるほど。鬼とは自ら仕掛けないのか。ますますもって嫌な奴だよ。』」

その声が聞こえてきた瞬間、射命丸は自分が犯した重大なミスに気が付きその者を止めようとした――――が、時すでに遅し。彼は勇儀の目の前にいた。あろうことかこんな言葉を吐きながら。

「『あんたのほうが、そっちより面白そうだ……！』」

いうがはやいが、不知火は勇儀に向かって腕を振る。

「おっとっ……。なんだいなんだい、威勢のいいのがいるじゃないか。――――でも、あんたじゃ役不足すぎるよ。」

顔面に向かって腕を振った不知火の攻撃を、焦ることなく避けながら勇儀は不知火が伸ばした腕を蹴る。パキッと嫌な音をたてながら不知火の腕は曲がることのない方向へと思いっきり曲がり、その蹴りの衝撃はそれだけにとどまることなく思いっきり後方へと吹っ飛ばした。

「なんだい、いきなり突っかかってくるからそれなりに強いのかと思ったのにとんだ期待はずれじゃないか……。」

落胆を隠そうともせずに、すこし興ざめしたように吹き飛ばした者を見つめる勇儀。

「『鬼は力が強いと聞いていたが……。　なんだ、腕一本しかとることができないのかい？』」

吹き飛ばされ、木々を道連れにしながら不知火は肩をすくめて挑発する。　腕を折られといて何を言うのだ……。　そんな気持ちが勇儀の中には湧き上がってくる。

「なら次は全身を吹き飛ばしてやろうかい？」

「『面白い……！』」

足に自分が込めることのできる精いっぱいの力を込め踏み出し、右足で地面を掘りそのまま眼つぶしの容量で抉った土をかける。

「あっ！　杯に土がはいるじゃないかっ！」

「『そんなことしらないよ。　丁度いい、その頭をカチ割りアンタの脳を抉りだし、そこから出た液体をその杯に注いでやるさ……！』」

杯に土が入ったことなど気にもとめず不知火はそのまま左足で地面

を蹴り空中へ飛ぶとその落下の勢いを利用しての一回転するさいに勇儀の後頭部めがけて踵を振り落とす――――が、その足はなんなく勇儀が片手で捕え力任せに地面へと叩き落とした。　それだけでは終わらない。　勇儀はそのまま不知火を真上に放り投げ、こんどは力を込めた様子もなくサッカーボウルを適当に蹴るように不知火を蹴る。その蹴りは綺麗にみぞに的中し空へ羽ばたく鳥のようにきりもみしながら飛んでった。

その様子をそばで見ていた射命丸は言葉を発することさえできずに、鬼による蹂躙を黙ってみることしかできなかった。　だからといって誰がこの少女を責めることができるだろうか？　そもそも鬼に喧嘩を売ったのは不知火のほうであり、勇儀はただ売られた喧嘩を買っただけである。　まさに自業自得である。

「『う……がはっ……！』」

勇儀より５ｍ離れた所で胸に手を当てながら思いっきりえづく。ぼちゃ……ぼちゃ……と朝に食べたものが口から垂れてきてそれは瞬く間に周囲に広がっていく。　それに混じるような形で血まで出始めた。

はあ……はあ……。　と、荒い息をたてながら勇儀を睨む。　射命丸と同じくそばでみていた萃香はため息とともに声をかけた。

「そのくらいでいいんじゃない、勇儀。　それ以上したら喧嘩でも

なんでもなく、ただの蹂躙になっちゃうよ。　蹂躙をして相手を完膚無きまでに叩きのめすのは弱者がすることだよ。　二度と歯向かってこないように、自分が上なんだと分からせるように。　予防線を張るように。　そんなこと、私達はしないだろ？　　さっ！そのへんにして、さっさと帰って秘蔵のお酒でも飲まないかい？」

言いながら近づいていき、勇儀の背中を叩いたのちいまだ立つことさえままならぬ弱者のほうを見やる。

「あんたもほどほどにしときな。　あんた、噂の妖怪だろ？　ちゃんと私達の間にも伝わっているよ。　命知らずの妖怪がいるってさ。　それを聞いたときは本気で思ったよ。　楽しめそうな妖怪がいるなと。　此処の妖怪達はあまり私達と闘おうなんて思わないからさ。　期待してたんだけど……正直、期待はずれもいいところだよ。　ハッキリ言って失望したよ。　けど……その心意気だけは惜しみない拍手を送るさ。　もっと強くなってから出直してきな。」

「そうだね……、この私相手によくやったさ。　この次はせめて持っている杯を落とせるくらいにはがんばりな。　再戦できるのを楽しみにしてるよ。」

そうして二人は歩き去る。

それはただただ黙って見送ることしか不知火には出来なかった。

「……無様な姿ですね。　あれだけ豪語しておきながらその体たらく。　滑稽ですよ。」

鬼によって折られた腕はひじ関節が曲がらない方向に垂直まで曲がっており、吐瀉物を吐きだした口はだらしなく半開きの状態である。
それはさながら、人形劇で使う人形のように滑稽な様であったのだろう。

「……喋る気力すらありませんか。」

ふと文は思った。　何故彼はあそこまで鬼に固執したのだろうと。
普通に考えても勝てる見込みなんて皆無のはずなのに。

「一点だけ、伺ってもよろしいでしょうか？　何故あそこまで鬼に固執するのですか？」

どうせ答えは返ってこないだろうと思いながらした質問は、小さな声量を伴って返ってきた。

「……嘘をつくことなく正直者な鬼が憎くて羨ましい　比類なき力をもっているのにその力で好き勝手にせず、真珠のような輝きを放つプライドをもっているのが憎くて羨ましい　俺のような者にでも惜しみない拍手を送ることのできる優しさをもっている鬼が憎

くて羨ましい……！　そんな奴らに、そんな奴らだからこそ、俺は勝ちたい……！！　能力なんて使わずに、正々堂々と！　“おめでとう”の言葉なんかいらない！　“よくやった”なんて気休めはいらない！　醜く、泥臭く、地べたを這いずりながら……、足に喰らいつき、喉に食らいつき、四肢千切れることがあろうとも！　生まれながらに力を持った鬼に、綺麗なプライドをもった鬼に、正直者の鬼に！　嘘をつくことでしか、括弧つけることでしか、自分を作ることができないけれど、それでも、だからこそ、勝ちたい！　哂われてもいい！　命知らずだと嘲笑されてもいい！　お情けじゃなく、誰がみても勝ちだとわかるように、あいつらの角を叩き折りたい！　ただただ、何もかもが正反対のあいつらに勝ちたい！」

それは嫉妬からくるものであった。　子供ように喚き散らし、自分が持っていないものを欲しがるように。　彼は自分を偽るためである括弧をつけることさえ忘れて、無我夢中で叫んでいた。　正直、何を言ってるのか分からなかった――――が、これだけは確認することができた。　いま、目より流れる涙の雫は嘘偽りなどない本当の涙だということだけは確認できた。　だが、どんな言葉を述べようがどんな想いが詰まっていようが答えはかわらない。　鬼火である彼が、鬼である勇儀達に勝つことなどできるわけがないだろう。

　そんな答えがわかっていながらも、彼は溢れ出る涙を袖で拭い、足に力を込めて立ち上がった。

「……もういっかい……！　もういっかい……！！」

折れた腕をかばうこともせず、彼は真っ直ぐに鬼が立ち去った方向へ歩いていく。

「ほんと、カッコつけ野郎なんですね。あなたって。」

歩く不知火の背中を見つめながら、射命丸はひとりでに呟く

「これから私、嘘をつきますのでよく聞いておいてください。『あなたが勝てるなんて思ってもいませんので、無様に負けてください。　嘲笑しながらみてますよ』」

それは射命丸文が送る最大限のエールだった。

☆

二人の鬼が互いに酒を酌みあいながら先程の光景の話をする

「それにしても勇儀。　実際、闘った感想としてはどうだったんだい？」

赤い杯から零れ出ようとする酒を、一気に喉へと流しながら萃香の質問に答える

「力としては最弱だね。　これまで戦った中で一番の脆さと、素早さだったよ。」

すこしだけ赤い頬を手を添えながら先程戦った男の顔を頭に浮かべる。

黒い髪の中で火のように存在感を出す赤い髪。　病んだ印象を受ける瞳は、勇儀を捕えて離さなかった。

「まぁ……いつか再戦にくるだろうさ。　そのときはまた相手するよ。」

「そうかい。　だったら相手してやんな。　あっちは待ってるよ。」

ニヤリと笑いながら前方を見る萃香に、杯に目を落としていた勇儀は遅れて前方を見て、自分の口元が勝手にニヤけていくのを感じた。

黒髪にところどころに混じる赤。　病んだ印象を受けるその瞳の奥底に静かな炎を揺らめかせながら、その男は勇儀に問う

「再戦は受け付けるんだよな？」

「ああ、いつでもどこでも。　何度でもね。」

「ふっ……。　その優しさと強さが狂おしいほどに憎く、狂おしいほどに羨ましいよッ……！！」

地面を抉るようにして前へと飛び出す不知火。　折れていないほうの腕には火で作ったナイフを顕現させていた。

「幻に魅せられ――――現を抱きながら――――塵となり消えるがいい」

懐にはいった不知火は勇儀の腹を引き裂く。　すると裂いたところから火が燃えだし勇儀の体を襲う

「いいねぇ……！！　さっきより全然動きがいいじゃないかッ！」

引き裂かれた傷は、勇儀からすると針でちょっと刺された程度の痛みであり、ダメージでもなんでもなかった。　逆に勇儀は右拳に力をこめ力任せに振り抜く。　その軌道は丁度不知火の頭にくるように振り抜かれ、あと一秒もしないうちに不知火の頭はザクロのように飛び散ることになる――――のだが

腕に感触はなく、いま殴ったばかりの不知火の体は霞のように消え

ていく

「姿なき幻に魅了され、実体でも見失ったのかい？」

声がかかってきたのは後ろから、いままさにその凶器を振り下ろさんとしている不知火であった。

「しゃらくさいねぇッ！！」

頭を振って、額の角でナイフを受け止めるとそのまま右足を軸にして左足で天を突くような勢いと力強さで蹴りあげんとするが、またもや触れた直後、霞のように消え、今度は自分の目の前に現れ持っていた杯を手で弾き、足で踏み壊した。

「たしか……その杯を落としたらご褒美をくれると言ったかな？」

「ご褒美は、あたしに勝ったらね……！！」

右足を天高くあげ落下の勢いを味方につけたかかと落としが脳へとはいる。　一瞬にして地面へと濃厚なキスをかわすことになった不知火は骨が軋む音を聞き、ついで折れる音を聞いた。　喉の奥底から湧き上がってくる鉄の味と酸っぱい味を強引に飲み込むと、すぐさま起き上がり靄になり、勇儀の遥か後ろへと現れた。

「面白いねえ、あんた。　それは能力かい？」

「いや、俺の能力は『あらゆるものを作り・あらゆるものを消す』ことさ。　といっても、この能力は借り物だけどね。　そしてあんたが面白いと言ってるコレは、存在自体が希薄になっていき、やがては消滅するので、とある神から止められているのだけど、あんた相手なら惜しくないよ。　不知火とは、手を伸ばせば伸ばすほど遠ざかる。そしてその逆もしかり。　さっきは驚いて捕まったが、もうそんなヘマはしない。　文字通り、燃え尽きるまで全力でその体、塵にして風の中へと舞い踊らそう！」

「そうかいッ！！　あんたがそこまでやってくれているのだったら、こっちが手加減するのは失礼に値するねッ！！　あたしも全力で相手するよッ！！」

同時に駆けだす鬼と鬼火

そのとき、その瞬間だけは世界は彼らの中心に回っていた。

鬼が蹴り、殴り、刺し、貫こうとするたびに、鬼火がそれをかわし、消え、全ての攻撃を空振りさせる。　かといって鬼も無様にやられている訳ではない。　その自慢の体はひ弱な攻撃を全て跳ねのけ、はじめの攻撃以降、傷がつくことはなかった。

「あんたやるじゃないかッ！！　最高だよッ！！」

「それはどうもッ……！！　殺し合いの最中、そんな言葉をかけてくるアンタは最低だよッ……！！　その角をへし折ってやりたいくらいにねッ！」

「そうかいッ！　だが、アンタの貧弱で軟弱な攻撃じゃ、この角を折ることなんて夢のまた夢だよッ！！」

狂ったように嗤いながら、二人は何度も何度も交差する。

この二人の殺し合いに終わりはあるのだろか？　そんな心配をさせるほど、二人の殺し合いは益々もって加熱していく。

しかしそんな二人の殺し合いも意外な結末で終わることとなった。

いままさに、勇儀と不知火が何度目かの衝突としようとしたところで、その二人の間に誰かが割り込んできたかと思うと、勇儀には方には張り手を食らわして、不知火のほうには軽くデコピンを打ち込んだ。

それだけで、たったそれだけで二人とも大きく後方に吹き飛ばされ、勇儀は控えていた萃香に受け止められ、不知火は大きな翼をもった天狗に抱きとめられた。

「いつまで経っても手紙がこないと思ったら、こんなアホなことやってたのかい……」

「まあまあ、若くていいじゃないですか。　君が不知火くんだね？　私は天魔。　天狗の長をしている者だ。　八雲くんから預かった手紙を君が届ける手はずになっているのに余りにも遅いから心配して探しにきたんだよ。」

天魔と名乗った青年は、優しい笑みを浮かべて抱きかかえたままの状態で不知火に微笑む。

「どけ。　手紙なら後でくれてやる。」

抱きかかえられた状態から、身をよじって抜け出そうともがきながら天魔を睨む。

「それは出来ない相談だ。　君が優先すべきことは使者としての役割を果たすことだ。」

凛として不知火のほうから視線を決して外さずに、肩に置いている力を少しだけ強くする。　それに一瞬顔をしかめた不知火は降参するかのように、両手を上げた。　天魔はそんな不知火をみて、拘束に近い形で抱いていた不知火を離した。

懐からボロボロになった手紙を天魔に差しだす。

「ごくろうさま。　うん、ちゃんと読める。　おつかいは果たせたようだね。」

「これでいいだろ。　さっさと続きを――――」

「ああ、それと。　これ以上山を荒らされても困るから今日のところは帰ってくれないか？　君とてその状態で、妖怪の山の全ての住民を相手にしたくはないだろう？」

優しい顔で、優しい目で、優しい声色で、天魔は彼を拒絶した。

使者として妖怪の山へ来たからには使者の役割を果たすのが当たり前である。　そしてその役割は“手紙を渡すこと”　今回は明らかにどちらが悪いのか、ハッキリとしている。　さらには、家で好き勝手なことをしていたのだ。　拒絶されるのは当然であろう。

沈黙がおりる。

やがて不知火は深呼吸をすると、小さく呟き、来た道を戻っていった。

☆

「優しいじゃないか、天魔。　天狗のお前があのような脆弱な存在をなんのお咎めもなしに帰すなんて」

先程まで黙ってみていた鬼の大将が天魔に声をかける。

「可愛い仲間たってのお願いだったもので。」

息を切らせて自分の元へやってきた彼女を見た時はビックリしたものだ。　その内容にも驚いたが。

「それで、鬼側からはなにもないのですか？　罰なら私が受けますが。」

「いや、なかなか面白いものを見せてもらったし。　此処の管理は私たちだ。　ウチの仲間が派手にやらかしたみたいだしね。　お互

い不問といこうじゃないか。」

「それはいいアイディアですね。」

それだけいうと、鬼側は勇儀の首根っこを掴み片手を上げて帰って行った。　それに答える形で軽く手を振った天魔は深い深いため息をついた。　彼が最後に漏らした言葉を思い出しながら。

――勝ちたかった

それが小さく呟いた言葉であった。

## 外伝？～『』つけない言葉～（後書き）

次は現代の話を挟みます。

外伝ばっかり書いてたので、彼方を書けるか少し心配です。

# 33．死神と閻魔と現実

美鈴から三途の川への道のりを地図として書いてもらいその地図を頼りに歩いていく。　こうしてみると、確かに普段の幻想郷よりも沢山の花が咲いておりその花が風に身を預けながらゆらゆらと嬉しそうにゆれたり、手の平サイズの妖精がその花に合わせてダンスを踊る姿がみてとれる。　鳥のヒナが巣から飛び出すようにたんぽぽの綿毛が一つ、また一つと風に身を委ねて旅立っていく。　いま飛んでいった綿毛が大地へと落ちまた新しい生命を増やしていくんだよな。

「あ、妖精さんこんにちは。　あんまりはしゃいで転んじゃダメだよ？」

目の前を３０ｃｍくらいはあるオレンジと赤、黄色と緑のふりふりのスカートをはき、袖の長い服をきた妖精さんが笑顔で手を振り返してくる。　なるほど、確かに妖精さんたちはとても嬉しそうだ。

紅魔館の妖精メイドがほとんどいなかったのも通り過ぎた妖精たちのように遊んだりはしゃいだり、騒いだりしているからかな？　まぁ、それで咲夜の仕事が増えるのはどうかと思うけど。　いや、むしろ減るのかな？　昔霊夢に愚痴っていたような気もするし。

「妖精かぁ。　今頃チルノたちもあの子たちのように遊んでいるのかな？」

童女のような可愛らしい笑みを浮かべ、頭をからっぽにして大ちゃんをひっぱりまわしている光景が目に浮かぶ。　大ちゃんは……汗を浮かべながら困った笑みをときたま浮かべながらも、チルノちゃんと精いっぱい遊んでいるかな。　チルノちゃんは元気だから大ちゃんの息が切れないことを祈ろう。

そんなことを考えながら歩いていると、目の前にふよふよとしたものが現れた。　それは別に彼方になにもすることはなくただただ浮いているだけだったので特に気にすることなく歩き去る。

「あれはなんだろう？　――――ん？　そこにもあるな。　あ、あっちにも。」

自分より右に１０m先の方角にも同じものが浮いており、左も同じ。

「んー……。　なんだろう。」

いくら考えたところで自分の乏しい知識ではこれがなんなのか解る筈もなく、結局解らないまま彼方は先へと進むことにした。

☆

紅魔館から歩くこと1時間30分。（正確な時間は時計を持っていないのでわからないが、大体これくらいだと思う。）ようやく美鈴が地図で示してくれた場所に着いたわけだが――――

「うわぁ……すげえ……」

これがなんとも美しかったか。意識していないのに勝手に口から音が漏れだすほどに、自分は目の前の光景に圧倒され、感動していた。確かにこれは美鈴が見たがるはずだ。いや、美鈴じゃなくてもこの光景はみせたいな。

目の前には赤く花をつけ全方位に下から上へ掬い上げるように咲いた花や、枝先にフリルのようなヒラヒラした扇状の花を6枚つけた花、ピンクの色をつけたシンプルな花丸を描いている一重な花などが咲いており、そのどれもが綺麗で美しく、知らず知らずの内に体が動き、丁度下に咲いていた赤い花をつけた全方位に下から上へ掬いあげる形で咲いている花を手に取ろうとしゃがみこんだ。

「あー、あんた。それは毒を持っているから人間は触らないほうがいいよ？」

「ひいいッ！？　すいません、決して折るつもりなんてなくて、たんにこの花が綺麗だな～なんて思っただけであり、その、悪さをし

ようなんて微塵も思ってないですし体が勝手に動いたというかなんというか――――……え？　毒？」

「そう。いまあんたが触っているのは彼岸花っていう花でね。　地獄へ誘う魔性の花さ。　ほら、分かったなら手を離しな。　あんたはもう少しだけ生きる人間なんだから。」

そう声をかけながら彼方の元へ歩いてきたのは、大きな鎌を肩に担ぎ、真っ赤な髪を両サイドの高い位置で可愛らしく結び、ワンピースのような形の白と青の綺麗なコントラストの服。　そして腰のあたりに銭を結びつけたベルトのようなものを巻いている、どことなく江戸前にいそうな俗に言う姉御肌のような人物であった。　彼方はそんな女性の警告を素直に聞き触ろうとしていた手をそっと懐に戻し、女性のほうを向く。

「えっと……助けてくださりありがとうございました。　俺……じゃなくて僕は不知火彼方です。　えっと……」

多少目を逸らし気味にしながら彼は女性の名前を尋ねようとするが、それよりも早く女性は自分の名前を名乗った。

「あたいかい？　あたいは小野塚小町（おのづかこまち）。　此処で彼岸に死者の魂を運ぶ仕事をしている死神さ。」

小野塚小町と名乗った女性は彼方のそばまでくると、よっこらしょ、となんとも似合わないセリフを吐きながらその場で座り自分の横の開いている所を手で軽く叩き座るように促す。　彼方はというと、そんな小町をみて極力小町の方を見ないように努めながら失礼しますと小さな声で言い、小町の横に座る。

「それにしても、どうしたんだい。　人間が此処に来るなんて。死ににでも来たのかい？」

「いえ……えっと、知り合いにこの時期は此処が花を沢山咲かせて綺麗な名所だと教わったので、地図を書いてもらい見に来たんです。」

先程自分に地図まで書いてくれ、その上見送りまでしてくれた美鈴の顔を思い出しながら彼方は小町とは逆のほうを向いて喋る。

「あー、なるほどね。　確かにこの時期此処は綺麗かもね。　まぁ……それはそれとしてなんでさっきからあたいのほうを見ようとしないんだい？」

頭を掻きながら、やや困ったような、どうしてか分からないような微妙な笑みで彼方に聞く。

「いえ……その……なんといいますか……。　ふ、服がはだけてい

て……」

とっても言いずらそうに、めちゃくちゃいいずらそうに視線は違う方向に向いたまま、彼方は小町の服のある一部を指さす。　もう少し正確に示すのであれば肩よりも下にあるたわわに実った果実を指さす。　たわわに実った果実はその大きさゆえに圧倒的な存在感を醸し出しており、見る者を魅了し、けっして離さない。　――――が、

「ん？　ああ、なんだ。　そういうことか。　いやー、悪いねぇ。　さっきまでサボ……休憩がてら寝ていたもんでね。」

彼には少しだけ早かったみたいであり、そんな彼の様子をみながら小町は顔を赤くするわけでもなく、友達に見られたぐらいの間隔できわどかった果実をしっかりと隠す。　果実が出ていたのにもかかわらずこんなにも甘美な響きというか、艶めかしいものが皆無なのは、ひとえに小野塚小町がもつ特殊な雰囲気だろうか。

おいおい……なんで俺は小町さんを正面から見れなかったんだよっ!?

一方、彼は彼で心の中で自らを叱責していた。

鈴仙のときはパンツとか見ても平気だったじゃんっ！　なんで小町

さんだと顔が赤くなるんだ？　胸か？　やっぱ胸なのか？

玉兎が聞いていたら一瞬にして張り倒し、マウントポジションから毎秒3発ほど顔面に打ち込む動作が1時間ほど続きそうなことを心の中で叫びまくる彼方。

そんな他人からみたらどうでもいいことこの上ない葛藤をしている横で、小町がいきなり黙った彼方を心配してまたもや困った笑顔を浮かべていると、背後からドスの利いた声が彼女に向けられた。

「小町……あなたはまたサボっていたのですか？　人間と男性まで巻き込んでのサボりまでして、大層な御身分ですね……」

その女性は身長は小柄だが、幻想郷の賢者である八雲紫や、月の頭脳である八意永琳、亡霊姫である西行寺幽々子と同じ、いや、それすらも遥かに凌ぐオーラを出していた。

「ひいぃっ!?　映姫さま!?　ちょ、なんでこんな所にいるんですか！」

いきなりの登場と身に纏う怒りのオーラで、先程までの姉御肌的なオーラはどこへ行ったのやら、すっかりとビクつきしどろもどろで言い訳をマシンガンのごとく話した。

緑髪を丁度肩の高さで切り揃え、頭にはけったいな帽子をかぶり、白い長そでのシャツの上に真ん中にボタンをつけて着脱可能な服を着て、手には悔悟棒をもった、映姫と呼ばれた少女は

「そのような言い訳は聞く耳もちません」

そう一喝して手に持っている悔悟棒で、小町の頭をはたいた。

「きゃんっ！」

と、おおよそその外見からは似つかわしく可愛らしい悲鳴をあげてから、叩かれた所がこぶになっていないか確かめるように擦る小町。

「そう。　そもそもですねあなたという人物は普段から仕事をサボリすぎなのです。　いつもいつも昼寝ばかりしていて私が様子を見に来ればよだれを垂らしただらしない顔で寝ている始末。　そんな様子をみて、私があなたを起こせばあなたはさっきまで仕事をしていたなどと、誰もが嘘だとわかる嘘をつく。　いいですか？　船頭であるあなたが私の所まで運んでいただかなければ私の仕事にも支障をきたすのですよ？　それともあなたがやってみますか、書類の山に囲まれて、ぺったんぺったんハンコを押してくれますか？」

映姫と呼ばれた少女は、小町の言い訳を一蹴し実に長い長い説教を

小町にしはじめた。　その小町はというと、そんな説教に涙目になってただただ聞いているだけ――ではなく、開始１０秒で鼻ちょうちんを膨らませはじめた。

これは退散したほうがいいかな？

と、目の前で繰り広げられている光景を見ながらそう決意した彼方は、抜き足差し足忍び足で、来た道を戻ろうと方向転換した――

「そこのあなた。　あなたにもお話があります」

ところで、彼女に止められる。

「あの……これから行く所があってですね……。」

「先方には私がお話しておきます。　ですので、心置きなき座ってください。」

慈愛に満ちた笑顔で小町の隣に座るように促す映姫。

その笑顔に圧倒され、小声で失礼します。と呟き頭を擦る小町の隣

に正座で座った。

「ごほんっ……。　ではいいですか、不知火彼方くん。　まずあなたは女癖が悪すぎます。　もう常軌を逸脱しているといっても過言ではありません。　第一に、あなたは身体的に小さい子と仲がよいみたいですか、とても犯罪チックだということを理解していますか？　いまの世の中では小さい女の子に頭を撫でるなどの行為を行うと、捕まるということは外の世界にいたあなたなら知っているはずです。　それに小さい女の子だけでは飽き足らず、大人の女性にまで手をいるとうことですが、あなたはとても守備範囲が広いみたいですね。　あなたのその性欲はどうなっているのか、私はそれを考えると震えが止まりません。その次に――――」

映姫の言葉はマシンガンなんかよりも、もっと強力で思わず彼方は泣きそうになった。　気分としては、小学生のときに担任の先生に放課後、一人で二者面談のような形で説教を受けている気分であった。

誤解だと声を大にして叫びたかった彼方であったが、説教中は声を挟む余裕なんてないほどに映姫がたんたんと喋ってくるので、黙っているしかなかった。

「――――と、まあこれぐらいでいいでしょうか。」

およそ1時間くらい経っただろうか。　既に足は痺れ、意識は若干

ハッキリしなくなっていた。　多分、映姫の説教が長すぎて彼の頭はオーバーヒートしてしまったのだろう。　映姫としては彼が分かるようにできるだけ噛み砕いて教えたつもりなのだったのだが。ちなみに小町は横で気持ちよさそうに寝ころんでいた。

ああ……長かった。

彼方は小鹿のように震える足に力を入れながら立ちあがり、頭を下げようとしたが――――

「これからが本題です。」

その一言で彼は本格的に泣きだしそうになった。

しかしながら映姫は彼のそのような顔をみても、何も感じない様子で彼にただ淡々と告げた。

「あなたは面白い目的をお持ちのようですね。　とある方に聞きましたよ。『自分の周りの人達だけでも笑顔にする』でしたね。　とても面白いですね、――――そのようなことできるはずもないのに」

それは優しい閻魔が彼のために教えたことであった。

「まずあなたは分かっていない。　人間は生きている一生にどれだけの人と関係を持つと思っているのですか？　それに加えて、あなたの場合は人間と妖精に妖怪。　これまでどれだけの者たちと関わってきたのでしょう？　あなたの“周り”にどれだけの者がいると思っているのですか？」

映姫は彼の瞳から目を逸らすことなく、冷たい眼差しで喋り続ける。

「あなたは神にでもなったつもりですか？　仏にでもなったつもりですか？　あなたの掲げる目標がどれだけ難しく、いえ――――不可能なことかあなた自身は考えたことがあるのですか？」

「そ、そんなこと分かっているよっ！　だから俺は必至で頑張って！」

「必死？　面白いことをいいますね。　必死でなにかを頑張ればいいと思っているのですか。　だとしたら、そのような考えは早めに捨てることにしたほうがよろしいですね。　まず大前提がおかしいのです。“周り”ということは３６０。全てを視野にいれることなのですよ。　それがあなたにはできていたのですか？」

映姫の言葉に彼方は押し黙る。

「何故あなたがここまでこれたのか。　それはあなたが“物語”の“主人公”でしたからでしょう。　良い所だけをみせて都合が悪いところは“無い”ことにしているのですから。　ですからここでハッキリさせましょうか。」

どさりと誰かが座り込む音が聞こえてきたが、それすらも無視してたんたんと告げる。　歯に衣着せぬ物言いで。

「此処の人達はとても長い年月を生きていきます。　ですが、人間のあなたは６０年くらいで死ぬことになるでしょう。　あなたが死んだらあなたと関わった者たちの誰かは泣くかもしれませんね。ここで問題です。　その時あなたはどうするのですか？　死んだからもう関係ないと言い切りますか？　後追い自殺でもさせるつもりですか？　そのようなことをしたら、あなたはひとでなしに成り下がってしまいますよ。　流石のあなたも人で無しになりたくはないでしょう。」

そこまで言い切り、映姫は大きく息を吸い込みへたり込む彼方に告げる。

「結局のところ、あなたの掲げる目標はただの自己満足でしかないのですよ。　あなたは猪突猛進で前“だけ”を向いて走っているのです。　前“だけ”を向いている者に、どうして“周り”を笑顔にすることができるのでしょうか。　あなたが掲げるものは、理想ではなく、想像ではなく、幻想ではなく、――――妄想なのです」

その言葉は針のように、彼方の体にずぶずぶと音をたててゆっくりと、確実に入ってくる。

何も言い返せない。　何も反論することができない。　それは彼方も考えていたことだったから。　それは直視しようとせずに“無かった”ことにしようした現実だったから。　ゴミ箱に捨てたはずの現実が、自分で立ち上がり彼の前に立ちはだかっただけなのである。

「とても愉快な妄想ですよね。　私も応援したくなります――――が、そのようなことできない事実ですので。　まったく……誰がこのような妄想を考えたのやら、ほんと――――馬鹿馬鹿しいですね」

その言葉を聞いた瞬間、彼方は我を忘れて映姫の胸ぐらを掴み叫んでいた。

「てめぇッ！！　いまなんつったッ！！」

映姫よりも背が高い彼方は、いま自分が掴みそのまま目線を並行にまで持っていった相手が閻魔であることも知らずに唾を飛ばしながら叫んでいた。

「おや？　聞こえませんでしたか？　でしたら、もう一度いいまし

よう。　――――莫迦莫迦しいと」

左手で映姫の胸ぐらを掴んでいた彼方は、右手に握り拳を作り思いっきり振りかぶろうとする――――が

「やめときな。　そんなことしたら、漢（おとこ）が廃るよ。　それに、いま映姫さまを殴ったら、あんたは敗北を認めることになるんじゃないのかい？」

彼方の作った握り拳は映姫に届くことはなく、その途中で後ろから小町によって掴まれていた。　先程までの雰囲気はどこへやら、真剣に冷静に、彼方を諭すように声をかける。

そんな彼方の目は怒りで満ちていたが、これ以上前に進めないとわかると意外にもすんなりとその拳を納めた。

「……ありがとうございました。」

彼方は震える拳を握りしめ、映姫と小町に一礼し後にした。

いままで視ないようにしていた“こと”を

右クリックしてゴミ箱にいれたはずの“もの”を
水底に沈ませていた“それ”を
四季映姫は掬い上げただけなのである。

しかしながら彼方は、何も言い返さずに、何も言い返せずに
現想の郷において、突きつけられた現実に彼はただただ黙ることしかできなかった。

▽　▽　▽　▽

彼方が去った後、四季映姫はふぅ……と一息つき隣にいる部下に声をかけた。

「小町……もしかして言い過ぎましたかね？」

「いや……思いっきり心折りにきたじゃないですか……」

彼方の様子をみていまさらながら映姫は不思議そうに部下に聞くと、

部下は冷や汗を垂らしながら、めちゃくちゃ困った顔で返した。
正直な話、彼に少しだけ同情したほどだ。　だがしかし、四季映姫は人間との価値観が違うのでこれにかんしては映姫を責めるのはお門違いも甚だしい。

「ですが誰かが言わなければならないことだと思います。　でしたらその役目は、閻魔である私がするべきだと思うのです。　べつに彼に嫌われても構いません。　八雲紫のやり方では彼はどんどんと堕ちていくだけでしょう。　ゆっくりと、しかし確実に。　ならばここで、閻魔である私が走る彼を転ばせてあげないと大変なことになります。　彼の能力は使い方を間違えれば――――いえ、進化していけば此処が危うくなりますし。“負”の想いが集まればの話ですが。　それに、これで折れるようなら所詮その程度のことだったというわけです。」

「まぁ……そうなんですけどね。」

ぽりぽりと綺麗に結わえた髪をきにすることなく掻く小町。

「それでは私は仕事に戻ります。　くれぐれもサボることのないように。」

映姫はそんな小町を一瞥して、自分の仕事場へと戻っていった。

小町はというと、嘆息を漏らすと彼方が去っていった方向を少しの間見つめた後、自分の仕事に取り掛かっていった。

――――がんばりな

そう想いながら。　一人去っていくのであった。

## 33．死神と閻魔と現実（後書き）

ちょっと甘かったかもしれない。

これからまた過去になりますん。

# 外伝？～おもいかみ～

それは偶然と偶然が重なり必然的に生まれた

小さな島国の遥か西に一つの集落があった。　その集落は大人が１０人、子供が８人ととても小さい集落でありながら生活自体はすぐ近くに山と川があったので自給自足の生活を送りながら過ごしていた。　一見、貧しそうにみえるが、それはそれはとても豊かであり、誰もが笑いながら生活をしていた。

しかし――――それは一匹の妖怪の手によって終わりを告げた

その妖怪は大層腹が減っていたらしく、何も喰わずな日が何週間も続いていた。　そんな時にだった。　その集落を見つけたのは。楽しそうにはしゃぎまわる子供達。　そんな子供達を農作業しながら優しく見守っている大人達。

そんな光景をみながら妖怪は近づいていった。

ああ……食糧がこんな所に転がっている。

森の中から現れた妖怪に、驚き、慄き、逃げまどう者や、腰を抜かしてその場にへたりこむ者、多種多様な動きをみせる。

怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　助けて　助けて　助けて
助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて
助けて　助けて　怖い　怖い　怖い　怖い　痛い　痛い　痛い　痛い
痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　怖い　怖い　怖い　怖い
助けて　助けて　助けて　助けて　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い
助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて
助けて　助けて　助けて　助けて　怖い　怖い　怖い　怖い
痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い
痛い　怖い　怖い　助けて　助けて　助けて　怖い　怖い
怖い　怖い　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて
助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて
怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い
痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い
痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い　痛い
怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い　怖い
助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて　助けて

瞬間には聞こえなくなる。

がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。がぶり。むしゃむしゃ。ぐちょり。にちゅにちゅ。ぶちぶち。くちゃくちゃ。

一人を捕まえては、腕を引きちぎり足を切断し、叫び声をあげる喉にがぶりと食らいつき、そのまま食らいついた喉をぶちぶちと引き千切る。　噛んだ部分からはジェットのように血が噴射するがそれすらも気にせず、それすらも御馳走のようにちゅるちゅると音をたてながらゆっくりと味わうように飲む。　そしてそれが終わると、顔と足首をもって一気にエビぞりの形にして背骨を折る。　その拍子に人間の体からは骨と内臓が一部飛び出すがおかまいなく折り続

ける。　やがて、人間は真っ二つに折れ、苦痛と苦悶と懇願と恐怖の顔と上半身、微動だにしない下半身だけが存在する。

妖怪はというと、そのような顔で死んでいった人間の顔を掴み、目の高さに持っていき目ん玉をくりぬき、丸のみして、口をこじ開けその舌にむしゃぶりつく。　ぶちぶちぶち……と生理的に嫌悪がする音が辺りを支配する。　それが終わると妖怪は、次に下半身に狙いを定める。　足首を持ち、爪先から食らいつく。　がつがつがつ。むしゃむしゃむしゃ。　やがて面倒臭くなったのか、両足をもち、チーズのように裂いていく。　ぶちぶちぶち。強引に裂いた後は、腸を引っ張り出し、踊り食いのごとく食す。

そこはまさに地獄だった

白目をむいている者。誰かを探していた者。ずっと離れることがないように、手を握りながら絶命した者。

その全てが等しく平等に、妖怪の胃袋の中へと入っていった

周囲は血の臭いと、糞尿の臭いで満たさせていた。

その時間、わずか一時間

そんな短い時間の中で１８人の人間が死に、代わりに一匹の妖怪が生きながらえることができた。

腹が膨れた妖怪は、キョロキョロと辺りを見渡した後に素早い動きでまた森の中へ消えて行く。

周囲に広がるは残りかすとなった人間。

あぁ……憎い

涙を流しながら死んでいった人間は死ぬ間際にそう想った

あぁ……殺したい

愛する者が目の前で殺される様を見ながら人間はそう想った

なんで人間だけがこんな目にあわなければならないのだ

力自慢だった人間は、いざ妖怪が現れると何もできずに死んでいった最中、そう想った

なんで？　なんで？　なんで？　なんで？　なんで？　なんで？
なんで？　なんで？　なんで？　なんで？　なんで？　なんで？
なんで？　なんで？　なんで？　なんで？　なんで？
なんで？　なんで？

その者たちは想う

静かに暮らしていたいだけなのに

平和に過ごしていたいだけなのに

妖怪たちが邪魔をする

じゃあ、どうすればいい？

どうすれば静かに過ごすことができる？

その答えは至極簡単なことであった

――――妖怪を殺せばいい

憎悪と憎しみと憤怒に塗れた想いは、どんどん溢れだし、やがて一人の神を創りだした

その神は7歳くらいの子供の身長で目にかかる程度の黒髪であった

その神はたったいま殺され、食糧とされ、カスに成り下がった人間の想いを受け取る

純粋なまでに、なにも不快感を示すことなく、疑問を抱くこともせずに――――受け取る

想いを受け取った神は、その想いを形にするために足を動かす。
妖怪を殺すために足を動かす。

あちらこちらから集まってくる想いを食料にして、力をつけ、初めに受け取った想いを完遂させようと動く。

その足取りは遅く、ぎこちないものだったがゆっくりと確実にある方向へと向かっていた。

八雲紫が楽園を作ろうとしている方向に向けて、愚直なまでにゆっくり進んでいた

そして想い神が生まれたこの日は、奇しくも八雲紫が妖怪拡張計画を実行した日でもあった

☆

朝、藍が作ってくれた朝食を食べようと席につくと、彼が見当たらないことに気がついた。　先程まで一緒にいたはずなのに何処へ消えたのだろうか？

「藍、不知火はどこへ？」

「え？　いやこちらに……っていませんね。　先程まで紫さまと壮絶な睨みあいと罵りに合いをしていたはずなのですが」

従者である藍が席を立ち、不知火にあてがった部屋へと向かう。
それにしても罵り合いとはこれいかに。　私は身勝手な行動は控えるように言い聞かせていただけなのに、その途中で不知火がうだう

だ子供のように呟くからスキマから木材などを出して頭をはたいたのだが、彼が悪いのだからしょうがない。　まぁ……妖怪の賢者たる私があんなみっともないことをしたのには反省が必要かもしれないけれど。　それでも彼が悪いのにはかわりない。　いい加減、言いつけを守ってほしい。

「う～ん……彼の部屋の中も探してきたのですが見つかりませんねぇ」

「そ。　まぁ、お腹が減ったら自分から来るでしょう。　冷める前に頂きましょう」

彼は斜に構えてはいるが意外に子供っぽい一面があるし

そう思いながら紫が温かい白米を上品に口に運ぼうとすると――

「『ずっと目の前にいるんだが』」

呆れたような声を出し、不知火がしれっとほかほかのご飯を口に運んでいる姿が映しだされた

「……いつのまに？」

「『ずっと前から。　具体的に言うならばあんたが俺を見失ってから』」

白ご飯を飲み込み、不知火は魚の骨を丁寧に取りながらそう答える

……見失った？

その言葉に疑問を覚えた。　見失うということは、彼はずっと私たちが話しをしている間もじっとそこにいたということ。　しかしながら私は彼の気配すら感じなかった。　この私がである。　自分でいうのは嫌みっぽい気がするがこれでも私は妖怪の中で強いほうである。　だからこそ、九尾である藍を従者にすることができたし、鬼や天魔とも対等な関係で話すことができる。

そんな私が彼のことを見失った……？

ううん、それはきっと何かの間違いだろう。　まったく……彼も少しは冗談を言ってくれるほどには私たちのことを信頼、もしくは信用してくれてるのかしらね。

「冗談を言うくらいなって私も嬉しいわ。」

「『……そうかい。　それはよかった。』」

「それに、もし見失ったら、スキマを駆使してでも見つけて首根っこ掴んであげるわ」

くすくすと手で口元を隠しながら少しだけ挑発的な声を不知火に放つ紫に

「『ま、頑張ってくれ』」

僅かばかりの笑いを伴いながら不知火はそう紫に告げた

「あまり紫様を挑発しないほうがいいぞ、不知火。　後で痛い目みても私は知らないのでな」

「『そうかい。　それは困ったね』」

食べ終わった食器を台所に運びながら不知火は、肩をすくめながらそう答える

そしてそのまま、手を洗い外へと続く戸に手をかけたところで紫に声をかけられた

「何処へ行くのかしら？」

「『そこら辺をぶらぶら』」

「ふ～ん……。　あれ以来、鬼の所へは行ってないみたいだけど？」

あれ以来とは、もちろん不知火が使者として妖怪の山に向かい天狗の長である天魔に手紙を届ける途中で鬼の四天王と殺し合いを演じたことである。

その話は当然紫の耳にも入り、紫はその日の内に不知火を呼び出して問い詰めようとしたのだが、当の本人はどこか悔しそうな雰囲気を漂わせていたので声をかけられなかったのだが。

「『……あそこはやりづらい。　ぎゃーぎゃー喚く、嘘が下手な天狗がいるからな。　鬼があの山から出たときにでもまた殺しにいくよ』」

不知火は一拍おいてからそう言うと、今度こそ外にでた。

そんな不知火の後ろ姿を紫はニヤニヤとした表情でみているのであ

った。

さてさて、自分も妖怪拡張計画をしたことで起こる出来事に備えて有力者を集めて話しあいでもしましょうか。

☆

射命丸文は、黒い翼をめいっぱい羽ばたかせ、とある人物を探していた。

あっちをきょろきょろ

こっちをきょろきょろ

目に太陽の光が当たらないように手をかざしながら自慢の視力を駆使して探すこと２０分。　ようやく目的の人物をみつける。　そしてその人物に向かって急降下

「あやや、おはようですね、不知火さん。」

「『その猫なで声をやめろ、気持ち悪い』」

「せっかく、友達のいないあなたのためにコミュニケーションを取ってあげているというのに……つくづく嫌な人なんですね」

「『その嫌な奴に声をかけるお前は、つくづく変人なんだな』」

ため息すらつきそうなこの男に、射命丸は必至に拳を抑えながら、なおも笑顔で話を続ける

「と、ところで今日は何をしてるのかしら？」

「『散歩だよ。　そんなことも見て分からないのか』」

肩をすくめながら射命丸に憐れみの目を向ける不知火に射命丸はついにキレた

「あーもう！　なんですかさっきから！　私がコミュニケーションをとってあげようというのにその言い様。　流石の私も怒りますよ！」

「『頼んでないし、いりもしない。　ほら、もういいだろ。』」

ハエを追い払うときの仕草で射命丸を追い払おうとする不知火に射命丸がぼそっと呟いた

「……話し方も直しているし、面白くないですね」

その呟きはもちろん不知火にも届いたのだが、それを聞かなかったことにして歩きだした。

「あ、ちょっと待って。　私も行きますから」

もくもくと歩きだした不知火の背中に追いすがる形で射命丸も歩きだした

☆

蓬莱山輝夜は退屈していた。

月より迎えにきた使者達を月の頭脳と呼ばれた八意永琳が殺してから、そのまま月の追跡を逃れるために、竹がどんどん生えてきて入った者の方向感覚を狂わせ、出られなくし、やがては発狂するこの竹林に住んでから約８００年くらいが過ぎただろうか。　永遠の命を手にしてからというもの、一年一年が短く感じて既に感覚が狂いはじめてきた。

「はぁ……退屈。　なにか面白いことはないかしら」

付き人である永琳は自室に引きこもってなにか作業をしている。基本的に私の退屈凌ぎをしてくれるのだが、一日中というわけにはいかず、ふとした拍子に今のようにぽっかりと空いた時間が出来てしまうのだ。　なにか書物でもあるといいのだが、いかんせん持っている書物は大体が読み終わってしまった。

輝夜が何度目かのため息をついた時、その者の声が聞こえてきた

「『気の向くままに、風の向くままに歩いてみれば、よもやこの竹林の中にこのような立派な建物があるとはな。　雀のお宿ならぬ兎のお宿ってところか』」

頭に兎を乗せ、肩に兎を乗せながら気取っている男がそこには立っていた。

……ださ

それが不知火をみた輝夜の第一印象だった。

しかしながらそれもそうだろう。　頭と肩に兎を乗せながら――――ついでに兎がズボンに食いついている状態の男が気取った感じで目の前に現れたとして、誰がそのような状況でときめくのだろうか。

輝夜が思ったことは至極真っ当な感想であった。

「『ん？　どうやら先客がいたようだ。　はじめましてお嬢ちゃん。君はここの主かなにかかい？』」

「まぁ、主ではあるけど。」

といっても永遠亭を支えているのは永琳であるのだが。

「それより、勝手に人の敷地に足を踏み入れてその敷地の主に自己紹介の一つもしないのかしら？」

「『ふむ、確かにそうだな。　これは失礼。　俺のことは不知火とでも呼んでくれ』」

「そ。　私は蓬莱山輝夜。　一応、ここの主よ。　ところで、いつまで兎を乗せているのかしら？」

いい加減見ていて暑苦しくて、うざったい

「『こいつらか？　この竹林に入って３０秒で五月蠅い鴉（しゃめいまる）と別れてから、いきなり集まりだしてね。　正直、こちらも参っていたところだよ。　大方、俺にシンパシーでも感じたんだろうかね。　まったく……兎に同情されるなんてはじめてだよ』」

頭に乗っかる兎を強引に剥がしながら、肩に乗っかる兎をデコピンで退散させながら肩をすくめてみせた不知火は縁側で座っている輝夜に問う

「『此処にいるのはお嬢ちゃん一人かい？』」

「もう一人いるわ。　それとその“お嬢ちゃん”は止めてくれない？　気持ち悪い」

「『それは悪かったね。　蓬莱山。　ふむ……しかしながらこの竹林にこんな建物があるとはな……。　さて、帰るか。』」

「はぁ？　あんた何しにきたの？」

建物をみながらしみじみと呟いた彼は、いましがた来た道を戻ろうとしたところで輝夜が１オクターブくらい高い声で不知火に聞いた。

「『べつに。　来たくてきたわけじゃないからな。　それに木漏れ日を浴び、可憐にして優雅に座っている女の子のそばに俺がいたんじゃ絵にならないだろ？』」

「うわぁ……」

そのセリフをきいた瞬間の輝夜の顔は、とてもとても苦々しい顔をし、不知火を痛々しい目でみていた。

その愛くるしい笑顔と美貌、手ですくと一度も引っ掛かることのない黒髪に陶磁器のような肌をもつ蓬莱山輝夜は、一昔前に沢山の男共から求婚を迫られた経験がある。　そのときの男共の求婚の言葉も輝夜としては身震いするものも少なくなかったが、目の前にいるこの男ほどの破壊力はないだろう。

「（色々と可哀想ね）　そう言わずに座りなさいよ。　ちょうど退屈してたところなのよね。」

「『残念ながら、俺は女性を怒らせることにかけては天才らしくてね。　いい気分にはならないぜ？』」

「それでもいいわよ、退屈よりかはずっといいし」

そう言って、自分の横を手でぽんぽんと叩き座るように促す

しかし不知火は輝夜が叩いた所よりもずっと遠い所に位置どった

「……あんた舐めてるの？」

「『そんな犯罪まがいのことはしないさ』」

「いや、そうじゃなくて。　距離が離れすぎてるわよ」

「『こういうのは心の距離が大事なのさ』」

噛み合っているようで噛み合っていない会話が続く

やがてその問答に飽きたのか輝夜はため息をつき、庭で兎が追いかけっこをしている様子を、ぼーっとみつめる。　先程自己申告したように、この男、話しを振るわけでもなくただただそこにいるだけなのである。　自分が引き止めた手前あまり言いたくないのだが、別にいなくていいのでは？　という気持ちがふつふつとわいてきた

「ふぅ……。　ちょっと休憩しましょう。　あら？　姫様、このような男、どこから引っかけてきたのですか？」

「本人いわく偶然来ただけみたいよ。　それにこんな男よりもずっといい男はいくらでもいると思うわ。」

がらりと奥の襖が開く音がしたと思い後ろを振り向けば、従者である八意永琳が彼のほうをみながらそんなことを聞いてきた。

「そうですか、それは失礼しました。　ところでお名前は？」

柔らかい笑みを浮かべて聞く永琳に、不知火はぶっきらぼうに答える

「『不知火』」

「それは種族名でしょう」

そう言われて黙る不知火

「ふむ……。　まあ誰でもいいですが。　それよりもその話し方きつくはないのかしら？」

「『べつに、もう慣れた。』」

そう言う不知火を、永琳は見つめながら輝夜の横に腰を下ろす。
丁度、輝夜・永琳・　不知火のような形で座る。　それから三人は何も喋ろうともせずにただただ風に身を預けるばかりだった

☆

３０分くらい経ったころだろうか。　こっくりこっくりと船を漕ぎだした輝夜の肩を抱き自分の膝に乗せ、頭を優しく愛でるように、撫ではじめる永琳。　その光景は主人と従者の関係というより、母親と子供の関係のようである。　輝夜はもぞもぞと体の位置を調整し、本格的に寝始める。

「『大変だな、あんたも。　お守なんかしてさ』」

「そうでもないわよ。　私はお守ができて嬉しいくらいよ」

「『……理解に苦しむことを言うのだな。　お守なぞしてなんになるって言うんだい？　一つ枷が足につくだけじゃないか』」

そう言った彼は本当に訳のわからないという顔をしていた。

「そうね、確かに枷がつくことになるかもしれないわね。　だけど

それがいいのよ。　大切な人の重みを、自分の生きる目的を、その枷があるかぎり見失うことはないのだから。　私の一生は姫様に捧げると決めたわ。　例え月の民がどれだけ攻めてこようと、私はこの手を離すことはしないでしょう。　そう考えると、とても素敵に思わないかしら？」

慈しむように輝夜の頭を撫でながら問う永琳に

「『やっぱり理解に苦しむな。　俺には到底理解できる気がしないよ。』」

そう言って席をたった。　どうやら帰るみたいだ。

「『折角の二人きりの時間を邪魔して悪かったな』」

集まる兎を器用に掻きわけながら、竹林に向かう彼はそう後ろ向きに声をかけてきた。

「べつに気にしないわよ。　それと見つかるといいわね、あなたの枷」

一度立ち止まったかのように見えた彼だが、そのまま軽く手を上げながら竹林の中へと消えていく。

彼はどうして、あんなに寂しそうな目をしているのだろうか？

不知火が去っていった後にそんなことを考える。

月の頭脳と呼ばれた私なのに、一人の妖怪の考えていることさえ分からないなんて……とんだお笑い草ではあるけども、嘘を嘘で塗り固めただけあってこの短時間では分からなかったのも確かである。

もう一度、彼が此処に来ることがあればお茶でも出して色々と聞いてみたいのだけど

「もう来ることはないでしょうね。」

そう漏らし、輝夜の頭を撫でることに専念しる永琳であった。

永琳の読みは当たり、それから不知火は迷いの竹林に寄りつくことはせずに月日が流れた。

その間にも八雲紫と藍はあちこちを動きまわったり、鬼が妖怪の山を去ることになったり、輝夜が殺し合いを繰り広げることになったのだが――――そんなこの場所にも大きな転機が訪れることになった。

その日は龍神が姿を現した日でもあり、一人の神が消えた日でもあり

そして――――　一人の妖怪が嘘を剥がした日でもあった

# 外伝？～おもいかみ～（後書き）

ケセランパセランこないかな

# 外伝？～不知火～

轟音と爆砕音が辺りに響く

緑溢れる木々で囲まれた森は焼け野原のような状態で、その地面にもところどころに５ｍほどの大きなクレーターがあった。

無邪気で悪戯好きの妖精の大半は死に絶え、わずかばかり残った植物たちも自分の力だけでは移動手段をもつことがないので、焼かれ、踏みつぶされ、引きちぎられ、見るも無残な存在へと変わっていた。

そこはまさに地獄だった。

「まさか、こんな神様がいるなんて……！？　人間の想いとは怖いものね……」

青汁でも飲まされたかのような苦い顔で紫は呟く

それは突然、突如、一瞬にして起こった出来事だった。

ぽかぽかと暖かい空気に包まれていた大和の国の東の奥。　様々な妖怪たちが面白おかしく、時には人間を襲いながら暮らしていたそ

の日に、想い神は現れた。

おぼつかない足取りで、よろよろと。　そんな様子を偶然みていた一匹の妖怪が不思議に思い声をかけたのがはじまりだった。

その妖怪は人間の子供と非常に似ている神様に声をかける

おいおい、そんな足取りで大丈夫か?

と。　その妖怪の声で神様は声がした方向に目を向ける

暗い　暗い　深淵のような目を向ける。　そして、こう口を開く

みつけた。　此処にあった

それは声として発することはなかったが、確かにその妖怪にはそう言っているように口は開いていたという。

口は開けど声はきけず

もしかしたら自分の耳が悪くなったかな?　なんてことを思いなが

ら妖怪が神様の口元に耳を近づけた瞬間――――

シュッ！と風を切るような音が聞こえてきたかと思うと、一秒後にゆっくりと妖怪の首がずれていき、ゴロンと近くにいた者たちの方に転がっていた。　次いで痙攣しながらおびただしいほどの血を流す胴体が二歩くらい歩いたところで、操り人形の糸が切れたかのように倒れる。

それが皮切りだった

偶然その様子をみていた近くの妖怪がなにかを叫ぶ。　するとその声に反応して想い神はその妖怪に気付き、テレポートのように姿を消した――――かと思うと、妖怪の背後に一瞬にして現れその鋭利な爪で喉元を引き裂く。

引き裂かれた妖怪は絶命しその営みを終える。　その妖怪の中から小さな光の玉が出てきて、想い神の胸の中へと吸い込まれた。

想い神の侵略はそれだけに留まらなかった

酔っ払いのように歩き、視界の中に妖怪が入るやいなやその凶悪な力で殺す

爪で　腕で　足で　口で

ただひたすらに殺しまくる

時間にしてわずか一時間

その一時間の間に１００匹以上の妖怪が死んだ

穏やかに暮らしていた妖怪も　平和に暮らしていた妖怪も　人間と折り合いをつけながら生活していた妖怪も　人間を喰おうと息まいていた妖怪も　人間を単なる玩具としか見ていなく、殺す道具だと思っていた妖怪も

平等にして均等に、想い神の手によって殺された

たった一匹の妖怪が生き残るために殺された１５人の人間が、その怨嗟と憎悪を持って生み出した神様

たった一つの想いを叶えるためにこの世に生み出された神様

それは人間側にしても、妖怪側にしても、神様側にしても、イレギュラーな存在になっていた

☆

紫は事の経緯を思い出すために閉じていた瞼をそっと開ける。　そして今目の前に広がっている惨状を受け止める。　紫の目の前には、まるで子供のような純粋無垢な瞳をした想い神が立っている。　その瞳はまるで何故このようなことになっているのか、本当に分からないといった風である。

なんで邪魔をするの？

そう訴えかけている気がする

「八雲くん」

後ろからなじみ深い声が聞こえてきたので振り向けば、そこには困った顔をした天魔が立っていた。

「君の言うとおり、力のない妖怪はみんな私達の山へと非難させた

よ。　後はこれをどうにかするだけだ。　……といっても、それが難しくあるのだけどね」

天魔は目の前にいる神をみながら苦々しく呟く。　いつも穏やかで優しい天魔からは想像もつかないような顔をしながら、想い神を睨みつける

「他の天狗にも迷惑かけたわね。　どうにかするといっても、力が強すぎてどうにもできないわよ。　あっちは強固な結界まであるみたいだしね」

「あら？　そんな結界、ぶち壊せば済む話じゃない」

天魔と紫が話してる横で、そんな声が聞こえてきた。

紫がその声に反応した時には、その声の主は想い神へと接近して自慢の傘を心臓めがけて貫く勢いで突いていた――――が、その傘は心臓に達する前に先端からグシャリと潰れ、みるみるうちに潰れた空き缶のようにひしゃげてしまった。

「あら、これは中々楽しめそうね」

恍惚とした声と表情に、剥き出しの闘気を隠すことなく想い神を値

踏みするかのようにみつめる女性。　腰まで届く長い緑髪に、膝下１５ｃｍくらいはある赤のチェックスカートに、白の長そでブラウス　そしてその上には同じく赤のジャケットを羽織り　ひしゃげた傘をぽんぽんと手で叩くその女性は、一見すると清楚で淑女のように感じるが、接してみるととんでもない女性。　自称最強の妖怪であり四季のフラワーマスターと呼ばれている風見幽香だった。

「花の妖怪がなんの用かしら？」

そう聞く紫に、幽香は

「最近退屈してたのよね。　それに、なんとなくムカつくわ、あの顔が」

とんでもない私情で想い神に手を出していた。

そうはいっても、紫としてはどんな理由だとしても幽香の登場は嬉しかった。　自分と天魔と従者の藍だけではこの神の足止めが関の山である。　そこに自称最強の妖怪、風見幽香が加わるだけでも形勢は少しだけだが、こちら側に傾くはずだ。

「ああ、協力なんてことしないわよ。　というか、邪魔するのであればあなた達から消すから」

そう言って、幽香はまたもや想い神に特攻を仕掛ける。　はなから協力なぞ幽香にはする気がないらしい。　しかしそれでいい。　こちらから制御などするより、のびのびと撲殺に励んでくれるほうが紫としてもありがたい。

「さて、これで多少は戦力が増強されたわね。　……といっても、まだまだ足りないくらいだけど」

想い神に拳を放ち、傘で叩き殺そうとしている幽香をみながら紫は呟く

まだ足りない　こんなものでは、あの神を倒すことはできない

そうしている間にも幽香は一人で対峙していた。

せまってくる拳を避け、カウンター気味にこちらが逆に放つ。　しかしその拳は想い神に届くことはなく、その３０ｃｍ手前で結界により阻まれる。　結界によって阻まれた手は、ぐしゃりと音をたててひしゃげ、幽香はそのたびに妖力で元に戻す。　さっきからこれ

の繰り返しである。

「なかなか、厄介ね。　その結界。　でも、いつまでもつのかしら？」

一向に壊れる気配を感じさせない結界を目の前にしても、その余裕を崩すことはせず、逆に強者特有の発言までする幽香。　そんな幽香にイラついたのか、はたまたただ単に邪魔だったのかか分からないが、想い神は左手を大きく広げ、何かを掴む仕草を空中でしたかと思うと、一気に幽香の方向へと振りかぶった。

その行動に首を傾げる幽香。　だが、それも一瞬――ざわりと鳥肌がたった幽香は自慢の身体能力でその場から一気に離脱する。

ゴシャッ！

そう音をたてて、幽香が先程まで立っていた場所に５ｍほどの大きな岩が飛んできた。

「念動力ってやつかしら……。　ダメよ？　そういった玩具は大事にしないと。　子供だからってお姉さん、甘やかさないわよ？」

ふわりと全てを照らす太陽なような優しい顔で、想い神に笑いかけ

る幽香。

その顔は一瞬にして、凶悪な顔へと変貌する。

風を切るように駆けだし、岩を踏み台にして１５ｍほど高く飛んだ幽香は、重力に身を任せたまま、背中から刀を抜刀するかの勢いで、想い神の頭に傘を叩きつけようとした――――その矢先、たったいま踏み台にした岩が幽香の背中へと流星のごとく襲いかかってきた。
　大蛇が鼠を喰らうかのように、とてつもない速さで向かってきた岩に幽香の体勢からでは避けることも、防御することもできず、かといって叩きつけようとしている傘を岩の方に向かって方向転換するのは間に合わない。　結果からすると、幽香は何もすることができずに喰らうわけになるのだが

「そんな凶悪そうな顔で、迫られたらビックリするに決まってるわ。だから岩を投げられるのよ」

後ろの岩が爆発し粉塵となり幽香の髪へ、ぱらぱらと降り注ぐ。
突然の出来事に、幽香は驚き力が抜け、傘は強固な結界に守られた想い神に届くことなく弾かれる。

後方へ弾かれた幽香は、声のした方向に視線を向ける

「くすくす。　頭にふりかけがかかっているみたいね。」

「……殺されたいのかしら？　へんてこな帽子なんか被っちゃって。邪魔よ、消えなさい」

「そうはいかないのよね。　こんなされると、こちらとしても色々と困るのよ。　此処は私達には丁度いいの。　そんな所をわざわざ捨てるような真似はできないわね。」

銀髪を三つ編みにして、ナースキャップのような帽子をかぶり、赤と青のコントラストで彩られた服を綺麗に着こなして、手には弓を持っている女性、八意永琳は睨む幽香の顔をみながらそう答えた。

「どちらにしても、あの子を倒すのが先決でしょう。　ちょっと協力してくださらない？」

「嫌よ。　なんで私が協力なんて真似しないといけないの。」

手を差し出す永琳に、ぷいと顔をそむける幽香。　そんな仕草に一瞬固まった永琳だが、年の功とでもいうのだろうか、すぐに優しい笑みを浮かべて再度お願いする。

「まあまあ、あなた一人じゃ絶対に勝てないから。　ここは協力し

ましょう？」

“絶対に勝てない”　その一言に幽香はこめかみを浮かべる

「あら……どこの誰だか知らないけど、随分な言い様じゃない。あんな子供ごときに私が勝てないって？」

「ええ、勝てないわよ。　あなたも、そして私も。　だって存在自体が卑怯だもん。　想い神って」

想い神――それは人間の想いが具現化し、神になった存在。憎悪と怨嗟によって生まれた存在は、最初の想いを叶えるために想いを食料にして力にする。　言い換えれば、想いそのものを力へと変換させるということ。　想いとは残留思念のようなものであり例え、肉体が滅んだとしても、想い自体はその場に留まることが多い。　想い神はそういった想いすらも食糧にすることができるのだ。

人間は生きている限り必ず想いがある。　妖怪にもあるだろう。もしも、想い神の視点から世界を見るならば、いたるところに食糧が存在している状態だ。　自分がより強力になるための食糧が。

私達が話しをしている間にも想い神は、どんどん強くなっているのだろう

「想いを喰らい、その想いを力に換えることができる相手にどうや

って勝つのかしら。　はぁ……こんなことなら、姫様にも来て頂いたほうがよかったかしら」

その姫様がいまなにしているの分かっている自分としては、おいそれと呼ぶことができないが。　自分の大切な姫様は、因幡の兎たちを非難させている最中だったりする。

「だったらどうするのよ。　このまま滅ぶのを待つのかしら？」

「それもいいかもね」

もちろん、冗談だけど。

傍から見ればとても楽しそうなお喋りを展開していた二人に、空気を圧縮した玉が放たれた。

「「ッ！？」」

いきなりの攻撃と、そのスピードに驚き、動きが止まった二人に空気を圧縮した玉は容赦なく襲いかかってくる。　その玉は真っ直ぐに突き進み、二人の間で爆発する――――かと思ったのだが

「「「「「破ッ！！」」」」」

ビュンッと突如として二人の前に現れた薄緑色の障壁に阻まれ、そこで爆発した

しかしながら、空気を圧縮しただけあって阻んだくらいで二人は無傷……というわけにもいかず吹き飛ばされ、空気の刃によって裂傷がつくことになるのだが

「ちょっと、敵の目の前で二人して喧嘩しないでくださいよっ！！」

気がつくと二人は、赤い髪を頭の上近くで結っている死神に、首根っこを掴まれた状態で遠く離れた位置へと移動していた。

「あら、死神まで来たのかしら。　ということは……」

「映姫さまも一緒ですよ。　こちらとしても、一度に死者が増えすぎるのは困るんですよね。　色々と」

みると、小さい体に誰もが冷や汗を浮かべるほどの圧倒的オーラを放つ存在が、悔悟棒片手に八雲紫となにか話している様子をみることができた。　いつきたのか、亡霊の姫までいる始末。

「死神さん、助けてくれてありがたいわ。　あの障壁もあなたがやったのかしら？」

問う永琳に、死神である小野塚小町は首を振り、想い神を指さした。
正確には想い神の周辺で印を結んでいる人間達を指さした。

数は２０人

丸坊主の者や、角刈りの者　スキンヘッドの者や　長髪の者

全くもって統一性のない髪型をしているが、その服装だけは統一していた。

全身を包むように着こまれた真っ黒で、袖がぶかぶかに余る服。
大きな数珠を首からぶら下げ、いまでこそ、印を結ぶために両手をつかっているが、腰からちらりとみえたホルスターのようなものからは、神授が書かれたお札が大量にセットされてあった。

「映姫さまが止めたんですけどねえ……。　妖怪に恩をつくるのは嫌だ！　ということらしいですよ。」

困ったように笑う小町。　その小町を困らせている原因の人間達は

というと、妖怪にはできない連携プレーをみせていた。

丁度、想い神が中心にくるように六芒星を描いていた。　むろん、一人ひとりが印を結んでいる状態だ。　想い神は最初こそ、不思議がるように小首をかしげていたが、自分が置かれている状況に気付くやいなや、おもちゃが目の前にあるのに、それで遊ぶことができずに暴れる子供のように、手足をばたつかせる。

想い神が暴れるたびに印と印を結び、光の糸でできた六芒星がブチブチ……と、いまにも千切れそうな音をたてる。

この呪縛も、もって１０分といったところかしら

そう計算しながら、永琳は暴れる想い神をみつめていた

☆

「まさか、人間達までくるなんて……」

八雲紫は、目の前に広がる壮観な光景を見ながらひとりでに呟いた。
　それは意識して呟いたわけではなく、無意識から出るものであった。

「想い神は人間側にとってもイレギュラーな存在です。　そのことに人間たちも気づいたのでしょう。　……ですが、このままではただのじり貧であることには変わりありませんね。」

「だったら、映姫さまも加勢してくださいよー！」

澄まし顔で紫に告げる映姫に、横にいた西行寺幽々子が怒る。

映姫は幽々子に

「そうしたいのは山々なんですが、私には見定める役目があるのです。　あなたが代わってくれるというのであれば、私は今すぐにでも戦火の中へと飛び込みましょう」

そう返答した。　澄ました顔で、ふるえる拳に力を入れて、ぐっと堪えるようにしながら映姫は目線を戦場から逸らすことなく幽々子に返答する。

「映姫さま……」

「私は加勢することができませんので、私の分まで頑張ってきてく

ださい。　もうじき、あの六芒星の呪縛も解かれますよ」

自分には、この結末を外から見守り、見定める。　という大切な使命がある。　だから、どんなに加勢したくてもそれはしてはいけないことなのだ。　ジャッチメントは内に入ってしまった瞬間に、その役目が消滅してしまうから。　それだけは避けなくてはいけないのだ。

震える拳を押さえつけることに意識を集中させていたら、いつの間にか傍にいた天魔や紫や、幽々子がいなくなっていた。　ふと、想い神の方をみると、呪縛を引きちぎっている最中だったので、多分加勢に行ったのだろう。

じきに鬼もくることだろう。　そうすれば、戦力としては充分だ。
　というか、それ以上の戦力を用意することは不可能である。

既に役者は揃っている

舞台も整っている

あとは幕を下ろす存在が着けば、この演目は終わるだろう

それが最高（ハッピー）の結末（エンド）になることはないけれど

この演目が最高（ハッピー）の結末（エンド）をむかえることはないけれど

☆

遠くから轟音と爆砕音が聞こえてくる

その音を聞きながら、いまだ被害にあっていない草の道をゆっくりと噛みしめるように歩いていく。

さくり　さくり

思えば、ずっとこの草を踏む音を聞いていたんだよな。　ずっと考えていなかったけど、草の道はこのように踏む者の耳をこんなにも癒してくれるのか。

何億歩と歩いてきたのに、はじめた知ったことに少しの感動を覚える

【今日は何処にいかれるのかしら？】

こうやって歩いていると、いつも自分のことをみつけてそう聞いてくる鴉天狗のことを思い出す

散歩に行くたびに、あの声がかかってくるのを待ち焦がれるようになったのは何年前からだろうか。　はじめは鬱陶しかった　天狗は自分より下の者は見下した態度をとると聞いていたし。　でも、あの子は少しだけ違っていた。　正直な話、あの子と喋りながら外を歩くのは楽しかった。　はじめて括弧を取った日。　あの子は応援してくれた。　あの応援がどれだけ自分の助けになったか。　……なんて、あの子にはわからないだろうな。　ずっと括弧をつけて、嘘をついていたわけだし。

歩き続けていると、ぽっかりと開けた空間にでた。

そこだけ緑の草木もなく、空気も違っていた。　どことなく神聖な、許された者だけがその空間に入ることが許されるような……そんな空気を肌で感じる

そこに一人で佇む女性がいた

長いフレアスカートに、フリルが沢山ついた衣を、胸元を赤いリボンで可愛らしくとめており、帽子は一見すると触覚のようにも思えてしまうリボンで装飾されている。

……はて、誰だったかな？

まあいいや。　用があるのは一人だし。　あちらの方もお喋りしにきたわけではないみたいだし

「出てきなよ、龍の神。　……いや、いまじゃ龍神だっけ？」

誰もいない虚空に向かって話しかける。　何も知らない人が見ていたら、ただの不審者に映るかもね

『久しいな、鬼火の者よ』

たった一言

その一言で、その場の空気は完全に変わった

ピンと張りつめた空気、重くのしかかるプレッシャー、力を抜くと足が崩れいやがおうにも土下座の体勢になってしまう。

上位であり高位の存在だけが持つ、独特な存在感

それがいまこの空間を支配している

「相変わらずの存在感とプレッシャーだね。　存在が確立してない……むしろ消滅しつつある僕じゃなかったら、今頃土下座の体勢だよ。」

肩をすくめ、目の前にいる存在に話しかける

大和という国が出来て以来、ずっと存在している神様

その力は他を圧倒し、最高位といっても過言ではないはず。　間違いなく八雲でも冷や汗を浮かべること間違いなしだね。　これと対等に喋れる存在なんて、閻魔様くらいだと思うよ。　例外として、僕もだけど。

２０００mはあるであろう体長と、鬼よりも強靭ででかい角を頭に二本生やし、全身は青色で髭は金色、二つ開いた黄色の瞳孔は爛々と輝き、決して僕から離そうとしない

「それに、久しいって……僕達が会うのはこれで二回目だろう？」

いや、確かに久しいけど。　なんか、そういった感覚がないんだよね。　別に友達って訳でもないし

『最初に出会ったとき、お主が我に噛みついてきたことはよく覚えているぞ』

ははっ、そんなことまで覚えているのかい。　案外、暇神（ひまじん）なんだな

「そういえば、噛みついたのは君が初めてだったね。　死ぬ寸前の僕の前に現れてさ。」

遠い昔のことで、記憶の大半は抜け落ちているけど……それでもそこだけは覚えているよ。

『そして主は願った。　死ぬ間際に、我の問いかけに答える形で。』

一度でいいから、僕は“勝ち”というものを味わってみたい

そう願った

『そして我は主に力を与えた。　あらゆるものを作り・あらゆるものを消す　という力を。　主はそれを積極的には行使していなかったが』

だって、そんな力で勝っても、僕は勝った気にならないよ。　僕はそんな“勝ち”を望んでいるんじゃないよ

「悪いけど、あれは僕には扱えない代物だったよ。　やっぱ借り物は借り物なんだよね」

氷精がいい例だよ。

そこで一旦会話が止まる。　龍神の傍らで控える形を取っている女性は僕達の会話に口を挟む気はないみたいだ。　……いったい、何しに来たんだか

龍神が口を開く

『一人称……戻したようだな』

「ああ、これかい？　そうだね……どうせ消えることだしもういいかなと思ってさ。　最後くらい、括弧つけずに、僕（おれ）と言わずにいこうかな……って思ってさ。　どうだい？　似合ってるかい？」

おちゃらけた態度で話す僕に

『だが、最後まで嘘はつくのだな』

と、胸を抉ってくる言葉を放つ

まったく……ほんと何でもお見通しだな

「残念ながら、一度だけこの嘘が剥がれたことがあるけどね。　……まあ、君のいうように最後まで嘘はつくよ。　僕は嘘をつくことで僕として保っているのだから」

君からしたら、なんとも滑稽に映るかもしれないけれど

それでも僕は貫きとおす

はるか後方で、ひと際大きな爆砕音がなりその振動で此処も少しだ

け揺れる

どれだけ暴れているのやら

まあ、それはそれとして

「僕も君に質問がある。　どうして、この時じゃなく遥か前に顕現なんかさせたんだい。」

おかげで僕は散々な目にあったんだ。

スキマ妖怪に家族認定されたり、鴉天狗の前で涙をみせたり、花の妖怪に喧嘩を売ってあっさり負けたり、闇魔様に説教されたり、竹林で変な奴らに会うし

――どれもこれも、散々（たのしかった）な思い出だよ

『何故顕現させた……か。　そうだな、一言でいえば“知ってほしかった”』

家族を

友人を

温もりを

知ってほしかった

勝つのは簡単だ。　力を使えばいい

しかし、そんなことでは――――一生自分に勝つことはできない

背負う重みを知らぬ者に

誰かを愛することを知らぬ者に

自分が傷つくことで誰かが泣くことを知らぬ者に

“勝利”などあるわけない

『自分が消えることで誰かが悲しむことを知ってほしかった。　主には背中を支えてくれる存在がいることを知ってほしかった』

ああ……やっぱりな。　そんなことだろうと思ってたよ。

だからこそ、僕が八雲と会うように仕向けたんだよね

「君の言っていることが、僕には全く理解できないよ。　そんなものがなくても“勝つ”ことはできる。　それに僕がアレを止めるために君は僕を顕現させたんじゃないのかい？」

『確かにそういう契約ではあった――――が、別にあれしきの神ごとき我の力で消せることに気付いた。　神が直接的に何かに干渉すること自体がいけないことなのだが……アレを野放しにすると危険なのでな。　一種の特例だ』

「それに気付いたからこそ、僕に普通の生活を送らせようと決めたわけかい。」

だとしたら君は間違っているよ、龍神

「想い神は何も悪いことはしちゃいないよ。　もちろん、人間を襲った妖怪も　妖怪を憎んだ人間もね。　妖怪が人間を襲うのはごく当たり前のことで、それによって人間が妖怪を憎むのも当たり前のこと。　そして想い神はただその人間の想いを行動に起こしている

だけにすぎない。」

最初に触れた想いが危険な想いだっただけで

「想い神ってのは、最初に触れた想い次第でどんな存在にも化けるんだよ。　今回が、悪よりな想いだっただけの話だろ？　たかだがそれくらいのことで、皆大騒ぎしすぎだよ。　そんなことだから、想い神は怖がって関係ない種族まで襲おうとするのさ」

まったく……生き物の悪い癖だ

自分のことは、遥か高い位置の棚に上げ、他の者を悪だと決めつけ徹底的に叩く

これは人間側の醜い風習と思っていたけど……案外、妖怪側もそうなのかな？

「だからこそ、僕は想い神を消すことには反対なんだよ。」

だって、あんまりじゃないか。

本当はもっと素晴らしい想いがそこら辺に落ちていたのかもしれな

いのに、最初に触れた想いが悪よりなものだっただけで、消えなければいけないなんて。

『だがどうする？　主がどれだけの言葉を吐こうが、想い神が行動に起こし、そのせいで妖怪が死に絶えていくのは事実。　このままいけば、妖怪は絶滅すること間違いないが』

「――――だからこその僕だろ？」

龍神の瞳を見ながら、不知火は決して逸らさずに堂々と言い放つ

「元々僕はそのためにいるんだ。　だから返してくれないかい？　僕の最初の能力を。　僕が俺であるために、俺が僕であるために、僕が僕であるための能力。　噛みつくことしかできない僕の唯一にして無二の能力」

神憑(かみつ)く　程度の能力を

手を差し出しながら言う僕と、無言でそれをみつめる龍神の間に、
荒い風が吹く

風は僕の髪を盛大に巻き上げ、龍神の髭をわずかながら動かす

しかしそれも数瞬でおさまり、次いで無音が空間を支配する

『かわらないか』

「ああ、かわらないよ。」

問う龍神に、不知火は間髪いれずに答える

その言葉を聞いて、龍神も諦めたのか不知火に近づいていき、その

顔を一舐めして離れていく

「うわっ。　あの時もそうだったけど、コレは勘弁してほしいんだよね……。　ま、確かに返してもらったよ。」

若干、苦い顔をしつつ礼をいって、くるりと反転して来た道を帰ろうとする不知火に

『まて、孤独にして孤高な者よ』

龍神はそう呼びとめる

「なんだい、僕はこれから行く所があるから、早くしてくれないと困るよ」

不知火は振り返ることもせず、そう言った

『なに、すぐに終わる。　主に友として、この言葉を贈ろうと思ってな』

歩みゆく　道はひとつにあらねども　われは忘れず　君の面影

不知火は歩みを止め、頭をがしがし掻いた後、振り返りながら、見たこともないような爽やかな笑みを浮かべながらこう言った

「ばっきゃろう。　そんなことしたら、最後の涙（うそ）が剥がれちゃうじゃないか」

☆

誰もいない、生き物の気配すらしない道を独り、ポケットに手を突っ込んだまま歩いていく

向かう先は、轟音と爆砕音の中心地。

そんな不知火の前に、何者かが突風を伴って不知火の前に舞い降りた

その者は、不知火を行かせまいと両手を大きく広げて言った

「ダメです。　これ以上は行かせません！」

大きな黒い翼に、からんと音がする下駄を履き、顔と同じくらいの団扇を持った鴉天狗の射命丸文が立っていた。

その顔を煤(すす)に塗れており、額には大量の汗の玉が浮かび上がっている。　よく聞くと微かながら、荒い息も聞こえてくる。

一体、彼女は何時間　飛びまわったのだろうか？

決して、大きくない体で、こんなになるまで何故飛びまわったのだろうか？

「いま行けば、貴方は間違いなく死んでしまいます。　そんなの…私が絶対に許しませんっ！」

顔を歪めながら、悔しそうに歪めながら、精いっぱいの声で僕に向

かって叫ぶ

まったく……なんで君が泣いているのか僕には理解できないよ

君と僕の関係なんて、他人以上、友達未満な関係じゃないか。

「もうじき鬼の皆さんが来ます！　そうすれば絶対にあの神様にも負けません！　本気で戦ったあなたなら知っているはずですよ！　鬼がどれほど強いのか！」

なおも射命丸の独白は続く

「なんであなたはいつもそうなんですか！　そうやって……自分を犠牲にして、正義のヒーローでも気取るつもりですか！　うざいんですよ！　キモイんですよ！　貴方がそんなことしても、誰もあなたのことを祭ることもなければ、名誉な勲章を与えることもしないです。　ですから、ですから私と一緒に行きましょう。　避難場所には沢山の妖怪たちがいます。　あそこにいれば、安全ですよ。大丈夫です、避難場所では私がずっと貴方の傍にいます。　貴方から離れません。　ですから、安心してください」

そういって、笑顔で僕の方に手を伸ばす射命丸

君はとてもすごい子だよ。　笑いながら泣くことができるのだから。

僕は愚か者だ

君の涙を拭うことができない僕は愚か者だ

君を笑顔にすることができない僕は愚か者だ

だけど……僕にはそれがお似合いなんだと思う

もうじき僕はこの世から消えて、時間が経てば、皆の記憶からも消えることだろう

幸せな記憶のほうが、嫌な記憶よりも消えやすい――と聞いたことがある

それは逆に、嫌な記憶であるならば残り続けることがあるかもしれないということだ

僕は愚か者で卑怯者で自己中だ

だって、消えてもいいと思いながらその実、君の記憶からは消えて
ほしくないと願うのだから

僕は手をとることはないけれど、君にこの言葉を贈ることにしよう

――次に会うときは、その小さな胸が大きくなるよう祈ってるよ

不知火は何もいわず、手をとることもなく、射命丸の隣を通り抜ける

小さな嗚咽を聞きながら、黙って通り抜ける

頭のいい射命丸が、このことを予想していないわけではなかった

むしろ、射命丸文はこうなるだろうと予想していた

ただ、それでも手をとって括弧つけながら、皮肉を言ってほしかった

虚空に向かって伸ばした手を、ゆっくりと握りしめながら射命丸は
そう思った

☆

「幽々子！　人間達を援護して！　その他は風見幽香を中心に、全方位から攻撃！」

紫の怒号にも似た声が辺りに響く

何十回、何百回、何千回、何万回

この命令をだし、攻撃し、そのたびに弾かれてきただろうか

数えるのも嫌になってくる

しかしそんなことを愚痴として言っても、誰も聞いてはくれないだろうし、自分自身そんなこと言いたくない

口に出していってしまえば、その瞬間に心が折れそうな気がするからだ

人間達の呪縛を引きちぎった想い神は想いを喰らい、益々力を増して私達に襲いかかってきた。　そこに、妖怪やら人間やらの種族間は存在しない

一種の暴走状態のようなものだ

「ちょっとヤバくないですか……！　あちらさん、さっきよりも力が強くなってますよ！」

額に大量の汗の玉を浮かべながら、大きな鎌をもった小町が能力で移動してきてそう叫ぶ

「堪えるのよ！　もうじき、鬼が来るわ！　そうすれば……」

そうすれば……形勢は逆転できるのか？

ふと紫の頭に疑問が生じる

確かに鬼は強力だ。　だが、想い神は力の強さに上限というものが存在しない

ならば、一瞬だけこちらが強くなっても、時間が経ち、その分の想いを喰えばまた形勢は逆転させられる。

……元々、この勝負は私達の負け……ではないのか？

いままで直視しないようにしてきた現実を、一瞬だけ見つめてしまった紫

辺りを見ると、風見幽香も八意永琳も、従者の藍も死神の小野塚小町も、人間たちも、不安そうな顔で戦っていた

あぁ……そうだ。

私は気付いてしまった

この勝負に勝ち目がないことを

そもそも勝負ですらないということを

想い神による一方的な蹂躙であることを

私は気付いてしまった

そんな時だった

彼の言葉が耳に入ってきたのは

「随分と派手にやってるもんだね、みなさん」

ポケットに手を突っこんだまま、散歩ついでに寄ってみたような感覚で彼は来た。

右手を目の上において、遠くでも見るかのように辺りを見回す

「ふむ……。　人間まで一緒か。　なんかどこかのバトル物の最終決戦みたいだ」

軽く笑いながら、そう言う彼

彼は一度止まっていた歩みを再開させて一歩一歩踏みしめるように私達の元まで……想い神の元まで歩いてくる

私達はいきなり現れた存在に、喋ることもできず、動くこともできず、ただただ彼の動向を見守ることしかできずにいた

そしてそれは想い神も同様だった。　いきなり現れた存在に、想い神は驚き、彼が動くたびに目線を動かして、釘付け状態になっていた

やがて彼は想い神に1mという所まで迫っていた

そして両手を広げて、この場にいる全員に聞こえるようにいった。とても透きとおった声で言う

「スキマ妖怪に九尾に花の妖怪、闇魔に死神に竹林の者に、人間達に天魔に亡霊の姫。　そして想い神。　はじめまして、こんにちは。僕は“不知火”――――」

――――最弱の鬼火妖怪さ

## 外伝？～不知火～（後書き）

次で外伝はラストになります

## 外伝？～夢の終わり／夢の続き～

遠い遠い、昔の話である

人間たちが言語を話すようになり、狩り主体から稲作主体になりはじめた頃、最弱にして脆弱な、一匹の妖怪がうまれた。

その妖怪は、最初こそ人間を襲い、喰いこそしなかったものの驚かせ、恐怖を植え付けることを生きがいとし人生を謳歌していたのだがある時、一人で沐浴を楽しんでいるときにふと思った。

自分はどれぐらい強いのだろうか？

気がつくと、妖怪の思考は一日中それで埋まってしまっていた

僕はどれくらい強いのかな？

流石に妖精には勝てるよね

自分より図体が小さい妖怪になら勝てるかな？

流石に自分の背丈の何倍もある妖怪には敵わないよね。

寝ても覚めても、そればっかり。

いつしか妖怪は人間を襲うことを止め、自分がどれほど強いのか試したくなっていた。

しかし、その妖怪のいる場所は東の国の中でも最西端の地であった。

周囲には15人ばかりからなる小さな集落が一つと、イノシシやシカ、鳥やきつねやたぬきといった食糧となる動物のみで、妖怪はおろか妖精すら存在していなかった。

困った……、これでは試すこともできないじゃないか

現状に落胆し、どうするべきか迷った妖怪は思い切って住みなれたこの地を出ていくことに決めた。

山に入れば山菜や木の実、秋の果物などが手に入り川に行けば魚が手に入る。　とても辺境な土地であるがゆえに別の妖怪が来ることがないこの地は、妖怪にとってとても心地の良いものであったが、妖怪はそれを自ら捨てることを選んだ。

そして妖怪は旅立った。　自分と同じ“妖怪”を探して旅立った

☆

最初は図体が自分の2倍ほどあり、腕が丸太のような太さをほこっている一つ目の妖怪だった。　その大きな手より繰り出されるビンタは、頬ではなく顔全体を叩(はた)きつけ、丸太から繰り出されるラリアットは首を強引にもごうとする勢いであった。

妖怪は文字通り手も足も出すことができず、ただただサンドバック状態の自分に意識が飛ばないように命令をし続けることしかできなかった。

次は自分と同じくらいの背丈、同じくらいの腕の太さの妖怪が相手だった。　この前戦った妖怪は自分よりも大きかったので勝てなかったのだ。　そう自分に言い聞かせながら妖怪は戦った。　右手に握り拳を作り力を込めて振るうが、相手はその力を利用して妖怪の右手を軽く弾き、よろけたところに躊躇いなくみぞに膝を入れる。

げほ……っ！？

口から胃液がこみ上げてきて、慌てて口を押さえるがその努力も空

しく、塞いだ手から濁った黄色の液体が指のスキマから流れて落ちていった。

妖怪は、その後もえづくことしかできず……いつしか相手も消えていた。

妖怪は気付いてしまった。

自分がどれだけ弱いかということに

妖怪は気付いてしまった。

弱肉強食なこの世界で生きていくことができないことに

妖怪は気付いてしまった

自分が鬼火という、最弱の妖怪の一種だということに

妖怪は気付いてしまった

――――最弱の自分が“勝つ”ことなどできないことに

それからというもの、妖怪は弱い自分を護るために精一杯の努力をした

まず一人称を変えた

住んでいた地の童たちが己のことを“僕”と呼んでいたから自然、自分もそうなったのだが、初めに戦った相手の一人称にすることにした。　そうしたら、ほんの少しだけ強そうに思えてきた。

だから“僕”は“俺”にした

次に、正直者は弱い者の証だと思えてきたので、括弧をつけて他人と距離を置くことにした。　決して、自分の心の中には入り込ませぬように括弧をつけて結界を作った。

『こうして俺は括弧をつけることにした』

最後に、他人を嘲るように精いっぱいの努力をした。　上手くできているのか分からないけど、それでも他人を嘲笑し、馬鹿にした。

これで強くなったんだ

そう俺（ぼく）は思った。　否、思いたかった

だけど現実とは厳しいもので、勘違いをする俺（ぼく）に優しく、厳しく教えてくる

君はこんなにも弱いのだ、と

事実、俺（ぼく）がそれからも勝つことはなかった

視界に入った妖怪全てに喧嘩を売り、ことごとく敗退。

時には、腕を砕かれ、足を切断され、目玉を抉られ、肺を潰されたりもした。

１２５３７３９６２３６４１３４６７３５７３２３６４８５２７５回

俺（ぼく）は挑み、全て負けた。

ギリギリだとか、惜しいだとか、そんなものは存在せず、決まって地べたと熱い抱擁を交わしながら遥か高い目線にいる相手を睨みつけながら、切れた唇から流れだす血を舌でなめとりながら、ずるずると足を引きずり腕で地面を掴みながら、体の奥底から溢れだしてくる涙に気付かないフリをして、相手が見えなくなるまで睨みつける。

戦った妖怪たちは俺(ぼく)の弱さをみると、拍子抜けしたようにどこかへ去っていく

その行動が、また悔しさを何倍にも倍増させる。

戦っては負けて、挑んでは負けて

いつしか妖怪の中には、勝利がどんなものなのかすらイメージすることができなくなっていた

春がきて　夏が過ぎ　秋を迎え　冬がくる

一体、何年の時を過ごしてきただろうか

目の下にはうっすらとクマができており、射に構えたような目。

この世の全てを敵だと思い込んでいるようなそんな目をしており、髪は黒髪に赤髪がところどころ混じり合うメッシュ。

小さな集落の人間たちを脅かして、恐怖を植え付けていた頃の妖怪はどこにもいなくなっていた。

そのかわり、いるのは敗北と嘘でできた妖怪だけ。

そんな時だった。　妖怪が龍の神に逢ったのは

手足は折れ、砕かれ、粉砕され。　腹を裂かれて臓物を引き出され、目の焦点は合っていなく、だんだんと意識がなくなってきた時に声が聞こえてきた。

『主は何故そこまでする』

頭に直接響くような声だった。

『何故そこまで求める』

求める……？

『左様。　なぜそこまでして、汝は勝利を求めるのか』

ああ……そういえば僕は勝利を求めていたんだっけ……

長き敗北の果てに忘れていたものをふと思い出す

『さあ……なんでだろうね』

『……あまりに突き付けられた現実が厳しすぎて何故勝利を求めていたのかも忘れたのか』

『そうかもしれない……。　多分、はじめは興味本位だったんだと思う』

自分がどれだけ強いのか試したくて

『だけど、外の出て気付いた。　僕のような存在がそういったものを意識したことのほうが間違いなんだと。』

『ではなぜ、いまなおそんな姿になってまで、勝負することを諦めないのか』

諦めれば楽になる。　諦めて、勝負することを止めて自分が元居た所に戻れば、引き込めば、こんな姿にならずに、無様な姿にならずにすむのに。

何故そうしない？

神の中でも最上位に位置する龍神には分からないことだった

もっというなら、負けるという行為すら分からないのだが。

そんな龍神に妖怪は答える

『もし……もしもだよ？　自分が持っていないものを他人が持っていたり、目の前に転がっているのなら……自分だって取りたくなってこないかい？』

それが自分にとっては勝利だったのかもしれない

『あいにく、我は望むもの全てを持っているのでな。　そういった

感情は持ち合わせることはない』

『ははっ……。　なんて嫌な奴なんだろうね、アンタは。　わざわざ死ぬ寸前の僕の前に現れて勝手に話しかけてきて、僕の心を抉るような真似して……いったい何が目的なんだい？』

『なんてことはない。　ただの興味本位だ』

妖怪が負けることしかイメージできないというならば、龍神は勝つことしかイメージできないのだろう。　だからこそ、負けることしかできない妖怪が珍しかったのかもしれない

『そうかい。　……なあ、アンタ。　“勝つ”っていったいなんなんだ？』

妖怪は口から血を垂らしながら、問いかける

龍神は答えない

『もうさ、僕にとって理由なんていらないんだよ。　ただただ、勝ってみたいんだ。　僕も皆のように、勝ちを味わってみたいんだ。
鬼に天狗に一つ目に赤坊主に足まがりに悪鬼に板鬼に牛打ち坊に歌い骸骨（がいこつ）に大蜘蛛に毛倡妓（けじょうろう）に　皆に勝ってみたいんだ。　中でも僕

は鬼に勝ちたいね。　だって、あいつら僕みたいな奴に見向きもしないんだよ。　力が強いからなんだってんだ。　種族が強いからなんだってんだ。　仲間がいるからなんだってんだ。』

ぽたりぽたりと知らないうちに涙が零れ落ちていく

血の赤と透明な涙が混じり合い、真っ赤な赤から薄い赤へと色が変わる

『僕は弱い存在だけど。　最弱の妖怪だけど。　それだからこそ、堂々と跋扈しているあいつらに勝ちたいんだ。　あいつらの鼻を角を折ってやりたいんだ。　ただただ、勝ちたいんだ』

『その願い、叶えてしんぜよう』

落ちる涙を拭うことができず、おぼろげな視界の中で妖怪の真正面に位置する龍神はそう答えた

『もちろん、タダではない。　それ相応のものを背負うことにはなるだろう。　たとえば――道連れ自殺　とか』

『ほんとうに――』

本当に僕が勝つことができるの？

『最後は己次第になるがな』

小さな声で聞く妖怪に龍神はそう返した

ほんの少しの静寂の後、妖怪はこう答えた

『それでも構わない。　僕の望みは一度でいいから勝つことだけだから』

手を伸ばそうとしたが、手が折れ砕かれ粉砕されていることを思い出して、顔だけを龍神の方向に向ける

龍神はというと、妖怪に顔だけ近づけてそっと舌で妖怪を舐めた

こうして――――妖怪と神は関係をもった

そして不知火という妖怪の始まりでもあった

☆

ふと遠い昔のことを思い出した。　何故、こんな時になって思い出したのかは分からないがけど。

龍神が言った言葉が僕の体の中を駆け巡る

――――最後は己次第になるがな

今更になってこの言葉の意味が分かった。　まったく……龍神も乙なことをするもんだ。

目の前にいる想い神を僕は見る。　想い神は子供のような瞳で僕のことをクエスチョンマークを浮かべながらみていた。

ほんと……君も運が悪いよね。　君にはもっと叶えたい想いがあったはずなのに

「まぁ……どうにかするさ！」

左手に炎で作ったナイフを顕現させ、勢いよく想い神に投げつける

当然、ナイフは想い神に当たることもなくその４０ｃｍほど手前でぐしゃりと深海の水圧で押し潰された空き缶のように潰れた

それに反応していままで首を傾げて様子を見るだけに止めていた想い神は、不知火に向か４ｍほどの大きな岩を投げつける。

その岩に潰され、赤い絨毯が完成するのかと思われたが

「君は闇魔様の所の死神かい？　中々面白そうな能力を持っているみたいだね」

「……アンタ、絶対助けが入ってくると分かってやったんですか」

小野塚小町の能力によって想い神から１０ｍほど離れた所に移動されていた。

「まあね。　別になくてもどうにかできたけど」

「そういう時は素直にお礼を言ったほうがいいですよ。　それがあなたにできる善行です」

小町の横に閻魔である四季映姫がやってくる。　その拍子に不知火に善行を勧める。

「これはこれは、閻魔様。　久しぶりですね」

「ええ、久しぶりです。　私は戦火には入ることができませんので頑張ってくださいね」

「知ってますよ。　生き物にはそれぞれ役目がある。　その役目も一刻一刻過ぎるごとに変わっていくけど。　そして今の閻魔様の役目は見守り、見定めること。　それくらい僕にもわかりますよ」

「そしてあなたの役目は憑くことですか。」

「そういうこと。　そしてそれが僕の最後の役目だよ」

こんな話しをしている間にも想い神の攻撃は止まらず、人間・妖怪・問わず襲いかかっている

不知火はその光景をみて、

「死神さん、ちょいと力を貸してくれないか？　その能力を使って出来る限り想い神に攻撃を加えて欲しい。　あの結界を壊さないことには憑くこともできないからさ」

そう提案してきた。

小町は一瞬ためらったものの、仕方ない……といった感じに頷いた

「あたいは戦闘向きじゃないんで、あんまり期待はしないでくださいよ」

そう一言置いて、その場から姿を消した。

遠くのほうでは、鎌の刃と結界がぶつかりあい高い音が響く

「さて、僕も行くか」

潰されたばかりのナイフを再び顕現させ、想い神目がけて走ろうとした矢先

「そう言えば、言い忘れていたことがあります。　あなた、括弧つけないほうが恰好いいですよ」

映姫は不知火を見ないまま、そう言った。

「……そうかい。　今度の言葉は大切に貰っていくよ」

それだけ言って、駆けだす不知火

互いに別れを告げないまま、二人は別れていった

☆

二つに結わえている赤い髪が上下に激しく動いているのを一瞬目で確認して、自分もナイフで足の腱を切ろうと仕掛ける

が、キンッ！と金属音のような音がしてまたしても弾かれる

「ちょっとッ！？　この結界本当に壊れるんですかッ！？」

正面で想い神に必死に斬撃を繰り返しながら、不知火に叫ぶ小町

「壊れるよ。　ただ、あんたと僕とじゃまだ足りないってことさ」

冷静に分析しながらそう答える。　その間も攻撃の手は緩めない

その時、不知火の後ろから声がかかってきた

「あら、面白そうなことしてるわね。　私も混ぜて頂戴」

その声とともに、不知火の頭より右に数ｃｍの所から傘が突き出て想い神へ向かう

傘はあっさりと折れたが、声の主は折れた傘を素早く捨てて右足を軸にした回し蹴りを放つ

「私もよろしいかしら？」

回し蹴りで穿った女性の場所にピンポイントに矢を放ちながら、銀色の髪を三つ編みにして赤と青が中心線で別れている服をきた八意永琳は頬笑みを浮かべたまま、不知火に問うた

そんな二人を見ながら、不知火は口角を釣り上げた

「やあ、八意。　姫さんはどうしたんだい？」

「力ない者達を守っている、とでもいえばいいかしら」

「あの姫さんがねぇ……。」

どうも会ったときはそんなことするようには見えなかったけどね。

「まあいいや。　戦力は多いほうがいいしね。」

その言葉を最後に不知火はまたもや駆けだして行き、永琳はそれを援護するように矢を放つ

疾駆する不知火に並走するような形で5本もの矢は想い神目がけて飛んでいく。　それに合わせるような形で不知火のほうもナイフを投げた。

ナイフと矢が勢いよく折られる――――が、不知火はそれを気にすることなく近づいていき、その心臓にナイフを突きたてようとジャンプする。

想い神は不知火の姿を捕え、足で地面を思いっきり踏みつける。
すると、踏みつけた所から６ｍほどの大きな土の塊が出てきた。
それを念動力を使って不知火のほうに投げ飛ばす。　その隙を利用して後ろから袈裟切りで左の肩を狙ってきた小町を、空気玉で吹き飛ばす。　吹き飛ばされた小町は、５ｍほど飛ばされ地面に右肩を盛大にぶつけた。

「まったく……とんだおこちゃまだね……！」

自分に近づいてくる土の塊をどうにかして壊そうとするが、非力な自分には壊すことができずにそう台詞を吐く

「さっきから邪魔よ、どきなさい」

「――――ん？」

疑問符を浮かべたのもつかの間、誰かに首根っこを持たれ下へと強引に叩きつけられる。

頭から叩きつけられた不知火は、その速さと強さで落とされ若干頭が切れたのか額から血を流していた。

上をみると、自分を叩きつけた張本人が土の塊に右ストレートを繰

り出し、こなごなのばらばらに粉砕している光景が目に入った。

腰まで届く長い緑髪に、膝下１５ｃｍくらいはある赤のチェックスカートに、白の長そでブラウス　そしてその上には同じく赤のジャケットを羽織った女性、風見幽香は重力に逆らうことなく降りてくる。

幽香が口を開いて何か言おうとした瞬間――二人が立っている場所に細かい石の流星群が降り注いでくる

不知火はバク転しながらその場を離脱し、幽香はふわりと後方に飛んだ。

「まったく、死神と八意を相手にしながらこっちにも仕掛けてこれるなんて、つくづく化物だな！」

叫び、突進する不知火

想い神は興奮したように咆哮し、不知火に岩を投げる。　今度は先程の土の塊の２倍はある大きさなのだが――

「これも砕けるかい、お花畑の妖怪さん」

「誰にもの言ってるのかしら。――――当然よ、私にできないものなどあるはずないじゃない」

不知火の前に忽然と幽香は現れ、復元した傘で岩の中心を貫く。すると岩はピシピシと音をたてながらひび割れ、最後には真っ二つに割れた。　そこをすかさず、不知火は飛びだし想い神の頭めがけて左足で渾身の蹴りを放つ――――が、ミシミシと嫌な音をたてたのは不知火の足のほうだった。

苦悶の顔をみせる不知火、そこに想い神がすかさず空気を圧縮した刃で腹を貫こうとするが、横から矢が飛んできたのでそれを迎撃。
その隙に死神に担がれたまま不知火は脱出することに。

「ちょっ！　大丈夫ですか?」

「助けてくれてありがとう。　問題ないよ、これくらい僕は慣れている。　それに完璧に折れたわけじゃないからね。　動ければいいさ」

まるで問題ないかのように答える不知火に、先程見事な連携プレーをみせた風見幽香が近づいてくる

「地に膝なんてついちゃって。　無様な姿が良く映えるわね、あな

た。」

「これはこれは、頭がお花畑な妖怪じゃないか。　さっきはありがとう、信じてたよ。　君が壊してくれるって」

右手を差し出す不知火、幽香はその手を取ることなく逆にパシッとはじいた

「あなたを殺すのは私よ。　それ以外の者に殺されちゃ堪らないから、弱小のあなたを助けてあげただけ。　勘違いしないでくれるかしら」

「まだ覚えていたのか。　君も意外と根に持つタイプだな」

「当然よ、まぐれだとしても偶然だとしても私に一撃いれたのはあなたが初めて。　そしてこれほど殺したいと思ったのもあなたが初めてなんだから。　いわば初恋よね」

「君の初恋と世間一般の初恋を一緒にしないでくれるかな」

僕が鬼と殺し合いを演じ、蓬莱山に会ってから１０年ほど経った頃、僕はこの女性、風見幽香に出会った。　ひまわり畑で幽香（ゆうが）に微笑むその姿は周りに咲くひまわりなんかよりもよっぽど美しかったのを

覚えている。

僕はそんな風見に近づいて、殺しにかかったんだっけな。

あんな笑顔を浮かべることができる彼女が羨ましくて

当然の結果として、僕は風見に殺されかけた

比喩ではなく本当に。

動くことさえ厳しかった僕だけど、歯を食いしばりながらなんとか立ちあがり、よろめきながら風見に合わせるような形でカウンターを喰らわせた

その後僕は動くことさえできず、下から彼女の顔を見上げることしかできなかった。　そんな僕を彼女は見下ろしながら、カウンターが当たった頬を撫でていた。

そして彼女はあろうことか、この僕を殺さなかった。

彼女は僕のことを殺さずに、殺してくれと懇願するほどの苦痛を味わせようと企んでいたらしい。　（これは鴉天狗から聞いたことだ

から信憑性は皆無だけど）

うまれてはじめて僕以上に嫌な奴を見つけた瞬間だったよ。

「あら、妖怪の私に世間一般の常識なんて無意味に等しいわ」

「確かにそりゃそうだ」

凝り固まった肩を二回ほど鳴らして、僕は起き上がる。　さっきから想い神が攻撃してこないのが気になる。

「あなたはそこでじっとしてなさい。　弱いあなたの出る幕じゃないわ。　スキマ妖怪や従者、天魔に亡霊の姫も本格的に参加しだしたみたいだし。　そこで指をくわえながら事の経緯でも見ておけばいいのよ」

幽香は起き上がった僕の額を人差し指で弾きながらそう言った。

そう言われて想い神のほうに視線を移すと、確かに見慣れた姿や、馴染みがさほどない姿が視界の中に入ってくる。　スキマ妖怪の八雲は自分の能力をフルに使い、様々の所から物を持って来て想い神にぶつけたり、時には人間が使う鉄砲で射撃する。　従者である藍はその強大な霊力を使い、想い神に真っ向から対抗していた。　天魔はその自慢の速さで想い神を撹乱（かくらん）させ、他の者のアシストを、八

雲の友人は自分の能力であろう、黒い蝶を結界へと突撃させたり、その蝶で人間達に向かう攻撃をシャットダウンしたりしている。

先程まで、僕の登場に呆然としていた人たちだろうか。

「そうはいかないよ。　僕はアレを止めるために此処まで来たんだから。　それに君達じゃ想い神は止めれないよ。　想い神は初めに触れた想いを叶えるまでは絶対に消えないし、止まらない。　妖怪を皆殺しにするまで止まらないんだよ。」

「ふんっ。　私達妖怪が、人間の想いだけで動くような神に勝てないとでも?」

「ああ、勝てないよ。　なんたって、人間の想いはとてもとても重く、強固なものだから」

負の想いであるならなおさら、それは強固で重いものになる。

人間に限ったことじゃないけれど、正の想いってのは意外と重いものじゃないんだよね。　だってその人自身が＋のことを味わっているから。　嬉しいことや、楽しいことを味わっているから。　負の想いはその反対で、悲しいことや憎いことで出来ている。　当然、その人自身は一のことを味わっているわけだ。

君だって思わないかい？　自分に不幸なことが起こったときに、他人も同じように不幸になっちゃえってさ。

「龍神ならともかく、僕たちが勝つことはできないよ。　その龍神だって今回はノータッチだ。　僕のお願いでね。　彼がどこかで見てることは確かだけど。」

いらぬお節介をするほどの激甘だからね

幽香は呆れたように言った

「わからないわ、人間が考えてることなんて。　考えたくもないけど」

「そうかい？　僕は分かるよ。　僕も同じような気持ちを抱いたことが多々あるからね」

「それでもあなたは、愚かな人間のように頼ったりにしてないでしょ？」

愚かな人間……か

「同じ穴の狢（むじな）さ。　僕と想った人間は」

僕は龍神に頼り、人間は想い神に頼った。　ただそれだけのこと

だとしたら、僕は愚かな妖怪ってとこかな

「さあ、話しは終わりにしようか。　僕達以外は皆戦ってるわけだし」

いつの間にか、傍にいたはずの死神まで消えている

ナイフを顕現させ構え、想い神を見据える僕に風見はため息をついた

「精々邪魔にならないようにしなさい」

「邪魔なときは僕ごと破壊すればいいさ」

君なら僕に当てることなく攻撃できそうだし

☆

焼け野原のようになった場所で、一人の神と何人もの妖怪・人間の連合が戦いあう

金属と金属がぶつかり合ったような甲高い音がしたかと思うと、重低音の音も響いている

この場所も元は木が沢山あり、妖精が遊びまわり、妖怪が我が物顔で跋扈し、人間が風景を楽しんだりしていたのだろう。　いまやその面影など残っていないが。

そのかわり、現在のこの場所には怒号と悲鳴が辺りを包みこんでいた

「天魔は右から攻めて！　花の妖怪は左から！　月人と人間は後方から支援を！　幽々子は後方の人間たちを守って！！」

その中央で八雲紫が指示を飛ばす

額には一筋の汗、その汗がキラリと反射して光る

その汗が爽やかな汗であればよいのだが、残念ながら紫から流れ出る汗は冷や汗であった。

紫の指示に従う形で（一部の者は舌打ちしながら）自身のできる最大の攻撃を加えるが

「この程度の攻撃は喰らいませんってことかしらね……！！」

想い神は両手を左右に広げ、一回転するだけで人間と妖怪の今世紀最大であろう攻撃を全て弾き返した。　それだけに留まらず、左手をかぎ爪状にして下から上へと空を切った。

ゴアッ！！

想い神が空を切った場所から灼熱の炎が駆けた

炎は遥か彼方の地平線までその牙を伸ばし、地面もろともパックリと空間を割った

「ねえ藍……。　さっきまであんな攻撃出来たかしら……？」

「私の記憶が確かならば、想い神は空気を圧縮したり念動力を使っ

た攻撃しかできない。　そう記憶しております」

若干、顔を引き攣らせながら藍は答える

そう、そうなのだ。

先程まで紫達が相手していた想い神はその二つしかできなかった

「それが短時間で、空間を裂くことが可能なの……？」

想い神のその能力と化物じみた成長の速さに紫は驚く。

「それが想い神なんだよ。　僕達が呼吸するのと同じように想い神は想いを喰らって力を増しているんだよ。」

紫の後ろから不知火が声をかける

「凄いと思わないかい？　想い神って最初は僕と同じ弱小な存在なんだよ？　それがだんだんと強者になっていくんだ。　誰も手がつけられないほどの強い存在にね。　これって凄いことだよね。」

「……凄いこと？」

「うん。　よく言われるじゃない？　勝者が強者とは限らないって。」

まあ……確かにそれはそうだ。

不知火の言葉に紫は頷く

勝負はその時の体調・精神的なメンタル・相性・運が絡まってくるなので、強者が弱者に負けることもありえる話である。

「けどさ、弱者が強者になることもないんだよね。　弱者が強者に勝負で勝ったとしても弱者は弱者のままだし、強者は強者のままなんだ。　頭がお花畑な人はさ、『努力は才能を凌駕する』とか言っちゃうじゃん。　あの言葉ってさ、僕からしてみれば一番腹立たしい言葉なんだよね。　だって――――そういうことを言える奴は既に才能を持っているから。　そいつらは既に強者の部類だから。そう言えるのはどうしようもない、絶望するしかないほどの強者との“格の違い”を見ていない連中が言えることなんだよ」

自分が勝てると思い込み、その自信を叩き折られた不知火が自分自

身で歩んできた道だから。　だからこそ、不知火はこんなにも穏やかに話すことができるんだろうか。

どこか達観したように語る不知火に、紫はそんな疑問を抱く

「って、ちょっと話がそれちゃったね。　まあ何が言いたいかというと、想い神に僕達の常識は一切通用しないよ。ってことさ。“超絶チートで成長する奴”なんて存在がそもそも僕達の常識には一切ないからね」

肩をすくめながら不知火は言った。

その時、二人の間にぞわりと鳥肌が立つ

二人は脳が指令を出すよりも早くその場から離れる。

二人がその場から離れた瞬間、さっきまでいた場所が紅蓮の炎に包まれる。　バチバチッ！　バチバチッ！　と咆哮を上げながら炎は燃えあがり、紫と不知火を断つ。　従者の藍は咄嗟に紫の前方に水遁の術で水の壁を作ったのだが――

「くそッ！　不知火まで間に合わん！」

不知火のほうには既に、二つの大きな岩と炎が逆巻く風の刃が迫っていた。

大きく飛びのいた不知火は空中におり身動きすることができず、その他の面々も自分のことで手いっぱいだったのでいまさら不知火の元まで駆けより、なおかつ大きな岩二つと炎を纏った風の刃から守ることなどできそうになかった。

「不知火ィッ！！」

誰かが彼の名を呼ぶ声がした

☆

まるでスローモーションのように目の前に迫ってきている物体が遅く感じる。　岩はゆっくりと回転しながら自分に向かってきており、炎の刃は不規則にゆらゆらと揺らめきながら心の臓に一直線に飛んできている。

だが、それは不知火とて同じであった。

不知火は自分で左手を握ろうとして、その動きがえらくゆっくりであることから意識だけどこか別の場所にあるのだろうと推測した。

そんなゆっくりと、音すら無い世界の中で、二つの人影が天狗のような速さで近づいてくるのが見て分かった。

一人はその長身と長い金髪。　額に堂々とした一本角を生やしており、もう一方は小柄で腰には瓢箪をぶらさげ、右手に鎖で繋がれた手の平くらいの赤色でできた三角推を、左手に黄色の球体を、そして髪を縛っている布のところに水色の立方体をぶらさげていた。

二人は合図するわけでもなく、同時に飛んだ。

長身のほうが岩に向かって飛び、その勢いを殺すことなく右ストレートを叩き込む。　岩は一瞬にして粉末とかすが、女性はそれに見向きもせずにもう一方の岩に左足のかかとを下段から上段へと思いっきり蹴りあげた。

そして小柄な少女のほうは左手を強く握り、余波で頬が切れるのではないかと思うほどの横殴りで炎を纏った風を吹き飛ばした。

その光景をみて、不知火は思った。

あぁ……俺はこんな奴らを相手取ろうとしていたのか。と

突然、聴覚が蘇ったかのように音を拾い始め、体も思うように動いていた。　どうやら無音でゆっくりとした世界は自分の役目を終えたのか、帰っていったらしい。

そんな不知火の耳に懐かしい声がはいってくる

大胆不敵にして大体無敵、天上天下で唯我独尊

自分が憎くてやまない存在、自分が憧れてやまない存在

「やあ、遅くなってわるかったねえ、少し見ない間に随分と雰囲気が変わったじゃないか。」

「勇儀とガチバトルしたときと少し似てるよ。　私はそっちのほうが好きだけどね」

ああ……相変わらずストレートな物言いだな

「やあ、久しぶり。　鬼のお二人さん。　待ってたよ」

これで役者の全てが揃った

想い神といえども、いまの状態ならなんとか結界を壊すことは可能だ。

結界さえ壊すことができたなら、憑くことは非常に容易い

「早速で悪いんだけど、ちょっくら壊してほしいものがあるんだ」

「あの小童の結界だろ？　大丈夫、壊してみせるさ」

「ま、あたしらに任せてアンタはそこで見ていればいいさ」

そう言って二人は駆けだした。

「そう言う訳にはいかないんだけどな……。」

首をまわし、腰を捻り、緊張で固まった筋肉をほぐす

さあ行こう

これ以上、僕が舞台に上がっておくのは頂けない

さっさと憑いて、舞台裏にでも引っ込まなければ

半透明になってきた体で、不知火は戦場へと身を投じた

☆

ガキンッ！と拳と結界がぶつかり合う音がする。　鍔迫り合いみたいになりギギッ……ギギッ……と、こすれるような音がして拳と結界は離れた。　拳を握った側である勇儀がその場から引いたのだ。

「かったいね～。　単純な力勝負ならかなりの自信があったんだけど……。」

「これだから怪力馬鹿は困るわね」

「それはあなたにも言えることよ？」

飛びのき、自身の拳と想い神を交互にみながらガシガシと頭を掻く
勇儀に、近くにいた幽香が呆れたような、皮肉めいた顔で勇儀のこ
とを怪力馬鹿と称したのだが、弓矢で遠距離攻撃をしている永琳に、
にこやかに自分も怪力馬鹿だと告げられる

「……後で覚えておきなさい」

永琳を睨みつけながら幽香は想い神に向かって突進する

それをみて、想い神は自身の周りに５ｍほどの火柱をたてる――
――が、

「ちょっと境界を弄らせてもらうわよ？」

スキマから出てきた八雲紫の指パッチン一つで想い神を守っていた
火柱が消える

「――――ッ！？」

「なかなかやるじゃない。　その穴に隠れてるだけかと思ったけど」

勢いを殺すことなく幽香は、傘で目玉を抉ろうと突き刺す――――

が、それは毎回結果が同じようにすぐに潰れた。

「それだけじゃ終わらないよ！」

霧となり姿を消していた萃香が現れ、壊れた傘の取っ手の部分を思いっきり蹴る。　傘は耐え切れずに粉々になるが先端の尖った部分だけはからくも残っており、その部分が真っ直ぐに想い神の目玉を穿ちにいく

結界に当たり、弾丸のようにくるくると回りながら徐々に徐々に突き進んでいく傘の先端部分。

誰もが思った

これでようやく結界が壊れたと

だが現実は厳しく――――その考えを嘲笑うかのように先端部分を破壊してしまった

パラパラと崩れ去り、そっと想い神がそれに手をかざせば砂のように消えてしまった

「おかしいわね……。私の目が確かなら破壊されたものが砂のように消えていったけど……？」

「節穴だね。　……と、言いたいところだけど。　どうやら、節穴ではないみたいだよ」

萃香が顎で永琳のほうへ促す。

永琳は弓矢を限界まで引き、常人では視認することさえできない速さで撃つ――――のだが、想い神はその矢に向かってゆっくりと手を伸ばした。

たった、それだけで

たった、それだけのことで

矢は溶けるように消えていった

「時間をかけすぎたようね……」

スキマから紫が苦々しく、呟いた。

また一つ、想い神は想いを喰らい強くなったのだ

「これ……かなりヤバくないですか？」

「ヤバいなんてもんじゃないわよ。　絶望的って言うのよ」

冷や汗を垂らす小町に、紫はそう指摘する。

いつもは優雅に頬笑みながら、口元を隠すように扇子を当てるのだが……現在はその余裕もなく固い表情をしている。

「絶望的ねえ……。」

顎に手を当て、想い神の動向をみていた永琳は手の平サイズの石を拾い、それを隣にいる勇儀に渡す

「ちょっと投げてくださらない？」

「これを？」

「ええ」

不思議がる勇儀に、永琳は頷く。

想い神のほうは、自分の能力を確認するように岩や石ころを消している。

こちらに興味をもっていないいまだからこそ、対策を考えないとまずいのだが……

「どうなってもしらないよっ！！」

全員が全員、いい考えが浮かばずに黙ったままなので、それを確認した勇儀は思いっきり、力の限り投げた。

「ええ！　これで私の考えが正しければいいけどね！！」

勇儀が石を投げた瞬間に、永琳は矢を放った

弾丸のような速さで想い神に飛んでいく石と矢。　下を向いたまま

だった想い神は、１m付近でようやくその存在に気付き手の平を石のほうに向ける。　石は音もなくサラサラと消えていった――――が、

パンッ！！

その石の背後から迫っていた矢は消えることなく、結界に当たって音をたてながら砕けていった。

「……どういうこと？」

「石は消えたけど、矢は残った？」

皆が永琳のほうを向く。　その視線を一身に集めた永琳が、ウインクして話しだした。

「簡単なことよ。　あの子が能力を扱いきれてないのよ、まだね。　あの子は自分に迫ってくるものを確認して、認識してようやく消すことができるのよ。　石を投げてもらったわよね？　そして矢を放ち、後ろに控えるような形にした。　ではここで問題です。　石を消したあの子は矢のときはどうしたでしょう？」

「消すことはしなかった……」

呟く小町に永琳は首を振る

「正確には消すことができなかった。　あの子が見たのは迫ってくる石だけで、後ろに控えている矢は視認できなかったから。　そして、石を消した後に視認することはできたが、咄嗟のことで確認することができなかったのよ。　何が迫ってきたのか」

もしも、想い神が視認せずとも確認せずとも、オートで自分に迫ってくるものを消すことができたならば勝ちはなかっただろう。

永琳は一度、皆を見渡して力強くいった

「まだ――――望みはあるわ」

だが、まだ勝てる。　勝つことができる。

永琳は力強く頷いた

☆

永琳の考えた作戦はいたってシンプルだった

一点集中、結界破壊

全員がバラバラの個所に攻撃するのではなく、一カ所に全員のありったけの力を込めて攻撃していく。　一つ一つの攻撃は結界で防げるかもしれないが、そのダメージの蓄積によって強固な結界を壊そうという考えである。

これにはリスクがついてくる。

誰か一人でも箇所が外れたり、外したりしてしまうとそれだけでこの作戦が失敗すること。　月の頭脳の八意永琳の計算を信じるのであれば、一人でも外れただけで結界は壊せなくなるのだ。

スキマ妖怪である八雲紫と死神であり距離を操れる小野塚小町は能力を駆使して皆のサポートを、そして後の者は攻撃を。

「……大丈夫。　大丈夫よ」

永琳はそう自分に言い聞かせ、ゆっくりと深呼吸をする。　トップ

バッターは発案者である自分。　目にみえないプレッシャーが重く圧し掛かってくる。　その全てを振り払い、永琳は弓を引く。

狙うは想い神の頭部

その想い神は立ち止まり、周囲の者を見回している。

誰が動くかわからないので、あちら側も手を出しあぐねている状態だ。

「さあ――――いくわよ！！」

叫び、永琳は矢を放った

風を裂き、流星のごとくスピードで想い神を貫く矢に、想い神は手をかざして消す

だが、それでいい。　その行動をもって――――

――――この作戦は開始される

「黒死蝶！　その鱗粉で、この者に死の導きを！」

幽々子が全身から黒死蝶を顕現させ、想い神の頭部に突撃させる

その一部分だけ真っ黒になり、昼間にもかかわらず夜の帳がおりる

驚いた想い神だったが、黒死蝶を視認しその存在をこの世から消そうと手の平をかざす――――ところで、フッと目の前から黒死蝶が勝手に消え、

「クスッ……。　あなたの泣き顔を思い浮かべると、知らず知らずのうちに笑みが零れちゃうわ。　……さあ、私に最高の快楽を味わせてちょうだい！！」

恍惚とした表情で、凶悪な表情で、風見幽香がありったけの妖力を傘の先端に込めて突く

それと入れ替わるようにして八雲紫の従者である藍が狐火を練りに練って、レーザー光線のように細くして追加攻撃を加える

その二人の攻撃に苦悶の顔を浮かべる想い神

「まだ終わらないさッ！！　鬼の本気の一撃、冥土の土産にもらってきな！！」

スキマによって想い神の視界から消えた藍と幽香にかわり、霧から姿を現した萃香は右腕をグルンと一回転させ、その回転の勢いのままアッパーをかます

ピシッ……！　ピシッ……！

蜘蛛の巣のようなヒビが一点にだけはいる

それはとてもとても小さな箇所で、それこそ拳一個分の幅であったのだが――――

「勇儀！！　頼んだよ！！」

「任しときなッ！」

怪力乱神の彼女の前では、その幅はとてもとても大きなものであった。　どんなに幅が広くとも、当たらなければ意味はない。　しかしながら鬼である彼女は、どんな小さな幅であろうとも当てることができる。

勇儀の拳を受けた結界はピシピシ……、という擬音からバキバキ……！　という擬音へと変わり――――

パリーーーン！！

と粉々に砕け散った

「やったわ！」

その光景を固唾を飲んでみていた紫は小さく両手を握りガッツポーズをする。　あの強固な結界を壊したのだ。　これに喜ばないはずがない

だが、喜んだのもつかの間――――ここにきて問題が起きた

強固な結界は壊した

じゃあ次はなにすればいいの？

想い神に一撃を喰らわせればいい

それは誰がするの？

幽香・藍・幽々子・勇儀・小町・萃香・私・全員が離れた位置におり、もう少しで再生してしまう結界には手が届かない。　仮に届いたとしても、妖力を全て使いきってしまったので想い神を倒すほどの一撃を出せるかどうかも怪しい。

「そんな……！？　もう少しなのに……！　もう少しでいけるのに……！」

悔しくて悲しくてどうすればいいのか分からなくて涙が出てきた。

涙などみせてもかわらないのに

こんなことしてる暇があるならスキマを開けばいいのに

考えてはいるが、八雲紫にはその後に待ちうけている絶望のビジョンのほうが浮かんでいき、ただただ立ちつくすしかなかった。

そのとき、一陣の突風が紫の帽子を飛ばしながら駆け抜けた

妖怪最速の名をもつ天狗の長

「天魔ッ！？」

そして――――

「おつかれさん。八雲」

妖怪最弱の名をもつ鬼火

不知火がその背に乗り、想い神を真っ直ぐに見据えていた

☆

「わるいね、大将。　体が消えかけ過ぎて足が思うように動かせなくってさ」

「はは。　それにしても……いいのかい？　このままお別れして」

「ああ、いいさ。　それにこっちのほうが僕らしいだろ？」

１７０ｃｍの不知火よりも大きな黒い翼をはためかせ滑空していく
背に乗ったまま、不知火はそう言う。　天魔は少し困った様子で反応に窮していた

想い神との距離は３ｍまで迫っていた。　既に結界のほうは再生をはじめておりかろうじて手が一本入るくらいであろう。

天魔はそこから一気に高度を上げる

「ありがとう、天魔。　この恩は覚えていたら誰かが払うよ」

そう言いながら、天魔の背から飛び降りる不知火

右手でナイフを顕現させ、重力を味方につけた状態で一気に振り下ろす

「幕引（ショウダウン）きといこうじゃないか！！」

穴に向かってナイフを差し込み、一気に横に薙ぐ

小気味良い音をたて壊れるナイフ

不知火はそんなナイフには目もくれず、腕が使い物になっても構わないかのごとく強引に結界の内部、想い神の肩へとねじ込み、触れる。

ビクリッ!?　と想い神の肩がわずかに揺れる

「なあ、想い神。　どんな気分なんだい？　想いを受け入れるってのはさ。」

不知火は一人でに喋る

「悲しみ・嬉しさ・怒り・泣きたい・殺したい・笑いたい・守りたい・助けてあげたい・救ってあげたい・悲嘆・悲哀・慈しみ・恨み・妬み・嫉妬・憎悪・殺意・愛でたい・愛らしい・犯したい・遊びたい・仲良くなりたい・恐怖・嫌悪・恥・孤独・罪悪・苦しみ・切ない・不満・快感・快楽・果てたい・犯されたい　人間はその一生で色んなことを想い、思う。　そんな全ての想いを受け止め、受け入れるのは凄いことだと思うよ。　少なくとも、僕にはできないことだからね。　君は例えるなら、まだ何も描かれていない真っ白いキャンパスなんだよ。　想いを受けて、ようやく“絵”になっていく。
　もちろん、その絵が醜悪なものになるのか、綺麗なものになるのかはその想い次第。　だとしたら、いまの世界では君の描く絵は醜悪なものにしかならない。　薄汚れた、穢れた、下卑想いが蔓延っているこの世界ではね。」

想い神はなにもするわけでもなく、不知火をじっと見ているだけ

「それに困るんだ、流石に妖怪がいなくなると。　殺す対象がいなくなってしまうし、僕の生きがいがなくなってしまう。　だから、これからやることは迷惑極まりないほどの僕の自己満足だ。」

半透明を通り越して、８割ほど透けている不知火は小さな声量で、しかし明確に言った。　湖に石を落したときのように、その声は波紋としてゆっくりと辺りにまで響いた

「――――神憑き――――」

眩い光が世界を染める

誰もが圧倒的な明るさに目を閉じるしかないなかで、八雲紫だけはしっかりと彼のことをみていた。

その光に紛れるようにして、元からなにもなかったかのように消えていく姿は、まさしく不知火そのものだった。

不知火は紫の視線に気づき、振り向き笑顔でいった

「アンタの思想、嫌いじゃないぜ。　精々、頑張ってくれよ」

いつもの口調で、笑みを浮かべながら不知火はそのまま想い神と一緒に消えていった

やがて、光はおさまり静寂だけが辺りを支配する。

ぽつり……　ぽつり……

紫の頬になにか冷たいものが当たるのを肌で感じる

それはやがて大きな粒となり、ザーザーと音を響かせた。　さながら心を洗い流すかのように。　労うかのように。

誰も何も言わず、誰も動こうとしない

たったひとりの妖怪と引き換えに、この物語は結末をむかえることになった

☆

それから一週間、雨が止むことはなかった。

まるで、誰かが号泣しているかのように止め処なく降り続いたのだった

## 外伝？～夢の終わり／夢の続き～（後書き）

不知火というキャラクターは、原作キャラが言わないような台詞を書くことができたので、楽しかったです。

『これにて不知火は降板でございます。　長々とありがとうございました』

外伝の後書きは、割烹に書きました。　時間に余裕があるかたは、「お？　やってるね～、俺も一杯！」くらいの感覚で覗いてみてください。

２０１１年　０９月　２７日　（火）　２２時　０７分　の割烹です

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4711s/

東方現想華僑

2011年10月3日23時31分発行